

---

# それのおとしもの～それぞれの想い

絃城恭介

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

それのおとしもの〜それぞれの想い

### 【Nコード】

N0871P

### 【作者名】

絃城恭介

### 【あらすじ】

「それのおとしもの」の二次小説がなかったので書いてみました。あくまで書いてみただけなので、あまり読まれていなかったら消そうかと考えていますのであしからず

絃城作新の悪い癖が全てここに集結。主人公たちの織り成す出鱈目グダグダストーリーでもいいという方はどうぞご覧ください

ハーレムにはなりません

## Prologue ～それのおとしもの(前書き)

始まりはいつも同じ場所、同じ夢の中

僕たちの望んだものはどこにあるのだろうか？

というわけで始まります。無理な人は戻ることをお勧めします

## Prologue ～それのおとしもの

俺は夢を見る。誰かを助け、自分も救われ、守るべき少数のために多数を捨てた人間の夢を。前世に果たせなかった理想を貫いた男の夢を

その男の名前は絃城恭夜。絃城の家系の一人らしいがこの世界には存在していない。なぜならこの夢を見ている俺が絃城の後継者である絃城恭夜なのだから。絃城の家系は代々夢を通して並行世界に通じるらしい。そして俺も現在それを経験することになっている

『模倣』の魔眼、それが俺の引き継いだ絃城による能力だった。俺の現在見ている夢に出てきた『絃城恭夜』の能力は『創造』、歴代最強の血縁者であった『初代』を超えた化け物。彼は神と同化したのだ。

もともと彼は絃城の能力を受け継いではいなかった。だが、あることを切欠に能力を覚醒させた。

それは『転生』

彼は一度死んで別の世界に甦ったらしい。俺はそんなことがあることが未だに信じられない。

現実に存在することは事実として認識されるが現実にありえないことは非現実となる。つまりこの世界にありえないことは別世界にもありえない。

なぜならそれはあくまで『可能性』の世界なのだから

けれどそれはありえたのだ。確かに現実としてここに存在している。  
『俺』という存在がその証明になるらしい。不完全ながらも俺も『  
創造』を使えるようだからだ

ここからは俺の話をするとするよ。この物語の主人公は夢の男『絃  
城恭夜』ではなくこの世界の『絃城恭夜』、俺の物語なのだからさ

俺は幼い頃に不思議な夢を見ていた。ある男の子と女の子、そして  
俺が三人で手をつないで広い草原に立っている夢を。

俺たちはいつも楽しく遊んでいた。けど、夢には必ず終わりという  
ものが訪れる。

決まって彼女は俺達二人の前で空にさらわれる。その泣き顔に俺達  
二人は必死に手を伸ばして、その手を掴もうとするが間に合わない。  
そして彼女は言うのだ

『  
』

届かなかった手を俺は固く握り締め、悔しさを忘れることはなかつ  
た。俺の隣の彼は、空に舞い上がった少女を見て泣いていた。

夢はいつもそこで終わる

けど、不思議なことにその夢は忘れる事はない。そして俺はいつものように目を覚ます

「ふあああ、よく寝たなあ」

そう一言、欠伸をしながら呟く。殺風景な部屋の片隅に置かれたベッドから立ち上がり居間に向かう。棚から食パンを取り出し口にくわえる。

ただ一人、広い家で朝食を食べるほど虚しい事はないだろう。普通の家庭ならば、朝には『おはよう』と家族に言い、皆でわずかな時間の朝食を楽しむのだろう。

けど、俺は違う。お察しの通りだろうが家族はいない。父曰く

『魔術は秘蔵すべきものだ。基礎を習得し、絃城の全てを教えたお前はこれから一人で生きなさい』

だ、そうだ。俺にはそんなことは関係なく家族と暮らしたかった。小さい頃に暮らしていた空美町は父のせいで引越してきてしまった。空美町で俺と仲良くしてくれた彼は元気だろうか？

「まあ、こんなこと思っても現実是不変だよな」

食パンを飲み込み朝食を終える。実に数分の朝食の時間が終わり、再び自室に戻ろうとしたとき、そこに一本の電話がかかってきた。

こんな朝早くから誰だろうか？そんなことを思いながら受話器を手に取り耳に当てると、意外な人物からの電話であった

「はい、恭夜ですけど」

『父だ、突然だがお前は空美町に引っ越してもらった』

「はい!?!」

『お前はこれからそこで自由に生きなさい。転校の手続きもしておいた、これが私からの最後の贈り物だ』

がちゃん、ツーツー。耳に電話が切られたときの音が響く。

もう少し会話を楽しんだっていいじゃないか、なんて思う暇もなく俺は呟く

「どういふことだよ、親父殿？」

「トモちゃん、トモちゃんっ」

これで何度目になるのかわからない揺さぶりを布団にもぐるトモちゃん……桜井智樹へ仕掛けるのは隣に住む幼馴染である見月そはらであった

「起きてよ、遅刻しちゃったよ、トモちゃんっ」

彼女は快活そうな印象を与えるポニーテールを揺らしながら、再度、智樹の布団をゆすってみるが、もうちょっと、もうちょっとの一点

張りで効果がない。

彼女、そはらは自分の用事が無い限りは、彼、智樹と一緒に登校するのが日課であった。それは子供の頃からの習慣であり、今更、中学生になつたからといってやめるなどという考えなどは無かつた。その彼女の顔にうつすらと施された化粧は、決して情性だけで彼を起こしていないということを証明していた

「むう」

可愛らしい小さな唸り声を上げたそはらは、幾分、焦るように自分の時計を確認した。この時間ならば優等生でなくとも普通に登校する時間であるが、遅刻常習犯である智樹にとっては関係のないことであつた

本来ならばもう少し速く智樹を起こしに来ているのだが、今日はどうしてもリボンの結び目が納得行かずに時間がかかってしまったのだ。

いくら揺すつても起きる気配のない智樹に彼女は最終手段をとつた

「こつなつたら……えい!!」

これ以上は時間の無駄だと踏んだ彼女は、智樹の寝ている布団を引っぺがした。こうすれば寒くなって自然に起きる。そう考えていた彼女は、寝転がっていた智樹を見ると

(え、これって…… / / / / /)

一瞬の沈黙。だが、彼女の顔は即座に赤く染め上がり



「きゃああああ!!」

「な、なんだ、どうしたそはらっ?」

突然の悲鳴に驚いた智樹が起き上がると、目の前のそはらは口を手で隠し、つぶらな瞳はまっすぐ何かを見つめていた

それは寝起きで寝癖のついた智樹の顔でもなく、彼のお気に入りのパジャマでもなく、ずっと下を見ていた

……つまり、男性的なアレ

「これは茶柱デス。立っていると、朝からエンギがとても」

「いいいやあああ!!」

そはらの右手が素早くチョップに固められると、そのまま智樹の頬に直撃した。それは一度ではなく数回繰返され、桜井家と書かれている表札の家から鈍い音が鳴り響いたのである

数分後、何とか着替え終わった智樹はそはらに連れられて学校に向かっていた。

彼、桜井智樹の住む空美町は人口七千人位の山に囲まれた町だ。決して楽しい町ではなく、本来なら中学生には暇で仕方ないところだ

「トモちゃんの馬鹿、変態!!」

実に、今日四度目の謝罪に四度目のそはらの変態という言葉

そはらの表情から察するに別に本気で怒っているわけではないのだ

ろっけど

(すぐに機嫌が直ってくれればいいけど……何も本気で殴らなくてもいいのに)

そんなことを考えながら、智樹はあぜ道から見える風景に視線を送る。そして思うのだ

(今日も平和だ)

平和、平穩、普通、彼にとっては退屈を表すものではなく幸福を示す言葉である

彼はそんな生活を死ぬまでこの町で送りたいと思っている

「あれ、なんだか校門のほうが騒がしいね」

「ん？」

そはらの声に智樹は目の前に迫った校門に目を向けると、確かに校門に人が集まっているのが見えた

そんな時彼の耳に入った言葉は、飛び降りだってよ、屋上からさ、え、マジかよ。誰だよそいつ。なんて声が聞こえた

「はあ！？飛び降りい？」

智樹とそはらを追い抜いていったカップルの後を追って校門に入ると、確かに屋上に一つの人影があるのが確認できた

やめろ、飛び降りるな。早まるな、希望はまだあるって！！という

声に誘われるように前に二人が足を進めると、徐々にその姿が見えてきた

まず、男子学生であり何かをぶつぶつと呟いている。そしてその横には飛び降りるといわれていたがグライダーが置いてある

「あ、あれ。守形先輩じゃない!？」

隣のそらは声を躍らせながら言う

「守形先輩?」

「ほら、『新大陸発見部』の、変わり者で有名な」

(そういえばそんな人いたっけ)

智樹も噂にだけは聞いたことはあったが、学校の屋上からグライダーで飛ばうなんて考えを起こすような人物は自分の日常を崩すだけのトラブル製造機な存在なので、なるべく関わりたくない人物だと思っていたので顔すらまとも知らない

「あらあら、やっぱり守形君」

「やけに楽しそうに見えるんですけど?」

「あら、転校生君。それは気のせいよ」

隣で聞き覚えのある声と、昔どこかで聞いたことのあるような男の声が聞こえた。

智樹がそちらを見ると、周りの女子よりもいくらか大人びた印象を与える、適度に整った体つきの女性と、転校生と呼ばれた背が高く、顔が整っているどこか懐かしい少年がいた

「あ、生徒会長おはようござい」  
「あらあ、スケベで有名な桜井君とその幼馴染の見月さんじゃない？今も二人でお風呂に入ってるって噂の」  
「朝から随分な会話ですね。もはや朝の会話じゃないですよ？」  
「あらあ、随分ってどんな意味かしら転校生君？」

転校生君と呼ばれる少年は「ぐっ」と呻くとそのまま静かになっ  
てしまった

「それで、どうなのかしら？」

「え、いや、違います」

「見月さんの下着を桜井君が選んでるって」

「ち……違います」

「朝の元気な男の子を嫌がる見月さんに無理矢理見せたんですってね。そういうのはまだ早いと思うわ」

「いや……あの、見たんすか？」

「見てたってどういう意味かしらあ。会長、意味が分からないから教えてくれる？」

「す……すみません、謝りますから許してください」

その場で土下座をして謝ると、転校生と呼ばれた少年に

「なんか、見ていて不憫だ……」

と、言われて少し泣きたくなかった。

「で、守形君だけど、本気で飛ぶみたいね」

この学園の生徒会長、五月田根美香子は謎の笑みを三人に送ると屋  
上にいる守形のいる屋上に向けた

「か、会長つて確か守形先輩の幼馴染ですよ？だったら早く説得して止めてくださいよ」

「ううん、確かにそうね。彼にナイフを説得と称して突きつければやめるでしょうね。けど……」

「分かってるなら止めましょうよ？」

転校生の言葉を無視して会長は屋上を見て言う

「面白そうだから、このままにしましょう」

「か、会長？先輩が心配じゃないんですか？」

「あら、心配はしているわあ」

そついうと制服の中に手をいれ、黒い何かを取り出す

「なんで？」

「か、か、会長。まさかそれって」

「ええ、チャカよ。ハジキとも言っわね」

「いや、そうじゃなくって。それ、本物じゃないですよね？」

そこからは会長の娯楽のために、屋上から飛び立った守形先輩は乾いた音とともにグライダーに穴が開き、校庭に墜落させられたのは言うまでも無い。

事が終わり、俺らは自分の教室に向かう。そして、何事もなかったかの様にホームルームが始まった。いつもならば事後連絡と出席を取りホームルームは終わるのだが今日は違った。

「今日は転校生の紹介もある。入ってくれ」

ドアが開き、朝の少年が入ってくる

「隣町から引越してきたらしい。それじゃ、自己紹介して」

少年は「ハイ」と答え、黒板の前に立ちチョークで名前を書き込んでいく

「絃城恭夜です。小さい頃はこっちに住んでいました。これから仲良くしてもらえると嬉しいです」

「それじゃ、絃城。席は……桜井の前の席が空いているからそこに座ってくれ」

「分かりました」

黒板の前から自分の席の前まで歩いてきて席に座った。そして

「席、前になつたからしばらくよろしくな。えと……桜井」

「あ、ああ。よろしく。えと」

「恭夜でいいよ。桜井」

「じゃあ、俺も智樹でいいよ」

その時、頭の中を何かがよぎった。それは幼い頃の記憶

「恭兄？」

そう呟くと、恭夜は驚いた顔をして指を指しながら聞いた

「なんで……まさかトモ坊？」

二人で大笑いしてしまった。もう会うことはないだろうと思って最後に大喧嘩して別れたのにこうして再開を果たしたからだ

そして、彼らはこう思った

(今日も平和な一日だといいなあ)

ホームルームが終わり、授業が始まると智樹と恭夜は二人して居眠りをしていた。

もともと恭夜は頭がいいので問題ないが、智樹はその逆でできないから居眠りをする。

そして、恭夜は久しぶりにあの夢を見ていた

広い草原で三人で手を繋いで立っている夢を。唯一つ、彼女と彼らが違うことは、彼女には翼が生えているということ。

そして彼女は彼らを置いていくように空へと舞い上がる。唯一ついつもの言葉を残して

たすけて。空に……つかまってる

恭夜は諦めずに手を伸ばし、その手を掴まんと飛び上がるが届くことは無かった。そして、いつものように隣の彼は泣いていた。

それを慰めようと、自分の無力さ加減を謝ろうと彼に近づくと、いつもここで夢はそれを拒むように強制終了される……………はずだった。しかし今回はいつものように夢は終わらずに彼に話しかける事ができた

『悪い、俺の手がまた届かなかった。お前は悪くないんだよ?』

『いいや、俺がすっかり手を伸ばさなかったから……………』

聞き覚えのある声、つい最近見たような気がする姿。恭夜と彼はお互いの顔を見ようとしたときに……………目の前が暗黒に包まれ夢は終わった

あの夢を見るとどうしても悔しさで目が覚めてしまう。恭夜は自分の不甲斐なさ、無力さを思い知らされているような気がしてたまらない

恭夜が完全に目が覚めると授業終了10分前。恭夜は机に出しておいたノートに手早く黒板に書いている内容をまとめ授業を終わらせた。

恭夜の後ろでは未だに寝ている智樹の姿、それを見かねたのかそらは声をかけていた

「トモちゃんっ!」

その声に反応するように智樹は目覚めたのか、そはらに向かって呟く

「……………すみません。すぐ起きますんで、殺人チヨップは勘弁してください」



「殺人チヨップ？見月はいつもそんな起こし方してんのか？」

「ち、違いますよ？そんなことしないよ？それにトモちゃんも寝ぼけてるんだよ、きつと！！」

「まあ、別に気にしないんだけどさ」

そんな会話の中、ふと恭夜は智樹の顔を見た。恭夜はその顔を見て驚いた、その両目からは涙が流れ出ていたのだから

「トモちゃん、またあの夢、見たんだね？」

「へ！？」

智樹が頬を触ると微かに水気を感じた。それは紛れも無く、すでに冷えてしまった涙の痕だった。しかし、このようなことは智樹にとって今に始まったことではなく、智樹はこしこしと顔を擦って、それを拭い取ってしまう

「なんだ、またか」

「またか、じゃないよ。トモちゃん子供の頃からずっと……何か心配だよ」

「子供の頃からずっと？」

恭夜は顔をしかめた。彼の夢の中の少年もいつも泣いていたからだ

「どうかしたの？」

「いや、智樹さ、もしかして夢の中で女の子に会ってないか？」

「え！？」

智樹は驚いた、何故彼がそれを知っているのかというように。そして恭夜も確信に近づいたかの様に納得している

「恭夜、何で？」

「いや、なんとなくだよ。確かに少し心配だなあ、病院でも行ってみないか？」

はぐらかすかの様に恭夜が勧めると、そはらも便乗したのか勧めた

「そつだよ、トモちゃん。絃城君の言うとおりだよ」

「は、はあ！？ば、馬鹿いうな、病院でなんていうんだよ！俺は夜に眠れない子供か、もう中学生だぞ」

そはらは「でも」と呟き、恭夜は「ははっ、そつだよな」と言っていた。そはらの場合は本気で智樹のことを心配しているのが分かった。けど恭夜の場合は冗談にも取れるので今回はそつちのほうが嬉しかった。

けど、こういうときの彼の嫌な感は当たることが多い。そう、そはらが変な事を考えている気がしてならなかった

「そつだ、じゃあ。守形先輩に相談してみたらどうかな？」

智樹の予感は的中していたのだった。

Prologue ～それのおとしもの（後書き）

少し文章を追加しました。

少し纏まりがなくなりましたがご勘弁ください

## 智樹とそらのおとしもの（前書き）

サブタイトルは適当ですのであしからず。これはりりなのとスパロボの内容が思いつかないので気分転換で書いているものなので過度の期待はしないでもらえると嬉しいです

では、本編をお楽しみください

## 智樹とそらのおとしもの

「何、夢だと？」

その後、智樹には選択肢は与えられなかったようだ。

新大陸発見部と書かれたプレートの掛かる教室に足を踏み入れた三人は、すぐに、机に座り何かの美少女フィギュア……

おそらく噂のプリティの着ているセーラー服のリボンを爪で結びなおしたり、スカートのプリーツのしわを直していたりしていた守形に出会うことができた

そんな彼を見た瞬間に智樹は逃げ出そうとしたが、そららに首襟を掴まれており失敗に終わった。そんな彼を見て、恭夜は苦笑していた

智樹は後ろで立ち上りつつあるオーラにびびりながらも、目の前の眼鏡を掛けた男……朝は遠めで分からなかったが、おそらく美形という部類に入る姿に一から十まで話したところであった

（なぜ、俺はここに？）

肩を落とす智樹に反して、守形に恭夜とそらは答えを求めている。尤も、恭夜の場合は少し違うようなのだが

「学説では……夢とは脳が記憶を整理する際に発する電気信号だと  
言われている。ある願望や 　ある学者はこの定説において

（何か言ってるけど、ますます危ない香りがしてきている気がする

のは俺だけなのか？」

視線で恭夜に智樹は訴えると、彼もそう思っているらしく安心した。

「だが、そんなものは『現実』の理論でしかない」

まだ、続いていたのかと耳を傾ける

「『現実』の理論では『非現実』の説明はできん。違うか？」

守形はおもむろに机のパソコンを弄り始めると、ある画面を呼び出す。それを三人に見えるように智樹に向けると、恭夜は呟く

「これは……ラピュタ？」

いや、ラピュタは無いだろ。と彼は心の中で突っ込んだ

「いや、ラユタではない」

「やっぱりそうですか……」

「これをよく見る。地球は北極と南極を軸とした磁力、所謂地磁気をまとっているが……これが何か分かるか？」

守形がゆっくり指差したのは、その映し出されている地球の地図をゆらゆらと移動する穴のような黒い円であった。

「いや、全然」

「私も……」

「いや、わかんないし」

「そうだ」

守形は画面から指をどけると、腕を組んだ

「分からないんだ」

「分からないなら見せんなよ」

「ちよ、恭夜？」

「え？分からないってどういう？」

「数多くの学者がこれを突き止めようとあらゆる観測機や果ては航空機まで出して調べたんだが何も見つけれなかった。つまり、結論は『分からない』だ」

そう言っている間にも『分からない』大穴はゆっくりとだが動き続けている。

「だがな、俺にはこの穴の正体は分かっている、そして無論、お前の夢も……全ては」

彼の眼鏡がきらりと光ると、その奥の鋭い視線で彼らを貫いた

「新大陸っ！」

その時、智樹は思った

（駄目だこいつはつ。トラブルの塊どころか、トラブルで作られたような奴だ。こんなのに関わったら俺のへ、平和が……………）

「桜井智樹、絃城恭夜。お前らは運がいい。今日の深夜十二時、この新大陸は空美町を通過することになっている。一緒に行くだろう？」

守形は智樹と恭夜の肩をがしつと掴んだ

「いや、俺は遠慮しときます」

「そうか、俺を信じる。お前の夢は必ず俺が見つけてやる」

「はい、俺は遠慮しますんで智樹と行って下さい」

「ちよ、恭y!？」

その後、結局智樹にせがまれて恭夜も行くことになったのは言うまでも無い。

「あれ？」

「おい」

現在、深夜十二時近く。場所は大桜の根元、風が吹くたびに黒い波が立つ草原の中、その集まるはずだった四人の男女の姿は無く。

代わりに桜を背もたれに立つ絃城恭夜と、何故か制服で三角座りをしている桜井智樹の姿しかなかった

「あれ？」

「おい、なんで嫌がってた俺とお前しかいないんだよ？」

再度呟く彼に恭夜は聞く

「いや………」

「まあ、いや。トモ坊、のど渴いたから何か飲みもん買ってくる



けどコーヒーでいいか？」

「あ、うん。コーヒーでいいよ」

「了解、んじゃ、おとなしく待ってるよ」

恭夜はそのまま歩いて自販機のあるところまで歩いて行ってしまった。

「ああ、ついに一人かあ」

そして、智樹だけが集合場所に残されたのである。まあ、恭夜の場合には気を使ってくれたのだらうが……

「って、ふざけんな！！お前らが来いって言ったのに！！俺は帰るぞ、俺は」

智樹は立ち上がる。

空に捕まってる

しかし、ふと思い出したのはあの夢の少女の言葉。悲痛な、助けを呼ぶ声。何故かそれが耳に聞こえた気がした

智樹が携帯を確認すると、既に深夜十二時五十八分。新大陸の通過まで後、二分

「空に、捕まってる、か」

彼はその場に座り込んだ。どうかしている、そう心で呟きながら

そして、ついに携帯電話は十二時を示した

「……そろそろか？」

回りを確認してみるが、大した変化は見られない。そのまま一分、二分と過ぎたとき、智樹は悟った

「ほら、やっぱり何も」

突如、彼の携帯電話は鳴り響いた。まるで彼を監視していたように

「ど、わ、え、えと、な、もしもし？」

あわてて電話に出ると、そこからは守形の声が聞こえた

「な、何すか、先輩。驚かせないで下さいよ」

「智樹、すまん。恭夜もいるなら伝える。やっと今までのデータがまとまってな……今、大急ぎでそっちに向かっていているんだがよく聞け」

電話の守形は一旦言葉を切ると、すぐに大きなしっかりした声で、智樹に伝えた

「今すぐそこを離れるんだ」

少し時間は戻る。

飲み物を買に行くといつてその場を離れた絃城恭夜。彼は二人分の缶コーヒーを自動販売機で買い、それを取り出そうとしたとき、彼の頭を過ぎる言葉があった

空に捕まってる

あの少女の酷く悲しそうな言葉。助けてと叫ぶ悲痛な声に、必死になってそのか細い腕を掴もうとして結局届かない

「空に、捕まってる……か。」

彼はふと空を見上げる。見上げたその黒い空は星で埋め尽くされていた。なんら変わりのないいつもの星空

「さ、トモ坊も待ってることだし早く戻らないとな」

彼は缶コーヒーを手に再び大桜に向かって足を進めようとした時、彼の魔術師としての感が働いた

何かが近づいて来ていると

彼は眼を強化し夜空を見据える。その眼には星々を食い尽くしたような黒い塊と白い何かを捕らえることができた

落下予想地はちょうど、智樹のいる大桜付近と予測された

「このままだとトモ坊が危ないな」

このとき時間は深夜十二時ジャスト。手に持った缶コーヒーをその場に投げ捨て、脚に強化の魔術を掛け、大桜まで疾走する

(間に合ってくれよ!!!)

残り三十秒、一段とその落下物が大きく見えるようになった。そして、落下まで残り一秒。

彼は大桜の約五十m前から叫んだ

「トモ坊!!!そこを今すぐ離れろ!!!」

「トモ坊!!!そこを今すぐ離れろ!!!」  
「うおっ!?!」

それに気が付いたのか智樹はその場を仰け反るように後ろに飛ぶと、彼が今まで座っていた場所に光の帯、いや、質量を持った何かが墜落してきて、その場に突き刺さったのである

「な、何が」

その間に絃城恭夜は智樹に近づくことに成功していた

「大丈夫かトモ坊？」

「だ、大丈夫だ。これって……」

智樹が指差すので、二人は一緒に穴を覗き込む。大きく削られた地面の中には水蒸気のような煙が立ち込めている。それが少しずつ晴れてきたとき、彼らは見つけた

まず、見えたのは、女性の胸らしき部分。胸元がぱっくり開いた大胆な衣装であるが、紛れもなく、それは女性の胸……

「人？いや、ち、違う」

智樹が脅えたように唇を振るわせた。

「人に……生えている訳が無い」

「アレは……翼か？」

水蒸気が消え去り、落ちてきた彼女の全体像が見えてくる。彼女は鎖の切れた露出の多い衣装と多少変わったいでたちをしているといえ、普通の少女と変わりない姿であった。

そう、背中に生える淡い桜色をしたそれ以外は……

（人に、羽なんて生えていない！）

仰向けになって眼を閉じている少女の背中からは紛れも泣く、彼女

の数倍はありそうな……まるで飛んでそれを羽ばたくことを想定したような大きな翼があった

「こ、こいつはトラブル臭が凄過ぎる！て、撤回！！」

「あ、おいトモ坊。どこ行くんだよ！！」

智樹は自己完結したようで踵を返して走り出そうとした。が、恭夜に腕をつかまれそうになる前にあるものに気が付いた

「え？」

間抜けな声を出すと、空気を切り裂くような音とともに、自分のいる場所に何かが落ちてきた

「おい、動くなトモ坊！！」

自分が昔、兄と慕っていた恭夜が叫ぶ

「うおおおお？」

思わずその場にへたり込むと、目の前に柱……まるでピユタにあるような巨大な石柱が大地に深く突き刺さり、地面が衝撃で揺れた

「トモ坊、お前はその少女を早く助ける！！」

「まって、恭兄はどうするんだ……よ？」

彼の前、正確には穴の上に立つ恭夜に彼は問いかける

「大丈夫だ、問題ない！！」

「何が問題ないんだよ！？問題だらけだろーが！！」

にこやかに問いに答える恭夜に智樹は怒鳴っていた

「と、まあ。冗談はさておき、早くその子をそこから引きずり出せ」  
恭夜はどこからか木刀を取り出すと細かい石屑を弾く

「くそ、分かったよ!! やればいいんだろ!!」

彼はぐいつと彼女の両腕を自分の肩に掛けると、身体の小さい彼はできる限りの力でその場から離れていく。のろのろとした動きだが確実に一歩ずつ進んでいる。

しかし、そんな彼の足取りを妨げるかのように再び、ひときわ大きな石柱が彼の上空に現れた

「あ………」

「トモ坊!!」

後ろから恭夜が走ってくるのが見える。しかし、間に合ったところでどうにもならないだろうと智樹は諦めた

「う、うわあああああああ?」

……その時、羽を持つ彼女が眼を覚ました

「え?」

突然の浮遊感に智樹は目をつぶった。何かに引っ張られているように彼は感じた。再び彼が眼を開いたとき、彼は空に浮かんでいた

(あ、俺、空を飛んで……死んだのか?)

「トモ坊〜!!お前はまだ生きてんみたいだぞ〜。後ろ見てみる〜!!」

「つて、はあ!?!」

彼は下から聞こえる声に反応して後ろを見た。

そこには、先ほどの少女の姿があった。そして

「インプリンティング、開始」

少女がそう呟くと、彼女の首輪の鎖が修復されるように徐々に伸び始める。それは智樹を守るように一周し、そして智樹の右手を見つけたといわんばかりに鎖が伸びると、しゅるしゅると巻きついてしまった。

「え?」

もう柱も何も無くなった先ほどの場所まで降りると、智樹はまきついた鎖を眺める。握り締めると、じゃらっと言う鈍い金属音が鳴った。

「何、これ?」

下りてきた智樹の言葉に恭夜はニヤニヤしながらこう呟く

「ペットに繋ぐ鎖みたいだな。トモ坊にそんな趣味があったなんて知らなかったぜ」

「ちよ、恭兄誤解だつて!!な?」



智樹が彼女にそう振ると、彼女はそれに答えるようにこう述べた

「初めまして。私は愛玩用エンジニアロイド、タイプアルファ、イカロス」

彼女……イカロスと名乗った少女の首輪の鎖が静かに揺れる

「貴方が楽しめる事をなんなりとご命令ください……マイマスター」

それを聞いた恭夜は顔をしかめる

「おい、トモ坊。流石にそれは……いや、なんとも言わないけどよ」

「あ、あの。なんで距離をとっているんですか恭兄？」

「俺も最初は冗談のつもりだったんだが、まさか本当だったとは……」

「い、いや。だから」

智樹は必死に少ない語彙を探しながら誤解を解こうとしていた。が、その必要は無かったようだ

「まあ、冗談だ。それより、その彼女、早くお前の家に連れてくぞトモ坊」

「え、あ、ああ」

「と言う事だ。よかったなイカロス」

その言葉に、彼女……イカロスは頷いた

こうして、少年の空から落ちてきた未確認生物との暮らしは始まる

の  
だ  
っ  
た

智樹とそらのおとしもの（後書き）

作者は別にラピュ は好きではありませんのであしからず。

この小説面白いでしょうか？

まあ、暇つぶしになっているのなら光栄です

魔術師と天使と悪戯と（前書き）

修学旅行中に書いていたので内容はあまり良くはないかと思いましたがどうぞ楽しんでもらえたら嬉しいです

それでは『魔術師と天使と悪戯と』お楽しみください

## 魔術師と天使と悪戯と

「トモちゃん、今日、私日直だから先に行くねえ」

隣の家の窓から呼びかけるそはらの声にも応えず、智樹は朝、起きるなり頭を抱えた。

目の前にいるもの………色素の薄い瞳で無表情のまま彼を見つめ、ちよこんと座っている少女を再度確認する。

背中どころかふくらはぎまで伸びたロングヘアを後ろで二つに束ねた髪型をしており、畳の上にそれらが腰を落ち着けている。

白雪のように白い肌に幼げな輪郭を持ちながら、一際眼を惹く豊満な胸が少女と大人を兼ねそろえた美貌を彼女に与えていた。

「おはようございます、マスター」

（そついや昨日、振ってきたね………未確認生物）

彼は現実逃避をしようと試みるがいつものように失敗した。なぜなら、この未確認生物を彼に預かれという張本人が窓から入ってきたのだから

「おつす、トモ坊。おはよーさん」

「あ、おはよう恭兄………つて、違あああうー!!」

「ん？どうしたんだトモ坊？そんなに叫んじやってよ」

「なんで窓から入ってきた、恭兄！？じゃ無くて、何で俺がこの未

確認生物を引き取る事になったんだ？」

「おお、ワンプレスで言い切ったな。あ……そうだったな」

彼はまるで思い出したかの様に言う

「その娘さ、トモ坊のことマスターって言ったじゃん。そういうこと。俺がその娘のマスターってのだったら俺が引き取ってもよかつたんだけどよ」

「え……それだけ？じゃあ、なに？俺、守形先輩と恭兄に言いくるめられたってことか！？」

「ま、そういうことだ。諦めてくれ」

満面のにやけ顔で智樹に恭夜は言った

「くそ、お、俺の平和があ」

「まあ、それはいいんだけどよ、あんまりシカトしていると可哀想だぞ？」

「……おはようございます、マスター」

「え、俺か？」

「いや、お前しかいなかったらさっきは」

智樹は一応彼女に挨拶を返すと、彼女は笑ったように見えた。もっとも、実際には微笑んですらないのだが……あくまで、笑ったように見えたといっている

「それで、どうするんだトモ坊？」

「え、何がさ？」

「その娘だよ。えと、イカロスだっけか」

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもないよ。まあ、いいか。俺は先に学校に行くけど、

「一緒に行くか？」

「いいよ、先に行っても。後で行くからさ」

「そうか？じゃあ、また後でな」

恭夜は再びドアを掴むと壁伝いに下りていった

「さて、この現状はどうしたものか？」

目の前にいる未確認生物を見据える

「どうかしましたか？」

「いや、自分の馬鹿さ加減にちょっと呆れててな。そはらの殺人手  
ヨップ喰らってでも守形先輩には関わらなければよかったと……」

今日二度目の「どうしましたか」に彼は答えるのだった

しかし、彼の頭の中では彼女のことは考えられておらず、またあの  
夢について思い出していた

(空に捕まってるか、でも今日は何か違ったような)

『天使』を大事にして

「え？」

『天使』を大事にして。決して手放さないで

そんな夢を見ていた。その上、いつもならば起きたときに涙が流れて  
いたのに今回は違った。

(夢が進んでる!?!まさか、こいつ俺の夢に関係してるんじゃない!)

「あのっ」

彼は慌てて立ち上がるうとすると、いつの間にか迫っていた少女の顔がすぐそこにあつた

「ち……………」

「マスター、楽しむことをなんなりと、ご命令ください」

昨日にも聞いた言葉を彼女は繰返すのだった

思わず彼の視線は彼女の白い肌に移った。昨日も見えた美しい肢体を見るだけで彼は恥ずかしくなり、少しずつだが彼の顔は赤くなつていった

「欲しい物とかでもいいんです。私たちエンジェロイドはマスターを楽しませるためだけに造られたものですから」

(欲しいもの?何でも?俺が望めば、なんでもって?でもこの子、作られたって)

智樹はしばらくいろいろ考えていたが、思ったことは口に出せずに変な事を口走っていた

「か」

「か?」

「金かな?やっぱ!」

イカロスの無表情のまま一旦姿勢を整えると唇を開いた



「お金……………ですか？」

その瞬間を逃すまいと、智樹は一瞬でイカロスから距離をとり背を向けた

（危なかった、本当に危なかった！危うくこんな未確認生物に欲情してしまうところだった……………落ち着け俺！相手はトラブルの元凶なんだぞっ！！）

「って、冗談冗談。世の中、お金が全てじゃ」

「一千億くらいでよろしいですか？」

「ああ、そうね。それくらいあったら何でも……………はい!？」

イカロスはどこからか一枚のカードを取り出す。それに向かって、静かにこう告げた。

「トランスポート」

突如カードが怪しく光りだすと、光の粒子が何かを形作っていく。その眩しい光が収まると彼女の手には電卓のようなものが握られていた。それをイカロスはそれをぼちぼちと押すと、智樹の頭上に何かが降って来た

それを確認すると百万円の束だった。それに気が付くとさらに智樹を埋め尽くすように頭上から百万円の束が降り注いだ

智樹はそれを手に取り、すかして見てみるがやはり本物だと分かった。

（つまり、これは……………）

「んふ、ふふふ、ンッフッフッフ」

智樹はイカロスとともに外に飛び出したのである

S I D E 恭夜

彼はトモ坊………智樹の家を出た後、引越してくる前の絃城の家に向かっていた。本当ならば迷わず学校に脚を進めるはずだった。そう、あくまで本当ならばだ

彼は家に着くと乱雑に靴を脱ぎ散らかし、父の書斎に向かった。

（確かイカロスは自分のことをシナプスの製品って言ってたはず）

父の書斎にある二段目の引き出しから鍵を取り出し、本棚にある本の配置を換える

わずかに空いた本の隙間に電子ロックの制御版が現れる。それに鍵を挿し、ふたを開けパスワードを素早く打ち込んだ

『パスワード、Nord-Europa-Mythos。認識完了、開きます』

ガチャン、と鈍い音が響く。本棚が横にスライドし隠し扉が現れた。彼はそれを開け、階段を下に歩く

彼は階段を下りながら考える

（昨日の夢は微妙に進んだな。天使を守ってあげてか、隣のアイツには何を言っただらろうな……………）

階段の一番下には更に扉があった。それを開け、中に入ると広い空間があった。しかし、広いといっても多くの本棚のせいで人が入るにはぎりぎりのスペースなのだが

（少女の言葉、天使、イカロス。そしてシナプス、魔術的要素が絡んでいるとは考えられないしなあ）

彼は本棚から一冊の古い本を取り出す。

（確かこの本の文献に似たようなことが書いていたような）

彼はそれをぺらぺらとめくり、あるページを読む。

（なになに、翼を持つもの……………が塔を……………壊し……………殲滅せん？天使……………感情なき瞳……………駄目だ、読めねえ）

その本を本棚に戻し、更に奥に歩こうとしたときに違和感に気が付いた

（外の時間がおかしい？）

彼は取り出そうとした本を本棚に戻し、走って空美町まで向かう

空美町に近づくとつれて違和感が大きくなる。まるで時間が止まっているような……………

(ん、アレは……トモ坊とイカロス？って、何してんだか)

彼の視線の先では智樹が全裸で止まっている女生徒の前で変態チツクなことをしていた。それを見て呆れようとしたときにイカロスと眼があった

こくん、イカロスは一瞬の間とともに頭を下げた

(俺が見えてるのか？軽く1？位の距離があるんだぞ？)

彼も一応と思い手を振って応えると無表情のまま反対を見てしまった

(やっぱり俺の気のせいだよな？)

そんなことをしている間にも智樹の行動は悪化していくのだった。

(はあ、なんか焦ってここまで来た俺が馬鹿みたいだ………帰って資料あさらないと)

彼はそのまま足早に旧自宅に戻るのだった。その後に智樹の言葉を聞かずに

明日は世界征服だ

『平和』と『現実』を大切に  
する彼らの日常は、彼女との  
出会いによって『平和』から  
大きくかけ離れていくこと  
になるのだった

## 魔術師と天使と悪戯と（後書き）

前回の更新したときに感想をくれたzeroさん、本当にありがとうございました。

感想を励みに頑張って書いていきたいと思います。

**孤独になって気が付くもの（前書き）**

結構適当になってまいりました。

作者の悪い癖がこの間にかなり詰まっていますので、お気をつけてお読みください

## 孤独になつて気が付くもの

「トモちゃあん！起きてよっ。昨日、何で学校休んだのお！恭夜君も来ないで先生怒つてたんだからねえ！」

少年の眠りを妨げるように幼馴染の少女の声が響いてきた。それも窓の外からではない。自分の家の玄関からだと気付いた智樹は寝ぼけ眼を擦りつつ布団から起き上がる

「もう、早く開けなさいっ！」

（たく、うるせえなあ）

寝癖でぼさぼさの髪のまま階下へ。どんと叩かれる玄関に向かつて、今開けると言いながら鍵を解除した。

「もうっ。何で鍵閉めて寝てるのよー！」

怒りで頬を膨らませた制服姿のそらは朝早々、智樹に噛み付く。彼女のポニーテールはゆらゆらと揺らめいていた。

「閉めないのなら閉めないで無用心って」

「そんなのはいいの！さっさと支度して、もう、髪の毛ぼさぼさ！」

下手に怒っている時のそらには逆らわない方がいいと判断した智樹の着替えのため、ゆっくりと二階の自室へ上っていく。

「二度寝しちゃ駄目だよお！家でおにぎり作ってきてあげたから、下で食べられるしておくね」

「おっ」



会談したから覗き込んできた幼馴染の少女にそう声を掛け、部屋に入る。というところで足を止め、昨日の出来事を智樹は思い出した。

(そういや、そはら。また胸が大きくなったとか)

下手に今は刺激をしないほうが良いのだろうが、こんなネタをからかわずにいられないのが男の性である。智樹は満面の笑みで階下へ顔を覗かせると。

「そういえば、そはら。また胸が」

そこで、彼の声は止まった。不審な物が階段の一番下に落ちているのである。

一階まで下りてみると、それはどうやら制服の上着のようだ。

(そはら、何でこんななところに脱ぎ捨てて)

智樹がそれをゆっくり拾うと、異常事態にやっと気付く事になる。

「え……………これ、そはらのリボンにワイシャツにスカートも。下着も……………」

そう、ブレザーの上着だけでなく、そこに彼女が着ていたものの全てが落ちていた。まるで……………

(そはらだけ、溶けたみたいだ)

「もうすぐ、世界征服が完了いたします。マスター」

彼の後ろから、声が聞こえた。振り向くと、光るカードを持ったイカロスの姿。その彼女を見て、智樹の表情は凍りついた。何かは分からないが嫌な悪寒が智樹を襲ったのである

「昨日おっしやいました。、明日は世界征服だと。ですので、世界征服プログラムを起動中です」

刹那、そはらの制服を胸に抱き、イカロスを押しつけるように居間に向かった少年はテレビをつけてみたが、普段やっている朝のニュースは映らず、それどころか砂嵐しか映していなかった

そしてその時に気付く。いつもよりはるかに周りが静かに思えることに。

(あれ?何でテレビが見られないんだ?何で、そはらは消えたんだ?世界征服ってなんだ?今日は何でこんなに物音が聞こえないんだ?分からない分からない、どうして、目の前でそはらは消えて)

「調査の結果、今現在、マスターを王と認める人間は存在せず、一度、全てを消去したほうが効率がよいとプログラムは判断したようです。そのために、今生きている人間はすべて排除し、その後、マスターの臣下となる人間を新たに創造します」

「生きてる人間を……全て消す?」

智樹の手にあるそはらの制服。それは確かにぬくもりが残っており、ついさっきまで彼女がいたということを証明する。

でも、それは消えてしまった

「ちゅ、中止……は?」

「できません。私はそういう風に造られてはおりませんので」

その時、智樹の頭は酷く混乱していた。いつもの平和の日常を生き  
ていたはずなのに唐突にそれはなくなってしまうた。

トモちゃんの馬鹿っ、変態っっ！

智樹、お前は今日から新大陸発見部の部員だ

(嘘…だろ。これ、嘘なんだよな？そうだろ、そはら)

彼女の制服をぐっと抱きしめる。彼女の残り香と温もりが少しの間、  
智樹を包み込む

「マスター？」

だが、次第に消えていく香りと温もりに、再度、絶望を感じて、彼  
はその場につづくまるのだった。その時、ある一人の姿と声が頭に  
浮かんだ

おいおいトモ坊、そんな場所でどうしたんだよ？

(そつだ、恭兄なら)

わずかな希望を胸に抱き、彼はゴーストタウンになった空美町を走  
った。その後ろをイカロスが静かについていく。

そして、町を走る、走る、走る。彼は人のいそうな場所を片っ端か  
ら走る。学校、商店街、どこに行っても人はいなかった。

その現実には疲れてしまった彼がたどり着いた場所は小さな公園だっ

た。ここで、幼馴染のそはらと、最近帰ってきた恭夜と遊んだ記憶が思い出された。

思い出すたびに胸がきりきりと締め付けられる。もう温もりが消えたそはらの制服から彼女が出てこないか、どこからか恭夜が出てこないかと願ってしまう

だが、そんなことは叶うはずはない

「本当に……誰一人、いなくなっちまったんだな」

公園のベンチに座った智樹は誰とも無く、呟いた

「申し訳ありません。てつきり御命令かとばかり」

隣に立つイカロスはその言葉に答えるが、少年は顔を上げず、ただ地面を見つめていた。その姿をイカロスは、自分のマスターが何を望んでいるのか探し出そうと考える。

「……いかが致しましょう。お望みなら、私を廃棄処分にできませんが」

結局イカロスはそういつた答えを自分の中から見つけ出した。彼女の手に粒子が集まり、その手には小型の拳銃が現れる

「そうだな……そうしてくれると助かるよ。もう、トラブルはたくさんだ」

イカロスに振り向きもせずには彼はそう呟いた。その時、再びある一人の声が頭に響いた

(トモ坊、お前は本当にそうなることを望んでるのか?)

(そんなわけ……………無いだろ。こんなの俺の勝手に起きたことなのにイカロスが死ぬ必要なんて)

「はい……………」

彼が思考を張り巡らせる中、マスターの命令を忠実にこなそうと自らの持つ拳銃をこめかみに向ける。

イカロスは未だに恐怖すら浮かべていない。

自分はマスターの願いを叶えるために存在する。

でも自分はマスターの願いと違うことをしてしまった

だから自分は廃棄されなければならない

簡単な図式。整然とした理論。普通の人間ならたどり着かないその結論にイカロスはまったく疑いを持たない

彼女……………エンジェロイドにとって、それが普通のことなのである

(俺はなんてことを言っちゃったんだ……………イカロスは何も悪くないのによ)

イカロスは一切表情を変えずに静かに引き金を引いた……………

「ッ!」

その刹那、ベンチに座っていた智樹は立ち上がりイカロスを押し倒すように両手を押さえつけた

「マス……ター」

（そうだ、それでいいんだトモ坊）

馬乗りになられたイカロスは不思議そうに呟く。

「はは……はははは」

（仕方ねえなあ、トモ坊はさ……俺が助けてやるからちゃんと彼女を引きとめてやれよ）

その時また、いっそう強く頭の中に声が響いた

「ウソ……ウソ。中止……な？今の、命令ナシ、な」

「命令の中止は、できま」

智樹は叫ぶと同時にまたぐつと両手に力を込めた

「分かってんだ……お前は何も悪くない。お前は俺の命令を聞いただけだもんな。悪いのは俺さ……何も考えずに馬鹿みたいをお願いしまくって。だから、お前が消える必要なんてないんだ」

そう、全ては俺のせいなんだ

その時、さっきまで頭の中に響いていた声は現実のモノとなって現れた

「よく言えたな、トモ坊。それと遅くなって悪かった」

「え……恭兄？」

「ああ、お前の頼れる兄貴、恭夜だぜ。イカロス、お前は後で俺のところ尋ねて来い。この夢は俺が終わらせるんだからさ」

「しかし、命令の中止はでき……」

「黙ってみてろ、起きたら忘れるんだからな。模倣による完全なる創造開始、『創造』」

恭夜の手のひらに光の粒子が集まってくる。それは一枚のカードとなり、恭夜の手に収まった

「それ……は？」

「お前のカードだ。願いを叶える、全てを夢に……」

世界は光に包まれた……

引き続き古い文献を読み漁る恭夜。そこは彼の工房であり魔術師の聖域である。ここは一つの世界であり、外界から遮断されているはずなのだが

突如、世界が反転するように視界が悪くなった。今までカラーで映っていた世界はモノクロに変わり、足が震えだす

「く、何だ……これは魔術？いや……これは」

彼は己の魔術回路全てを開きそれに抵抗する。しかし、それだけでは間に合わないと判断した彼は肉体補強の創造を開始する

身体の消失は止まったが、彼の頭の中には膨大な情報と記録が流れ込んできた。まるで、絃城を受け継いだときのようなあの感覚

「はあはあ……くっ、俺じゃなかったら廃人確定だな。それにし  
たってこの量は凄まじいな」

彼はその記憶の中から興味深いものを見つけた

(これは……ははっ、こいつは興味深い。それはさておき、俺が  
こうなるってことは一般人は助からないだろうな)

彼は、この騒動の原因だと思われる彼女の場所に向かうのだった

場所は桜井と書かれた表札の家の前。彼はその家のドアを叩いていた

「おい、トモ坊いるなら返事しろよ」

いくら叩いても返事どころか物音一つ聞こえない家を前に恭夜は再度  
度呟く

「って、やっぱりないよなあ」  
(それにしたってこの静寂は異常だよな。やっぱり何かの大魔術な  
のか?)



そのまま彼は人のいそうな商店街や学校に行ってみるがやはり誰一人、人は存在しなかった

(ねちねち歩き回っても仕方ねえよな。腹括るか)

「模倣による『創造』の完全なる再現開始」

不完全な創造を行うために模倣を使って完全なものとする。彼が創造したものは白く輝く翼、大空を自由に羽ばたくための翼を

「創造完了……………さて、空から探すか」

誰もいない世界でならば今まで隠してきた魔術を惜しみなく使うことができる。もっとも、彼にとって魔術とは平和や幸福を守るための手段に過ぎないのだが

彼は天高く羽ばたく。高い高度から彼は下を見下ろす

「はあ、誰一人いないなんてな……………孤独は死に至る病ねえ。俺には痛いほど……………って、アレはトモ坊か？」

小さな公園。確かにそこに小さな人影が二つ、一つは俺と同じ綺麗な翼を生やした少女、もう一つはベンチで下をうつむく少年の姿

(間違いないな、この近くで降りて驚かせてやるかな)

彼は近くの雑木林に降り、翼を消し、足早に智樹の下へと走った

「ッ…」

近くの草陰まで来たとき、智樹はイカロスを押し倒していた

「マス……ター」

（そうだ、それでいいんだトモ坊）

馬乗りになられたイカロスは不思議そうに呟いているのが見える。  
彼はその現場を見て思った

（やるじゃんトモ坊……じゃなくて、早めに出てって助けてやるか）

「はは……はははは」

（さて、イカロスの手に持つてるカードの解析を開始しないと）

「ウソ……ウソ。中止………な？今の、命令ナシ、な」

「命令の中止は、できま」

（よし、解析完了。今すぐ創造による再現の構築準備）

「分かってんだ……お前は何も悪くない。お前は俺の命令を聞いた  
だけだもんな。悪いのは俺さ……何も考えずに馬鹿みたいをお願い  
しまくって。だから、お前が消える必要なんてないんだ」

準備の終わった彼は草むらから歩いて彼の前まで出て行く

「よく言えたな、トモ坊。それと遅くなって悪かった」

「え………恭兄？」

「ああ、お前の頼れる兄貴、恭夜だぜ。イカロス、お前は後で俺の  
ところに尋ねて来い。この夢は俺が終わらせるんだからさ」

「しかし、命令の中止はでき………」

「黙ってみてる、起きたら忘れるんだからな。模倣による完全なる創造開始、『創造』」

恭夜の手のひらに光の粒子が集まってくる。それは一枚のカードとなり、恭夜の手に収まった

「それ……は？」

「お前のカードだ。願いを叶える、全てを夢に……」

「貴方は何者ですか？」

「俺は……ただの一般人だよ。こいつの平穏と幸せを守るためのな」

「そう……ですか」

「あと、夢だったってことはお前から伝えてくれ。俺はこの場にはいけない人間なんだからさ」

「はい……わかりました」

世界は光に包まれ、長かった孤独な夢は終わるのだった

「トモちゃあん！起きてよっ。昨日、何で学校休んだのお！恭夜君も来ないで先生怒ってたんだからねえ！」

（あれ？）

暖かな日光に包まれながら、智樹がゆっくり布団から起きる。先ほど聞こえた声は確かにそはらの声……なんで、そはらの声が。

「トモちゃん？聞こえてるう？先生、めっちゃめっちゃ怒ってたんだからね」

「そ、そはらっ？」

幻聴だと思ったのもつかの間、確かにハッキリと聞こえた。いや、そはらだけではない。朝から田んぼや畑に出かける農家の方々の声やトラクター、軽トラのエンジン音。全てが今までどおりの朝になっていた。

「ど、どういっ」

そう思っ顔を上げると、目の前に光るカードを右手に持って座り込んでいるイカロスの姿と恭夜の姿があった

「おはようございます。マスター」

「お、ようやく起きたかトモ坊」

「お、おい、そのカード……まさか」

「はい『夢』だったら良い、とお休みの前におっしゃったので、全て夢にして元通りに……いけなかったでしょうか？」

途端、智樹は布団を蹴り上げると、イカロスに近づき、その両手をつしりと握り締め、ぶんぶんと何度も上下に振った

「いや！いいいいいい！いい仕事してくれたよ！」

「ありがとうございます」

「朝から好きだなトモ坊。へっへっへ」

「って、何で恭兄がいんだよ！？」

「さつきからいたじゃねえか!!」

そんな会話をしている中、恭夜をイカロスは見つめていた。ほんとにこれで良かったのだろうか

(おいおい、夢が覚める前にも言っただろ？俺はあの場にはいけない人間だつて。あの時はお前がトモ坊の心のより所になるしかなかったんだよ)

念話でイカロスに恭夜がそう送ると、イカロスはわずかにだが笑ったように見えた。実際には笑ってなどはないのだが

「じゃあ、俺は先に学校行くから。そはらと仲良くこいよ」

「つて、また窓から出てくし……まあ」

「あの、マスター？」

「ん、なんだ？」

「あれも夢にしたほうがいいのでしょうか？」

「あれ、何が？」

「『そばにいる』……とおっしゃってくださいました。あれも夢のほうがよろしかったでしょうか？」

彼は確かにそういった。だから、気恥ずかしかったのでこう応えるのだった

「イカロスの……好きなほうでいいんじゃないのか？」

「え、それはどういっ」

「そゆこと。そゆことなの、うんっ、うんっ！」

彼女は自分なりにその言葉を精一杯理解して頷くのであった

今日も世界に平和が訪れることを願おう。彼らは日常に感謝しつつも学校に向かうのだった

孤独になって気が付くもの（後書き）

なんか、恭夜が必要ない気がしてきた。早くニンフが出てこないと  
恭夜の出番が……とりあえず、恭夜はニンフとくつつきたい

単身シナプスに乗り込んでハッピーエンドとか……駄目ですよね。

r  
z

夢は終わって、日常は戻って……？（前書き）

何とか投稿に至りましたが、次回の案がまとまっていません。

暇でしたらあとがきのアンケートにご協力頂けたら嬉しいです



夢は終わって、日常は戻って……？

前回、私こと桜井智樹は平和に学校に向かうのだった。と、あったが実際にはそうはならなかった。

平和に学校に迎えたのは恭夜一人で、智樹はというと……

「トモちゃんっ？もう、本当に怒るよっ」

幼馴染の声に反応して布団から飛び出した彼だったが、あることに気が付き、表情を強張らせる

論題

？一人暮らしの男の部屋に素性の分からない女の子

？しかも、少女には翼が生えていて、少女がしている首輪の先は男に繋がっている

？その上、少女は男をマスターと呼んでくる

以上の三項目を踏まえて結論を言うと………鬼畜

(どう鼻屑目に見ても、俺、変態で鬼畜でしかねえじゃねえかああああああ！！)

漸く事態を理解した彼は、直ぐに冷静さを取り戻す。そうだ、どうせ家には鍵がかかっているんだから、そはらが入れるはずがない

何とかごまかして、その間にこの手の鎖を。

「もう、トモちゃん鍵開いてるから入るよお！」

(しまったっ！昨日の世界征服の夢のショックで鍵なんか閉めてねえ！！と言うか、鍵も元に戻しておけよイカロスっ！！)

「そ、そはらっ、ちよっと待て」

「なんだ、トモちゃん起きてるじゃない。起きてるんなら、返事くらえ」

その間にもとんとんと階段を上がってくる軽い足音が聞こえてくる。恐怖に表情を強張らせながら力いっぱい鎖を手から引き抜こうとするが、一向に抜ける気がしない

「つく、何で取れないんだよ………そうだ、恭兄はどこに！！」

「絃城さんなら先ほど、先に行くよ………」

「そうだったああああ！！イカロス、お前も鎖をはずすの手伝え」  
「はい」

イカロスは立ち上がり、言われたとおりに智樹の鎖の部分を両手で持つ

そして、力いっぱい引っ張った瞬間

「うわあ？」

なぜだかイカロスの力が勝り、智樹の身体はぐいっとイカロスに引き寄せられるように倒れていく

「トモちゃんっ？今の物音、何っ。何か………」

無常にも襖は開かれた。イカロスは智樹の布団に押し倒されたよう

な格好になっており、ほぼ言い逃れはできない状態である

嗚呼………無常。今の彼にぴったりな言葉なのだが、少年は諦めなかった

「違うんです。鎖をはずそうともみ合つうちに何故か……」

当然、そはらの右手には偉大なるオーラを纏うチョップの形に固められる

(剛掌波!?)

そう思うのも一瞬。今日も桜井家では、大きな鈍い音が響くのだった。

その日の学校のある教室からは、一人の男の高らかな笑い声が上がっていた

「ぶっ、どうしたんだよトモ坊、酷い顔じゃないか……ぶ、あはっはっはっは!!」

「いや、あの。こうなった原因はお前なんだよ恭夜!!」

「え、俺か? 違うだろ、口車に乗せられたお前も悪いんだよ」

「た、確かに………恭夜も一人暮らしなんだから十分引き取れたんじゃないか。くっそお」

「そういうこと。でもいいじゃないか、孤独も少しはまぎれるんじゃないのか？」

「う、確かにそうだけどさ………じゃなくて、そはらの説得頼むよ。このままじゃ毎朝死ンじまうよ」

俺はにやりと顔を歪めると、一つ提案をする

「別にいいけどよ、た」

「本当か!!」

「最後まで聞けよ。ただし、条件が一つある。それを承諾するならいいぜ」

「何でもいいから頼む!!」

「よし、じゃあ後で内容教えるからまってる。」

俺は席から立ち上がるとそはらの前に立ち、問いかける

「ちょっと良いか、見月？」

「ん、何ですか。絃城君？」

「つと、その前に恭夜って呼んでくれないか。苗字はあんまり好きじゃないんだ」

「じゃあ、私もそはらって呼んで。そのほうが親しみがあるからね」  
「分かった。じゃあ、そはら。話つてのはさ、トモ坊に………じゃなくて智樹についてだ」

「トモちゃんですか? って、あれ? トモ坊って………もしかして!」

「ん、どうかしたか？」

「もしかして恭ちゃん？」

俺にはその呼ばれ方に覚えがあった。それは確か………幼い頃の記憶にあったような

「もしかして……って、今までどうして気がつかなかったんだろ  
うな。そうだ、そはらじゃないか」

「って事は、やっぱり!」

「なんでかな、何日か過ごしてたのにお互いに気がつけないなんて  
さ」

「うん、何でだろね」

「それはおいといて、続きはなして良いか？」

「うん」

俺はこの前のことを寸分違わずにそはらに伝えたと、少し不思議そ  
うな顔をしたが納得してくれたようだった

「何だ、随分要領が良いじゃないか」

「はは、だつて朝にその女の子見たんだよ？見てなかったら、たぶ  
ん信じられなかったらうけど」

「ふーん、ま、そういうことだ。あんまり手厳しいとトモ坊に愛想  
着かされるかもよ？」

「な、なななな、な!」

「って、何だ。冗談のつもりだったんだけど案外本当なのかもな」  
「何言ってるんですか!」

そはらは高速で手をチョップの形に変えると、恭夜に叩き付けた…  
…はずだった

「!?!」

「おっと、あぶねー。って、分かったから……チョップはやめてく  
れ」

「……うん」

その時、周りでは「あのチョップを回避した!？」「何もんだ、あの転校生!！」「殺人チョップがきかない!？」「アイツ、できる!！」などと言われていたことは、俺達には知るよしもなかった

後日、俺は何故かクラスの男子（何かモテなさそうな）たちに尊敬されていた

「何でさ?」

学校の帰り道、智樹と恭夜は一緒に歩いていた。そはらは先生から何かの手伝いを頼まれていて、遅れるそうだった

「それで、条件ってなんだったんだ?」

「そういえばそうだったな。言わなきゃ忘れてたところだ」

「げっ、墓穴掘った。言わなきゃよかった」

「そういうなよ。これはもしかしたら俺達の共通の目的かも知れないんだからさ」

「ん、どういふことだ恭兄?」

「天使を大切にしておいて、だ。ま、イカロスのことなんだろうけど」

恭夜がそういうと、智樹は顔をしかめる

「恭兄、それってもしかしてさ……三人で遊んでいる夢の終わりの

言葉か？」

「ん、そうだけど……って、やっぱりか」

「もしかしてさ、俺達」

二人の声が入ってきた

「「同じ夢を見ているんじゃないか？」」

二人はお互いに顔を見合わせ、納得したように呟く

「やっぱりお前だったか、いつも泣いていたのは」

「恭兄こそ、いつも悔しそうにしてるじゃねーか」

「意味は分からない……けど、あの女の子が言ってるんだから俺達二人だけででも大切にしようぜ？」

「……………」

その言葉の答えを待つ恭夜、しかし智樹は応えなかった。いや、答えられなかった

「そうか、別にいいけどさ。ゆっくり悩んで、お前が答えを決めるならそれで良いよトモ坊」

「たすかるよ、恭兄」

その後、二人は話すこともなくお互いに家に向かって歩いて帰るのだった

天使を大事にしてあげて

二人はそれぞれ、夢を思い出しながらその日を過ごしたのだった



夢は終わって、日常は戻って……？（後書き）

ようやく第一部、と言うよりも全体的なプロローグが終わりました。

次回から、どうするかは未定です

案としては

？原作どおりギャグパートを書きながら進める

？シリアス優先で話を進める

？主人公二人の部活を作って、文化祭のライブを行う（たぶん作者には厳しい）

の三択です

**夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（前編）（前書き）**

前編と言っわけですが、原作から一話飛ばして書いています。

基本的にシリアスを重点的に書いて、ギャグは途中で閑話としてた  
まに書くことに決めました

ですが……作者のシリアスって、ギャグに近い気がします

夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（前編）

夏と言えば、海。山。川。

と言うことで、智樹とそらは、イカロスのカードの一つである『使い捨てだが思考の強運を手に入れられる機器を取り出す能力』を持つカードで見事、町の福引でペア日帰り海水浴券を手に入れたのだが、その後ろに並んでいた守形と恭夜も日帰り海水浴券を手に入れ、イカロスも加えて五人で行くことを約束した。

……そこまでは良かったが智樹は内心後悔していた。

自分の隣では何故か不機嫌そうにしているそらも一つの理由だ

朝から連絡の一つも無い恭夜

そして、来るのが遅い守形を呼びに行くにも町に一軒しかない豪邸の守形家では『そんな人間は居ない』と言われて途方に暮れ。

途中で生徒会長に見つかり、以前に起きた学校での『パンツ騒動』を嫌に正確に追求されたり、商店街に向かって飛んでいたイカロスについて追求されたりしたのも、一つの理由

だが、最も後悔している大きな理由は。

「先輩、そっちに行ったぜ！って、トモ坊にそらじゃん。」

「ふむ、了解だ。ん、智樹に見月。悪いな、準備に手間取っていて

………む、そのような左アッパーなど食らうものか。ならばこれで  
どうだっ」

彼と幼馴染の生徒会長に言われ、町外れの森を流れる川の川原を訪ねた智樹、そはら、イカロスの三人は、やっとそこで守形と恭夜をみつげられた

川原には守形の表札のあるテントと彼の自転車、以前に見たことのあるライダーなどがあり、どうやらここで生活しているらしい

何でこんなところで中学生が生活しているのか疑問があつたが、そんな疑問は直ぐに吹き飛んでしまう。

なぜなら……

「あの、なに……してるんすか？」

彼らの目の前で、学校の夏服を着た守形と黒のタンクトップにジーパンと言う格好をした恭夜は、黒い毛に覆われた巨大な生物とパンチの応酬をしていたのである。

ちなみに、黒い毛の動物とは、山に生息する鮭や蜂蜜が好物な、アレ

「ああ、熊と戦っている」

「戦闘中だけど、どうかしたか？」

守形の右のジャブが熊の胸元に打ち込まれたのを恭夜が確認した後、恭夜の右ストレートが熊のわき腹にクリーンヒットする

「見れば分かりますよ……てか、何で恭夜も一緒なんだよ!？」

「うむ、この時季はそれほど凶暴だとは思わなかったのだが、どう

やら俺がこいつの縄張りの蜂蜜を取ったのがばれたらしくな。根にもたれたらしい。少し待ってくれ、いつものことだ」

「んー、俺か？楽しそうだったからだけど問題でもあるか？」

（俺は何も聞いていない。何も、聞こえてないぞっ）

智樹は、恭夜と守形の非現実的な言葉を忘れることにした。

「ところでさ、イカロスの大きな翼はどうしたんだ？」

「そういえばそうだな、どうしたんだ？」

「翼、ですか？」

他人が見たら通報されそうなか、二人は余所見をしながらかわしつつ、恭夜と守形はイカロスを見る

イカロスはキャミソールにパーカー、下にはジーンズ生地のミニスカートを穿いており、あのいつもの目立ちすぎる大きな翼はどこにも見えなくなっていた

出で立ちだけ見れば、何の変哲もない、可愛い女の子にしか見えないのである

「翼でしたら、私の翼は可変式となっております……」

そういうなり、イカロスはするつとパーカーを脱ぐと、キャミソールの肩紐を少し緩めて、後ろを振り向きつつ、大きな翼を守形と恭夜に見せた

刹那、二人と戦闘していた熊はびくつと震えるなり、逃げるようにして山の奥に帰って行ってしまった

イカロスは二度、三度と翼を羽ばたかせると、きゅつと翼全体をすくませる。すると、しゅるつと桃色の翼は縮んでいく

「ここまでなら何とか小さくすることが……少し窮屈ですけどね」  
「うわ、わ、分かったから、パーカーを脱ぐな。キャミをずらすな」

「なにそんなに慌ててんだよ、トモ坊？」  
「あ、慌ててなんかねえよ！」

なぜなら、守形と恭夜に背中を見せると言うことは、智樹と真正面に向き合うことである。パーカーを脱ぎ、キャミをずらせば、当然、智樹の目の前にはイカロスの豊満な谷間やその頂点が……

「トモちゃんっ！」  
「な、何でそはらが怒るんだよ」  
「ふんだ」

朝からずっと機嫌の悪いそはらはむつとした表情で智樹からそっぽを向いた

「ふむ、可変式とはな………ともかく、その翼のおかげで熊も追い払えた。準備はできてることだ、駅へ向かおう」  
「そーだな。んじゃ、駅に向かおうか」

駅に向かう途中、イカロスと智樹に気付かれないように守形と恭夜はそはらの隣に行く

「すまん、見月」「悪かったな、そはら」  
「……………何がですか？」

「何がって、折角二人きり!?ムガあ」  
「すまん」

事態の悪化を防ぐために、守形は恭夜の口を塞ぎ、謝罪の言葉を述べた

「う、わあ!」

電車までの不機嫌が一転、そはらの楽しそうな声が上がった

「きれい!」

チェック地の胸元にワンポイントで赤い小さなリボンがつけられたワンピースタイプの水着を着たそはらが感動したように胸の前で両手を組む

「うみ………?」

黒の大胆なビキニの上にパーカーを羽織ったイカロスは、首輪の鎖をちらりと鳴らしながら、周りをゆっくりと観察する。

「うおっ、砂あちい、砂あちっ、あちゃちゃちゃっ!サンダル、サンダル!」

トランクスタイプの水着の智樹はイルカの玩具を脇に抱えたまま、爪先立ちで一旦、海の家まで戻っていった

「ふーん、海ねえ。来るのはいつ以来だっけかなあ。お、あれ面白そうだしやってくるかな」

更衣室に入らずにその辺を散策していた恭夜はある会場に飛び込んでいく

（そうよね、確かにトモちゃんと二人つきりで海に来たかったけど、いつまでもむくれてちゃ駄目だよな。イカロスさんや守形先輩、恭ちゃんもいるけど、せっかくトモちゃんと海に来たんだから）

元々、福引でペア日帰り海水浴券を狙ったのはそはらであつた。

（せっかく水着も新しいの買ったんだし……楽しまなくちゃ）

そはらはぐつと遼の拳を固めると、サンダルを履いて戻ってきた智樹ににこつと笑いかけた。

「ね、トモちゃん。一緒にボートに乗ろうよ」

「ああ…おろ？先輩と恭夜はどこに行った？」

「え？」

そこで智樹は、電車まで一緒だった守形と恭夜がいないことに気が付く。確か更衣室に行くまでは一緒だったはずである

「すごい！すごい少年が現れましたっ！それも二人！！」

二人を探して周りをきよろきよろしていた二人の耳に大音量の音が



聞こえた。それはどうやら海の家近くのイベント会場からであったが……

「凄い、凄過ぎる！！この『もつと汗・刺激的！大食い大会』の予選を勝ち抜いた猛者たちが苦しむ中、飛び入り参加をした少年二人が他者を圧倒している！！既に両名十二杯目！！何だこのネクタイの少年と、黒のタンクトップを着たイケメンはあああ！！何者なんだ、守形英四郎、絃城恭夜！！」

イベント会場から聞こえてくるエムシーの声に、二人は立ち尽くした

「……いいや、あの二人はほっとこう」

智樹の声にそはらも静かに頷く

「じゃ、じゃあ、私、ボート借りて来るね？」

「あいあい……」

再度笑顔になったそはらが軽い足取りで人ごみを掛けていく中、智樹はふと、喧騒の中で気がつく

（おろ？今度はイカロスの奴が消えた？）

そう、先ほどまで周囲を見渡していただけだったイカロスが影も形もなくなっていたのである。

（先、泳いでんのかな？ていうか、アイツって泳げるのか？）

さっと、視線を海へ

子供たちは浅瀬でばしゃばしゃとはしゃいでおり、若いカップルらしき男女がビーチボールで戯れる

そんな中、智樹は見つけてしまった

ぶかあつと海面に浮かぶ、見慣れたパーカーを

「お、おい、まさか」

最悪の事態を想像した智樹。だが、その耳に不審な音が響いてきた  
ずしん、ずしんと、何か重いものが歩いているような物音である

「ん？」

智樹はその音がしたほうに泳いでいく。徐々に近づいているのが分かった。それは紛れもなく、海底から響いてくる。そして、やっと真上までたどり着いたところで、智樹は海底に目を凝らした

そこには酸素マスクもなしに海底をずしんと歩くイカロスの姿

ちなみに、右手にはなまこ、左手にはかにを掴んでいる

(いたっ！アイツ、何やってんだ)

智樹はその場で息を大きく吸い込み、イカロスを捕まえようと潜水を始める。だが、思った以上に浮力が強く、うまくイカロスのところまで潜れない。

海底を歩くと言う奇怪極まりない事態と潜りきれない苛立ちからか、

智樹は我を忘れ、潜水を続けながら……

思いつきり叫んだ

「お前、何やってっ、ぐぼっ？」

当然、海水が口の中に浸入する。つまり、智樹は先ほどのパーカーのように海面にぶかぶかと浮かぶのだった

「圧海深度三〇〇〇、無酸素活動時間連続七二〇時間。私はそのように造られていますので、この程度の浅瀬でしたら何の問題も……」

(そういう問題じゃねえ!!)

心の中で突っ込みを入れる。その後、飲み込んだ海水をゲホゲホと吐き出した後、言葉で突っ込む

「ぐほ、げほ、はあ、はあ、せめて……人並みに浮かんでろっ！」  
「はあ、ですが……羽が水を吸って重くなってしまうので、どうしても……ぶくぶく」

イカロスは再度、潜水艦か、もしくは轟沈した戦艦の如く海底に沈んでいく

(いかん、こんなのを放っておいたらきつと……いや、絶対に騒ぎになる。せめて人並みに浮かべるように……)

「マスター？」

頭にわかめと、またも力二を捕まえて戻ってきたイカロスは智樹の後ろに座り込むと、無表情のまま首をかしげた

「よし、イカロス。お前に泳ぎを教える」

イカロスに向き直った智樹は高らかに宣言するのだった

彼は今、一つの戦場に立っていた。倒れるものは後を絶たない、そんな戦場に……

「おおっと！！守形選手、ついに二十杯目に入りましたあああ！！この細い身体はどこに入ると言うのか！！既に、この会場に残る選手は二人！！守形選手と絃城選手だあああ！！」

エムシーの叫び声が会場に轟く。そう彼。絃城恭夜は『もつと汗・刺激的！大食い大会』に飛び入り参加したのだ。しかし、飛び入り参加をしていたのは彼一人ではなかった。

ここに来る前に一緒に熊と格闘していた守形も、飛び入り参加をしていたのだ

「おおっと！？ここで絃城選手が二十杯目に到達しましたあ！現在の差は二杯、一体どうなるのでしょうか！！」

その執狂エムシーの声を聞きながら、二人はカレーを食う様に口に運ぶ。

「悪いが、別に勝負なんてしているつもりはないのだがな……お代わりだ」

「そうだよなあ、別にただ飯食えるから参加しただけなんだけど……こっちもお代わりだ」

おそらくこの二人はただ飯が食えると思って参加したのだろう。もはや、この二人しか残っていない時点で商品は確実に手に入るのだ。それなのに食べ終わらないと言うことは、ただ単に食事をしていると言うことなのだろう

「おおお！！ついに料理人が一人倒れました！！一体、どれほど食べれば気が済むと言うのだろうかあああ！！」

お互いに三十杯を越えたあたりでスプーンが止まる。どうやら、二人の腹が満たされたようだ

「えーと、ご馳走様。もう無理だ」

「ついに絃城選手がリタイヤしたぞおお！！つまり、この瞬間に守形英四郎選手の勝利が確定しました！！おめでとございます！！感想をどうぞ！！」

「ああ、非常に美味かった。」

「それでは、賞品をお渡しいたしますのでそこのお二方、ステージの前にどうぞ！」

二人は椅子から立ち上がると、促されたようにステージの前に行った

「それでは優勝賞品の『海の家・家族ご宿泊券』を守形英四郎さんに贈呈いたします。準優勝の絃城恭夜さんには『サバイバルセット、アーミーナイフ付』を贈呈させていただきます」  
「ふむ、食べただけで賞品がもらえるなんてな」  
「おかしくねえか？何でサバイバルセットなんだよ？」  
「以上、これで『もつと汗・刺激的！大食い大会』を終了いたします！！」

大きな歓声の中、二人の熾烈？な戦いは終わったのだった

「それで、恭夜。お前はその後どうするんだ？」

「ん、俺？その辺散策しようと思ってますけど……先輩はどうすんの？」

「俺は釣りだ。今のうちに食材を確保しておきたいのでな」

守形はどこからかクーラーボックスと釣竿を取り出す

「暇ならお前もどうだ、やらんか？」

「いんや、俺は遠慮しておきます」

「そうか……ならば一人で行ってくる。じゃあな」

「んじゃ、そういうことで……頑張ってください」

お互いに違う方向を向き歩いていく

「さて、と。見晴らしのよさそうな場所でもさがすかなあ」

周りを眺めるが特によさそうな場所は見当たらない

(しかたねえなあ……トモ坊たちと合流してボートでも乗るか)

恭夜は再び辺りを見渡す。人混み、はしゃいでいる子供、カップル（俺も作るのかな）……そして、浅瀬を眺めたとき。そこに智樹とイカロスの姿があった

（ふーん、なんだかんだ言っただけで楽しそうじゃん。んと、そはらがないのが気になるけど……まあ、ついでに聞いとけばいいかな）

彼はそのまま智樹とイカロスのいる浅瀬に足を運ぶ

近づいていった彼を、先に気が付いたのはイカロスだった

「どうしましたか？」

「イカロスだれにむかつ……って、うおっ！？きよ、恭夜？」

「おいおい、人を化け物みたいに言うなよ……で、何してんの？」

「マスターに泳ぎ方を教えていただいています」

「泳ぎ方って、イカロスは泳げないのか？」

「はい。羽が水を吸って重くなってしましますので……」

恭夜は一旦顔を悩ませる。が、直ぐにもとの表情に戻る

「どうかしたか、恭夜？」

「いや、なんでもないさ。それで、そはらはどうしたんだ？さっきからどこにも見当たらないんだけどよ」

「え？そはらならずとそこに……」

智樹が指を指した方向には、最初にとって置いたビニールシートがあるだけで誰もいない

「誰もいないから聞いてんだろ……なにか心当たりはないのか？」

「まさか……！」

幼馴染であるそはらがいるはずのビニールシートを指差す智樹。だが、そこに居るはずであるそはらの姿はなかった

「誰もいないから聞いてんだろ……なにか心当たりはないのか？」

恭夜の一言に、智樹はある一言を思い出した

ね、トモちゃん。一緒にボート乗ろうよ。

不意に思い出したそはらの言葉。確かにボートに乗ると約束した言葉。

それなのにボートを借りに行ったそはらは一度も智樹の元へ戻ってきてはいない

「まさか……！」

夏であるのにへんな寒気のした智樹は人の少なくなつた海へ視線を送る。

「って、やっぱり心当たりがあるんだな。」

「あるも何も、俺。約束忘れてた……ボートに乗ろうって約束したのに」

「ボート……ね。」



一度も後ろを振り向いて話さない智樹の言葉を聞き、恭夜も智樹の隣に立って海に視線を送る

「くそ、どこだ……どこなんだよ、そはらっ」

「そんなに慌てるなつて。直ぐに見つけるからよ」

「何でそんなに落ち着いてられるんだよ、恭夜はっ!？」

「そう見えるか……これでも結構慌ててるんだぜ？」

隣に立つ恭夜の顔には、確かに焦りがあることは智樹にも分かった。

「まあ、そう見えたなら謝るけどさ。っと、見つけたぞ。あれ、見えるか？」

恭夜の指差す先は、まず海水浴客が行きそうにない沖。そこに何か小さなものが浮かんでるのが分かった

「そはらっ!」

「ほら、お前がいつてやれよ。約束したんだろ？」

「言われなくても!! 恭夜、イカロスのこと頼んだ」

「了解だ。ちゃんと謝って来いよ……」

智樹は海に飛び込むと、自分でも驚くほどの速さで海の中を突き進んでいく。すると、やはりあの沖に浮かんでいたものは、貸しボートで、そこには一人の人間が座り込んでいるのが見えた

(そはら!)

夕日に照らされたシルエットは、ポニーテールを結っていた。

その人影が何故かボートから乗り出しているのが分かる。まだ遠くで智樹には見えないが、ボートのオールが海に流されているのである  
(そはら、危ないっ)

智樹がそう思った瞬間、ボートはぐらつと夕日を遮るように起き上がると、乗せていたポニーテールの少女を海へと投げ出した

そこで、やっとそはらの姿が智樹に見える

ボートを先に掴んだ智樹は、海中に沈む、目をつぶったままのそはらに手を伸ばす。すると、見えていないはずなのに、智樹を助けるようにその手がぐいっとのばされ……

「そはらっ!!」

智樹は彼女の華奢な手首を掴んだのである

「よくやったな、トモ坊」

砂浜に戻ってきた智樹に、そう一言告げる恭夜。イカロスもその後ろに立っていた

「ありがとう、恭夜。俺だけだったらこんなに簡単にいかなかったと思う」

「俺にお礼を言う前にさ、先に言うことがあるんじゃないのか？」  
「っえ、そうだな。悪かったよ……」

智樹はそはらに向き直ると即座に謝罪の言葉を告げる。

「イカロスが騒動を起こしたら遊ぶどころじゃなくなるって思ってた……それでつい、夢中になっちまって」

一方、そはらはと言うと。濡れたショックからか、はたまた助けられたことが恥ずかしいのか、茫然自失と言った感じで、砂浜だけを見つめている

「でもな、一人で沖に行くなんて、絶対になしだからなっ」

智樹は海水でぬれた頭をわしわしとかきむしると

「ほら……お前さ、昔から泳げないんだからさ」

智樹はできるだけやさしく、テレ交じりにそう呟いた。

ここまでを聞けばいい話で終わるのだが……そうは行かなかった。

まずその後、智樹は最後までそはらの言葉を聞かずに、そはらチヨップ（切れがない）を喰らってぼこぼこにされた。

そして、そはらチヨップの嵐は、大食い大会の優勝賞品『海の家・家族宿泊券』を持った守形が現れるまで止まることはなかった……

SIDE 恭夜

まあ、今回についてはトモ坊が悪いみたいだから止めなくてもいいかな。でも、何か鈍い音してるのが気になんなあ……まあ、別にいいかな

それに、こういうのって本当に懐かしいな。本当にさ……

幼い頃はこうしてよく遊んだよなあ。俺とトモ坊にそはら、本当ならずっと離れないで遊んでたかったのになあ

「でさ、イカロス。ちょっといいか？」

「何でしょうか？」

「お前さ、初めて俺達二人と会ったときに、愛玩用って行ったよな」

「はい、そうです」

まあ、ここまででは予定通りだな。問題はここからだ

「じゃあ、質問していいか？」

「お答えできることなら」

つて、軽いなっ！まあ、楽でいいんだけどさ

「それじゃあ、質問その？。愛玩用って事は他にも種類があるのか？」

「はい、確かに存在しますが……どうかなさいましたか？」

「いや、別になんでもないさ。それじゃあ、質問その？。シナプスってのはどこにある？お前は自分のことを製品って言ったよな？自分の開発者とか教えてくれないか」

「すみません。最重要機密の項目に引っかかってしまったためにお話  
できません」

最重要機密ね。まあ、これも別に予想通りだ。簡単に分かるんだっ  
たら自分で探してる

「最重要機密……まあ、いいか。じゃあ、最後だ。質問その？、お  
前に過去の記憶はないのか？」

「過去……ですか？分かりました、検索してみます」  
「悪いな……」

この返答しただいでは大きく確信に近づくことができるんだ、俺の予  
想通りであってくれ

「………検索終了しました」

「どうだ、何かあったか？」

「すみません。記憶のメモリーにプロテクトがかかっていて、確か  
めることができません」

「ん、別に気にしなくてもいいさ。十分な情報が聞けたからさ」  
「はい」

予想通り過ぎる答えが逆に何か引っかかると………だったら、何で  
イカロスの生産者は地上に落として来た？

空に、捕まってる

もう少しで……繋がりそうなんだ

天使を大事にしてあげて

「っ！そういうことか……」

「何かございましたか？」

「いや、なんでもないよ」

繋がった。今度こそ確かに繋がった。あの突然の情報の獲得、イカロスの記憶のプロテクト、絃城の本棚にあった古い文献、そしてあの女の子の言葉……

つまり、間違いなくイカロスはあの子の造ったモノ。この子に幸せを与えてやれっというんだな。君は……

けど、それだけじゃ何かがおかしい。なんだ、この違和感の元は？

「……い……おい。聞こえてるか」

誰だ？この声は……先輩か？

「先輩……っすか。どうかしたんですか？」

「ああ、お前も一緒に参加したから分かってるだろうが、今日の宿泊場所は素泊まりだけしかできないんだ。だから食材の調達を自分たちでしなければならん」

「別にレストラ……そうでしたね。それで、俺はどうすればいいんすか？」

「理解が早くて助かる。智樹たちには釣りをしてもらおう予定だ。お前は山菜を取ってきてくれ」

山菜……もしかして、俺が山菜取りに選ばれた理由って

「サバイバルセット……まあ、そはらが山に行ったら遭難しそうだしな。分かりました」

「それじゃ、頼んだ」

「了解ッス」

俺はサバイバルセットからサバイバルナイフとアーミーミナーナイフだけを取り出して山に入っていくのだった

**夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（前編）（後書き）**

次回に続くわけなんです、次回は極端に短くなると思います

作者、絃城はそろそろ冬休みが来るので、しばらく更新の止まっていたスパロボの続きが書けそうです。

りりなのの方はいまだに一話からの見直し、修正をしているのでまだまだ更新はできそうにありません

本作は一定期間で進められそうですので、頑張って行きたいと思えます



**夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（後編）（前書き）**

なんか、原作とほとんど変わってない気がする

次回からハチャメチャにいききたいものですな

## 夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（後編）

「……で、何で俺とそらは釣竿を持たされてんすか？ 恭夜はどこに消えたんすか？」

宿泊する海の家の前に荷物を運んだ後、何故か守形に連れられ砂浜に戻ってきた智樹、そらは、イカロスは、守形に有無を言わせずに釣竿を渡されたのである

「それと、何でここでグライダーを組み立ててるんすか？」

守形は骨組みであるパイプの接続を中断すると、ゆっくりと智樹に振り返った

「ああ、言っていなかったな、あの宿泊券は素泊まりしかできない。すなわち、夕食は自分で確保しなければならない。それと、絃城なら山に山菜を取らせに行った。幸い、山と海が両方あるのだからな」  
「いや、あの、普通にどつかのレストランで飯を食べば」

「次にこのグライダーだが、本当ならば今日テスト飛行するつもりだった。下が水のほうが何かと楽だと思っただけ……ただ大食い大会で今日を潰してしまったので、明日にするつもりなんだ」

守形の頭に、レストランで食べることは頭に無いらしい。いや、実際には、彼の財布にレストランと言う単語はないのかもしれないなかった。

（この人、何しに海に来たんだろう。ずっと、学校の夏服のまままで水着にも着替えないし）

「先輩………またアレで、飛ぶ気なんですか」

そはらの問いに、守形は一度だけ眼鏡を指で押し掛けるおした

「お前たちに見てもらった黒い穴があったら。アレが実は、未だに空美町の上空にある。これまでは移動を繰り返していたのに、急に停滞したんだ」

「でも、普段空美町で生活してても、空には何も無いんですけどねえ。俺が前に見たときは、空にぽっかりと大穴があいてたんすけど」「そうだ、そこが分からん。何らかの方法で光を曲げているのか、雲の陰にでも隠れてるのか」

本気で悩んでいるのだろう。眉間に皺を寄せる守形に智樹はうんと頷く

「今度、イカロスに飛んでみてきてもらえば」

「いや、いい」

守形は即答した

「自分の力で確かめたい。だから、いい」

再び、グライダーの骨組みを組み立て始めた守形に、智樹はそれについて口を出すのはやめることにした

「それで、守形先輩。もう一回、質問何すけど、俺らに釣りをしに来てってことっすよね？」

「ああ、米などは俺が炊いておく。竿も海つり用のものだ、心配ない」

「えっと、マジですか？」

「何か問題でもあるか？」

智樹が後ろを振り返る。そこには……

「夜で真っ暗だから、超怖いんですけど、海」

眼前には何者も吸い込みそうな漆黒の闇が月明かりに照らされていた。当然、人気も無く、波の音だけが暗闇から響いている

「問題ない。既に漁業組合には許可を取っている」

「いや、そうじゃなくて」

「大物を頼むぞ」

他に選択肢は無いらしい。

と言うことで、智樹とそらは、イカロスは釣りを始めたが、夜中と言うこともあり、流石に浅瀬でしか釣りをしようとしか考えない。そのため、掛かる魚も小ぶりで、食べられる魚はいまだ一匹のみ

その時、山のほうから懐中電灯の光が漏れてきた。

夜中と言うこともあり、こんな時間に山から下りてくる人間は一人しか居ないだろう。そう、恭夜だ

それに真っ先に気が付いたのは守形であり、一仕事終えた恭夜にねぎらいの言葉をかける

「ご苦労。飯はもう直ぐ炊けるが、成果はどうだ？」

「肉も調達してきたくらいに大量ですよ」

「肉だつて？」

「はい、美味そうな猪が居たんで狩って来ました。山菜は主にきの

「こですけどね」

背中の籠から捌かれた猪の肉と大量のきのこが守形の前に差し出された

「そうか、こちらは文句のつけようがないな。それで、智樹はどうだ？」

「いや、見れば分かるでしょ」

智樹のバケツには小さな魚が一匹

「ふむ、これではバランスが悪いな……………恭夜、すまないがお前も参加してくれ」

「別にかまわないっすけど……………ところで、イカロスがいないんだけど何かあるのか？」

恭夜に指摘されて、そこにいた三人はイカロスのいた場所を見るとそこには釣竿だけが残っていた

「あれ、さっきまでいたのに」

「ま、まさか、海で溺れてっ？」

目を大きくしたそはらが海を見やるが、智樹は慌てもせず。

「いや、それはねえよ。あいつ、泳げないけど、溺れないから」

「……………へ？」

「何とか深度三〇〇〇と、無酸素活動時間連続七二〇時間なんだと。だから、海底を歩けるんだ」

「何、深度……………それは、圧海深度のことか」

「圧海深度……………でも、その数字は」

「ああ、確かそんな感じのこと言っていました。どうしました、そんな深刻な顔して？」

途端、守形と恭夜は口元に手をやり、しばし考え込む。だが、次の瞬間

「ふ、伏せろっ！！」

二人は何かを感じ取ったのか、同時に叫ぶとその場にしゃがみこむ。それを言われた二人も訳が分からずにしゃがみこむ

刹那、海水が柱のように立ち上がったかと思うと、智樹たちの真横を海水がどどどと押し寄せ、堤防に打ち付けられた

「なっ？」

キャミソール、ジーンズ生地のスカーツという出で立ちに腰にはパーカーが巻かれ、大きな翼を背中に持つ少女……イカロスが立っている

だが、黒い大きな影の正体は彼女だけではない。彼女の肩にはイカロスの二倍は優にあるだろう……

巨大魚が乗っかっていたのだ

「ピラクルー」

守形と恭夜のほぼ同時に発せられた眩きに、智樹とそらは反応する

「南米アマゾンに生息する、世界最大の淡水魚」

「そして、最大のものは体長五メートルを超え、ワシントン条約で捕獲規制されてる種の魚だ」

「はあっ、アマゾンっ？日本からどうやってアマゾンなんか」

智樹が叫ぶと、イカロスは砂浜にまだ生きているピラクルーを下ろすと

「私はマツハ二十四で飛べますので」

「ま、マツハ……世界一周してきたのかよ。ていうか」

智樹はぴちぴちと跳ねるピラクルーの傍に立つイカロスの前に向かい、その頭をこつんとげんこつで叩いた

「何で海釣りなのに、川の魚とって来てんだよ！しかも、捕捉規制されているようなのをっ」

「では……今から戻してきます」

「今から戻したら死ぬだろうが、その魚っ」

「はい」

「『はい』じゃねえ！」

「ぶ、くす、あは、あはははは」

そんな二人の姿を見ていたそはらはその場でくすくすと笑い出した。その声に智樹もイカロスも彼女に視線を送ると

「なんだかイカロスさんが来てから楽しいね。驚かされてばかりだけど」

「……………ふう、ま、悪い奴じゃねえからな」

途端、智樹もそはらにつられたように笑い出す。そんな二人にイカロスはクエスチオンマークを浮かべたような表情になる

「あの、マスター。どうして、笑っているのですか？」

「どうしてって、そりゃ楽しいからに決まってるだろ」

「楽しい？」

「なんだ、お前そんなこともわからねえのか？」

笑いあう智樹とそはら。その二人を見て首をかしげるイカロス。空を見上げながら何かを呟く恭夜。そんな三人を見つつ、守形だけは険しい表情でイカロスを見つめていた。

その後、夕食を終えた四人は海の家宿泊施設に入り、襖を隔てて、智樹と守形と恭夜、そはらとイカロスで部屋割りをした

夕食を終え、風呂に入ってしまったえば、後は何もすることはない。そはらが風呂から上がってくるまでのんびりと畳の香りがかぐわしい部屋で、テーブルに突っ伏しながら過ごしていると、隣の襖から浴衣姿のそはらとパーカーにキャミソール姿のイカロスが現れた

そはらの手には、夏休みの宿題が握られていた

「お前、真面目だな。こんなところまでそんなん持ってきてさ」

「だって、この数学の問題、ぜんぜん分からないんだもん。だよね 恭ちゃん？」

「へっ？俺は宿題なんてもう終わってるぜ。確かに少しは面倒だったけどそれほどの問題は無かったと思うけどなあ」

「と、トモちゃんは？」



「その天才と一緒にされても困る。宿題なんて俺にできるわけないだろ？馬鹿だな」

瞬間、智樹の後頭部にチョップがクリーンヒットした

「で、守形先輩に教えてもらおうと持ってきたんだけど………恭ちやんが頭いいなんて知らなかった」

「ま、聞かれても教えねーけどな」

「きよ、恭ちゃん………先輩？」

「ん？宿題か？」

持ってきていたノートパソコンに何らかのデータを打ち込んでいた守形はそはらからプリントを受け取ると、さらさらとそこに鉛筆を走らせていく

「す、凄い。分かるんですね」

「ああ、恭夜も解けるレベルの問題だからな。せいぜい東大の院の入試問題といったところか。数学者を気取るならもう少しひねった問題でも出して欲しいものだ」

その言葉に智樹とそはらは口をぽかんと開けるのみである

（なんで、中学校でそんな問題出るの？なんでこの二人はそんな問題とけるの？）

智樹とそはらは同時に思った。

「ふむ、此処は恭夜の学力もテストしたいものだが。イカロス、続きをやってみてくれないか？」

八割がた解答を終えた守形は、全員分のお茶を入れていたイカロスへ声をかける。

「え？私……ですか？」

鉛筆と解答用紙をイカロスへ渡した

「彼女は自分のことを『製品』と呼んだのだろうか？つまり、造られたもの、ロボットのようなものを見ていい。電算能力に長けているのではないかと思っただけ」

「出来ました」

そう言っている間にも、イカロスは鉛筆をテーブルの上に置いた

「わあ、ありがとう、イカロスさんっ」

「なんだ、イカロスにも解けるのか。じゃあ、帰ったら、俺のモ…

……………」

イカロスから渡された解答用紙を見て、智樹とそらは啞然とした

そこには汚い文字……まるで幼稚園児が書いたような文字で『マスター』としか書かれていないのである

「さて、続きをやるか見月」

「はい、お願いします」

そらはその解答用紙を受け取ると、静かに消しゴムで文字を消した

「イカロス、そこに座れっ。日本語の読み方から教えてやるからっ」

当然、智樹のお叱りをイカロスは受けたのだった

深夜、その時間はある一部の人間を除き、誰もが眠りにつく時間

どう？「天使」は？

智樹は、そう呼びかけられた。身体を起こし、辺りを見ると、見渡す限りの草原が広がっている。

（ああ、いつもの夢か）

「はいはい、イカロスね。んー、なんていったらいいのやら。ああ、でも、結構楽しいかな、悪い奴じゃないみたいだしな。なんていうか」

楽しませるために送ったんじゃない、ないんだけど

「へ？」

忘れないでね。空に……

空に、捕まってる

そして、もう一人。夢を見ていた

いつものように、草原で身体を起こし、いつものように聞こえてく

る声に耳を傾ける

どう？「天使」は？

(夢じゃ、ないんだよな)

「イカロスのことなら心配しないでいいよ。俺がどっちも守ってあげるからさ」

キヨウ君は驚かないんだね？

「冗談、俺も驚いてるよ。それに、俺もそついう存在だからさ」

ふふ、トモ君もそれくらい言ってくれば安心できるんだけどな

「いや、トモ坊はあのままでもいいと思うよ。トモ坊に争いなんて似合わないしな」

キヨウ君は優しいんだね

「いや、孤独はもう嫌なだけだよ。こんなに楽しい毎日を送れなくなるからさ」

でも、巻き込んだじゃってごめんね……私、トモ君だけを入れてたはずなのに

「別にいいさ、おかげで二人を悲しませずに済むんだから」

だったら、お願いしてもいいかな？

「構わないよ。俺の願いもきつと同じだからさ」

二人を、ううん、これから来る天使も

「大切にしておいて、だろ。」

ありがとう。キョウ君

私は、『幸せ者』ね

智樹が目を覚ますと、目の前にはイカロスの無表情な顔があった。瞬時にイカロスが智樹に覆いかぶさるように顔を眺めているのだと分かる。

「……………おい、どけ」

彼がそう告げると、浴衣も傷にパーカーの格好のままイカロスはゆっくりと状態を起こす。

「何でいんだ」

「はい」

「『はい』『じゃない』」

「はい」

多少、旅行の開放感でナニかをしてしまったのかと焦った智樹は幾分、声を震わせながら、イカロスに注意する。彼は布団から出てイ

カロスに立つようにいと、その柔らかい背中を隣の襖へ通していく

「お前はそはらと一緒にの部屋のはずだろ？さつさと帰って寝た寝た」

「あの、マスター」

押されながらも、おずおずといった感じで、背中に声をかける

「『眠る』とはどういふものなのでしょう？」

「へっ？」

そこで、智樹の背中を押す手は止まった。イカロスはゆっくりと振り返る

「私たちエンジェロイドは眠るようには造られていない……ですから『眠る』とか『夢を見る』とかはどういふものなのか……分かんなくて」

イカロスの表情はいつもの無表情。だが、どこか智樹には悲しんでいるように見え。

「じゃあ、お前、毎日俺が寝てる間は？」

「ずっとマスターのお傍に……マスターが目を覚ますまで、ずっと」

智樹はその言葉を聞き、イカロスを見つめる。自分たちとなんら変わりにない、人間の顔。何の変哲もない、可愛い女の子の顔

でも、イカロスは眠ることが出来ない

「散歩、行くか」

そう思ったとき、智樹は自然と、そう呟いていた。

「ずっと羽しまって窮屈だったろう？こんな夜中なら誰もいねえよ」

智樹は財布だけを懐に忍ばせると、イカロスを伴って、海の家から外出する。

外は昼の熱気とは打って変わり、静かで穏やかで涼しげな風が身体を抜けていく。波の音が心地いい砂浜まで出ると、さっきの釣りのときには怖かった海が月に照らされ、幻想的な光景を作り出していた。

そこには、一つの黒い影が寝そべっていた。耳にイヤホンをつけて、夜空を見上げる寂しげな男

「何してんだろ、恭兄？」

「どうかしましたか、マスター？」

「いや、あそこにいるのって恭夜かなってさ」

智樹たちに気が付いたのか、寝そべっていた彼は身体を起こして智樹たちに手を振る

「イカロス、ついでだし恭夜のとこに行こうぜ」

「はい」

二人は手を振っている恭夜のところに行く。すると、彼のほうもこちらに向かって歩いてきてくれたので、思ったよりも早く合流することが出来た

「どうしたんだ、二人そろってさ？」

「ん、いや、イカロスは『眠る』ことが出来ないらしくてさ。恭夜

「こぞどうしたんだ？」

「ん、どうしてだろうな？」

「あの、マスター？」

イカロスは申し訳なさそうに智樹に声をかける

「あ、ああ。悪い悪い、気にせずに広げていいよ」

「はい」

そこで、イカロスは静かにパーカーを脱ぐと、飛び立つかのように、大きく羽を広げた。二度、三度、嬉しそうに翼を羽ばたかせると、イカロスはゆっくりと足だけを海へ浸からせ、波打ち際に静かに歩いていく

「なあ、智樹。眠らないってのはどんな気分なんだろうな」

「とても便利なこと……なんて思ってたけど、違うんだろうな」

「ああ、夢も見ない。いや、見れない。その分何か、大切な何かをなくしてるんだろうな」

「マスター？」

前を歩いていたイカロスは不安そうに智樹に振り返る。彼女の首輪の鎖がさびしそくに音を鳴らす。

（そのうち、分かる日が来るよな？）

智樹はイカロスの手を握り、二人で連れ立って歩いていく。恭夜は二人を見送るように眺めた後、さっきと同じように砂浜に寝転び、満点の夜空を眺めるのだった

そんな時、潮風にやられたのか、日に一度だけ、智樹は咳き込んだ



「悪い、イカロス。ちょっとノドが乾いたから、ジュース買って来る」

堤防の上を指差しながら告げると、智樹はゆっくりとイカロスから手を離れた

「はい」

「お前は果物系のジュースでいいか？ついでに恭夜の分も買ってやるか」

「はい」

「じゃあ、ちょっといつて来るから此处でしばらくおとなしく遊んでろよ」

智樹はそういふなり、サンダルでかけていく。その後ろ姿をじいつと見つめるイカロス

そんな彼女の後ろに、人影が一つ伸びてきた

その影はイカロスの無防備な背中を見ながら立ち止まると、眼鏡を直しつつ、こつ声をかける

「お前は……………何者だ？」

その声、守形からの声にイカロスはゆっくりと振り向いた

「え？」

イカロスは不思議そうに瞬きすると、守形は眼光鋭く、彼女を射抜く

「お前は何者かと聞いている

守形に正対したイカロスはゆっくりと唇を動かした。

「私は愛玩用エンジエロド、タイプアルファー」

「とぼけるな。愛玩用が深海を平気で歩き、マツ八二十四もの高速で飛ぶものか。かといって……電算能力は赤子も同然と……いいしかない。その点は確かに愛玩用ともいえるが……それならば、身体能力は人並みに造るべきではないのか？」

守形は一步踏み出しつつ、一度だけで言葉を切る。

「限りなく完全で限りなく不完全。お前は一体何者なんだ……何が目的で智樹に近づいている」

彼女はしばらく押し黙った後で、静かにつぶやいた

「私は……何を目的にしたら良いでしょうか？」

「何？」

「私は、マスターに『そばにいる』といわれたのでおそばにいます。とができますが……私が何かするたびにマスターが起こっているように思えて」

月明かりがイカロスの身体を照らす。白い肌が柔らかい光を受け、やさしく輝く

「マスターの先輩が今、お怒りになっているように、私はマスターの傍にいたべきではないのでしょうか？」

その言葉を聞き、守形はしばらく黙った

もしかすると彼女は自分を騙そうとしているのかもしれない。自分の正体を隠そうとしているのかもしれない

しかし、隠す理由が分からない。それに、どうみても隠し事をしていないとは雰囲気からいっても、到底思えない

本人にまったく自覚がないのであれば、問題は、誰がこのイカロスを智樹に送り込んだのか。そうであるのならば、イカロスに追求するのはお門違いもはなはだしい

「ふう」

大きなため息のあと、守形はそう告げた

「別れの日が永遠に来ないように祈りながら、智樹の傍でただ楽しめばいいんだ」

「楽しむ……」

そういわれたイカロスは少しうつむいた

「マスターの先輩は、マスターといて楽しいですか？」

「ん？」

「私はまだ『楽しい』という、言葉の意味が分からなくて」

ただ……とイカロスは続ける

「マスターといると、なんとなくか、ふわふわとは……するのですけど」

「それは『宿題』にしておく。いつか、レポートにして提出するよ

うに」

そう言っつて守形は去っつていっつてしまっつた

「おろ？今の守形先輩じゃ？どうかしたのか？」

ジューズを三本持っつた智樹がそう声をかけると、イカロスはこっう静かに咳く

「はい、宿題を与えられました。」

波の音が静かに二人を包んでいった

しばらく、夜空を見上げて思いふけっつていった恭夜のもとに智樹たちが戻っつてきた。智樹の手には『Keyコーヒー』と書かれた缶が一本持たれていった

「ん？なんだ、戻っつてきたのか」

「用事も済んだしな………ほら、恭夜！」

手に持っつていった缶を智樹は恭夜に投げて渡す

「『Keyコーヒー』ねえ、何かのネタか？」

「特に意味はねえよ。で、何してんだ？」

「空を眺めてる……空は広いぜ？」

恭夜は渡された缶コーヒーを開けて口に入れる

「空が広いのは当たり前だろ？」

「だな……天使を大事にしろつてよ、智樹」

「ああ、きつと出来るよ」

「何を話されているのですか？」

不意にイカロスが俺と智樹の間から顔を出して聞いてきた

「な、なっ、驚かせんなイカロス!!」

「はい。すみません」

「ま、いいんじゃないのか？」

「まあ、そうだけどさ」

「？」

イカロスは意味が分からないといった表情をして恭夜をみる

「じゃあ、俺は宿に戻るから。お前らも早いうちに戻ってこいよ」

「分かった。じゃあな、恭夜」

「ああ」

こうして、長い長い夜は更けて行くのだった

**夏だ！海だ！宿題だ！大食いだ！（後編）（後書き）**

次回から、原作通りにはたぶん進みません。結構適当な内用になるかも知れませんがご勘弁を

思いつきは駄目だぜ！？（前書き）

はい、前回予告したとおり、まったく関係ない内容です

十人中九人がつまらないという内容ですが勘弁してください

思いつきは駄目だぜ!?

「そつだ、サバゲをやるう!！」

俺はふと思いついたことを口に出した。そして、現在いる場所が新大陸発見部の部室である。そこにいる人物が、いつもの三人だけなら良かったが、今日は違った

「あら、いいわね、サバゲ。恭夜君、グッドアイデアよ」

そう、我らが腹黒生徒会長、五月田根美香子がいたのだ

「げつ、お、俺はやりませんよ!！」

「わ、私も遠慮しておきます……」

「悪いが、データを纏めるのに時間がかかっていてな。俺も不参加だ」

そんな言葉を聞いて、生徒会長は残念そうに智樹に聞こえるように言った

「あら、せつかく、優勝者には、全生徒一日絶対服従させる権利を与えようと思ったのに、残念だわ」

「あの、会長?俺、そんなつもりで言ったわけじゃないんですけど

……」

「思い立ったら即行動が会長だいすきな」

「いや、誰も参加しな」

恭夜が言葉を言い終わる前に、智樹が椅子から勢いよく立ち上がり



「会長、絶対服従って事は何でもしていいんですよ？」

「ええ、そういうことになるわ」

「やりましょうー!」

「はっ!?!」

そはらと恭夜は声をそろえて絶句するのだった。守形はというと、優勝賞品を部費アップにしてくれと会長に言っつて、了承を得たのか智樹とどこかに行っつてしまつた

「あの、恭ちゃん」

「何だ、そはら？」

「もしかして、これつて全校参加？」

「もしかしなくつてもだろ、これは……」

そこに、いつの間にかいなくなつた生徒会長の声が聞こえてきた

『生徒会長からお知らせよ。これから、全校生徒生き残りをかけたサバイバルゲームを開催するわ。なのでえ、武器の支給を受けるために今すぐ校庭に集合よ』

放送を聴いた、恭夜とそはらは仕方なく校庭に向かうのだった

生徒会長からの武器の支給が終わり、このイベントのルールを説明される

まず一つ、チームを組んで戦う

二つ、チームの一人でも残ったチームの勝利

三つ、捕獲した敵を自由にしている

四つ、ペイント弾が胸、頭に当たったら即死、即捕虜

だそうだ。ぶっちゃけ、なんで学校もこんなことを認めるのか分からない。生徒会長、何者なんだ？

そして支給されたのは、やけにリアルなガスガンらしい拳銃とゴムナイフ

どうやらこれで本当にサバゲをやるらしい。思いつきとはいえ、此処までになると責任を感じ得ないな

「っと、それはいいとして負けるのは勘弁だな……………おい、その二人！！」

名前も知らない人物に手を振って呼ぶ。すると、呼んだ筈の男が来ないで女子が殺到する

「なに！絃城君！！」

「どうしたの！！」

「きゃ〜」

「……………」

どうにかその場をスルーして抜け出そうとするが、がっかりと腕をつかまれてそれも不可能なようだ

「じゃあ、君と君。一緒に組もうか………」

その中から運動の出来そうな二人を抜粋して、チームに誘うことにしたのだった

「よろしくね。絃城君」

「あ、あのー！名前でもいいですか？」

「よろしく。別にどう呼んでも構わないよ」

「「やったー！！」」

「え、えと。二人の名前は？」

名前を聞くと、二人は双子の姉妹らしい。俺とクラスが違うらしく、まったく覚えがなかった

ちなみに、名前は美樹と亜樹らしい。そんなこんなで自己紹介などをしていたら、始まりを教える花火が上がった

その途端、どこか別のところから雄叫びが上がっていたのは言うまでもないだろう。

「さて、適当に頑張ろうか？」

「「はい！！」」

元気だなー、と思いながらも陣を取るのだった

いくら探しても見当たらなかった最強の親友を諦めて、守形とモブの男子を仲間にした智樹だった

「智樹、この状況で恭夜が敵に回るのは痛いな」

「はい、ですけど先輩がいればなんとか……」

智樹は守形と暢気に話しながらも、回りから迫ってくる敵を守形と男子生徒と迎撃する。

「問題はそこじゃない。美香子が敵にいる以上、恭夜の存在は不可欠なんだ」

「つぐ、確かに会長は侮れませんね……っと、じゃあどうするんです？」

「ふむ、惜しかったな……つまり、恭夜が他のチームを狙ったところで俺達も攻勢にでる」

お互いに背中を合わせ、くるくると回りながら次々に襲い来る標的を始末していく

「それにしても……その本人は一体何処にいるんだ？」

「……？知らないんですか、てっきり知っているんだと」

「これは……相当やばいぞ」

何故か、さつきから増えていく敵に智樹たちは囲まれてしまった。しかし、次々に増えていく敵は、次々に倒れていく

「どづいつことだ………？」

「や、さあ？」

倒れていく者の姿を見ると、即死の判定である顔と胸にピンポイント

トで命中している。

「っと……………弾切れか。亜樹、補充のマガジン」

「はい、恭夜君」

「あゝ、亜樹ばかりずるいよゝ!!」

その光景を見た智樹と守形は言葉を失う

「ん、智樹に先輩じゃないですか。そんなところで突っ立っていると狙われますよ?」

「いや、恭夜。お前は何でその状態で動けるんだ?」

「てか……………モテモテじゃねえか!?!」

智樹は思いつきり僻むように言い放つ

「恭夜君、何で変態の桜井何かと話してるの?」

「へ、変態じゃねえ!?!」

「そうだ、智樹は変態じゃない。思春期なんだ」

「え?恭夜、それって、ぜんぜんフォローになってない!?!」

恭夜は笑いながらマガジンを取り替える

「まあ、会長に負けるのだけは嫌だからさ、協力といかねえか?」

「ああ、問題ない。むしろ大歓迎だ」

「まじか!!助けるぜ、恭夜」

此処に、最強チームが結成された

「あら、流石にあのチームは強いわねえ」

「あ、あの。どうするんですか？」

「どうするも何も、こっちも助っ人を呼んでるわあ」

美香子の後ろから大量の鳩が飛び立つ。その中からダンディーなおつさん（名前が分からないのでジューダスと表記します）が現れる

「的屋ジューダス。此処にもやってきたぜ」

「はい。勝ったら約束の分を払うわ」

「確かに受け取ったぜ」

ジューダスは長めのライフル形の銃に弾を込め、窓に設置する

瞬間、手が動いたかと思うと引き金が引かれ、弾が吐き出された。

吐き出された弾の分、狙われた生徒は次々に即死にされる。それに気が付いた生徒がいたのか、ジューダスの元にペイント弾が飛んできた

「は、意気がいいのがいるじゃねえか。ちよっくら出てくる」

「だったら、私たちも行きましょうか」

美香子はそらの手を引きながら、ジューダスとともに外に出るのだった

「ぐわーはっはっは、大漁じゃ〜!!」

智樹の下には捕虜にされた女性とが数十人いた。恭夜は可哀想なヤツを見る目で智樹を見つめるが、智樹はそれに気が付いていない

「先輩、流石にアレはやりすぎじゃないんですかね？」

「いや、鬻蹙を買うのは智樹だけだ。俺には関係ない」

「さいですか。でも、難敵の会長が一向にあらわれないっすねえ」

「いや、さっきからいつの間にか数が減っているんだ」

「そりゃ、サバイバルですからね。減りますよ」

「そうじゃない、狙撃者がいるようだ。幸い、此処は校舎の影だから狙われていないがな」

守形が言い終わると同時に、弾幕の雨が降り注ぐ

「な、なっ!?!どうなってるんだああ!?!」

「親方様ああ!!敵襲です!!」

いつの間にか智樹の味方になっていた男子生徒が智樹に報告をする

「先輩、俺達此処にいたら同罪になるんじゃないっすか？」

「たぶんな……俺達だけで組むか？」

「それが一番ですね。美樹、亜樹、俺たちはこれから智樹を見捨てて勝ちに行くぞ」

「はい」

恭夜は美樹からライフルを受け取ると、弾幕が襲ってきたほうに向けてスコープを覗く

「どうだ、恭夜？」

「やっぱり、会長ですね。なんか偉く強そうな人がいるんですけど……」

「撃つてくれ」

「了解……」

恭夜は完全に額をマークして引き金を引く。相手はそれに気が付いたのか身を半歩ずらして避けた

「避けられました」

「お前の精密射撃に気が付くなんてな……」

「あ、動いた」

「何!？」

「こっちに向かって……きたああ!？」

守形と恭夜は別方向に陣を取り、向かってくる敵に照準を合わせる

「いまだ!?!」

「了解!?!」

二人の同時射撃にグラウンドの砂が舞い上がり、何も見えなくなる

「やったか？」

「わかんないツスね……」

「あめえな!?!」

「なに!?!」



砂煙の中、弾幕が二人を襲う

「先輩、だいじょうぶですか？」

「ああ、こっちは問題なっ!?!」

守形の額にペイント弾がべったりと付着する

「悪い……やられた」

守形は音を立てて倒れた

「お前か、さっきの狙撃は……おもしれえ、いくぞ」

「会話が成り立ってねえ!?!」

答えるまもなく、恭夜は弾幕にさらされる。それを避けながらも負けじと弾幕を張るが、運悪く弾切れになる

「美樹、亜樹、変えのマガジン!!」

「……」

「?マガジンをくれ」

美樹と亜樹に替えのマガジンを要求するが一向に渡してくれないようなぞぶりを見せない

「ま、まさか!?!」

「やつちやつてえ」

「「はい、会長!!」」

「ちよ、まつ!!!グルだったのかよおおお」

こうして、全校総動員サバイバルゲームは終わった

「英くん、なんで私をこの前の旅行に誘ってくれなかったのかしらあ〜?」

「いや、その……………」

「絃城君も酷いわ〜、何で教えてくれなかったのかしら〜?」  
「す、すみません。」

今回の騒動の原因である美香子の前に守形と恭夜は跪いていた。その後ろには、ぼこぼこにされた智樹が縄でつるされている

「じゃあ、会長から命令よ〜」

その後、恭夜と守形は学校の畑に埋められるのだった

思いつきは駄目だぜ！？（後書き）

思い立ったら即行動。これは会長ではなく私の考えです

そんな考えをしてるものですから計画なしに小説を次々と……で  
すが、これからも頑張りますので、よろしくお願いします

空夢・少女の悩み（前書き）

久々の投稿です。

リリカルなのは／F a t e 編に行き詰ったために此方を投稿します。

暇つぶしになっていねばうれしいです

では、久しぶりの本編（準主人公・恭夜編）をお楽しみください

## 空夢・少女の悩み

少女は少年の夢で必死だった。

起きて、ねえ、起きて

しかし、彼は夢の中のいつもの少女に気付かない

ダメ。最近全然私の声を聞いてくれない。こんなことになるために天使を送り込んだわけじゃないのに

起きて、お願い。大変なの。

何度揺すぶっても気付かない智樹に少女は呟く

気付かれた。

「おいおい、もう一人君の願いを聞ける人が居るのを忘れているんじゃないか？」

突然、夢に現れる少年。最近では夢にいこうとしても何故か行く事の出来なくなっていた彼の姿

キヨウ君！！

「うわおっと……そんなに焦って君らしくもないな。どうかしたのかい？」

あのね、天使が　　る

「え？良く聞こえ……」

だから けて るの

「あた……ま……が」

ウ君！？

「す……まない……けど……なんとなく理解……したよ。」

メンね……ごめんね

「気にしないでくれよ。俺はそんな顔が……見たいわけじゃ……ない」

そこで、恭夜の姿が完全に消える

残っているのは眼を覚まさない智樹と謎の少女だけ

キョウ君……ごめんね

恭夜は夢から強制的に目覚めさせられた。本来ならば絃城家の魔術の一つ『夢見』は自らの意思で抜け出すことが出来る

だが、今回は少し違った

それは、少女との会話を始めた途端に始まったのだ。

まるで、少女の話を恭夜に聞かせないようにしているかのようだ…

……

「クソ　最悪な目覚めだな……」

彼はソファアールの上で涙目になっている眼を擦り、視界をハッキリとさせる

そして、先ほどの夢について考えを纏めるのだった

(夢には問題なく行く事が出来た。けど、あれは本当に夢なのか?)

本来ならば感じるはずの無い感覚を思い出し、あの空間が本当に夢なのかを疑問に思う

(そもそも、魔術を使ってまで入り込んだ夢から強制的に追い出されるなんて第三者が介入しているとしたか思えないな。それに……)

気付かれたの……

少女の言葉が頭に引っかかる。

つまり、それが意味することは先ほどの考えである第三者の介入があることを示しているのではないだろうか？

事実そうだとしたら、間違いなくもう一体のエンジェロイドがこの美空町に現れるということになる

そう思う理由は一つだ。夢の少女の顔がそれを物語っていたから

気付かれたという割には少し悲しげな顔をしており、その拳句泣いていた気がした

それはまるで、母が子を守ろうとしているような感じだった

それだとしたら随分若い母親が居たもんだけだな

「とりあえず……俺は俺の出来ることでもしようかな」

ソファーから立ち上がり、背伸びをする。背中から小気味良く骨の音がポキポキツとなる

朝食を取るために、そのままキッチンにある冷蔵庫へ向かう

しかし



「食い物がない……だと？」

本来あるはずの食品が冷蔵庫の中から消え去っていた

「最近そんなに食った覚えはねーんだけどなあ………」

冷蔵庫を前にぶつぶつと呟いてしまつが、気を取り直す

「ま、どうせ商店街に行くんだしそのときついでに買つかな」

ボタンと冷蔵庫の扉を閉め、私服に着替える

時間は朝八時十四分

ちなみに今日は学校は休みだ

「適当にぶらつくとするかな」

携帯を胸のポケットに入れ、玄関に置いてある靴を履き外に出る

鍵をかけるか迷ったが掛けない事にした

どうせここは人避けの結界が張ってあるのだから人は来ないだろうし

「でも、このパターンだと会長のお散歩コースに行き当たるんだよなあ……………」

憂鬱だと言わんばかりに呟いてしまう。

「あらー、恭夜君おはよー」

「げ、生徒会長」

「なにかしらあ、その顔は？会長悲しいわあ〜」

どう考えても狙っていたとしか思えないタイミングで会長が現れた。

守形先輩といいこの人といい、一般人とは微妙に違っている。何故か感覚が狂う

「いや、あの……………」

「まあ、いいわ。今はね……………」

「それってどういう？」

「じゃあね、恭夜君」

そういつと本当に何もしないで生徒会長は行ってしまった

「な、なんだっただ？」

その呟きの答えは返ってくることは無かった

商店街に来て恭夜は驚いた。今まで無関心だった行事の一つのクリスマスが近くに来ていたことだ

今までは外に出ることも無かったのでそういう行事に関心すら向かなかった

それに、それを一緒に楽しむ家族も、友人すらいなかった。

だから、そういう行事は忘れることにしていた

「まあ、今からは楽しめるといいんだけどなあ」

そんなことを思いながら華やかになっている商店街を歩く。

いつもなら気にも留めないような場所でも新鮮に思えた。

そこで、ある一人が眼に留まった

その一人というのは、『ジングルベル』を歌う玩具のサンタクロースをじいーと見つめている。その衣服と全体の雰囲気には見覚えがあった

「よ、イカロス。どうした、それが気に入ったのか」

「あ、はい。何故だか……こう」

そう言っただけでイカロスは玩具のサンタクロースを撫で……ようとしたのだから首がめきよっと言う音とともにもげた

「っ?」

「……イカロス、撫でるのはいいけど壊しちゃダメだろ」

びくつとイカロスが驚いたとき、恭夜は優しく教えた。

しかし、運が悪いことにたまたま商店街に足を運んでいた智樹に発見されてしまったのだ

「イカロス!!少しは人間らしく振舞えよ!!」

イカロスは首のもげたサンタクロースの人形を持ちながら、表情の変化の薄い顔でおとなしく説教を聞いている

恭夜はおそらく智樹には見えていないのだろう

「はいはい、トモ坊。それくらいにしてやれ。俺もちゃんと見てなかったのも悪いんだからさ」

「え、恭兄いつの間？」

やはり、気が付いていなかったらしい

「さつきから居たぞ。それに、頭ごなしに叱ってもいいもんじゃないだろ？」

「そ、それはそうだけどさ……」

「だろ。知らないことはこれから教えてやればいいんだよ。けど、それは俺の仕事じゃない。お前にしか出来ないことだろ？」

「……………はい」

「そ、お前は素直が一番だよトモ坊」

智樹は反省したのか、イカロスに改めて注意をする

イカロスもそれを理解しているのかは分からないが、ちゃんと聞いている

「ま、十分人間らしいじゃないか。イカロスもさ……………」

その咳きは誰にも聞こえてはいなかった

アレから数日後、気が付けばクリスマス当日だった。俺はイカロスと二人で商店街を歩いている。その理由は良く分からなかったが……とりあえず頼まれたために引き受けた。

「それで、どこか見て回るか？」

「どこか……とは、どこでしょうか？」

「いや、それが決まってるから聞いてるんだけどなあ」

イカロスに訪ねてはみるが、帰ってくるのは疑問に対して疑問だけだった

「じゃあさ、適当にその辺見て回るからさ、何かあったら聞いてくれ」

「はい………」

そんな感じでイカロスとの散歩が始まった。

まず初めに来た場所は何故か八百屋だった。その理由は、季節はズレなスイカが一つ店の前に置かれていたからだ。

イカロスはそれを見るなり、一人で勝手に歩き出し、それを手に持って撫でていた

「はあ、まあ、イカロスが楽しんでるなら良いんだけどさ……………」

「？」

「あの、これっていくらですか？」

俺は店の人に値段を聞く

「もう季節はずれだしねえ、もって行ってくれても構わないよ」

「え、良いんですか？」

「ま、恭夜君は昔こっちにいたし、戻ってきたお祝いも兼ねてね」

その割には処分品をお祝いに渡すのもどうかと思うが…………

何も言わずにその好意を受け取ることにした

「ありがとうございます」

「いやいや、これからも家の店をよろしくね」

そんなやり取りをしている間も、イカロスはスイカを撫でている

「イカロス、それ貰ってもいいってさ」

「え……どうしてですか？」

「お前、それ気に入ったんだろ？店の人もいいって言ってたし、貰えばいいじゃないか」

「はい」

僅かだが、表情が綻んだようにみえた。

うん、こういうのもたまにはいいのかな？

次に来たのは、先ほどの玩具のサンタクロースがあつた店だ

あれは俺が弁償しておいたが、イカロスはそれをモノ欲しそうな眼で見っていたので、壊れたそれもついでに貰い、イカロスにあげた

しかし、スイカを撫でながら歩く少女というのもシユールだな

その後は、イカロスも気に入ったものがなくなつたのか、一人で歩き出す事が無くなつた

だから、一通りを周ったころでも時間が余っていた。

「他に行く場所もないしさ、話でもするか？」

「……はい」



一瞬間が開いたが、イカロスは了解してくれた。

手ごろなファミレスに入り、向かい同士に座る。頼んだものはコーヒ―を二つ

「イカロス、何か聞きたいことってあるか？」

「……はい」

「そうか、答えられる範囲だったら答えるからさ、教えてくれないか？」

「はい。」

イカロスは小さく頷くと、話をしてくれた

「人間らしくとは、どうすればいいのでしょうか？」

それは、彼女が常日頃智樹に言われていることだった。

そんなことを聞いてくるだけでも俺は彼女が人間のように思える。

「人間らしく…か。別に今のままでも十分人間らしく見えるけどな」「今の…ままで、ですか？」

「ああ、イカロスはそうやって考えて、悩んでるだろ？そういうのってさ、俺からすれば人間と一緒に見えるよ。ただ単に表情変化の

薄い子なんだなっでさ。」

「悩む？」

「そう、そうやってトモ坊の言ったことの意味を考えてる。けど、トモ坊の言う人間らしくってのは俺とは違う意味なんだろうけどさ」

イカロスは分からないといった風に言う

「でしたら、マスターの言っている人間らしくとは…どういう意味なのでしょう？」

「ま、俺が言える事は特にないけどさ。泣いて、笑って、悩んで、悲しんでさ、それをできるだけでも人間らしいと思うよ」

「そう……ですか」

「コーヒーをお持ち致しました」

そこで、注文していたコーヒーが運ばれてきた

二人の前にコーヒーを置くと、店員は足早に戻っていく

「ま、コーヒーでも飲みながら考えるといいさ」

「……………はい」

しばらく無言のまま、コーヒーの味（香り）を楽しんでいた

その後、ファミレスから出た俺は妙な気配、いや視線を感じた。それは俺に向けられたものではなく、イカロスに向けられたものだったが

その気配の正体を探ってみるが、気配は感じるが姿、場所を発見することも特定することも出来なかった

イカロスはそれに気が付いていないようなのでひとまず安心だ

「イカロス、時間的にお前はそろそろ帰れ。俺はまだ行く場所が残ってるからさ」

イカロスの返事を聞くことも無く、気配を探ることに力を入れる

そのまま、俺はその場から急激に遠のいてゆく気配を追いかけるのだった

## 空夢・少女の悩み（後書き）

いかがでしたか？

気分転換に執筆しているものなので更新も内容も結構薄いと自分でも思っています……

描いていて楽しいのは此方ですね。

だったらこっちを執筆すればいいじゃないかと言われそうですが……

たまに執筆するくらいが丁度いいくらいだと思っています

また、更新はいつになるか未定ですが、おそらく小説事態は削除しませんので続きは書き続けていきます

これからも末永くよろしくお願いいたします

感想ありがとうございます

## 意味ある言葉

結局、謎の気配を突き止めることは出来なかった。

既に完全に無くなった気配を捜査するのを諦め、智樹の家に向かって歩きなおよす

そこで、計帯電話のバイブレーションに気が付いた

智樹からだ

「あゝ、俺だけどうしたんだ？」

『恭夜、悪いけどさもう一つ頼んでもいいかな？』

この時間に頼みごとか？

「別に構わないけど、それは俺にできることなんだな？」

『そう……だと思っ』

「はあ、了解。それで、頼みごとってのは？」

智樹はその言葉を聞いて、躊躇っていた言葉と言う

『イカロスがクラッカーを買いに行ったきり帰ってこないんだよ』

「そういうことな。つまり、イカロスを探してきて欲しいんだろ？」

『わりい、場所と物の形教えないで行かせた俺も悪いんだ』  
「どうせそれも先輩とそはらに言われて気が付いたんだろーな」

智樹は電話越しに『ウツ』と漏らしていた。俺はそれを電話越しに少し笑ってから智樹に電話を切るぞと伝えてから電話を切った

「さてと、幸いなことに時間も遅いことだし………見つからないよな」

現在いる場所は雑木林の中。それも田舎でこの時間となると人もほぼ居ない。

「模倣による創造開始」

創り出すのは智樹の夢の一日に創り出したあの白き翼

サイズはあの時よりも一回り小さくしておこう

「完了つと。見つかるといういろめんどそうだけど、こんな日くらいは別にいいよな」

今日はクリスマスだ。せめて、イカロスにもクリスマスという行事は楽しいものだという事を知ってもらいたい。

「視力の魔術による強化開始」

もつとも、その楽しさを知らない俺がそんなことを考えるのも可笑しな話だけどさ

「強化完了つと」

地面を軽く蹴り上げ、翼を羽ばたかせる。

通常、人間は自力で空を飛ぶことは出来ない。だから飛行機などの機械を使って空を飛ぶ努力をした

だからか分からないけど、俺は空を自由に飛べるといっなのはこんなにも気持ちが良い事だと思えるのだろう

羽ばたかせた翼は空気を掴むように俺の身体を空中へと運んでゆく。

地上から見る夜空も綺麗なものだが、自身が空に上がり眺める風景はもつと美しい。そんなことを思いながらも、上空からイカロスを探す。

視力の強化により、この位置からでもはっきりと地上が見える。一応だが、先に空を見渡したので空には何も居ないことは確認済みだ。そこで、隣町近くの林の一部がなぎ倒されていくのが見えた。

「明らかに人間の仕業じゃねえよなあ……ま、トモ坊の頼みも在るけどあの子の頼みもあるし　俺も急がねえとな」

目的地のほうに向きを修正して、一気に翼を羽ばたかせる。

近づくに連れて、その風景、いや。光景が眼に映りこんでくる。

そこには、イカロスと同じように首輪と翼を持つ少女が居た。

背はイカロスより大分小さく、髪は空の青のように澄んだ色であり、両端を縛るツインテールにしていた。

体型はその背丈に合わせたように起伏は少ない。イカロスと違って衣装はミニスカート型の

ワンピースだが、イカロスの身に着けていた衣装と似た細工が施されている

そして、その小さな背中には七色に輝く透明な羽が生えている。

「翼というよりは羽…か。」

上空から小さく呟きながら状況を把握する。どうやら一方的にイカロスに少女が話しかけているようだ

別にそれだけならば俺が地上に降りてまでお節介なことをする必要



は無かった。

だが、それはイカロスの表情を見て変わった。

泣き顔だ。

それも、悲しみに嘆く悲痛な涙。

イカロスはその数秒、まるで機能を停止したように俯きながら泣いていた

俺はそれを黙って見過ごせなかった。何故なら、それは俺が容認できるものではないのだから……

孤独を知るものはそれを決して許すことは出来ない。

たとえ、どんな理由があろうとも。

「テメエエエエエエ!!」

翼を羽ばたかせ、一気に地上まで降下する。

少女はまるでありえないものを見るかのような眼で此方を見ながら後ずさる

握り締めた右手を少女へと放つ。しかしそれは少女が後ずさったために頬を掠めるに留まった

「な……どうして地蟲ダウナーに翼が!?」  
「テメエ、どうして他人の些細な幸福を奪おうとする………」

頭に血の上った俺は冷静ではなかった。いつもなら絶対に創るつとすら思わない刃を頭の中で組み立てていく

少女は拳が掠めた頬を触って血が流れていることを知った途端、狂ったように怒り出した

「おのれ……地蟲ダウナーが!! 低脳な蟲の使う兵装が私たちの使う兵装にかなうと思うなあああ!!」  
「俺をあんまり苛立たせるなよ!!」

少女はすつと息を吸うような仕草をしたと思うと

「超々超音波振動子『パラダイスⅡソング』!」

頭の中に組み立てていた刃を手に創りだし、魔眼を開放する。

「模倣開始 超々超音波振動子『パラダイスⅡソング』………」

相手の技、兵装を魔眼で模倣し、同時に刃から全く同じ衝撃波を作

り出し放つ

脳に掛かる負担は大きいがその模倣は真に迫っているだろう

「なっ 相殺されただと!？」

驚く少女を待つことなく、手に持った刃を少女の首筋に突きつける

「俺もさ……そこまでの善人じゃないんだ。知っているか?やらない善よりやる偽善ってのをさ」

刃を振り上げ、眼を見開いて立ち尽くしている少女の首を刎ねんと刃を振り下ろそうとした

だが

お願い、天使を助けてあげて

あの少女の言葉が頭を過ぎった。

そして、少女の顔が見えてしまった。

俺は……何をしようとしていたんだ？

頭の上っていた血が一気に引いていくのが分かった。

状況を再び把握する。

俺は……………最低だ

そう思い、彼女の首元から刃を退けようとした時、後ろから信じられないほどの威圧感を感じ取ってしまった

「ターゲット、ロック……………オン」

それは、ついさっきまで泣いていた彼女から溢れ出ている

そこには、赤い瞳の悪魔が居た。

「ウ、ウラヌス、クイーン」

先ほどまで自分と対峙していた少女が放った言葉。

そこで、あの文献の文字がふと頭の中に現れた

『翼を持つもの』 『天使』 『殲滅する』 『感情なき瞳』

それは全て今の彼女と一致してしまった。

「はあ、嫌な予感つてのは否応無しに当たっているものなんだな……」

「何をおっしゃっているのですか？」

「いや、なんでもないよイカロス……ただな、お前は今の日常を守るべきだ」

その言葉を聞いてぴくっと反応するイカロス。だが、未だに赤い瞳は少女を睨んだままだ

「なあ、少女。今は退いてくれないか？ここで戦ってもお互いに実害しか残らないだろうしさ……」

その言葉を聞いた少女はわなわなと怒りに震えているように見えた。だが、直ぐにそれは無くなり、此方を見直し

「分かったわよ……確かにこの状況じゃ分が悪いし。私もむざむざ消えるつもりも無い。だけど一つだけ言っておく……」

徐々に身体がどこか　　いや『シナプス』に転送されていく少女は歯を噛み締めながら、イカロスを睨んだ

「いつまで……騙し続けられるかしら？あなたのマスターはあなたの正体を知ったらどう思うんでしょうね、この……」

そこでイカロスの表情に影が落ちる。そんな彼女に追い討ちをかけるように。

「大量破壊兵器がつー!!」

捨て台詞を残し、少女は消え去ってしまった

そこでイカロスは、俺に尋ねてきた

「私は……どうしたらいいのでしょうか？」

その表情は困惑。俺はそれを簡単に返してやった

「帰ったら理由も話さずに思いっきり泣いてやれ。」

時計を見ると既に十一時を回っている

「ま、俺は何も見えてない。お前とは会っても居ない。」

「それはどういう……?」

「ま、言い訳は木にぶつかりましたとか言っておけばいいだろうし  
な」

「あの……」

「要するに、早くお前はトモ坊……いや、智樹の場所に帰れ。今日はクラッカーを買いに行った途中でたまたま木にぶつかっただけなんだろ？」

俺は手をひらひらと振って、イカロスに早く帰るようにジェスチャーで伝える

イカロスはそれをどう受け取ってくれたのかは分からないが、いつもの服装に戻り、翼を広げて飛び去っていった

「ま、これからはお前の努力しだいだって事さ……イカロス」

携帯電話をポケットから出して、智樹に連絡を入れる。

相当、智樹も心配しているのだろうか声が笑っていなかった。

（トモ坊なら事実を知っても今までと変わりなく過ごしていると思っけだな）

伝えることを伝えて電話を切った。

そして、俺もただんでいた翼を広げて上空へと上がる

「シナプス……か。」

一言呟き、俺は自宅のほうへ空を泳ぐのだった

大きな石柱のある不思議な場所。その宮殿のような建物で何人かの人々が嫌な笑みを浮かべながら、何かを喋り、何かの肉を口に運んでいる

その中でも、一際目立つ格好をした男は片翼をその衣服きくずし、ニンフが頭を低く下げて……いや、土下座のような格好で跪いていた

「失態だなあ……空の王女ウラヌスクイーンを連れ戻すどころか目覚めさせてしまうなんてな」

「……申し訳ありません」

ニンフはただその言葉を言い放つ。まるでそれを強制させられているかのよう



「ベータはもう廃棄しても良いのではないか？」

「何千年立っても地蟲どもはこのシナプスを発見することすら出来ない」

「電子戦用など必要ないだろう？」

「！！お、お待ちください。次こそは必ず」

その言葉を聞いてか男たちは途端に見下すかのように言う

「目覚めた空の王女にお前ごときに何ができる？」

そこで、先ほどの一番目だったものがこう言い放つ

「いや、待て……ベータはいい情報を持ってきたのだ。」

「ほう、それはなんだ？」

「地上に裏切り者の一族が残っているらしい。これは面白くなるのではないかあ？」

「ほう、裏切り者か……懐かしい響きよなあ」

男たちは途端に笑い始める

「研究者ダイダロスといい、あの裏切り者といい……地蟲のどこが気に入ったのだろうなあ」

「ククク、それはいい暇つぶしになりそうだ」

「さて、ベータ。お前には条件付で楽しませてもらうおつ」

男はすつとカードを取り出すと、ニンフの鎖に翳した。カードからは黒い気体が発生し、ニンフの元へと迫ってゆく

「な、何を!？」

その気体が鎖から首輪に渡りきつたとたん、ニンフは途端に喚き声を上げた

「アアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

それは苦しみの余りに上げた叫び

「あっあ……あう」

「退屈でしょうがなかったんだ、せめて、それで私たちを楽しませろ」

「は……はい……マスター」

首輪から嫌な電子音がニンフの耳に入った

「あ……ああ……うう」

「裏切り者を我らの前へ連れて来い……それが出来たのなら廃棄は

無しだ」

それが男たちのニンフへ向けての最後の言葉だった

そして、男は小さく呟いた

「貴様は傲慢な人の世に何を望んだのだ……十三番目よ」

その言葉は誰にも届いては無かった

## 意味ある言葉（後書き）

ついにニンフ出てきました

話を考えるのが大変になっていきそうだあ

ま、気分転換に書いているものなので文章に穴などがありましたらすみません。

また、つまらないと思っている方も申し訳ございません。

ですが、面白いと読んでくださる皆様には感謝いたします

それでは、また次回はいつになるか分かりませんがよろしく願いいたします

なんだ……これは？（前書き）

今回は裏側のお話

恭夜メイン？

なんだ……これは？

イカロスは不安だった。

自分がマスターの嫌いな兵器であったこと。

マスターに隠し事をしていること

そして、恭夜に言われたようにマスターの背中で泣いてしまったこと。

アレから数日過ぎたが、智樹は一切、イカロスに何も言っっては来なかった

（マスター、何を考えてるのかな？）

先ほどから湯飲みを手に日光を浴びている智樹をイカロスはじいっと見つめていた。余り彼の邪魔にならないようにじいっと

そんな彼女の熱視線を浴びているとは露知らず、智樹は湯飲みの茶を啜ると、爽やかな顔になった

（ああ、何かこう、エロイ事したい…むしろ女湯に入りたい。女湯、女湯、女湯、入りたい、入りたい）

（いつもの……マスターだ）

直感で確信したイカロスは非常に優秀な子であった。

同じ時間、彼は眠っていた。

日ごろ滅多に使用しない魔眼を使用した疲れが残っているのだろう。  
ソレは数日たった今も変わらずに

だが、その顔はどこまでも爽やかなものだった

そこに、携帯の着信音が鳴り響く。

その音を聞いて彼は眼を覚ました。

(ねむ……こんな時間からだれだよ……?)

まだ重い瞼を擦りながら、片方の手で電話に出た

「もしもし……俺ですけど……」

『……もし』

電話に出る。しかし、相手は無言のままだ

(もし……?)

悪戯電話だろうかと思い、彼は通話終了のボタンに指を当てる

そのとき、ようやく相手の声が耳に届いた

「もしもし……くう」

『あ、おい！！電話に出ながら寝るんじゃない？！』

「なんだ……こんな朝っぱらからよ……」

『もう十時過ぎる時間を朝っぱらっていわねえだろうが！！』

そんな会話をしているが、寝ぼけている彼は相手が誰だか把握できていない

「それで、何のようですか……」

『とりあえず銭湯に行くから恭兄も』

『

ブツッ

彼は余りの眠さに通話終了のボタンを押していた。

(切れた……？まあ、眠いし……ねよ)

彼は再びベットに潜り、眠るのだった



「トモちゃん、恭ちゃんはどつだったの？」

智樹に聞くのはそはらであった。どうやら、彼女の意見もあってか智樹は恭夜に電話をしたのだろう。

だが、結果は

「電話……切られた」

智樹の一言に、そはらは残念そうしている。その横では生徒会長がいつものようにニヤニヤと笑っている

「恭夜君がいないと心配ねえ」

「え、何がですか？」

その言葉に、そはらは思わず聞き返す

「勿論、桜井君の事よお。だって、思春期の塊みたいな人間だもの

」  
「あ……」

智樹は電話を片手に持ったまま、ニヤツと下品な笑いを顔に浮かべ

ていた。

（こちらイカロスのカードがあることを奴らは忘れていた！）

その表情を見てしまったそらは先手を打った

「イカロスさん、持っているカード、全部この袋に入れて」  
「はい」

後ろで計画が崩壊していく音が智樹には聞こえてしまった

「あ……」

カチンと固まる智樹に、そらはあかんべえをした。

「……残念でした」

白く燃え尽きた智樹を置いて、女の子二人はまた楽しそうに歩いていく。

冬の北風が、智樹の心の隙間に冷たさを運んできた瞬間でもあった。

『なんだ……これは』完

「まだ終わっちゃいねえ!!」  
「なんだ、突然現れて騒々しい」

智樹は一旦そはらと会長たちの元を離れて、イカロスを連れて守形の下へ来ていた。先ほどの説明をして、何とか女湯に入り込む方法を聞くために

だが、現実はそんなに甘くは無かった

「興味ない」

一言の下に切り伏せられた。

「いや、なんつーか、予想通りっちゃ予想通りだけど……先輩って今いくつツすか？」

「十五。ぴっちぴちの青春真っ盛りだ」

青春真っ盛りの男はつきはぎだらけのグライダーの角度を念入りに調整していた

「だったら、女湯ですよ！！一糸纏わぬ女性が！！」

「興味ない。そんなことを言うのなら恭夜と行けばいいだろう」

熱く語る智樹と正論を言う守形。

その様子をイカロスはきよとんとした表情で眺めていた。

智樹はぐつと奥歯を噛み締める。だが、彼には奥の手が残されていた

「良いんですね。『新大陸』つすよ」  
「ッ!？」

その言葉を聞いて守形は智樹のほうへ振り向く

「貴様、今なんと？」

「考えても見てください。県によっても違いますが男が女湯に入れるのは精々十歳まで。ソレを過ぎた男性に女湯に入る術はない。女湯がどんな世界か俺達には知る由も無い!！」

智樹は両足をダンツと踏み込むところ叫んだ

「もしかしたらそこには新大陸がつ!!！」

守形の眼には己の目指す新大陸の幻影が確かに見えた。

彼はポケットから一枚のカード……イカロスのカードを取り出す

「先輩、ソレは……」

「前にイカロスに借りていたカードだ。これは量子変換機を呼び出すことができる。これで一時的にだが別のものになることが出来るはずだ」

そう言つて、守形はカードからタイプライターのような量子変換機を取り出すと、彼の姿は分子レベルで分解され、再構築されていく。ソレをイカロスは無言で眺める

「辛いたびになるぞ。帰つてこれんかもしれない」

まだ分解されていない右腕を智樹に差し出す。ソレをイカロスは無言で眺めている

「そんな時は、俺が担いででもあんたを連れて帰りますよ」

智樹も徐々に分解されていく手でがちりと手を握つた。イカロスはソレを無言で眺めている

そして、全てが分解されると……イカロスは黙って量子変換機を拾つて銭湯へすたすたと歩いていった

「ふああああ……よく寝たなあ」

欠伸をしながら両腕を上には伸ばす

そこで、携帯に眼を向けるとお知らせのランプが点滅していた

携帯を開き、履歴を見ると、智樹から電話がかかってきていたようだ。

だが、全く身に覚えが無い。

彼は確認の為に電話をかけるが繋がる事はなかった。

「ま、朝飯……昼飯食ってから考えるかな」

部屋から出て、台所へ向かう。

台所にある冷蔵庫を開くと、中には何も入っていないかった

「アレ?なんか……これってデジャヴユ?」

冷蔵庫の戸を閉じ、棚を探すが一向に食品は見つからない

「仕方ねえ……外食するか」

居間に置いてある財布をズボンのポケットに押し込み、玄関に向か

い、靴を履いて外に出る

「その前に久しぶりに銭湯にでも行くかなって」

最近歩きなれてきた道を歩きながら呟く。

平和な日常を肌で感じているのか、戦っているときの彼の姿はどこにも見えない。

田舎道を歩くこと数分。近場の銭湯に着いた。

入り口から入ろうとしたとき、彼はソレを見つけてしまった

彼女、イカロスをだ

イカロスは地面にしゃがみながら何かの機械を弄っている。彼はソレを不思議に思い声を掛けた

「イカロス……そんなところで何してんだ？」

「あ……これは」

近づいていくと、機械のモニターのような場所の映像が見えた

やはりというべきか、なんと言うべきか……智樹はともかく、守形まで一緒に馬鹿げたことをしていると思ったら彼の頭が痛くなった



「大体は察したよ……お前も何かあったときは智樹を思いっきり困らせるよ」

「え……？」

彼は彼女の隣に腰を下ろし、一緒に画面を覗き込む。

「あの、何を……？」

「ま、俺もどうせ暇だしさ」

どうやら彼は自分が銭湯にきた事すら忘れて、彼女を見守ることにしたようだ

(ま、この前のこともあるしなあ)

「あ、マスター。身体の変化の一部に異変が」

そんな時、彼女の弄っていた機械が警告音を発した。機器の画面では智樹の身体の一部……

所謂『男の子』の部分がピカピカと光っていた

「終わったな……」

「このまま興奮状態が続くと、何か未知の物に変化する危険が……」

あの、マスター？」

しかし、智樹の返事は返ってこない

画面を越しに、いや。銭湯の中から聞こえてくる声を聞くと大体のことが理解できた。

（大方そはらの胸でも揉んでんだろうな……）

イカロスはおろおろしながら此方を見たり画面を見たりを繰り返している

そして

「限界です」

というイカロスの声の数秒後。

銭湯の中から智樹の断末魔の叫びが聞こえてきたのは言っまでもないだろう

彼が両手を合わせて一言

「……南無」

ソレを真似したのか、イカロスも

「……………なむ」

と、同じ格好をしていた

そこで、彼は自分の目的を思い出したのかイカロスに一言

「あ……………俺、風呂に入りに来たんだ。んじゃ、俺は行くから」

「あ……………はい」

彼はその場を早急に立ち去り、銭湯に入ってしまった

彼が風呂から上がり、コーヒー牛乳を飲んでいたところ、大きな叫び声が聞こえてきた

「オラア！！きりきりと働くんだよ！！警察に突き出されたくはないだろう？綺麗にした所は舐めて確認するんだよ！！」  
「ハイハイ！！スミマセン！！！！」

急に冷や汗が流れ出てくる。おそらく、朝の電話の用件はこれのお誘いだったのだろう。

（寝ぼけてた俺ナイスだぜ！！）

そのまま、掃除をしているだろう智樹の場所へ向かう

「お、恭夜君まだいたんだね。見苦しい場所見せてごめんなさいねえ」

「い、いえ。別にいいですよ」

先ほどの声を聞いていたために少々腰が低くなってしまつのは仕方ないことだろう

「何か言っておくかい？」

「いえ、俺は別にいいですよ。どうせ帰ってからも袋叩きにされそうですし」

苦笑いしながら言葉を返し、智樹を眺める

「でも、恭夜君と智樹と一緒にここに来るのもほんとに久しぶりだねえ。片方はおじいさんに似て変態になっちまったようだけどね」

「まあ、思春期ですからね。仕方ないですよ」

「おや？その言い草だと恭夜君は違うのかい？」

同じようにまた苦笑い。こればかりは仕方ないだろう

「俺はそついう風に育てられましたからね……」

窓から見える夕日を眺めながら一言。

「そりゃ、悪いこと聞いちゃったね」

「いえ……じゃ、俺はそろそろ」

飲み終わったコーヒー牛乳のビンをかごに入れる

そのまま、銭湯を出て行った

「ま、トモ坊もイカロスも楽しそうだし……俺もそれなりに楽しんでるからさ」

彼の呟きからは孤独は薄れていた



なんだ……これは？（後書き）

原作を知らないと分からないような内容でスミマセンでした。

自分的には、介入者がいたらこんな感じだろうと思って書いているので違和感が凄いかも知れませんが

ですが、作者は書いていて楽しいです

では、次回の更新をお楽しみに

次回『天使の思い、孤独を嫌うもの』

天使の思い、孤独を嫌うもの（上）（前書き）

完全オリジナル……ではないですけど、まぜこぜになっている話  
しなので過度の期待はご遠慮いただきたいです

二話・連続投稿いたします



天使の思い、孤独を嫌うもの(上)

(どういう状況だ……これはさ?)

いつに無く、彼は思い悩んでいた。何故なら

『だめえ、みかわやさん、らめえ』

ポテチをつまみながら、昼ドラを見ている羽の生えたツインテールの女の子

(つか……なんで俺の所なんだ?確かイカロス狙ってたんだよなこの子……つか、来る場所間違えてないか?普通さ、トモ坊の家に行くんじゃないか?)

頭を?きながら現在の状況を必死に把握しようとしているが、彼の頭の中でソレがまとまることは無かった。

「なあ、一ついいか?」

これ以上、一人で思い悩んだところで何も考え付かないと踏んだ彼は女の子に声をかける

「なに?」

「何って……なんでお前が俺の家の今でポテチ食いながら、昼ドラ

見て寛いでるんだ？」

「なんでって……何かおかしいの？」

さも当然だという風に返事を返す女の子に、彼は更に頭を悩ませる

「いや、おかしいだろ？」

「何が？」

(何がって……普通、殺されかけた相手の家では寛がないだろ?)

それ以前に、彼は一つ気になっていたことがあった。

ソレは

「どうやってこの家に入った？」

「どうって……普通に玄関からだけど？」

ソレは本来ありえないこと。人避けの結界を張っている以上は、この存在にすら気が付かないはずだ

だが、張っている結界はあくまで『人避け』の結界だ

(まさか……エンジニアロイドに人避けの魔術は意味が無い?)

「ねえ、質問は終わり?」

そこで、いかにもめんどくさそうな表情をしながら聞いてくる女の子だが、まだ聞いていないことが一つだけあった

「いや、もう一つある。お前の名前聞いてない」

「名前?そんなのを聞いてどうするつもりなの?」

「ま、新しい居住者の名前くらい知つといたほうがいいだろう?どうせ居座るつもりなんだろうしな」

そういうと、不満そうにだが女の子は答えた

「タイプ・ベータ、ニンフ……」

「ニンフ……か。ま、良い名前じゃないか」

彼はそう言って、居間から出て行く

それに気が付いたのかニンフは彼に聞く

「どこに行くの?」

「ん?これから智樹とかと花見だ」

「花見?」

「そ、花見だ。お前もついてくるか?」

ソレは、彼なりの優しさなのだろう。

夢の彼女との約束もあるのだろうが、これは純粹な彼の気持ち

少年は孤独を嫌う。

それ故に聞いてみたのだろう

ニンフはぼかんと口を開け

「うん」

と、答えた。彼はソレを聞き、財布をズボンのポケットにねじ込んだ

「んじゃ、行くか」

彼はニンフにそついうと玄関に向かって歩いていく。

ニンフは彼の後ろをただ歩いていくのだった

「来たようだな……おや？お前がこのメンバー以外の者を連れて歩いているというのは珍しいな」

「ああ、気にしないでください。智樹と似たような状況になっただけっすから」

そう言って、恭夜は後ろにいるニンフに眼をやる。

「なによ？」

やけに嫌そうな表情で言葉を放ってくるが、恭夜はまるで意に介さないように話を続ける

「ほう、まるで人を寄せ付けないお前がか……変わったな、恭夜」  
「そりゃ、一年もあれば人間簡単に変われますよ。どっちかという  
と、こっちが素の俺でしたし」

「まるで今までのお前はお前じゃないというような言い方だな？」  
「抑制されていた感情が表に出ただけっすよ」

そう言って、恭夜は守形を納得させる

勿論、守形もこんなことで納得するはずは無いのだが、恭夜の会話を終わらせたいという雰囲気を感じたのか、無理矢理納得してくれ  
たようだ

「で、何で先輩はこんな場所に？」

「アレをよく見る。分かるだろう、非難してきたというわけだ」

指を指されたほうを見る。

そこには、会長とそはらに弄られている智樹が居た。

それで、恭夜も納得した。

(間違いなく巻き込まれるな)

と。

「そういうことですか……………ニンフ、お前はどうす  
って、い  
ねえ!？」

「ああ、ニンフなら俺達が会話をしている途中でいなくなった」

「何で教えないんですか？」

「お前なら気が付いていると思ったのだがな……………」

「ちよつと探してきます」

そう言つて、恭夜はニンフを探しに行った

その頃、ニンフは

イカロスの元を離れた智樹をつけていた。

彼女は険しい表情で智樹を睨んでいたが、彼は全く気が付いた素振りを見せない。すると、ニンフは突然何かを呟き、一瞬にしてその姿を消した……いや、周りの風景と同化させたのである

だが、普通の人間の目では彼女を捉えることは出来ないだろう。ニンフは電子戦用エンジェロイドと自分で名乗るとおり、ハッキングやジャミングといったデータを使う技に長けている

その中でも、このステルス機能は、イカロスでさえ認知できるか危うかった

(コイツさえ押さえれば……あの二人は無力化できる)

ニンフはステルスで見えない笑みをたたえ、その手を無防備な智樹へと伸ばした

運悪く、空の女王として覚醒してしまったイカロスをシナプスへ力づくで連れて帰ることは到底、ニンフには出来ない

かといって、イカロスはシナプスへおとなしく帰るはずも無い。

そして、もう一つの命令は恭夜をシナプスへ連れて行くこと

事情は良く分からないが、彼もシナプスの関係者らしい。だが、彼は地蟲であるはずなのに翼を持ち、あまつさえ、得体の知れない力

を持っている

勿論、恭夜もイカロスと同様に力づくつれてはいけない。

ならば、どうすべきか

この男を人質に取り、両者を連れてシナプスに戻る。それが彼女の作戦だった

そうして、気付かれないように伸ばした手が、智樹の首に掛かろうとした時だった

ゾクッ

不意に強烈な殺気を感じた。

それは、明らかに彼女に向けられているモノ

それは強烈な恐怖のイメージだ

「お……居たな。つか、トモ坊……何してんだ？」

「うへへ、何って……覗きだよ、ノ・ゾ・キ」

いつの間にか現れた恭夜のせいで、彼女はその場から数歩離れる

(なっ……いつの間に!?)

彼女は、気が付いていなかった。それだけに驚きが大きかった



「覗きねえ……取り敢えず　南無」

「よく考えるよ……そこに夢があれば覗くのが男ってもんだろ!!」

「いや、ソレは煩惱塗れの奴が言う言葉だ」

「お前はそれでいいのかよ!!?」

その様子を、ジッとニンフは眺めている。どうやら恭夜がいなくなるのを待つことに決めたようだ

「いいも何も、そこまで煩惱に塗れちゃねえよ」

「くそお……これだからイケメンってやつあ」

智樹の怨念のようなものが恭夜に向けられる。ソレを察したのか、恭夜は足早に智樹から離れていく

「お前も少しは楽しんだらどうだ?」

恭夜がニンフの横を通り過ぎた時だった。

確かにその言葉は、ニンフに告げられたものだったようだ。

(う、嘘よ……見えてるはずが無いんだから……そう、私の勘違い  
よ)

ニルフは、完全に恭夜がいなくなったのを確認してから、当初の予定通りことを進めようとするのだった

SIDE 守形？

「どうだった、見つかったのか？」

「あー、そういえば俺アイツ探しに行ってたんでしたね」

「……ん？」

どうやら、その一言を守形は疑問に思ったらしい。

「どうしたんすか？」

「いや、確かお前はニルフを探しに行ったのではなかったのか？」

「そうですけど……なんか問題でもあったっすか？」

その返答に、沈黙が訪れる。

だが、守形は無理矢理納得し、無かったことにしたようだ

「いや、なんでもない。それで、これからどうするんだ？」  
「適当に出店見て周ろうと思っっていますけど……先輩もどうですか？」

守形は眼鏡をくいつと持ち上げる

「食費は奢りか？」

「少しなら」

その問いに、考える必要も無かったようだ

「ならば、早く行こう」

少しなら。と、確かに答えたはずだった。

事あるごとに、食べ物の置いている出店の前を通ると

「美味そうだな……二つ貰おう」

というような感じで、財布の中身が軽くなってゆく

(忘れてた……この人、俺以上に飯を食うんだ……)

今の彼の気持ちを表すのならば……『orz』だ

別に、まだまだ金は余ってはいるが、この勢いだと間違いなく食いつぶされる

「あの、先輩……」

「なんだ？」

右手には焼きとうもろこし、左手には焼きそば、焼き鳥と、どこからどう見ても花より団子というような人だ

「さっきから気になっていたんですけど……あの明らかにおかしい人ばかりはなんですかね？」

そして、俺も会話に脈絡が無さ過ぎるのは自覚している。

「脈絡が無さ過ぎるぞ？」

「ま、気にしないでください……で、見に行きますか？」

「ああ、少し気になるしな」

そう言っつて、手に持ったとうもろこしを食べきり、残っている焼きそばと焼き鳥を食べきる守形

「あの、もしかしてまだ食うんですか？」

「ああ、食えるときに食っておきたいからな」

「さいですか……」

そのまま、人だかりのほうに足を進めていく。

気が付いたことは唯一つ。以上に女性がそこに密集していたことだけだ

「ふむ、状況から察するに間違いなく……智樹だな」

「……ですね。」

周りを見渡すが、イカロスの姿は見つからない。

つまり、この状況を作れる人物はただ一人。

「ニンフか……恭夜、どうするんだ？」

「別にいいんじゃないですか？悪意も感じませんし……智樹以外からはですけどね」

人だかりの向こう側に、見覚えのある少女がぽつんと立っている。

そいつに向かって手招きをすると、此方に気が付いたのかとてとてと歩いてきてくれた

「どうしたのよ……手招きなんかして？」

「いや、わざわざ智樹の相手してくれてどうもって伝えようと思っ  
てな。」

「……えっ？」

「だからさ、ありがとっつてな。」

その言葉に、ニンフは戸惑っているのか顔を赤くしている

「どうした？調子が悪いなら家まで連れていくけどよ……どうする  
？」

「ち、違っつわよー！」

「ふーん、ま、ついでだ。これでも食ってあいつのこと待っててく  
れよ」

そう言って、恭夜は右手に持っていたりんごあめをニンフに持たせた

「んじゃ、俺は先に帰るからあんまり遅くなんなよ」

「そうか、お前が変えるなら俺も帰るとしよう」

そう言って、守形と恭夜は帰っていくのだった。

その後、ニンフは小さく呟く

「……………馬鹿にしないでよ」

その呟きは、どこか嬉しそうであった

天使の思い、孤独を嫌うもの(下)

翌日の事だった。

恭夜が寝巻きから制服に着替えて居間に向かうと、テーブルの前の椅子に座ったニンフが居た

「ご飯まだ？」

ソレはつまり、朝の食事をとらない事の多い恭夜が毎朝早起きして朝食を作らなければいけないということだ

しかも、どういうわけか絶対にニンフは料理が出来ない気がする  
と恭夜の直感が働いた

仕方無しに、恭夜は朝食を作ることにしたようだ

「簡単なものだけでもいいか？」

「食べられるのならなんだっていいわよ」

「さいですか……」

食パンを二枚とり牛乳と卵、砂糖、塩を混ぜた物に浸す

その際にフライパンに余熱を通しバターを広げる



そして、浸したパンをフライパンに一枚ずつ入れていく

「ま、こんなもんだろ」

適当に焦げ目がついたあたりでひっくり返し、また数十秒待つ

棚から皿を取り出し、完成したソレを皿の上に載せてニンフの前に置いた

「付け合せは生クリームかブルーベリーのジャムが在るけどどっちにする？」

「甘いほう」

「さいですか……」

今日、二度目になる「さいですか……」と彼は呟きながら、生クリームとブルーベリージャムを持ってくる

ソレをニンフの皿にあるフレンチトーストに適量かける

「ま、美味いかは分からんが朝食だ。食べ終わったら台所に置いていてくれ」

「アンタは食べないの？」

その質問に恭夜は少し悩んだ後に、答えた

「今日は食べたくない気分なんだよ」

そう言って、玄関に繋がるドアを開けて、玄関に向かおうとする

「どこに行くの？」

「智樹のところと学校。ま、暇になったらイカロスのところにも行っててくれ」

ニンはフレンチトーストを頬張りながら頷くのだった

「じゃ、行ってくるわ」

そう言って、恭夜は家を出た。

桜井家に向かって

「トモ坊、来てやったぞ。家、入るぞ。」

彼はそう言ってから、返答すら待たずに桜井家に進入する。

そのまま、廊下を歩き、居間へ上がり込む

「恭兄……せめて返事返してから入って来いよ」

「いいんじゃないか、別にさ？」

「いや、そういう自己完結やめない？」

「お、このおかず美味そうじゃん……一個貰うぞ」

「あ、ちょ……まだいいってすら言っただけ！？」

「お、美味しいなこれ。」

そんなこんなで、朝食を済ませた智樹を連れて学校に向かう

学校に続く田舎道を歩く途中、智樹に彼は聞かれた

「なあ、何で今日は迎えに来たんだ？」

「ま、考えれば分かるだろ？」

「うっ……」

智樹はどつやら思い当たることが在ったらしく、小さく呻く

「お前らこのまま結婚でもすればいいのにな……案外お似合いだぜ？」

「な、何言ってるんだよ!?俺はそは……」

「ふーん、俺は一言もそはらなんていってないぜ。つーことは、やつぱり気が無いって訳でもないんだろ?」

「な、なな、そんなわけあるはずねーよ!」

そんな智樹を弄る彼の姿はとても楽しそうである。

「ま、今のお前はイカロスもいるから決めかねてるんだろーけどさ

……これで名実ともに空美町一の変態だな、トモ坊は」

「俺をこんな状態にしたのはアンタだろオオオオオオ!!俺だつて……俺だつてえええ!!」

「よ、お前もそろそろ爺さんを越すんじゃないか?」

火に油を注ぐように、彼は智樹をからかい尽くす。

そして、智樹もようやくソレを悟ったのか落ち着いてくる

「お、突然静かになったじゃないの」

「なあ、恭兄。せめて、学校だけではあいつ等のこと忘れさせてくれよお」

ソレを、一言で切り捨てるように彼は言う

「断る」

「な、何でだよ？」

「強いて言うのならな……………」

智樹はごくつとつばを飲み込む

「つまらなそうだからだ」

「そんな理由で俺の平穩がああああ」

「ま、コメントもこれくらいにしておいてっと…………早くしないと本当に遅れるぞ？」

「あ、ちよ、待ってくれよ」

彼と智樹はこんな感じで学校に急ぐのだった。

（何故だ？）

その言葉が頭に浮かんだ

（何故、何故なんだ？）

そして、頭痛を抑えるように右手で額をぐつと圧迫する

（いつもの朝、いつもの登校……とは違ったけど、いつもの授業、いつもの放課後。そう、今日もこの学校にいる間だけは平穏だと思っただのに……どうしてだ!?)

「ええ、転校生の威伽鷺さんは、つい先日まで外国に」

（何故だ、俺の席の後ろの後ろにいるんだっつ!）

当のイカロスは制服の上にパーカーを着込み、持ってきたスイカを静かに撫でていた

「おい、智樹………どういう状況なんだ、これはさ? まあ、面白そうだしいいけどさ」

「正直、俺が聞きたい………つか、アンタは何でもかんでも楽しみすぎだっ!」

智樹と恭夜はそんなことを話していた

「暑い………」

しかし、イカロスは不意にそう呟くと、パーカーを脱ぎ捨てて、その翼をバサツとはためかせた。

だが、智樹には後ろを見る勇気がない。だから、代わりに恭夜に頼んで見たありのままを教えてもらった

「もはや隠すつもりもねえな……それと、イカロスとお前の関係は間違いなくばれてるからそこまで気にすることでもないだろ？」

「俺はばれる最後の最後まで頑張っただけ見せるんだっ！」

だが、そんな智樹の努力も無駄であった

あれって、この前商店街に空から降りてきた女の子よね。

俺さ、あの子が桜井の家に入っていくの見たぜ。私も、今朝桜井君を送ってるの見たわ。やっぱり、桜井の関係者だったのか

恭夜の言うとおり、既に全てがばれていた

「ま、いいんじゃないか。いつも以上に生活に刺激が出来てさ」

そして、周囲はイカロスに対して寛容であった。

朝直ぐに、智樹はイカロス、そはら、恭夜を連れて新大陸発見部に居た守形に相談しに来たところ

「いいんじゃないか？毎日の生活に刺激が出来て」

だった。

「恭夜も先輩も他人事だと思ってっ！大体、イカロス、お前、どうやって」

「はい。カードで先生の記憶を」

「恐ろしいことすんなっ！」

がぶがぶとイカロスに噛み付く智樹を、守形と恭夜が、まあまあ、と押し留める

「実際のところさ、他人とのコミュニケーションを取らせるのも悪くないだろ？お前は散々イカロスに人間らしくしろって言ってるんだし」

と、恭夜

「真面目な話、イカロスを普通の人間の生活に慣れさせるのもいいんじゃないか？恭夜も言うように散々言っていることじゃないか」

二人の言葉に押し黙る智樹

「笑う事も出来ない、どこか人形のようなイカロスをどうにかしたいのだから？」



その言葉に智樹は反論できなかった。ソレはつまり、イカロスの入  
学許可と同様である

「じゃ、そういつことらしいから頑張れよトモ坊」

「じゃあ、私がいろいろとイカロスさんに学校生活を教えてあげる  
ねっ」

ノリノリのそはらと、投げやりな恭夜に押され。イカロスは無事入  
学となった。

そして、授業が開始される。

恭夜はいつも通りに授業中に爆睡。そんななか、智樹だけはびくび  
くと脅えながら授業を挑むのだった。

だが、智樹の心配も杞憂に終わったようだ。

一時間目の社会では整然としたノートの使い方を見せ、二時間目の  
家庭科では舟盛や松茸尽くしのフルコース、松坂牛のステーキなど  
をカレーの材料で作り上げ、三時間目の数学では東大レベルの問題  
を繰り返す数学の竹原の攻撃を全て答えきり、四時間目の英語では  
ネイティブレベルの素晴らしい英語で発音してくれたりしていた。

だが、どうやってカレーの材料で舟盛りを作ったのか、何故数学の  
問題を答えるときにイカロスの瞳が赤くなったのかは不明だ

……ちなみに、イカロスに学校生活を教えるといっていたそはらは  
全てでイカロスに負けており、一人、涙目で落ち込んでいた。

恭夜はと言うと、数学の時に寝ていたからという理由で最後に問題を当てられていたが、難なくソレを答え、逆に数学の竹原に問題を出して苦惱させていた。つか、本当に恭夜って同じ歳なのだろうか？

そうして、これなら大丈夫だと安心していた五時間目の矢先

「びゅえ？がが、あびゃびゃばば。鍵っ子サイコー！！べああばべ  
べ」

突然、理科を担当する男子教師が謎の言葉とともに暴れだしたかと思つと、その姿が徐々に変じて行き……

その途中、恭夜が突然起きて「鍵っ子サイコー！！筋肉イエイエ  
イ！！！」と言っていたのは誰も知らない

「理科教師の、威伽鷲主です」

白衣を着たイカロスが教壇の前に立っていた。勿論、スイカを抱いて

（先生かつ！今度は先生がやってみたくなつたのかつ！！？）

「夜露死苦」

（夜露死苦じゃねえっ！）

「先生、今日は何の授業をするんですか？」

守形が手を上げて質問した。ちなみに守形は三年生、智樹は二年生

(どうしてアンタがこのクラスにいるっ!!)

「桜井君で人体実験なんてどうかしらあ」

生徒会長が手を上げて提案した。ちなみに彼女も守形と同学年である

(人を玩具にすることばっか考えてんじゃねえ!?)

まるでこのときを待っていたといわんばかりの二人の質問にイカ口  
スは、おもむろに理科の教科書を開いて

「今日は……空の飛び方について、勉強します」

教科書は開いてみただけだった

「先生、ちなみに誰かって誰ですか？」

そこで、タイミングを見計らっていたかのように起きた恭夜が質問  
する。ソレと同時に守形と生徒会長が智樹の背中をぐいぐいと押す

(お、おおい!!なんで今起きたあああ!?!つか、生徒会長も先輩も俺を差し出すように押すんじゃねえええ!!!!)

「だい、じょうぶ」

窓を開け放ったイカロスは静かに胸の前で手を組んだ

「人の背中には、見えませんが、大きな翼があります。その中でもとりわけ」

イカロスはゆつくりと教壇を降りると、智樹のほうへ歩いていく

「マスターは大きな翼を持っています」

彼の手をイカロスが掴み、立ち上がらせる

「分かるんです。なんとなくですけど……でも、わかる」

そこで主従を示すかのようにイカロスは跪くと、智樹の手を自身の頬に当てる

「マスターは、空に呼ばれている」

その言葉が始まりだった

さっくらい、さっくらい

智樹の耳には聞こえている

さっくらい、さっくらい

ソレは徐々に大きくなり

さっくらい、さっくらい、さっくらい、

教室全体を揺るがすまでになっていた。

その瞬間、智樹の顔が引き締まった

「おお、ギャグにそこまで真剣になれるか」

恭夜の感心したような呟きは智樹には聞こえてはいない

(そつだ、人の背中には見えない翼がある)

そして、一步、また一步と窓際に足をすすめる

(信じればきつと、誰だつて飛べる)

そして、窓枠に足をかけた時、空が智樹に微笑んだ

(あの、自由な空に!!)

少年はその瞬間だけ鳥になった

それから十分もしないうちに、救急車のサイレンが鳴り響いていたのは言うまでもないだろう

「ま、確かにお前は鳥バカになれたよ」

病院での診断結果、ただの打撲で済んだようだった

「流石はギャグ補正……侮れないな」

その眩きは誰のものだったのか、ソレを知る物はいなかった

ニンフが彼の家に来てから三日、イカロスが学校に通うようになってからも三日たった。

彼は家族が増えたと思い、それなりに生活を楽しんでいた

「確か恭夜の所にニンフが住んでるんだよね？」

「んー、ああ。そういうことになってるなあ」

智樹の質問を事実のままに返した

「だから分からないけどさ、お菓子の量が半端なく増えたよな恭夜？」

「まあ、いいんじゃないか？別に俺はそれほど困ってないしさ」

「そういうもんなのか？」

「そういうもんだ。で、それだけか？」

そこに、そはらが現れた。

「恭ちゃん昔からそうだったよね。自分も相手も楽しいならそれで

「いって言う感じですか」

「んー、そうだったわけか？」

「「そうだったよ!!!」」

智樹とそはらの声がハモツた

「恭ちゃんならニソフさんを連れてきても違和感無いんじゃないかな？」

「確かに……なんで、恭夜は連れてこないんだ？」

「何でって言われてもだな……」

珍しくそこで考え始める彼。そして、答えた

「アイツも学校に来たいんだったら俺に言うだろ？」

ソレを言う彼の顔は未だに何かを考えている

「だったら誘えばいいんじゃない？」

「いや、なんていうかさ……そういう雰囲気じゃないんだよ。何かに追い詰められてるって言うかさ」

「「追い詰められてる？」」

同時に聞き返されたために彼は



「いや、なんでもない。」

と、答えてその場をごまかした

（そうだ……魔術師として感じる違和感はないんだ。けど……なんだろうな、あの首輪から出る違和感といい、模様といい）

彼は一度頭を振って思考を元に戻す

「そうだなあ、俺の奢りで飯でも食つか？」

「やったー、恭ちゃんのおごりで飯〜」

「え、まじで！？ゴチになるぜ恭夜〜」

こうして、頭にある一抹の悩みを振り払い、彼は過ごさのだった

天使の思い、孤独を嫌うもの（下）（後書き）

上だけで読むと話が分からないと思います。

実際に上と下を合わせて読んで丁度いいくらいだと思いました。

ニンフを恭夜の家に置く………かなり難しいです。違和感ありありです。

ですが、どうにか頑張って乗り越えます。

作者的にこちらは書いていて楽しいので

では、次回は未定ですが、よろしくお願いします

天使の笑顔・天使の苦悩（前書き）

内容が原作にもろ被り。

恭夜いなきやただの原作じゃね？

なんて、書いていて思いましたが、よくよく考えたら今から原作が消えていくんだと思えば気が狂いそうです

テスト勉強の合間にちよくちよく書いていたので、誤字等が多いと思います。ご勘弁を

では、お楽しみ頂けたら幸いです

## 天使の笑顔・天使の苦悩

ニソフは恭夜と生活を始めて、地上の人間に対する考えが変わり始めていた

事あるごとに智樹のやることを傍観し、ソレを楽しんでいる

そして、めんどくさそうにしながらもなんだか言って自分の世話を焼いてくれる

その上、些細なことだが彼女にも感謝をしてくれた

皿を洗うのを手伝ったときや、ちょっと何かを提案するたびに

ありがとうな

小さなことだが、彼女にはソレが全て不思議で仕方なかった。

そして、今日も恭夜は智樹の家で笑いを堪えている

「く……ぶぶ、楽しそうじゃねーの」

何故、彼が笑いを堪えているのかというと、智樹が必死になってイカロスに笑わせようと努力しているからだ

「笑いなさいっ」

だが、イカロスが笑うと思うたびに

にやり

そんな擬音だけが、イカロスの体内から響く。どういう仕組みかはニンフには分からない。おそらく恭夜にもわかっていない

(何で、笑ってるのかしら?)

ニンフは恭夜を少し眺めてから、目の前にあつた鏡で自分の姿を確認した。

顔、身体、羽。どこにも異常は見られない。そして、最後に首輪を確認する

そこにある、白い縦模様が、砂時計の砂のように削れていくように見える。しかも、残っているのは今削れている一本と、何も削られていない一本だけ。

(後、少し)

ニンフはソレを確認すると、どこへともなく、恭夜達から去っていった

「え、笑い方？」

イカロスと智樹は、体育の時間にそはらにそう尋ねた。体育館では各々の生徒達がバスケの向上に励んでいる。

「そうなんだよ、どうしてもこいつ、笑えなくて」

「ううん、でも笑い方なんて……あ、じゃあ、万歳してみて、イカロスさん」

皆はバスケットボールを持っている中、一人、スイカを抱えていたイカロスはゆっくり万歳してみる。そこにそはらは近づくと。

「えいつ」

突然、イカロスの両脇をくすぐり始めた。とたん、イカロスは、ぴくん、ぴくんと身体を震わせると

「どう？イカロスさん、くすぐったいでしょ？」

そのとき、くすぐったさが限界を超えたイカロスは

「きゃあっ!？」

まるで油の切れた機械のように滑らかではない動きで、上下左右に  
がくがくと身体を揺すり始めた。

イカロスなりにくすぐったがっているらしいが、やはり顔は笑って  
はいなかった

「そはら、お前のくすぐり方はなっていないっ」

ぐっと拳を握り締めた智樹がそはらの後ろに回ると、その魔手をそ  
はらの両脇に運んだ

「あっ、きゃ、きゃはははああははは」

突然のそはらの笑い声に、今までバスケットに集中していた生徒の目が  
智樹たちを集まる

「くすぐるって言っのほ……」じっ、じっやっただなああ!!--」

智樹の手は、太ももを触り、かと思っただらその豊かな胸を掴み、最後にはそらの尻に顔を擦りつけながら胸を揉んだ

「あっああ、あっああ、ああ　　ハアアアア!」

そらの笑い声が、一転して怒号に変わったのは直ぐのことだった

(分からない、どうすれば笑えるようになるんだろう……)

イカロスは、そらに殺されかけている智樹から離れ、体育館の入り口から空を眺めていた。

笑うこと、ソレは智樹が突然言い出したことだったが、イカロスも常づね笑いたいと思っではいた。

何故なら、そらも智樹も恭夜でさえも楽しいときには笑っていた。

自分はまだ楽しいことが分からない。だから、笑うことが出来れば、そこから楽しいことがわかるかもしれないと思った。

だから、イカロスは笑いたいと決心していた

(そうだ、物知りなあの人なら)

思い立ったら吉日。イカロスは昼休みになるとともに、ある人物を尋ねた。



「なに、笑い方だと？」  
「はい、どうしたらいいのかと……」

勝手に校庭に『新大陸発見部菜園』を作って大根の収穫をしていた守形であった

「ふむ」  
「はい」

引き抜いた大根を持ちながら、守形は思考を張り巡らせた。そんな彼をイカロスは静かに見守る

「そうだな……ソレは俺ではなく、恭夜にでも聞いてみたらどうだ？」  
「……え？」  
「俺はまず、滅多に笑わない。ソレならば、日常を楽しもうと努力をしているものに聞けばいいと思ってな」

確かにそうだった。自分は笑えないが、守形は笑わない

そして、この人がいう人は、何故だか分からないけど笑っていることが多い

(そう……だ。あの人なら)

そして、イカロスは恭夜を探して歩き出した。

教室に戻り、彼の席を見るが既にそこにはいない。次に、他の教室をのぞいて周ってみるが、やはり彼の姿はなかった。

他の特別教室を見て周り、職員室も回ってみたがどこにも恭夜はいなかった。

そして、最後にイカロスは普段立ち寄ることのない屋上に足を進めた。

本来ならしまっているはずの屋上のドアが開いていた。

その先では、フェンス越しに風景を眺めている恭夜が立っていた。

イカロスは、とてとてと歩き彼に近寄る

「あの……」

「んー？」

ぼんやりと風景を眺めている彼の姿は、何故だか分からないが哀愁を漂わせている

「どうやったら……笑えるんでしょうか？」

彼は、ソレを聞いてから一瞬だけが悩んだように見えた。

そして、口を開いた

「そうだなあ……日常を大切にすればいいんじゃないか？」

「日常……ですか？」

「そ、俺は日常を楽しんでいるから笑っていられるしさ」

ソレを言う彼の顔には嘘はない。どちらかといえば、何かを思い出しているのか自傷しているようにも見えた

「まあ、お前はそんなこと聞きたいんじゃないんだろけどさ」

フェンスから離れ、イカロスの横を通り過ぎてその場を立ち去っていく恭夜。

イカロスはソレをただ見ていることしか出来なかった。

「日常を大切に………する」

ソレを一言呟き、イカロスもその場を後にした。

家に帰ってから、恭夜は考えていた

イカロスに聞かれた笑う方法を

だが、彼にはイカロスに言ったように日常を大切にすることで笑っていることが出来ている。それ以外の方法を彼は知らないのだ。

何故なら彼も、つい最近まで独りで孤独に過ごしてきたのだから

ソファーに寝そべり、意味もなくテレビの電源を入れる。

「はあ、何考えてんだ……俺」

頭の下に腕を持っていつて枕にする。

そんなことをしていたら、ニンフが帰ってきたようだった

「お、帰ってきたか……」

ただ一言、そう言うてからもう一度考え込む。

「どうしたの？そんなにつまらなそうな顔して？」  
「いや、なんでもないさ」

そんな考えを悟られないように、身体をソファから起き上がらせ、立ち上がる

「なんか食いたいもんでもあるか？」

「ううん、特にない」

そのとき、彼を違和感が襲った。

いつもならば感じない違和感を。だが、彼はその違和感の正体に気が付くことは出来なかった

「んじゃ、椅子に座っててくれよ。夕飯作るからさ」

「……………うん」

俺は背伸びをしてから台所に向かった。

冷蔵庫の中を確認したところ、やはりといつべきか、なんと言うべきか……………

「な……………に？冷蔵庫が空……………だと？」

彼は床に手をつけて落ち込んでいた。

（何故だ？何故、俺が気分を変えて飯でも食おうとすると食材がないんだっ！？）

立ち上がる際に、台所の角に頭をぶつけ、大きな音が立った

ガツン

「いっ つつつつ」

「どうしたの？」

その音を聞いていたのか、ニンフが彼のところに歩いてきた。

「角に頭をぶつけた………つか、食材がない」

「じゃあ、ご飯は？」

（あくまで飯優先ですか……）

「ま、何とかなるって……」

携帯電話をポケットから取り出し、彼は電話をかけた

『もしもし、桜井ですけど』

「今からお前のうちに行くから飯二人分多く作っておいてくれ」

『え？な、何？』

「んじゃ、今からそっちに行くから。じゃあな」

彼は、伝えることを伝えて、電話を切った

「さて、行くかニンフ」

「ねえ、電話をかける意味はあったの？」

「さあな」

そんなやり取りをいくらかしてから、俺たちは桜井家に向かうのだった。

SIDE 恭夜

俺とニンフは智樹の家に泊まることに決めた。ソレも、智樹に確認すら取らずに。





「そ、そうか……じゃ、お休み恭夜」

「おう。階段で転ぶんじゃねーぞ」

「何歳だと思ってるんだよ……」

「夜に怖くなったたら起こしていいからなー」

「だから、もう中学生だってー!!」

智樹はそう言って居間から出て行った。

その後、俺は様々なことを思いながら目を瞑っていた。

懐かしい匂い、懐かしい感覚。

どれも昔と何一つ変わっていないことに俺は安心した。ここは、確かに昔俺が居たということを確認できた気がして

俺は、ここを離れるとき何も言えずに去っていった。それでも、こうしてトモ坊やそはらが俺と昔と変わらずに接してくれる

それだけで、十分だった。

そう、自分の日常を守るだけでよかった

「間違ってるなんかねーよな……」

小さく呟き、雑念を捨てて眠ることに専念した

意識は夢に飲み込まれるように、眠りに落ちていくのだった

「はあ？笑い方？」

智樹が寝入った後、イカロスは煎餅をばりばりと食べていたニンフに尋ねていた。ちなみに、恭夜は二人の前で無防備にて寝ている。

「だってアンタ、自分で感情のプロテクトを解除して………ああ、そっか、アンタは戦闘に特化した分、そういうのがあれだからね。」

ニンフは煎餅を口にくわえたまま、ううんと唸って、腕を組んだ。

「しかし、笑いなんて簡単なこと」

「簡単じゃ、ない」

イカロスの言葉にニンフは目をぱちくりさせた。

「私は笑えないけど……私、ニンフが笑ったところ、見たことないわ」

「はあ？何言ってるの」

「見たこと……ない。ない、わ」

イカロスは記憶を呼び起こす。シナプスでニンフはいつも『マスター』の男にぼろぼろになるまで蹴られていた。そして『マスター』の気が済むと、ニンフは口元だけ歪ませて、血だらけの顔でこう言うのだ。

ありがとうございます

「ニンフが笑ったところ、見たことないわ」

その言葉にニンフは少し驚きつつ、優しい表情を彼女に向けた

「そうね。私たちエンジニアロイドは笑ったことなんてないかもね」

その言葉とともにイカロスとニンフは、少しだけ寂しそうな表情になった。

「わかった。じゃあ、二人で考えましょ。どうしたら私たちは笑えるのか。それで、アンタのマスターに見せつけてやればいいのよ」「うん……………」

その夜桜井家では、いつまでも女の子のささやきが途切れることはなかった。

「ふああ、おはよう」

欠伸をかみ殺しつつ一階に降りてきた智樹は台所からの美味しそうな匂いにつられるようにそこへ歩いていく

そして、台所の暖簾をくぐり、カチャカチャと料理の支度をしているイカロスに

「おお、イカロス。おはよう」

そう声をかけた瞬間、彼女はゆっくりと振り向いた

……………満面の笑顔を惜しげもなく、マスターに向けるために

「は……………い」

そこで、恭夜が目を覚ました。状況を把握できていないのか、目を擦りながらその状況を見直す

恭夜は自分がまだ寝ぼけているのかと思いながら、再び声のする方向を見ると

「イカロスが…笑ってる？……………寝ぼけてんのかなあ？」

そんなことをいいながら、徐々に目覚めつつある頭を回転させながら、再びどんな状況なのかを考えているのだった

その瞬間、日光がイカロスの顔を照らした。すると、まさにきらきらと輝いたのである。

誇張ではなく現実には。

智樹はゆっくりと息を吸うと、静かにその指をイカロスの頬に当てた触ったときの音は、かちん、かちんと明らかに何かで固めたような音がしていた。

「おまつ、何やってんだ！うわ、顔全体ががちがちに固まってるっ

「？」

その怒鳴り声を聞いて、恭夜の目が完全に覚めた。

「確かに表情だけは笑ってるけどさ……なんか違うねーか？」

そんな彼らを陰から見つ、ニンフはため息を吐いた。

「さすがに接着剤で固めただけじゃダメか」

彼女は、手に持っていた瞬間接着剤をその場に捨てると、智樹に示かられるイカロスとそれを見て笑っている恭夜の笑い声をBGMに、静かに玄関に向かう

(でも、大丈夫よ、アルファ)

がらがらと引き戸を開けると、空をみた。遠くには、かすかに暗雲がくすぶっていた。

(アンタのマスターは、アンタが笑うことが出来なくなっちゃってアンタを大事にしてくれる。私もマスターが……だったらよかったのに……)

ぴっ、ピッと何かの音が響く。それは、ニンフにつけられた首輪からのもの。少しずつ減っていく白い縦線の数と同じスピードで、

音が鳴り続けている。

「さよなら、アルファー。さよなら……」

ニンフは最後にそう呟くと、七色の羽を羽ばたかせ、ゆっくりと上空へと舞い上がった。

その光景を、自転車に乗った眼鏡の少年に見られているとも知らずに。

ニンフが移動をやめて空中にホバリングすると、下にはただっ広い草原が見えていた。どこへともなく飛んできたので、この美空町に不慣れなニンフではここがどこなのか分からない。

だが、どこだろうとどうでも良かった。

ニンフの首輪は、時限爆弾であった。いや正確に言えば時限爆弾にされたというのが正しい。

おそらく、自分が自爆することにより彼女の力をそぎ、その上で彼女を捕縛するエンジェロイドを派遣するつもりだったのだらうとニ

ニフは考えている

確かに、命令に逆らうことの出来ないエンジェロイドをこのように使うのは一番確実なのかもしれない

それほど、イカロスの力は計り知れないのだから。

だが、ニフのマスターは一つだけだがミスを犯していた。

(マスターは『楽しませろ』としか言っていない)

そう、ニフに『自爆してこい』ではなく、そういったのだ。それでも、マスターの心中を察して行動するのが、自分たちエンジェロイドの使命。

でも……

(爆発まで後少し。アルファを弱らせるのも目的なら、下手な場所じゃ、被害がでるわ……さて、どこにしようかな。海？人気のない山の中？それともいっそ、シナプス？)

そう思って、空を見上げたときだった。

光の帯が、ニフめがけて落ちてきたのだ

気づいたときにはニフは光に潰されるように地面に叩き落とされ、周囲の土地が何メートルもくぼんでしまう。ぱらぱらと降り注ぐ石の欠片を甘んじて受け入れなければならぬほどに、ニフはその一撃でダメージを負ってしまった。



「ぐ、くう」

うつ伏せの状態で顔を上げたニンフだったが、思った以上に身体が重い。頭の内部では自分のダメージ量が計算されており、既に戦闘不能に近いところまでメーターは迫っていた

「どこに行こうというの？ベータ」

その時、ニンフの目の前に二人分の足がゆっくりと降りてきた。その足の武装から、誰がシナプスからきたのか、すぐに分かる

「ガ、ガンマー？」

「そう、私たちは要撃用エンジェロイド、タイプガンマー、ハーピ  
ー」

ニンフが顔を上げると、やはり思った通りの二体のエンジェロイドがそこに降りてきていた。

白と黒で構成された羽は畏怖の象徴であり、その指は鉤爪のような手甲で覆われている。水着のような布地の少ない衣装ながら、ソレは動きを制限しないためのものであると直ぐに分かった。

なぜなら…

「案内しなさい？壊しにいきましょう、空の女王を」

イカロスやニンフとは全然違う、残虐な表情で、銃器を肩に担ぐ姿は、天使というよりも悪魔に近いものだった

「アルファアを壊す？」

ニンフは軋む身体で立ち上がると、オレンジの髪を持つハーピーが首をぎぎつとならした

「作戦は単純。アンタの『P=ステルス』システムで私達の姿を空の女王が知覚不能になるまで消す。後は空の女王の後ろなり正面から近づいて……」

それに続けるように、もう一体のハーピーが

「バン！簡単でしょう？」

ニンフは寂しそうに俯いただけだった。

「一撃で空の女王を倒せるとは思えません。気付かれて反撃でも受けたら」

「大丈夫」

緑色の髪を持つハーピーが銃器を空に向けた。

「超高熱体圧縮発射砲『プロメテウス』。あんたも名前くらいは知  
っているだろう？ 摂氏三千度の気化した物体を秒速四キロで打ち出  
すわ。『イージス』を展開する暇さえ与えなければ、あいつも私た  
ちの装甲と大して代わらない、一瞬で黒こげよ。」

でも……と、ニンフは一層深く俯いた

「マスターの命令は『破壊』ではなく『連れ戻す』では？」  
「ソレがいろいろ事情があつてねえ、可変ウイングのコアだけを持  
つて帰れつてさ。できるなら、あの地蟲も一緒につてさ」

それでもニンフの表情は暗い。明らかにこんな作戦をしたくないの  
は誰が見ても明らかであった。

そんな彼女に二人のハーピーは優しく声をかけた。

「マスターが、ベータに早く帰ってきて欲しいつてよ？」

その言葉は、ニンフの心を貫いた。今まで俯かせていた顔をくいつ  
とハーピー達のほうに向ける。

「え？」

「アンタねえ、何で私達が寄越されたと思ってんの？そりゃ、マスター、アンタ独りで空の女王を相手して来いって無茶言っただけさ」  
「そうそう、もしアンタが破壊されたら』って考えたら、心配になっちゃったんだってさ。なんだかんだ言っただけでマスター……アンタが居ないと寂しいのよ」

ニンはそこで、自分の心臓が高鳴っていくことに気が付いた。ソレは、明らかに嬉しさや恥ずかしさが入り混じった感情

自分がマスターに必要とされている絶対的な悦楽だ。

（マスターが私のことを必要としてくれる？私がいないと寂しいって）

胸に広がっていくシアワセの気持ちよさにニンは浸る

そんな中、ハーピーたちは一瞬だけ、口元を大きく歪ませた。ニンは気付かれないよう

「で、では『P=ステルス』をかけますね」

ニンは頬を緩ませながら、ハーピーの後ろに回った。ハーピーはゆっくり銃口を下ろすと、ステルスが掛かるのを待つ

その、一瞬の気の緩みをニンフは逃さなかった

「『パラダイス』ソング』っ」  
「なっ」

ハーピーは慌てたように振り返るが、もう遅すぎる。彼女らがニンフを確認する前に『パラダイス』ソング』は見事に命中した

その衝撃波は地面を百メートルほど穿ち、目の前に居たハーピーの姿はなくなっていた

「はは、はははははは」

残ったニンフは大きな声で笑い出した

「粉々だッ！ざまあみろ、ハハハハ！」

はあ、はあと荒い息を吐くニンフは一度つばを飲み込んだ

「何が『マスターが心配している』だ！そんなウソにだまされるもんかっ！そんなウソに………」

ニンフの笑い声が途切れた。代わりに聞こえてきたのは、嗚咽だった

「そんなウソにい！！ううううううう」

その叫びは本当に悲痛なものだった

ニソフは思った

自分をもっと馬鹿だったのならばと

馬鹿だったのならばウソだとすらも分からなかったと

もっと馬鹿だったのなら何も気が付かなかったのだと

だが、気が付いてしまったのだ。

自分に対しても優しく接してくれた彼のせいで

名前くらい知っておいたほうがいいだろ？

自分が敵だと思っているにも関わらず受け入れた彼の、そんな優しさを知らなければ

自身のマスターが酷い人だと気が付くこともなかったのだ

だが、自分は自らその優しさから逃げてきたのだ。迷惑をかけたくない、ただそれだけの思いで

一つの価値ならば、永遠に気が付くことのなかった事実。だが、一

度ソレを知ってしまったえば気が付くしかない

自分はマスターが大嫌いだという事実

そして、彼ともっと一緒に過ごしていたいのだと

でも、エンジェロイドはマスターを裏切ることには出来ない。

(分かっていたのに……心配だって言葉を少しでも、本気で信じた)

ソレが、悔しくて、心が痛いのである

「ふっぐ……」

もう時間がない。ニンフは無理矢理ナミダを堪え、くっつき空を見上げた

その瞬間、何かに肩をたたかれた

「あ、あ……」

ニンフは脅えながら振り向く。そこには……血だらけになったハーピーが二体、ニンフを睨む姿があった。

「い、イヤア！」

オレンジ髪のハーピーがニンフの腕を掴むと、そのまま地面に引きずり倒した。

「どつする？このクソチビ」

「さあ、痛めつけねば言うこと聞くんじゃね？」

そういうと、ニンフを足で踏みつける

「そうだな、まずは逃げられないように羽、むしっとくか」

鉤爪の手がぐっとニンフの羽を掴んだ

「いや、やめて、それ、それだけはっ！！」

そんな彼女の悲鳴も虚しく……

「ほづら、一枚目！！」

「イヤアアアアアアアアアっ！！」

その痛み、いや。自分の大切なモノが奪われていく衝撃がニンフの



心を打ちのめしていく。余りのショックにそのままデータが飛びそうになるが、ハーピーはガツンとニンフの顔を地面に叩き付けた

「さあ、ステルスをかけるんだよ」

羽をもがれ、身体を自由を奪われたような気持ちのニンフは荒い息で、背中を手で押さえた。

「い…やだ」

「あ？」

「いや…だ」

ニンフの頭には、日常を必死で楽しんでいた恭夜の顔や、イカロスの顔、そはらや智樹の顔が浮かんでいた。

頭の中には聞こえるはずのない彼の声も何故か聞こえた

どごだっ！！どごだよ

もし、自分がハーピーに手を貸せば、イカロスだけでは済まさない。間違いなく命令どおり恭夜も被害を受ける

「いやだ」

そんなのは絶対にいやだ。ニンフはそう思った。自分を無条件で受

け入れてくれた人たちが、場所が消されるのはいやだと思った

そして何より、自分に優しさを、日常の大切さを教えてくれたあの人が消えると思うと……

そんなのは……

「イヤアアアアアア！」

地面を這い蹲りながら、ニンフは目を瞑って大声で叫んだ。その目尻からは一筋の涙が頬を伝っていく

見つけたっ！！

「わかったわかった。じゃあ、もう片方の羽もむしっておくか」  
「ひっ、いやあ」

ニンフの耳に、めりめりと引き裂かれる羽の悲鳴が聞こえてくる。そして、片方の羽も全てもがれてしまった時

「おいおい、傷だらけじゃねえか……ニンフ」

ふと、自分に優しく掛けられた声に耳を疑った

「はん、馬鹿なのかい？地上の兵装なんかで私達に敵うとでも？」

彼が小さく呟くと、背中から大きな白銀の翼がその姿を覗かせる

「そんなこと思っちゃいないさ……ただな」

赤く獅子を模したような綺麗な装飾の施された鞘が空中を大きく舞う

「居候を連れ戻しに来ただけなんでね！」

その姿は、いつもの優しい彼の姿だった。

少年の意地（前書き）

短いです。本当に。

## 少年の意地

ニンフは驚いていた。

気づかれていないと思った。だから、もう二度と見ることもないだろうと思っていた。

だけど、彼はこうして彼女を探しに来てくれた。

「さ、早く帰ってその怪我の治療するぞ……」

いつもと変わらない笑顔を向けてくれる

それだけでも、彼女は救われた

「アンタはマスターが連れて帰って来たっていったダウンナーだね」  
「おとなしく捕まってくれないかしら？」

ハーピーは、彼に『プロメテウス』の銃口を向けて尋ねる

それを無視して、彼は前進する

「チツ……めんどくさ」

「コイツと同じようにボロボロになるまで痛めつけて連れて帰るっ

「てのいいんじゃないかい？」  
「構わないんじゃない？」

ハーピーたちは、そう言って彼に襲い掛かる。

だが……

「「なっ!？」」

「えっ？」

その姿が一瞬見えなくなる。ハーピーたちですら姿を視認できなかった様だ

「大丈夫か、ニンフ……って、まあ。その様子で大丈夫なんていったら怒るけどよ」

「え……どうやって？」

彼は彼女の質問に言葉を返さずに、頭を撫でてから翼を羽ばたかせた

「とりあえず、全部終わってからだ」

「みつけたっ!！」

その羽の音に気が付いたハーピーが、彼に襲い掛かる

彼は両方から襲い掛かるガンマーの攻撃をバックステップで回避し、手に持った刀を一閃する

だが……

「そんな鉄屑じゃ、私達に傷一つ付けられない!!」

二人の手甲による攻撃が、彼に襲い掛かる。

ハーピーたちに刃こそ当たってはいたが、傷一つ付ける事はできていなかった。

「それくらい想定内だよ」

彼はその攻撃を身体を捻って回避する。それと同時に再び刀を一閃する

「何度やっても変わらないっ!?!」

ハーピーは先ほどのように、装甲で防ごうとするが、鈍い痛みが彼女達を襲った

「なっ!？」

「どうして!?!」

突然の出来事に、彼女達は慌てる

彼はそれを見てにやりと笑うと、再び刀を振るった

ハーピーは理屈こそ理解していないが、あの刃は自分達の装甲すらも切り裂くと分かった以上、先ほどのように容易にきられるわけにはいかなかった。

これようやく彼は一息つく

「ふう………」

それは、安堵のため息。

(超振動ならどんな物体でも切り裂けると思って試してみたけど…  
…成功して助かったぜ)

そんな彼の内心を知らないハーピーたちは、先ほどとは変わり何の容赦もなく襲ってくる

「本当の同時攻撃ならっ!?!」



左右から完全に同時に二体が襲い掛かってくる。それも彼の前後から。

彼は左右どちらかに回避を考えたが、それは実行できなかった。

刀を後方に一閃し、前方の攻撃を受け入れた。

「があっ……く……ゴホ……」

手甲による容赦のないパンチが、彼の身体に入る

ハーピーはそれを機に、次々と同時に襲い掛かってくる。

そのたびに、彼は片方の一撃を受けて、傷を負っていく

だが、彼は決して倒れることはない

「しつこいねえ」

「いい加減に倒れたらどうだい？」

馬鹿の一つ覚えのように彼に襲い掛かる。

「何度も同じ事されたら嫌でも避けれるっての……！」

彼は、ぎりぎりまでハーピーを引き付け、しゃがんだ。

ハーピーたちは、完全に当たったと思い込んでいたために、お互いの顔を手甲で殴る

「喰らえ、これがニンフの兵装だ」

先ほどとは違い、刀が振動を始める

それが徐々に早くなり、振動しているのが分からないほどまで高速で振動をする

「『パラダイス』ソング』!!!」

それを、ハーピー目掛けて一閃した

緑色の髪ハーピーはそれを危険と判断し、緊急回避を取ったが遅かった

それは衝撃波というよりも、振動刃

それが彼女達の装甲を掠め取り、彼を殴ってきた手甲が切り落とされた

「クソオ!!! だったらこれでどうだ」

ハーピーは今まで持つてはいたが、使わなかった『プロメテウス』の引き金に手をかけた

恭夜は大きな一撃を繰り出したために、体が大きく開いた状態だ

「連れて帰れって言われたけど、殺すなんていわれてないからね  
！！！」

『プロメテウス』の引き金が引かれた

それと同時に、銃口に赤い色をしたものが集束していく。彼はそれを見て避けようと判断したが、間に合わない

放たれた物体は、周りの空気を取り込みながら彼に襲い掛かった。

数秒間、彼のいた場所に『プロメテウス』が放った物体が通り過ぎた

彼のいたところには、焼け爛れた翼の球体があった

「なっ……撰氏三千度の気化した物体を秒速四キロで打ち出す  
プロメテウス』ですら防ぎきっただって!?」

信じられない出来事に二体のハーピーは驚く

彼は焼け爛れた翼を開き、その姿を現す

「納得した……迂闊だったな、俺相手に自分の兵装を晒すなんてな」

彼の眼の色が変わる。

「構成物質の解析完了、模倣による『創造』で複製開始

「な……馬鹿なことが」

徐々に彼の手の中にはハーピーの手に持っている『プロメテウス』と同じ形をしたものが現れる。

だが、微妙にだが色や模様が違う

「『エンケラドス』いいネーミングセンスだと思わないか？」

その瞬間、ハーピーたちに嫌な悪寒が奔った

あれは絶対に直撃してはならないものだ

「高みの見物をしている奴の耳まで劈けよ」

照準をハーピー二体に彼は合わせようとする。しかし、ハーピー二体は空を羽ばたき、ロックされまいと必死に逃げ惑う

彼はそれを見て、にやりと笑ってから引き金を引いた。

その瞬間、銃口から轟音が鳴り響き何かが放たれた。

ぼぶん

「なっ                    フェイク!？」

銃口から飛び出てきたのは世界各国の国旗が繋がっているアレ。マジックとかでよく使われるアレだった

「とりあえず……撤退だなっ」と

かなり警戒していたのか、遙か上空にハーピーがいる。降りてくるまで数分は掛かるだろう

焼け爛れた翼を羽ばたかせ、ニンフのところまで飛んでいく。

そして、手に持った刀を振り上げた

「何、一瞬で終わるからよ」

「え、え、な、なんで……」

「動くなよ……手元が狂うと面倒だからよ」

彼女は自分を助けに来てくれたと思っていた彼の言葉を聞いて混乱する。

振り上げられた刀は寸分の狂いもなく、彼女に振り落とされた

(私……バカみたい、信じようとしたのが間違いだったのかな……)

彼女は、振り落とされる刀を見るのをやめた。

キーン

甲高い音がその場で響いた

彼女は、自分の意識がまだあることに驚いた

(あれ……私、死んだんじゃないの……?)

目を開き、状況確かめる

首も繋がっている、腕もある、足もある。むしりとられた羽以外には何の欠損もない。

だが、何故だか分からないが彼女の気は軽くなった気がした

「獅子刀・傀儡……流石は契約を断ち切る絃城の宝刀だな」

彼は彼女に向かって笑い掛ける。

「何を……したの？」

「首元、よく見てみるよ」

言われるがままに、彼女は首元を確かめる。

そこには、自分を縛り付けていたものが繋がってはいなかった

「う……そ……」

彼女は、そこで大粒の涙をぼろぼろと流し始めた。

それが余りにも嬉しくて

だが、まだ彼の顔は晴れない

「さてと、俺もそろそろ終わらせねえと……な？」

彼はそう言って、未だに空に飛んでいるハーピーを見据えた……

「あれ……？」

急に彼の足がぐらつき始めた。

「ちょっと……待てよ、まだ、倒れるわけには……いかないんだけどな……」

（俺じゃ、一人しか救えないのか？）

魔術の行使、模倣の連続使用、そして創造を使ったことにより、彼の身体は限界を超えていた

その、絶望感に倒れこもうとしたとき



「おいおい、恭兄。何でも一人で抱え込むなんて寂しいことすんな  
「よ」

彼の身体が支えられた。

そこには彼と彼女の友人、四人が立っていた。

## 少年の意地（後書き）

### 武器紹介

『獅子刀・傀儡』

絃城家に伝わる、四刀あるうちの一刀。

鞘には獅子をイメージさせる赤い装飾が施されている

あらゆる契約に物理的に干渉し、断ち切る。

切れ味としては結構切れ味のいい日本刀レベル。

作者のダメダメ後書き

戦闘パート、何回書いてもなれないです。

戦闘嫌いです。

別作品はバリバリ戦闘ものなのに……

いい加減慣れるよ……つか、もっといい文章にできねえかな自分

r z



## 最終回・日常を守り続ける事

『魔術師とは孤独なものだ。それも、なまじ人間を捨てることができないものにとってはない』

魔術を叩き込まれてきた間に、よく親父に言われたことだった

その意味を、俺は本当の意味では理解していなかった

『それでも、他人の為に魔術を使うというのなら覚悟しろ。己の守りたかったものが自分から離れていくということ』

だけど、今ならその意味が分かるかもしれない。

けど、親父はきつところなる事を予感していたのだろう。あの時の俺は、決して、魔術師に向いていなかったのだから

孤独を嫌い、常に誰かと過ごしている姿を見て。

それでも、俺は己が守りたかったものを見過ごして歩き進めるほど器用な人間じゃない

(みんな、来ちまったのか……)

結局、自分で掴んだ幸せを手放してでも俺は誰かをシアワセにすることを望んでいるのだ

「おいおい、恭兄。何でも一人で抱え込むなんて寂しいことすんな  
よ」

智樹もきつと、俺が自分達と違うということを知れば今までのように  
気楽に接してくれなくなるだろう

身体を支えてくれている手を避けて、地面に獅子刀を突き刺し、支  
えにする

「とりあえずよ、ニンフを手当てしてくんないか。俺はまだやらな  
いといけないことがあるからさ」

「なっ、そんなボロボロな状態で何をやるって言うんだよ!？」

「そはらに会長、ニンフのこと頼みました。先輩、智樹のこと頼み  
ますよ」

疲れを打ち払い、地面に突き立てた獅子刀を抜き、一気に飛び上がる

翼は『プロメテウス』の一撃を受けてから、ニンフのところまで飛  
んただけで消えてしまった。

もう、翼を創るほどの余裕は残っていない

トリック・チェインズミラー  
「連続する悪戯鏡」

次々と造り出した鏡を空中に固定する

それを足場に、ハーピーのいる所まで一気に駆け抜ける

「とどけえええ!!」

そして、獅子刀を一閃した

「そんなものも当たらないよッ!!」

ハーピーは左右に飛び退き、獅子刀による一閃をいとも簡単に避ける。

空中に飛び出し、刀を振った俺の身体は大きく開き、隙だらけだ

回避行動を終えて、ハーピーはこちらに再び向かってくる

「連続する悪戯」

「遅いッ!!」

足場を造ろうとしたが、間に合わずにハーピーに上から強く叩きつけられた

既に翼もなければ、自信の身体を強化するほどの魔力も残ってはいない。

勿論、模倣の魔眼も使えない

「クソ　　詰みか……」

下では、なにやら智樹が叫んでいる

その時、俺の耳には風を掴む翼の音が聞こえた

ばさり

心地よい香りが俺の身体を覆った

それは、俺が日常を楽しめと、そして、日常を守れと言った少女の香り

だが、それは俺を掴むと同時に地上に向かって降下していく

「大丈夫か恭夜ッ!!」

「恭兄ッ!!」

また地上に戻ってきたみたいだ

再び立ち上がろうとしたが、どうやら限界のようだ

既に立つことすらままならないようだ

「おいおい……これが大丈夫そうに見えるんなら、先輩もトモ坊も眼科に通院することをオススメしますよ」

「それだけ言えるのなら大丈夫だな……」

「それが心配した奴に言うことかよッ!？」

智樹は、そのやり取りを見て安心してくれたようだ

イカロスは、その瞳を赤くして、ハーピーを見ている

ニンフは、それに気が付いたのか叫んで制止する

「だ、ダメよアルファー!!」

だが、イカロスはニンフに顔を向けて、ふるふると首を振り、目を瞑った

「やめる………日常に戻れなくなるぞ!!」

「恭兄……?」



バチバチと彼女の周囲がスパークする。それだけの力場が彼女の周りに展開されていく。

その時、イカロスは今までのマスターとの思い出を頭の中に思い浮かべていた。

最初に出会ったとき、マスターは動けない自分を助けようとしてくれた。

世界征服をしてしまったとき、マスターに「そばにいる」と言ってもらった

海に行ったとき、必死に自分に泳ぎを覚えてくれた

クリスマスとき、何も言わずずっと泣かせてくれた

女湯のとき、マスターは自分のことを家族だといってくれた

学校に初めて行った時、なんだかんだ言っても温かく迎え入れてくれた

今まで、いろんな優しさを教えてもらい、与えてくれた

そんなんは、なんだか嫌だなあって思ってたさ

「モード、ウラヌス・クイーン……オン」

スパークが収まって、イカロスの頭上に天使の輪のようなものが浮かんだ

「すみません、日常を守れそうにありません。」

俺は、その言葉を聞いて謝りたくなった『お前の日常を守ってやれなくてごめんな』と

そして、彼女は智樹のほうを向き

「マスター、申し訳ありません。今まで嘘を付いてきました」

着ていた服は全て燃え尽き、あの白い戦闘衣装が現れた

「私は、戦略エンジニアロイド、タイプアルファ、イカロス」

彼女が瞼を開く、そこにあったのは

「マスターの嫌いな、兵器です」

紅い瞳をした少女だった

その時、一瞬だが智樹の目が大きく見開かれた。だが、それも本当の一瞬だった

「分かってたさ」

「トモ坊……お前」

俺は驚き呟く。イカロスは驚いた表情で智樹に振り返った。その紅い瞳は、優しい笑顔をした智樹を映している

「なあ、イカロス」

智樹はできるだけ優しく話そうとしている。それも、彼女の今までの苦勞をいたわるかのように

「俺が『兵器が嫌だ』つたのはさ、お前がかわいそうだと思ったからなんだよ」

イカロスの頬が赤みを帯びて、その目元に雫がにじむ

「は……い」

「スイカ可愛がったりさ、ひよこ育てたり、お前、結構優しい奴だからさ。そいつがさ、生まれつき人殺しのための道具だと思ったらあんまりだと思ってさ」

「は……い、は……い」

目じりからナミダが一度溢れると、それはもう止まらなくなった。それはどンドンどンドンあふれ出し、イカロスは目を開けていられなくなった

「でも、俺が兵器が嫌いだと思ってさ、お前が苦しみ続ける必要はないんだ。だって、お前は俺の大事な家族なんだからさ」

「はい……っ!!」

「それに、今はこう思う。お前が兵器でよかったと。」

智樹はゆっくりと目を瞑った

「おかげで、俺の親友と友達が助けられるんだからさ………頼む、お前の、俺達の友達を助けてくれ」

「はい、タイプアルファ、イカロス」

翼を持つ少女は、腕で目を擦ると、かっと見開いた

「出撃します」

ガーネットの輝きのような残像を残しつつ、二体のエンジェロイドの元へ突っ込んでいった

「さあて、ちゃんと話してくれるんだよな恭兄さ」

智樹は、完全にイカロスが離れたのを見ると、俺の腕を肩に回してニンフ達のいるほうに歩いていく

守形は先に空気を読んで、戻っていたようだ

「話すって……見てただろ、俺はお前らとはちよつと違う世界にいるだけだつて」

「別に、全部話せなんていわないけどさ……少しくらいは先に話してくれても良かったんじゃないか？」

「話すも何も……俺は俺なりに日常を守ろうとしただけなんだけどなあ」

「ほら、恭兄はいつだってそつだ。自分ひとりで抱え込んで、勝手に居なくなっていく」

それを言われて、俺は何も言い返すことはできなかつた

「ほら、覚えてるか？昔、恭兄がここから離れるってなったときに大喧嘩したことさ」

「ああ……覚えてるよ」

（忘れるはずもないさ。アレだけが俺の唯一の心残りだったことなんだからさ）

「あの時もさ、恭兄は理由も言わないで俺の事怒らせて突き放そうとしたんだぜ」

「そうだったか？」

「絶対にそうだって。それで何年も連絡すら取ってなかったんだし」

（そうだ、俺はコイツに嫌われようとして突き放したんだっけ）

「それにさ、恭兄の家の事情もじっちゃんが昔話してくれたことあったんだよ。『絃城の家の子は他とは違うが仲良くするんだぞ』ってさ。あの時は小さくて理解できてなかったけど、今なら理解できる気がするよ」

「……………」

「恭兄は凄い奴なんだってさ」

「……………ん？はあっ！！？」

余りに短絡的な言葉に、俺は思わず仰天した

そこで、どうやらみんなのところに着いたようだ

「どうした、恭夜？そんな素っ頓狂な声を上げて？」

「いや、なんでもないツス。で……ニンフ、大丈夫か？」

ほんの少しだが回復して動けるようになった身体を動かして、ニンフの横に座る

それでも、身体はまだまだ重い

「どうして……？」

「なにがさ？」

ニンフは、理解できないといった風な表情をしてたずねてきた

「どうして……助けに来てくれたの？」

俺は、自分の頭を掻きながら、答える

「あえて言うなら、ま……居候とはいえ、俺の家の一員だって事だ」

「えっ……？」

「俺たちはもう家族だって言ってるんだよ。」

自分の頭を搔くのをやめて、ぼんとニンフの頭に手を置いた

そこで、ニンフの涙腺は崩壊したのだろう。ぽろぽろと涙が溢れ出てきた

「思いっきり泣けよ……もう泣かなくてもいいくらいにさ」  
「うん……うんっ……！」

俺はニンフが泣き止むまでずっと、頭を優しく撫で続けるのだった



最終回・日常を守り続ける事（後書き）

epilogue

消毒液の匂いが微かに香る、とある病室で、彼は目を覚ました

その隣では空の青のように澄んだ色の髪を、両端を縛るツインテールにしている少女がベットに突っ伏して眠っている

「あー、やっぱり無理しすぎたかな」

ベットの上で頭だけを動かし、窓から見える青空を眺めながら、彼は呟く

所々包帯に覆われている彼の身体は、見たとおりの怪我なのだろう

だが、その表情には何の苦痛も浮かんではなかった。

そこにあるのは、苦笑いだけだ。

「ま、痛みを知ってこそ分かるシアワセの形つてもあるんだろうな」

ベッドの上で、上半身を起こして、ベッドに突っ伏して眠っている少女の頭を撫でながら、彼は思う。

自分がしたこと間違いはなかったのだと。

これで、彼女との約束も無事に守れたはずだと

それは、孤独だった彼が、自分と同じ寂しさを、辛さを、悲しさを、知って欲しくなかったという単純な思い

たとえば、自分が誰かから再び嫌われようと、日常を大事にしてもらえるのならばそれでいいと思った

だが、現実もそこまで酷いものではなかった。

彼の親友は、全てを理解した上で、彼らを受け入れてくれた。

そこに、彼の嫌った世界はもうない。

「おっ、起きてたか恭夜っ！」

そこに、彼の親友が現れ、その他数人の友人を連れてやってきた

「おいおい……病院では静かにしろよ」

「別にいいんじゃないか？ 幸いなことにここはお前一人の個室だからな」

「あら、恭夜君……随分嬉しそうじゃないのお、どうしてかしら

あ？  
」

「あつ、ほんとだー。恭ちゃんが笑ってる」

彼は、この日常を前にシアワセを感じていた。

ただ、それが何故かむず痒くて、嬉しくて

「そうだな……別にいいのかもな」

「んじゃ、恭夜の退院祝いの予定でも打ち合わせしよーぜ。ニンフもまた一緒に連れて、楽しもうぜ」

「あんまり甘いものは勘弁してほしいんだけどなあ……」

日常を取り戻した少年と、日常を手に入れた少女の物語はこれからも続いていく。

それはきつと、今まで以上に彼らにとってはシアワセな物語を

**A n o t h e r e p i s o d e 0 0 ( 前 書 き )**

しばらくはオリジナルストーリーで行きたいと思っています

まあ、面白かつまらないかは別に楽しんでもらえれば幸いです

## Another episode

「おい、どういことだトモ坊？」

額に青筋を浮かべながら、智樹の頭をがっしりと掴む恭夜の姿があった。

場所はどこの男子更衣室のようだ。縦に長く並べられたロッカーに『プールサイドを走るな、危険。飛び込み禁止。流れに逆らって泳がないように』などと書かれているところを見る限り、どうやら室内プールのようだ

そして、再び状況を見直すと、海パンをはいた恭夜が、同じく海パンをはいている智樹の頭をがっしりと掴み、状況の説明を求めているところだ

「どどど、どついう事だとはどついう意味でしょうか!？」

智樹は、久々に額に青筋を浮かべた笑顔をしている恭夜に恐怖していた。勿論、質問の意味も理解している

「ああ、わからなかったか？」

ゴキゴキと首の骨を鳴らし、智樹に顔を近づける

勿論、額に青筋を浮かべた爽やかな笑顔で

「い、いえ。あの、す、すいません。」

「んじゃ、早く説明を頼む」

ついに、恭夜の威圧に負けた智樹が話を始めた。どうやら、ここに  
来ることになった経緯を説明しているようだ

「実は」

長いので、簡単に纏めた智樹の説明を書こう

どうやら、元々はプールではなく図書館で勉強という予定だったら  
しい。だが、その準備をしていた智樹の元に会長が現れた

そして、いつもの如く会長の口車に乗せられ、現在に至る

「ほお、お前が珍しく勉強を教えてくれて泣きついてきたから俺  
もOKを出したら、お前は会長の口車に乗せられたっていうのか？」

「は、はい。その通りです」

その瞬間、智樹の頭を掴んでいるほうの腕に血管が浮かび上がる。それと同時に、智樹からありえない悲鳴が上がる

「うぎゃああああ痛い痛いって！！ごめんなさい、マジでスミマセン……！！」

「よし、ついでだ。今までの分も今のうちにやっておこうか」

恭夜の口元がにやりと歪むと、更に大きな叫び声が男子更衣室に響いた

「いぎゃああああああああああ、割れる、割れるって、マジで」

「反省してるか？」

そう聞く恭夜の智樹の頭を握る手は緩まらない。むしろ、逆に強くなっている

「してますっ、してますからっ！！！！痛いイタイっ、マジで割れるううううう」

「まあ、今回はこれくらいにしておいてやるか……」

ようやく、万力の如く締め付けられていた智樹の頭が解放された

掴まれていた箇所は、ハッキリと赤い形が残っている

どれほどの強さで掴まれていたというのだろうか

「イテテテテ……今回はって、何でだよ恭夜？」

その場にしゃがみこみながら、頭を抑えて智樹は恭夜に質問する

「なに、病み上がりって言うのも在るけど、ニンフも楽しそうにしていたからさ」

「病み上がりでこれじゃ、次は頭マジで割れるっての………じゃなくて、確かにアイツが楽しそうってのも嬉しいことだよなあ」

一変して、さっきとは異なり真面目な空気が漂い始めた

「ああ、羽をむしられてからは空元気づて感じだったしさ。それだけにさ、アイツが楽しそうにするのを見ると嬉しいんだよ。で、イカロスの方もちゃんと今までどおりに扱ってるだろうな？」

「当たり前だろ。そんなこと確認されなくても家族を大事にするのは変わらないだろ？」

「ま、そうだな」

二人はうんうんと頷くと、その場で軽い準備運動を始めた。



「それにしたって、会長がおとなしく過ごすとは思えないんだよなあ」

「……確かに、あの人が何か提案すると絶対に何かが起こる」

「……」

二人は無言になり同時に呟いた

「何もなけりゃいいんだけどな」

二人の正直な気持ちが重なり、二人は苦笑いをしながら更衣室から出て行くのだった。

二人が更衣室から出て広場に歩いていくと、先に集まっていたそはらと会長、イカロス、ニンフ、守形が居た

その中でも、やはりというべきだろうか、守形だけはいつもと変わらぬ制服姿で立っていた

女性陣は言つまでもなく全員が綺麗だ

「あら、遅かったわねえ」

「スミマセン、ちよつといろいろとあつたもんで」

「アレ？トモちゃん、何で頭に手形が残ってるの？」

「いや、そはら。何も聞かないでくれ」

恭夜と智樹は上手い具合に話を終わらせる。勿論、それだけで終わるはずも無いのだが

そこに、恭夜の前にはニンフが、智樹の前にはイカロスが歩いてきた

「ねえ、水着、似合ってる？」

「ん、ああ。似合ってるよニンフ」

と、恭夜は普通に返していた

「あ、あの、マスター」

「ああ、イカロス。お前も今日は翼出しても構わないからな。どうせこの町に知れ渡ってるし」

「は、はい……」

イカロスは何故かしょんぼりとしているように見えた。

「あとさ、似合ってるぞイカロス」

だが、智樹のその一言で表情変化の少ない顔が、笑顔になったようにも見えたのはあくまで余談である

「じゃあ、早速だけど始めましょうかあ」

パンパンと、会長が手を叩き、歩いてくる

その手には、何かの機械を持ちながら

「あの、いいですか？」

「なにかしらあ」

そはらの質問を待っていたかのように聞く

「始めるって、何を始めるんですか？」

「ふふ、これよあ〜！」

手に持たれた機械のスイッチが押されると、なにやら大きな看板が上から下りてくる。

その看板には、『第一回・ときどきウォーターライダー』と書かれている

「んじゃ、一緒に泳ぐかニンフ」

「え？別にいいけど」

「イカロス、そういえばお前泳げなかったよな？だったら泳ぐ練習でもするか」

「え、はい。分かりました」

智樹、恭夜はその看板と会長をなかつたことにして、歩いていこうとしたとき、二人は誰かに肩を掴まれた

言うまでもないが、その誰かは生徒会長こと五月田根美香子だ

「あら、どこに行くのかしらあ？」

「ちよつとニンフといっし」

「イカロスに泳ぎを」

「逃がさないわあ」

二人は周りを見て逃げ場を探すが、既に時遅し。

会長の後ろには黒服が構えており、どこにも逃げ場などなかった。仮に逃げられたとしても後日が怖いことを知っている二人は諦め、おとなしく捕まるのだった。

「ねえアルファ？」

「なに、ニンフ？」

「……………ううん、なんでもないわ」

「？」

「それじゃあ、観客も集まってきたところで『第一回・どきどきウォーターズライダー』の説明をするわあ」

「実況は、私、守形英四郎と」「数学教師の竹原が勤めさせていただけます」

実況が名乗りを上げると、会長は再びボタンを押し、モニターが降りてくる

「出場者の皆さんには、ここにある巨大ウォーターズライダーの各レーンを選んでもらい、そこに待機していただいています。このゲームは、一番最初にウォーターズライダーを突破し、ゴールに辿り着いた人が優勝となります。分かったかしらあ？」

次々に映り変わる画面を使いながら、簡単に短く説明を終えた会長は、それではとマイクを実況の二人に移した

「じゃあ、会長もいくわね」

最後の出場者の彼女がスライダーのレーンに座ると、実況の守形が出場者の名前を発表する

「赤の第一レーン、空美町に戻ってきた天才、絃城恭夜。赤の第二レーン、厨二病にして性欲の権化、桜井智樹。青の第一レーン、任侠道と書いてセレブと読むこの大会主催者、五月田根美香子。青の第二レーン、殺人チヨップで幼馴染を幾度となく葬った見月そはら。この四人に関して解説をどうぞ」

「えー、現在の人気順で解説をするのならぶつちぎりで五月田根選手が人気であります。ですが、僅差で絃城選手が人気なことに驚きを隠せません。ついで見月選手ですが、大きく人気を離されており、数十票差をつけられての三番人気です。やはりというべきでしょうが、桜井選手は一票のみ入ったの四番人気。ちなみにその一票は身内のイカロスさんです。次の選手説明をどうぞ実況の守形さん」

「緑の第一レーン、的屋のおっちゃんことジューダスの店主、注目の選手であります。緑の第二、第三レーン、モブキャラで終わってたまるかとの、美樹と亜樹選手。黄色の最終レーンには、孤児院の頼れるお兄ちゃん、浅上遼選手です。遼選手も人気が高いです」

「この中ではやはりというべきでしょうが、祭りに突然現れる的屋

ジューダスが一番人気です。ついで浅上選手ですが、ウォータースライダーの下のほうから孤児院の子供達から声援が届いています。ついで双子の美樹選手、亜樹選手です。どうにかしてサブキャラまで上り詰めたいところでしょう」

「えー、ここで優勝賞品の情報が届きました。優勝賞品は、賞金1000万円だそうです。」

「これは選手のやる気も上がるでしょう。おっと、当初はやる気を見せていなかった桜井選手と見月選手の背後に炎が見えます!!」  
「それでは、レディー……………」

守形のスタートの合図を、参加者全員が息を呑んで待つ。だが、いくらかはそんな気持ちでもなさそうなのだが

どうやら、イカロスとニンフは特別ゲストとして実況に参加するようだ。

「一千万……………」

「金があってもなあ……………」

と、やる気を出している智樹と、逆にやる気をなくしている恭夜

「ふふ、久しぶりに会長の見せ場よお。たのしいわあ」

「一千万…………一千万あったら何が買えるかな!!?」

どす黒いオーラを背後から出す美香子に、軽く暴走状態のそはら

「プールにも来るぜ。何度でも現れるぜ……」

「私達は名前だけのモブキャラなんかじゃないのよ……」

「そうよ、ここが最後の砦になんてしないよ……」

と、不敵につぶやく的屋ジューダスに、物凄いやる気を出している  
双子の姉妹

「ルナ、カンナ、ティータ、ヴァン、フィオナ、俺頑張るからな！」

「頑張ってお兄ちゃん……」 「頑張れよアニキ」 「頑張ってください  
い兄さん」 「頑張ってくださいね、お兄ちゃん」 「がんばれー遼！  
……」

と、子供達と同じく孤児院を営んでいるフィオナにぐっと親指を立てる浅上遼。それに声援を送る子供とフィオナ

「頑張ってください、マスター……」

「まあ、頑張りなさいよね恭夜」

実況席から小さく応援するイカロスとニンフ

それぞれの気持ち交差するなか、開幕の言葉が鳴り響いた



「ゴ—！！！！」

守形の叫びと同時に、全員が一斉にウオーターズライダーを滑り始めた

好スタートを切ったのは、意外なことに美樹と亜樹の双子姉妹だった。それについて智樹、美香子、そはらがほぼ並んでコースを進んでいく

その後ろを追う様に、ジューダス、恭夜、遼がスタートこそ出遅れたが距離を離されるどころか加速して追いかけている

「おおっと、好スタートを切った四人がそれぞれの特設レーンに入りました！！それから数秒で残りの三人も特設レーンに入りました！！！！」

「えー、特設レーンは各選手の滑るコースによって初めから選ばれているらしく、その距離が運によって大きく左右されるという情報が今入りました。どうですか、特別ゲストのイカロスさん、ニンフさん」

全選手の姿がそれぞれの特設レーンに消えると、守形が二人に意見を求めている

「頑張ってください」

「ねえ、特設コースっておいしいの？」

てんで見当違いなことをマイクに言いながら、二人の意見が終了する

「えー、現在の順位はどうなっているのでしょうか？解説の竹原さん？」

「はい、現在は先ほどと大きく順位が変わり、大混戦の模様です。おおっと、今、美樹選手が特設レーンから姿を現し　いや、特設レーンから投げ出されました！！どうなっているのか、このコースは！！美樹選手の安否が気になります」

竹原の実況解説に、選手の安全確認のスタッフから手で大きな丸がジェスチャーで現される

「どうやら、怪我はないようです。おっと、少し目を放した間に何が起こったのか！！更に亜樹選手、見月選手が同じように特設レーンから投げ出されました！！どういうことでしょうか、守形さん」

「おそらく、特設コースによっては脱落確定のコースが決まっているのでしょうか。ですが、まだ優勝候補の三人組と桜井選手、浅上選手が残っております。それでは、モニターに映します」

守形が手に持ったボタンを押すと、モニターに映像が映る

どうやら、参加選手ごとのモニター映像のようだ

「いつせんまあああああんんん!!!」

同時に、智樹の欲に塗れた叫びが響いた。

「欲望に塗れていますね……」

「ええ、欲望の塊ですね」

次に、美香子の映像が映った。

その表情は、物凄い笑顔だが、何故だかわからないが歪んで見える

「たのしいわ、桜井君。今仕留めるからあー。うふふふ」

その言葉に、実況の二人は言葉を失う

「とりあえずゴールしねえと話しになんねえな……」

恭夜の姿がモニターに映る。

その表情は爽やかだ。

「爽やかだな」

「はい。勝負をしているとは思えないほどに爽やかです。ですが、やる気が伺えないのですが……………」

「ええ、やる気がないのでしょーう」

余りのやる気のなさが、爽やかさを通り越して伝わってくる。

もはや、ゴールさえできるならそれで言いというように

それに続いてジューダスの姿がモニターに現れる。

「ふ……………」

その姿はまさに戦神。

両腕を組みながら、特設コースをどうやって加速しているのかわからないが物凄い勢いで滑り落ちていく

「……………」  
「……………」

実況の二人も無言でそれを流した。最後にモニターに映ったのは孤児院のお兄さんこと浅上遼だった

「みんな……俺は頑張ってるぞおおおおっええええええ」

途中まではやる気で滑っていたようだったが、どうやら余りの高低差や、曲がりの多さでグロッキー状態だ

「……これは、棄権させたほうがよろしいのではないのでしょうか？」

「ここまで来ると、個人的に応援したくなりますね……」

実況の二人は、いや、守形は思った。参加しなくて良かったと

残りの選手の映像が全て流れ終わると、モニターが五分割され、それぞれの選手の映像がリアルタイムで流されている

今も混戦状態は変わらず、横着状態が続いている

その時、全ての選手の姿が同時にモニターから消え、最後の直線コースに一斉に姿を現した

「凄い、これはすごい。ほぼ同時に選手が姿を現しましたっ!!」「ですが、こここのラストの直線コースはレーンごとの仕切りがないので妨害が可能になっております、ここからどう立ち回っていくのでしょうかあああ!!!!」

そう、最後のコースにはレーンごとの仕切りが存在しないのだ。

それを狙ってか、美香子は智樹の背後に着き、両腕を使って首を固める。ジューダスも恭夜の横に着き、コースを滑りながら立ち上がり、つて攻防戦を繰り返している

「ちよっ!!会長っ!?そんなのありですっ!!!!!!??」

「ふふっ、今、会長はとても気分がいいわぁ」

と、智樹と美香子の現場

「ふっ、サバゲのときの焼きまわしだな。坊やにしてはやるじゃねえか」

「わりいけど、今回は勝たせてもらっぜっ!!」

と、常人離れをした動きをしてバトルをしている恭夜とジューダス

「俺……頑張ってるからな……」

と、後方で一人遅れてすべる遼

「おおっと、桜井選手は完全に落ちたようです。これで残るは四人。絃城選手が圧倒的に不利な状況です!!」

「もはやウォータースライダー関係なくバトルを始めています!!」

これは一体どうなるのでしょうか!?!?」

完全にウォータースライダーを下りきった水場で、恭夜、美香子、ジューダスの熾烈な戦いが繰り広げられている

誰もが、この三人のうちの勝者が優勝すると思った。

その時

「ゴオオオオオル!?!?!優勝は浅上遼選手だああああ!?!?!」

ゴールに居た、審判の音がプール場に響いた

「「「はあっ!?!?」」」

無常にも、ゴールには口を押さえながらも片腕を上げてガッツポーズをとっている浅上遼の姿があった

「えー、モニターを見て確認しましょう……………」

「「「どうやら、私達の目が三人に向いている間にゴールしたようです。」

こうして、『第一回・ときどきウォータースライダーばとる』は幕





「あいつらは楽しめてたのか？」

「さあな、俺は帰ってから聞いてみるさ。お前は？」

「そうだな……俺も帰ってから聞いてみるかな」

二人は、にやりと笑いながら顔を見合わせる

後ろからそれを見ていたのか、ニンフが恭夜のほうに走って近づいていく

「ねえ、二人で何笑ってるの？」

それに、二人は声を合わせてこう言った

「「さあな」「」

二人は、同じことを言ったことで更に声を漏らしながら笑うのだった

「もう、教えてくれてもいいじゃないっ」

恭夜の腕を掴み、足を止めようとするが、何を勘違いしたのか恭夜はニンフの手を取って横に並んで歩き始める。

ニルフはそれをされたことで顔を赤く染め、一度は振り払おうとしたが、その手を握りなおしてどこか嬉しそうに歩くのだった。

智樹がそれを見てからイカロスを見ると、何故か悲しそうに見えた

「しかたねーな、ほら」

智樹がイカロスの手を取って、恭夜と同様に歩き始める。

すると、先ほどの悲しげに見えたイカロスの表情が一転して嬉しそうに智樹には映った

エンジェロイドと共に過ごす少年達は思う

この天使たちの笑顔を守って生きたい

それは、言葉にはしなかったが、二人にとっては言うまでもない目標なのだろう

「んじゃ、俺たちはこっちだから気をつけて帰れよ」

「おう、じゃあな恭夜」

こうして、とある日の一日は終わったのだった

Another episode (後書き)

どうでしたか？

これはプロットがあったので三時間程で書いたモノですが

実際には三日から四日で書き上げています

一日更新しているものナドは、書き置きやプロットがあるものだけです

長くなりましたが、被災地にいる皆様、いろいろと大変な事が多いですが、がんばりましょう

では、また次回にm( ) ( ) m

Another episode 01 (前書き)

マジで馬鹿な話

今までの作風関係無しです

どこで間違えたんだろうか…………… (泣)

申し訳ないです

## Another episode 01

そこは見渡す限りの銀世界。

太陽の光に照らされ、煌く雪が美しい

急斜面の坂を、一枚の板で滑り降りてくる二人の姿。正確には片方は途中で転び、転がっていると表現したほうが正しいのだが

その片方は、綺麗に雪しぶきを上げて、平坦な場所に立つ。もう片方は、浜辺に打ち上げられたワカメ……いや、クラゲのように伸びきっていた

「ふう……久しぶりにボードなんてやったけど、結構面白いな。よし、もう一回滑るぞ、トモ坊」

そう言つて、彼はリフトに向かってボードを滑らせて行くが、智樹はすべり行く彼に叫ぶ

「ちょっと……あんな急な斜面を初心者が滑れるわけねーだろっ!!」  
「まあ……確かにそうだな」

その叫びに彼は戻ってくる

「それに、そろそろあいつらも降りてくる頃だし……あいつらと一緒に滑るか」

「そうしてもらえるとありがたいです……」

そう言って、彼らは麓で降りてくるだろう二人を待つのだった

何故、彼らがスキー場に行くことになったかというところ、CMで宣伝されていたからだ

「ねえ、スキーって面白いの？」

「スキーねえ、俺はボードしかやったことないから分からないけど面白いんじゃないか？」

「ふうん」

ニノフは、そういうと手元にあるお菓子を食べながらそのCMを興味深そうに見ている

「そうだな……丁度暇だったことだし、行きますか」

「行くってどこに？」

「スキー場だよ。まあ、ついでだしあいつらも誘つか……」

そういうと、彼はニンフの手を取って外に出る。

ニンフが嫌そうな顔をしていないところを見ると、どうやら彼の考えは外れてはいなかったようだ

そのまま桜井家に行き、事情を説明する。

すると、智樹からの提案があった

「今回は俺達だけで行こうぜ、勿論イカロスとニンフも一緒だけだよ」

「ああ、概ね理解した。あの人たちに知らせたら楽しむどころじゃないからな」

「ほんと、そらには悪いけどたまには安心して楽しみたいからさ」

そんなこんなで、スキー用品などは現地で調達しようという話になり、足早にスキー場に向かうのだった

「んじゃ、二人も大分なれたらろうし、一緒にリフトに乗って上まで行くか」

「ちよつと待てッ！！緩やかな斜面をみんなで楽しく滑るんじゃなかったのか!？」

彼は、もはや自分が上から滑りたいという理由だけで、ニンフの手を引っ張ってリフトに向かう

「あー、もうっ！！仕方ねえっ、行くぞイカロスっ！！」

そう言っつて、智樹もイカロスの手を引いてリフトに向かう

手を握られたイカロスは、顔を赤めて、戸惑いながらも、嬉しそうに引っ張られていくのだった。

ちなみに、皆さんもお分かりだろうが、リフトに乗って頂上に上りきるまで結構な待ち時間があることをご存知だろう

彼らは、その待ち時間を無駄にしないように話をしていた

「なあ、ニンフ？」

「なに？」

彼女は、なんだろうかと返事をする

ちなみに、その表情は笑顔だ

「んー？いや、楽しんでくれてるかなってさ」



「楽しいわよ？」

その表情を見ただけで彼は彼女が楽しんでいると悟ってはいたが、言葉にして聞いてしまう。

それは、彼の思いであり、彼が夢の女の子と交わした約束なのだからだが、今では単純に彼女に笑っていて欲しいのだと思っているのだろう

次に智樹とイカロスだが、こちらも一応話していた

「あの、マスター？」

「なんだイカロス？」

それは、智樹なりの気遣いなのか、優しい表情だ

「いえ……ただ……」

「？」

そして彼女も、自分と一緒にいてくれて嬉しいということ伝えられずのもじもじしてしまう

だが、彼はそれを察してか、察していないでかはわからないが

「まあ、今日はずっと一緒だなイカロス」

いつもの優しい表情で言うのだった

それを見たイカロスも、小さく「はい」と答えて、残り時間を静かに過ごすのだった

そして、リフトが頂上に着く

恭夜は自分が慣れているという理由で、ニンフを先にリフトから降りるように言って、ニンフが降りるのを待った

その後、難なく彼もニンフの横まで滑って行き、隣に立ち止まる

次に、イカロスと智樹のペアがリフトから降りてくるが、智樹が途中で転びリフトに引きずられる

それを、イカロスは腕を引っ張って引きずりながらも智樹を救出していた

（ああ、普通逆じゃないのかトモ坊？）

そんなことを思いながらも、無事こちらまで滑ってきた智樹に彼は

小さく一声

「次は普通のやさしめのコース滑るか」

「さっきからそう言ってるんですけど……」

智樹に涙目で睨まれて、流石に恭夜も謝ってしまっていた

だが、ここもまで来た以上は麓まで滑っていくしかない

彼は思う

(雰囲気的に俺とイカロスは大丈夫そうだけど、智樹とニンフは…  
…無理だろうな)

ここは、最上級者向けのコース

つまり、ほぼ直角に近いコースを転ばずに、そして上手く曲がりながら滑るしかない

下手をすれば崖から谷に真っ逆さま、大怪我ではすまないだろう

そして、彼は宣言した

「とりあえず、生きて麓まで降りてこれることを祈る」

「えっ？一緒に滑ってくれないの？」



そして、ある程度滑り終わったところでようやく先ほどより緩やかな斜面になった

「ニンフ、そろそろ補助外すぞ」

「えっ、まつ、待って!!」

「へっ!?!」

そう言って手を離れた瞬間に、ありえないスピードを出して滑っていくニンフ

「きゃああああああああ!!?!」

「ちよっ、はあっ!?!」

その時、彼はおもいだした

(雪山であんなに大声出したら……雪崩が起きるんじゃないかっただけ?)

ゴゴゴゴゴッ

「やっぱりいい!?!?!」

彼の予想通りに、先ほどまで滑ってきた斜面から雪が迫ってくる

始めは微々たる量の雪崩れだったが、徐々にその質量を増加させながら迫ってくる

このままでは明らかに飲み込まれてしまう

だが、幸いなことに彼は頭がいいし、魔術師だ

(ボードの強化っ!! 身体強化っ!!)

迫り来る雪崩に飲み込まれないように上手く滑りながら進んでいく。

そして、滑って行ってしまったはずのニンフに追いつく

「えっ、恭夜っ!?!? って……雪崩っ!?!?」

「雪山では大声で叫んだらダメなんだよっ

って、そんなこと

悠長に言ってる暇はないんだって」

「あっ、ダメッ……転んじゃうっ」

そう言って、途端にぐらつき始めるニンフ

その時、普段の冷静な彼ならば思い浮かばないような発想が閃いた

(雪崩……波……ビックウェーブ……サーフィン?)

「ニンフ、ちょっと我慢しろよっ!?!?」

後ろから一気に加速し、ニンフを抱き上げる

「えっ……何してっ!？」

そして、ジャンプした

「ヒヤッハアアアアア!！」

「きゃあああああ!？」

本日二度目の絶叫を上げながら、ニンフは目を疑った

何故なら、恭夜が自分を抱えながら雪崩の上を滑っているのだから

(あー、まさかこんな馬鹿な発想が現実になるなんてなあ)

そんなことを考えながらも、実はかなりのハイテンションな恭夜だ

ノリノリに雪崩の上をシフティーエアークリップラー・エア、マックツイスト等といった大技を繰り返しながら滑っている。

実際には、ありえない光景だ

しかしその表情は、ニンフの見たことのない彼の本当の笑顔だった

だが、彼はおそらく彼女を抱きかかえているということを忘れている

いや、おそらくではなく確定だろう

「きよ、恭夜っ はげ 激しいっ!!」

「いいいいやふううう!!」

「あ  
」

そんなこんなで無事に麓まで滑りきった恭夜とニンフ（抱きかかえられている）だが、麓で雪だるまになっていた智樹は雪崩に巻き込まれていた

イカロスは、スコップを借りに行っていたために巻き込まれてはいなかった

「ふう、久々に心から楽しんだな……って、おい。ニンフ、ニンフ!!」



「もう、スキーは……したくないわ……」  
「マスター……マスター……」

その日以来、恭夜はボードを封印したそつな

## Another episode 01 (後書き)

用語説明

ウィキ参照

シフティーエア

クラブを伴わないトリックで上半身と下半身を逆方向にねじり、またねじりもどす。通常このとき前足をボーンする。

クリップラー・エア

180度横回転しながらバックフリップ（後方回転）するインバートッドエア。飛び出して90度回転し、空中で後方回転して、もう一度90度ひねって着地する。フォワードで飛び出してフォワードで着地。

マックツイスト

540度の横回転を行いながら縦回転するインバートッドエア。まず、ハーフパイプの壁をフォワードでアプローチ、フロントフリップ（前方回転）をしながらバックサイド方向に540度ひねる。ランディングもフォワードになる。スケートボーダー、マイク・マックギルの名からつけられた。

ちなみに、絃城（作者）は、ターン、フリップが限界です

ああ、話作るのはいいけど中途半端感が残る

だけど、まだfフォルテに入りたくない

いや、進めるか？

どうする、どうするよ俺！？

続きはW E ( r y

プシン

この放送は削除されました

天使とデートⅡダブルデート 前編(前書き)

久しぶりの更新です

気分転換に書き溜めていたものが完成したので、載せます

一応、fに入る直前のこと

天使とデートⅡダブルデート 前編

真夏が過ぎ去り、残暑なんて言葉がアホらしくなって来たある日の  
日曜の朝

桜井家では智樹、恭夜、イカロス、ニンフが思い思いにそれぞれの  
休日を過ごしていた。

片や、智樹は毎度のこと新しく出た得る本の新刊を読み

片や、イカロスはいつものように掃除、洗濯を行っている

片や、恭夜は自宅から持ってきたであろう分厚い本を読むのに没頭  
している

そして、ニンフはといえば……

『奥さん、奥さん、ほかあ、ほかあ』

『ダメよみかわやさん。私には主人がつ!!』

「なに…見てるの?」

居間でせんべいを齧りながらテレビを見ているニンフに、買い物に  
出かけようとしていたイカロスが声を掛けた

「んー、昼ドラ」

大体、平日の午後一時から、午後二時に掛けて放送される、いろんな意味でドロドロしたドラマのことだ。今日は休日のため、その再放送が一挙に放送されているのであった

「面白いわねえ、昼ドラ。一日中やればいいのに」

それでは、昼ドラの名称に傷が付くだろう

イカロスには構わずに買い物に出かけようとしたが、ニンフが余りに真剣に見ている『昼ドラ』なるものに興味が出たのか、しばらく無言のまま、二人で見る

『だったら、せめてデートだけでもっ』

『そ、そうね。デートくらいなら』

その会話に、イカロスとニンフは二人して目を丸くする

『やった、やった。奥さんとデート!』

画面の中には男性が喜んで踊っている姿が映し出されている。それを眺めつつ、エンジェロイド二人が同時に思った疑問を代表してニンフが口にした

「デートってなに？」  
「……………」

先ほど、イカロスがニンフのために入れてあげたお茶は既にぬるくなっていた

「はあ？デートに連れて行けなあ？」

「デート……………ねえ。いきなり何を言い出すかと思えば……………何に影響されたんだ？」

こくこくと、玩具のように二人して、イカロスとニンフは何度も頷いた

二人の行動は早かった。早速、買い物ついでに書店に向かい、『デート』に関する情報を手にするために特集の本を二冊買い、智樹と恭夜に押しかけたのである

ちなみに、智樹は見ているエロ本の中身を少女達に見られない様に

と、後ろ手に隠し不機嫌そうな表情で彼女達を見ている。

恭夜はというと、分厚い本をパタンと閉じ、どうして彼女達がそのような思考に行き当たったのか把握するために周りを一通り眺める。そして、一つの結論に至った

（イカロスが考え付くはずもなし……どうせ昼ドラに影響されたんだろうなあ）

「お前らな……デートの意味分かって言ってるのか？アレは男女二人で行くもんだ」

確かに真つ当な意見である

そして、恭夜もそれに頷いている

「四人じゃダメなの？」

だが、好奇心旺盛なお嬢さんであるニンフの興味は、そんな正論などお構い無しに食い下がってきた。

そこで、智樹と恭夜は同時に考える

（確かに男二人、女二人だしデートになるのか？けど、それって唯の仲良しグループと変わらないような……）

（状況的に考えるとニンフと俺、智樹とイカロスで行動するんだろ  
うな……確かに男女一組になるが、それなら個人的に行けば問題は



ない気が……)

そして、智樹は頭の中で抑えきれずに言葉を漏らす

「いや、そういうものでもなくはなく……いや」

勿論、恭夜は後々のことを考えてもいるのでうっかり口に出したりはしない

だが、智樹が言葉を漏らしてしまったことが既に失態であるということに恭夜は気がつけなかった

「じゃあ、いいじゃない」

「いや、お前は恭夜に頼めよ」

「なっ……」

「それもそうね」

智樹は二人も同時に一人で扱えないと知っているのに、いつも知らぬ間に消えている恭夜に上手くパスをまわした。

恭夜も漸くそこでもっと早く逃げるべきであったことに気が付くが、既に遅い

「ねえ、恭夜。連れてって、ねえ、つれてって」

「いや、突然すぎるだろ……それにデートではないけど一緒に買い物に行ったりしてただろ？」

だが、駄々をこねる子供のようにニンフは恭夜の服を掴むと、買って来た雑誌の特集ページを見せながら、右に左に揺さぶるニンフそれを援護するように、イカロスも智樹に向かって無言で特集記事を近づけ、プレッシャーを与えていく

恭夜、智樹共にこうなったら二人は意地でも実行することを知っているので（特にニンフが）諦めたように

「あー、分かった分かった。ほら、お前もだトモ坊」

「あー、もう。仕方ねえ。行くぞ、デート。ほれ、準備しろ」

そう言った。

ニンフは恭夜の言葉を聞くなり、準備の為にばたばたと走り去ってしまった。

「あー、そうだな。トモ坊、駅で待ち合わせにするか……俺も家に戻って準備してくるからさ」

「りょーかい。」

そう言って、恭夜は本をもって立ち上がるとゆっくりと帰っていった

一方、智樹は面倒くさそうにエロ本を閉じ、ゆっくりと腰を上げる

「ん、イカロス。どうした？」

「あ、いえ」

智樹が雑誌を開けたままのイカロスに声を掛けると、固まっていた彼女はゆっくりと雑誌を閉じる

「お前も行きたかったんだろ。準備しとけよ」

「はい、マスター」

そうして、智樹も部屋着から着替えるために部屋に着替えに行く。それを目で追ってから、イカロスは静かに、胸に手を当てた

（マスターと、デート）

途端、動力炉が少しだけ鼓動を速める。苦しいわけでもない、痛いわけでもない。でもどこかむずがゆい

（なんだろう、私………わくわくしてる？）

四人は駅に集まり、街行きの電車に乗り、街に繰り出したのだった。電車を降りると、空美町とは全く違った風景が智樹、イカロス、ニンフの前に現れた。恭夜は、一人暮らしたときにたびたびこちらに来ていたので思うこともないようだ

ちなみに、智樹は恭夜から見て田舎モノ丸出しといった感じに映っている

「さて、早速デートを始めたいと思います」  
「わあい、デートね！」

まるで何かの任務のように重苦しく言った智樹に、可愛らしいお嬢様風の洋服を着た、明るい声のニンフの声が追隨した

「ハイ！デート！」

その明るさに負けじと、智樹も明るく、びしっと指を指しながら応

えた

「で、これからどうするんだ？」

「そりゃ、デートといえば、アナタ」

くるっと一回転した智樹は、ミュージカルのように手を差し伸べながら、応えようと…した

恭夜はその様子をウザそうに見ながら、返事を待つ

「……………」

だが、智樹の口から出てきたのはため息だけだった

(明るく言っては見たけど…………何をすればよろしいんでしょうね、デートって)

思い返せば、ご存知の通り智樹という人物がモテた事なんて一度もない

(桜井智樹、モテない男歴十四年。デートなんてしたことはございませぬ。そういえば、そろそろ十五年目突入だっけなあ)

詩的に思ってみても、心の傷が癒える筈も無かった

そんな刹那、彼は一人の男のことを思い出した

(いるじゃないか、此処に俺とは真逆の人間が……)

その男とは恭夜だ。彼の知る限りの恭夜は持てていることに気が付かない鈍感男

守形とは違い、正常な思考の持ち主であり、変人でもない普通の男子。思い返してみれば、恭夜以外には智樹の周りには変人しかないなということに今更気が付く。

「で、どうす……」

再び恭夜の言葉が発せられるが、急に動き出した智樹に手を掴まれ、最後まで言葉を言い切ることが出来なかった

「恭夜っ！モテるお前の意見を聞かせてくれ！！」

「はあっ!?!」

「頼む、どうすればいいんだ!?!」

「どうするって、その辺を歩いて周って買い物でも何でも楽しめばいいんじゃないか?」

それを聞いた智樹は、言われたことの意味を理解せぬままに行動を起す

「よし、お前ら！好きなもの買って来い」

ニンフ、イカロスにお金を渡し、智樹は宣言した

(いや、何か違うだろトモ坊……………)

それに、言われたとおりモノを買いに行こうとする彼女らを見て、  
恭夜は頭をぼりぼりと掻くのだった

そして……………十五分後

イカロス「スイカ大好き

「八百屋の仕入れか！」

智樹は思わずイカロスの頭をはたいた

その……………五分後

恭夜の目の前には、リアカー満載のお菓子を買ってきたニンフが現

れた。

ニンフお菓子大好き

「ニンフ、いくらしたんだ？」

「うんとね、五千円くらい」

「……………買いすぎだ」

智樹とは別に冷静に突っ込み、尻ポケットに入っている財布から五千円を取り出し、智樹に渡した

「ニンフの分は俺が持つから、ほれ」

智樹はそれを無言で受け取り、一人頭を悩ませている

そして、恭夜は明らかに間違った方向に進んでいく智樹の思考が迷宮入りする前に、発言する

「んじゃ、ベタだけど映画でも見に行くか」

「む、その手があったか」

そして、近場にあった映画館で放映されていたのは……………R15指定のかかったグロテスク込みのホラー映画と、何故か真昼間からR18指定のかかったセクシー映画。そして、全年齢対象であるが明



らかに幼児向けのアニメ映画であった

「んー、じゃ、このホラー映画にするか」

「あの一、恭夜さん？これって噂になってる滅茶苦茶怖いって評判の映画で、ででで、で、デスよ？」

「映画見たーい」

「……………」

恭夜は智樹の言葉を華麗に聞き流し、チケット売り場に向かった

「えーと、中学生四人。このホラー映画で」

「うん？お兄ちゃんデートかい？若いっていいわねえ」

財布からお金を出しながら恭夜は応える

「まあ、デートってよりは保護者気分ですけどね」

「うふふ、そう思うのも若いうちだけよ」

「そういうお姉さんだって十分若いですよ」

そう言っつて、窓口から出されたチケットを貰い、三人の下に戻っていった

ちなみに、映画館の中は人に溢れていた。怖いもの見たさからなのだろう。その中で、彼らが座った席は意外なことに中段の真ん中の

辺りの席だ。

ポップコーンを買ったのは恭夜一人だけだったが、隣に座っているニルフは構わずそれを食べている

そして、映画の上映が始まる。喋るウサギが一通りの注意を終えた後、漸く本編が映し出された

内用は私情によりカットさせていたが、簡単に説明をするのならバイオ ザードのゾンビの代わりに、リグの貞が大量に井戸から這い出てくる感じだ

その話の中盤に入った辺りで、周りの席にいる人たちが失神したり、恐怖の余りに精神に異常をきたしたりのある意味リアルに恐ろしい状況になっているが、恭夜は何の表情の変化もなく映像を眺めている。

智樹はというと、隣で内用の意味が分からないといった風に見ているイカロスにしがみ付きながら、脅えている。というよりも耳を塞ぎ、目を閉じている。彼は一体何をしに来たのだろうか？

そして、ニルフは

「ねえ？ホラーってなあに？おいしいの？」

「ニルフ、映画館では静かにな」

と言った具合に、恭夜に尋ねては注意と言ったことを繰返していた

そして、映画の放映が終わる頃には、映画館の中で生存していたのは彼ら四人だけだったという

「まあ、フィクションならこんなもんだろっな」

「アンタ、どういう肝の持ってたんだ!？」

「ん〜? そういうえば、お前……途中からイカロスにしがみ付いてたよな? 普通逆だろ?」

「あんな怖いもん見てられっかあああ!！」

映画館を出た後、次に案を出したのは智樹だった。

「よし、気分転換に明るい気分にするためにテーマパークでもいっそ」

「夜に寝れない子供の行動パターンだな」

そういう智樹の足は、小刻みに震えている

「……マスター？」

「な、ななな、なんだね。イカロス？」

と言った感じで、テーマパークに向かったはいいのだが

「ねえ、何が入ってるの？何が入ってるの？」

「ニンフ、そこには子供たちの夢が詰まってるんだ……だから、やめてあげてくれ……」

出会うキャラクターの頭を取ろうとするニンフに

「やめ、やめ、や、やめ、ぐあああああつ？」

何かに恐怖を覚えたのだろうか、会うキャラクター全てに攻撃し、撃沈させるイカロス

当然

「お客様、申し訳ございませんが、ご退場願えますか？入場料はご結構です」

こうなるわけである

「ま、まだだっ」

恭夜はそんな智樹やイカロス、ニンフを見て日常を確かに感じていた  
だが、それ以降の状況を説明するのは不可能であった

「「うおおおおおっ！！！！？」」

智樹と恭夜は安全と踏んで乗り込んだコーヒーカップにて、エンジン  
エロイド二体は全力でコーヒークップを回し続け、彼らを未知の領  
域に招待したからであった

「うっ……まさかの伏兵だった」

「うえ……っぷ」

ベンチにもたれかかる様にして、ダウンしてしまっ彼ら。智樹にい  
たつてはともファンシーなものが流れ出ている

「大丈夫？」

売店で買ってもらったアイスを舐めながら、ニンフは疲弊しきった  
二人に声をかけた

「あ、ああ。俺はなんとか……………」

「お、おい。お前ら、いい加減に……………うっ?」

恭夜は何とか無事だが、智樹は無理のようだ

その間に、イカロスは購入した雑誌のページを読んでいた。そのページには、楽しそうに一緒に走っている男女の姿が描かれている

(マスターとデート……………楽しい。けれど)

ベンチでぐったりしている智樹の姿をちらりと見つめ、すぐに視線を戻す

(なんだろう、何かが……………違うような)

この絵と、今、何かが違う。イカロスはそう感じるが、その答えがわからない

「ほら、いつまでも休んでないで早くっ」

アイスを食べ終わり、退屈になったのだろう。ニンフは疲れ気味の恭夜の腕を引っ張る。彼も、疲れをなるべく見せないように足取り重そうに立ち上がり、ニンフの声に応える

そして、ニンフがごく自然に恭夜の手を取り、彼を急かす

(手……?)

その光景を見た直後だった

(あ……)

イカロスはその場で数秒固まったかと思うと、ゆっくり自分の手を胸に……動力炉のある胸に置いた

(私も……マスターと手を……)

それを知らずに、智樹はいつまでも動かないイカロスの手を掴む

「どうしたんだ？ほら、早く行くぞ」

自然に掴まれていた手を、彼女は思わず握り締めていた

その表情は、少しだけ嬉しそうであった

天使とデートⅡダブルデート 前編（後書き）

うん、漫画読み直しましたが時間軸がいろいろとずれていますね

けど、作者的にはこっちのほうが展開的にはありだと思って執筆しています

え、言い訳じゃないですよ（汗

次回、ダブルデート後編

まあ、前編って書いていますし分かりますよね

次回の更新も未定です

PS、本作以外に新たにオリジナルを出す予定。作名は『とある世界の自己ドッベルゲンガー虚幻』

うん、完結できない作者によくあるパターンなので、なるべく出さないようにしなければ

まあ、あくまで予定ですよ？



天使とデートⅡダブルデート 後編(前書き)

いや、あの……一応出来ましたが過度の期待はしないでくださいね  
?

## 天使とデートⅡダブルデート 後編

「はあああああ……………」

聞こえてきたのは、ニンフのため息。そのため息は退屈だから出たというわけでは無いということは、彼女の子供が興奮したような少し赤らんだ顔を見れば、すぐに分かるものであった。

(はあ………… やつと満足してくれたみたいだな。ま、後はゆっくり出来そうで何よりだ)

(んー、ニンフの方は表情で何とか分かるけど、イカロスの表情はやっぱり分かりにくいな………… たのしんでんのかな?)

最後に訪れたのは動物園。此处でニンフは漸く興味を満たすことが出来たようで、檻の中にいる動物に視線を浴びせている。その姿は、恭夜から見ても歳相応に楽しんでいるように見えて微笑ましい光景である

「トモ坊、何か飲み物でも買いに行くけど一緒に行くか?」

「あ、うん。あいつらも楽しんでみたいだし、問題もなさそうだから行くよ」

「という訳だ。俺たちは飲み物とか買って休んでるから、二人で楽しんでてな」

智樹もこの状態の二人ならば問題は起こさないだろうと考えたよう

で、恭夜と一緒に売店に向かう。

そしてまた、恭夜もデートという名の意味の分からないものにつき合わされているために結構疲れ気味のようである。

だが、二人のエンジエロイドはそれを気にも留めず、檻の中に視線を集中させたままである。

否、そのうち片方は、また別のものを見ていた

「……………」

ため息を吐き続けるニンフの隣で、イカロスの目には先ほどの光景が何度も再生されていた。マスターである智樹と、自分が手を繋いだ光景を

まるで、恋愛ドラマのワンシーンだけを切り取ったかのように鮮明にその光景がいつまでもイカロスの頭から離れない

(私、喜んでる……かな？ 嬉しいのかな？)

ぎゅっと手を胸の前で組んで、頬を赤らめているイカロス

「　　ファー、アルファー？」

「　っ?」

突如聞こえてきた声に、微妙ににやけているだろう表情を引き締め、イカロスは顔を上げた

「アルファー、聞いてる？」

「え、何？」

完全に意識が現実から離れていたイカロスは、少し背の低いニンフに視線を向ける

「いや、どうしてこの動物たちは檻に入れられてるのかなって思ってた」

言うなり、ニンフは再び、目の前の動物達へ視線を戻した

「そう、ね。どうしてかな」

それに倣うように、イカロスも再び、檻の中を見つめる

「もしかして、この檻って、私達のコレみたいな物かな？」

そう言って、ニンフは鎖の切れた……恭夜が切ってくれた首輪を細

い指で一回弾く

「だとしたら……ねねっ、檻からこの子達を出してあげたら、あの二人は喜んでくれるかな？」

ニンフはにこっと微笑みながら、イカロスに少しだけ肩を寄せて呟いた

それは、純粹な彼女の思いなのだろう。確かにこの檻と首輪が同じものならば、彼女達に自由をなんだと語ったあの二人は彼らの望みではないのかと思う。

ただ、命令に従っているのは彼らにとっては望ましくないもの

……と、ニンフは勝手に思っているようだ

(マスターが、喜ぶ?)

それを聞いた途端に、イカロスの動力炉が少しずつ鼓動を速める。

『マスターが喜ぶ』この一言は、エンジェロイドにとって至高の言葉である

マスターの願いを叶える為のエンジェロイドにとっては、一番甘い響きでもある

そして、マスターに本当に喜んでもらえるのならばと、あるいは…

……

「ねね、そうしましょ！ アルファー！！」

いい事を思いついたというように、ニンフは言う。故に、イカロスの感情の変化には気が付いていなかった

「アルファー？」

その瞬間、イカロスの感情はピークを達した

「きゃっ？」

突如、イカロスの周りに力場が発生し、ニンフはその壁に押しつけられるように数歩分か後ろにやられる。イカロスの服はその衝撃に耐えかねて、紙ふぶきのように宙を漂う

そこに現れたのは、白い独特な戦闘服に身を包んだイカロスだった

（マスターが、喜ぶ）

「ちよ、アルファーっ？」

バチバチと静電気が鳴り響く空間で、何とか呼びかけるニンフの声であったが、既にイカロスの耳には届いていない

彼女は一度大きくその翼を羽ばたかせると、目の前の檻に手をかける

(マスターが)

思い出されるのは智樹が自分の手を握って引っ張ってくれた光景。  
二人で手を繋いだワンシーン

イカロスの動力炉が早鐘のように鼓動を刻む

もし、マスターが喜んでくれるのなら

もし、マスターが褒めてくれるのなら

自分も同じように……

今度は私から……

手を繋いでも、マスターは喜んでくれるだろうか？

(マスターが、喜ぶならっ)

刹那、檻の鉄格子は彼女の力で捻じ曲げられ、中の動物たちは思い思いに檻の外に逃げ出すのだった

「ふう」

「ま、楽しんでるようで何よりだな……………コレで問題が起きなければなおさらだよ」

智樹はため息を一つ吐きながら、水滴の付いた冷え切った缶ジュースを飲んで、体力の回復に努めている

恭夜は智樹と違い、缶コーヒーを飲みながら呟いている

春風が彼ら二人を包み込み、春の日差しが彼らを暖かに照らしている

そんな平和な時間を二人でゆっくりと過ごす

「なあ、恭兄……………思っていることを口に出すと決まって問題が起るから不吉なこととは言わないでくれよ」

「んー？ま、確かにそうかもな」



「だったらさ、ゆっくり出来るときにゆっくり  
「まあ、そう物事は上手く進まないって事だな……ほれ」

智樹が恭夜に向かって何かを言おうとした瞬間に、恭夜に頭上を指差され、何事かを確認する智樹

それと同時に、恭夜は素早く手に持った缶コーヒーの中身を飲み切ると、空き缶をゴミ箱に向かって投げる。

その瞬間、猫が塀に飛び上がったはいいが上手く着地できずに、下に止めてあった車のボンネットに落ちてしまったときのような音が、目の前のテーブルから響いた

いうなれば『ごすん』ではなく『ズドンっ』というような音だ

二人に挟まれるように現れたのは、獣特有の臭いを放ち、百獣の王と比喻される生物。

そう、ライオンがいたのだ

そこで、智樹は悟った

(はは……絶対にあいつらだ)

刹那、智樹は前方を確認する。そこには、ライオンのキュートなお尻があり。その先では、やはりといふべきだろうか全く動じていない恭夜の姿があった。

そして、恭夜が手を差し出すと同時に

「お手」

「がうう」

差し出した恭夜の手の上に、ライオンが犬のように手をのせていた

（うん？ あれ？ ライオンって猫科の動物だったような……あ  
れっ？）

そんなことを考えているうちに、いつの間にかライオンは背中を地面に付け、恭夜とじゃれていた

「あ、あの〜？ 恭兄？」

「ん？」

「大丈夫なんでしょうか？」

恭夜は手で顎を触りながら、コレと言った感情も込めずに

「大丈夫じゃないか、別に？ そんなに心配ならお前もどうだ？」

「いや、怖いです。お願いですから檻に戻してあげてください……」

……

智樹がそういうと、恭夜はライオンと戯れるのをやめ、立ち上がる。

「まあ、俺としては一向に構わないけど……流石に他の人に迷惑がかかるな。原因は、と……」

「あの……早くしてくれないと　　って、いぎゃあああああああああああ！!?」

恭夜の関心がライオンからずれた為に、ライオンが智樹の頭を齧る。

絶叫を一発。その場から逃げ出す智樹。

それを止める恭夜

「とりあえず……お前は檻に戻れ」

「それで分かってくれるんならみんな分かり合え……って、あれ？」

恭夜に睨まれたライオンは、『にゃあう』と情けなく鳴いてから、すすすこと檻のほうに戻っていった

「あの……」

「なに、気にするな。別に何もしてないからさ」

「……………」

恭夜はライオンが檻に戻ったのを確認した後、行動に移る

智樹は、それを黙って後ろを着いて行くのみだ

先ほどの騒動の時に見えた飛行物体が……いや、この場にいる恭夜以外に翼を持つのはイカロスしかないために、恭夜はその方向に走る。

「マスターが、喜ぶ」

初めに来たのは、ようこそ爬虫類ゾーン

「いや、可愛いんだけどさ……戻りなさい」

「何者ですか？」

そんなイカロスを追って、恭夜は檻から出された爬虫類に命令して檻に戻す。

「マスターが喜ぶっ」

ようこそ、肉食獣ゾーン

「おい、トモ坊……って、先に行ったらどうしようもないだろうが」「いぎゃあああああああ！？」

我先にと走っていた智樹は恭夜より先に入ってしまったため、初めのライオンのように集られ、服を食い破られる

「な、なんで俺ばつかに集まって来るんだよ〜!？」

外に出ると、何故か目の前にいた猪の大群に襲われる智樹。

みんな、智樹のことが好きなのである……きつと

「お、お願いっ、みんな。お願いだから、檻に戻って」

そして、恭夜の前方では、暴れる動物達をなだめようとする飼育員のアイドル的存在の女性（十九歳）の姿

「お願い、みんな、うう、おねがいだからあ」

そして、助ける。何せこの騒動の元凶が知り合い、もとい親友の家族なのだから

恭夜が手を叩くと、飼育員の女性（十九歳）の周りにいた動物達の視線が集まる。そこで、恭夜が一睨みすると、あるものは恐怖を覚えたのかひっくり返って気絶し、あるものは檻に戻っていく



空軍まで借り出され

「ちきしょう！　いくら続けても、平和な世界なんてこねえのかよ  
！」

「諦めるなっ！　俺達なら大丈夫さ。諦めなければ何時かは必ず！」

一つのドラマが発生し

「俺、帰ったら、アイツにプロポーズするんだ。へへっ、羨ましい  
だろ」

明らかな死亡フラグが発生し

「はっはっは。俺様はまだ実力の半分すら出し何ぞいない」  
「そうか、早く消えろ……つか、いい加減にしろっ!?!」

少年漫画的なラスボスは恭夜によって瞬殺され

「大丈夫、世界は救われる」

「でもどうしたら」

「簡単よ、私達が愛し合えば世界は救われるわ」

愛の力で世界は救われ

「どこで間違っただらうな……………」

結果

「ただいま入ったニュースです。本日お昼過ぎ、全裸の男が動物園で暴れまкруるといふ事件が発生しました。男は衣服を全く」

そして、夕日の中、パトカーのサイレンの音は響き渡るのだった

と、まあ。いろいろとありましたが。

「終了！ はい、デート終了！」



戻ってくる事が出来ました。

泣きながら、やけくそ気味にパンパンと手を打ち鳴らす智樹は、夕方の動物園に少しだけ大人になって戻ってきた。

「まあ、オチがあつてよかつたんじゃないか？」

「こんなオチが毎回続いてたまるかっ！？ 帰る、帰るっ！！」

「まあ、別に俺は構わないけど……お前らはもういいのか？」

ボロボロになつた智樹をなだめながら、恭夜はニンフとイカロスに尋ねる。

「えーっ」

そう尋ねると、ニンフはつまらなそうに声を上げた。しかも、分かつてやっているのかそうでないのかは不明だが、見るからにしょぼんとした表情で足元の草を蹴る始末。

いわば、声を掛けなければいけないような雰囲気を出している

勿論、恭夜が尋ねたい以上は聞くしかないのだが

「なんだよ、もう十分デートしただろ？」

「ま、お前の怒りも分かるけどさ、今日くらいは最後まで聞いてやるんだろ？」

「うっ……分かったよ」

「で、何が不満なんだ？ 出来ることなら付き合っけどぞ」

智樹は多少めんどくさそうにしながらも、聞く体制をとっている。同じく恭夜も、ニンフに声を掛けると、彼女は拗ねた様に唇を尖らせた

「……ただもん」

「「？」」

「まだデートでしてないこと、あるもん」

「言ってみ」

恭夜がそういつた瞬間、ニンフは持っていた漫画のあるページをめくると、ぱっと智樹と恭夜に見せ付けた

そこに描かれていたのは……

『キスシーン』

主人公らしき少年と、ヒロインが恥ずかしがりながらも、唇を重ねるシーンであった。

そのせいか、沈黙が辺りを支配する

「アホかあああああああ！！！？」

最初に動き出したのは智樹であった。

「えー？ だって、デートの最後にはキスするものなんでしょ？」  
「キスつてのは、心に決めた一人にするもんなのっ！」

智樹の必死の説得に、ニンフは多少押されたのか、恭夜に標的を変えろ。もともと、彼女は彼とキスを試みてたくてそう言っているのだから

「じゃあ、恭夜はどう思うの？」  
「っ……………」

ねえ、あいしあうふたりはくちづけをかわすんだって

その瞬間、恭夜の頭の中に何かが過ぎる

「ねえねえっ、どうなの？ 恭夜？」  
「…めろ……………なんだ……なんなんだよ……………やめてくれっ」  
「恭…夜？」  
「うわあああああああああああああ！！！！」

恭夜の声が三人に届いたときには、既に恭夜の背中からは左が黒い

翼、右には白い翼が生えていた

どうして？ どうして、やくそくしたよね？ ずっといつ  
しょにいるって

「嫌だ……出てくるな……やめろ……やめろおおおおおおおおおお！  
」

だったら、わたしのいのちをあげるから

目の色が黒から金色に変わる

その様子を見て、智樹、ニンフ、イカロスは明らかに恭夜の様子が  
おかしいことを悟る

「なっ、どうしたんだよ恭兄！？」

「恭夜っ！？」

「近づくなぁっ！！」

智樹とニンフは恭夜に近づこうとするが、恭夜の激しい拒絶の前に  
近づくことも出来ない

そして、恭夜の背中から生えた翼は大きく動かされ、空に彼が舞い

上がる

「なんだよ……この……感覚はっ！？ ……気持ち悪い、気もちわりい  
！！」

そのまま、恭夜はこの物語の全てが始まった所に向かって飛んでいく。

そこは、イカロスと智樹が出会った場所であり。恭夜がニンフを家族と呼んだ場所。

そう、大桜の方向に

「イカロスっ！！ 追ってくれ！！」

「アルファー、お願いっ」

「了解、しました」

そして、イカロスも恭夜を追うために空を飛んだ

「恭兄……」

「恭夜……なんで？」



天使とデートⅡダブルデート 後編（後書き）

ああああ……

複線張ろつとしたらこんな結果に……

どうしよう、文章に起こせるか心配になってきた……

アストレア……早く出ておいで

閉ざされる心（前書き）

いいんでしょうか？こんな文章で？

かなり短いです



## 閉ざされる心

気が付けば、俺は地面に横たわっていた。

背中から生えている創造物でもなんでもない、本物の翼が目につく。黒の羽と白の羽が自身の周りに降っている様に見える。

それ以前に、この翼はなんなのだろうか。自身で作製したわけでもなければ、模倣の魔眼を使った覚えも無い。

白と黒のデザイン。それは決して自分ではイメージしないものだ。

そもそも、何で俺はこんな場所に横たわっているんだ。

ついさっきまで智樹たちと一緒に動物園に居たはずじゃないのか？

分からない。何も思い出せない。

上を見上げれば、満開の大きな桜の木が美しくその姿を風に震わせている

（大きな桜の木？ 大桜の根元に俺はいるのか……………）

ズキズキと痛む身体を起こし、辺りを見渡す。

そこは、彼が初めてエンジェロイドと遭遇した場所であり、ニンフのことを家族と言った場所だった

そして、次に背中から生えている翼を触る。もし自分が無意識のう

ちに創ったモノならば、何らかの魔力の流れを感じるはずと考えたからだ。

（解析開始………やっぱり俺が創ったモノじゃない……いや、まて。何で解析をする前から俺の創ったモノではないと確信していたんだ、俺は………）

それを考え始めた瞬間に、頭を締め付けるような頭痛に襲われる。

（頭が……万力に挟まれてるような気分だ………ウツ）

同時に、胃の中から何かが込み上げて来る。

それが咽を通り、口に進入してきた瞬間、口の中に強烈な酸味と血生臭さが広がる。

それを吐き出さないように堪えるが、余りの気持ち悪さに吐き出してしまふ。

吐き出された血反吐は、地面から生える草を赤く染めた。

血反吐を吐き出した後も、口の中は血生臭さと共に鉄の味が広がっている。

（ふう……ようやく落ち着いてきてくれたみたいだな）

大桜にもたれ掛る様に座り、再び翼に手を触れようとした時だった。

不意に、頭の中に何かの映像が流れる

ザッ…ザザザッ…

視界がホワイトアウトし、砂嵐に包まれる。

次の瞬間、映し出された光景は見たことのないものだった。

そこは、空に浮かぶ一つの離島。その中心には表面に何かを書き記されている石柱…いや、石板が聳え立っている。その文字は見たことのない文字だ。

だが、この文字の羅列を見ると酷く気分が悪くなる。

例えるのならば『怒り』と『悲しみ』

その二つが己の中から同時に開放されそうになる。

それと同時に、頭の中に音声が流れる

私はい、こんなことの為にあの子達を……生み出したんじやない

その音声が流れ終わると同時に、再び強烈な頭痛に襲われ現実に引き戻される。

ぼやけた風景が視界に広がる。



れない。

もしくは狂っていると思われるかもしれない。

これは魂の慟哭

心が悲しみのあまり、声をあげて泣いているのだ

何が悲しいのかもわからないというのに。

だから、こうして表面では泣くこともできずに笑っしか出来ない。

誰か、俺をここから引きずり出してくれ。

そう叫ぶことも、そう誰かに求めることも出来ずに。

ひとしきり笑い声を上げていると、その笑いすらも出来なくなった。

だったら、俺は悲しまないように忘れればいい。

(何でそんな思考に陥る?)

そして、誰も俺のことを思い出さなければいい。俺は全て忘れればいい。

(そんなことを考えるな……)

そうすることで、この感情が消えてくれるのならば

(それが……今一番の、最善の方法じゃないだろ……考え直せよ、

俺)

それが例え『忘却』だったとしても

(それは、人としてやっちゃダメな領域だろ……くそ)

「俺は……どうすればいいんだ……」

そんな、末期的な考えに至っていたときに不意に声を掛けられた

「……………恭夜さん？」

空から翼を羽ばたかせながらゆっくりと近づいてくる少女。

「……………イカロスか？」

「大丈夫……………ですか？」

どこか話しくそくにイカロスに尋ねられる。

大丈夫なはずが無い。こんなにも末期的な考えに至ってしまった  
のだから。

けど、それをこいつらに悟られるわけにはいかない。気が付かれて  
しまえばきつと、自分が自分ではいられなくなる

そつだ、この得体の知れない感情を忘れるくらいにこいつらと一緒に笑えばいい。楽しめばいい。

日常に戻ればいい。

自身に必死に暗示を掛ける。いずれ解けてしまつと分かつていてもだ。

そつすることしか、この状況を乗り切れないから

だから俺は、応える

「大丈夫……俺は大丈夫だ。心配掛けて悪かつたな」

「そつ……ですか」

そして後ろからは、誰かが走ってくる音が聞こえる。

おそらく、智樹とニンフだろう。

「あつ、恭兄！！いきなりどうしたつて言うんだよっ？」

「……恭夜、あのね。………なにか気に障つたなら謝るから」

智樹は怒つたよつな、心配したよつな表情で言い。ニンフは悪いこつとをして怒られる前の子供のよつな表情だ

「悪かったな智樹……ニンフ、何をそんな表情をしてるんだ？ お前は笑ってるほうが可愛いんだから」

そう言って、ニンフの頭を撫で、智樹に笑いかける

「だって、突然……」

「俺は怒ってないから、そんな表情はするなよ」

「うんっ！」

（自分を偽り、他人を笑顔にする。まるでどこかの夢で見た英雄みたいだな）

「む？ ……まあ、恭兄が大丈夫そうだからいいけどさ……何か悩んでるなら言ってくれよ」

「ああ。じゃ、帰るか……」

そうして、何事も無かったかのように俺はみんなと帰るのだった

そう、今日の出来事はまるで無かったかのように偽って



## 閉ざされる心（後書き）

軽く鬱っぽくなる思考で書いてみたんですが……

恭夜の思考を上手く表現できていたでしょうか？

それと、文章の短さだけが……いや、追加で切りの悪い終わり方になったことも気になります

むしろ私の限界？

実はコレがfの序章です。というよりもfのプロローグ的なものでした

以上。次回の更新は未定。

追記・国家試験受けかりました。コレで心置きなくあそべるっ！

未確認生物三体目くソイツは馬鹿なのか？ 前編（前書き）

冬という季節は、食料の調達が非常に難しい季節である。それは、動物だけに関わらず、川原でサバイバルをしながら一人暮らしをしている守形にも見事に当てはまる

その日も、とても寒い晴れの日であった。川原で一人、ホームレス生活をしている守形英四郎は、好敵手である熊を尻目に今日のおかずを手に入れるために釣りをしていた。

そんな時、空気が震えた

「ん？」

守形はすぐに異変を感じ取り、その正体を突き止めようと辺りを見渡す。このプレッシャー、以前にも感じたことがある。そう、あのエンジェロイドが現れたときのような……

彼は、空を見上げた。

しかし、そこには既に空は無かった。

「なっ」

黒い大穴が口を開いている。その大穴は、紛れもなくイカロスや八

ーピーが現れたときと同じものである。

そう、空に風穴が開いていると表現したほうがしっくり来る。

刹那、守形は先ほどまで握っていた釣竿を捨てて、身を翻す。その瞬間、空から一筋の閃光が地上に降り注ぐ

光の球体が落ちてくる。

その物体は周りの空気を殺しながら、地上に激突する。その衝撃波で川が干上がり、突風が守形を襲う。飛んでくる砂利などを手で庇いつつ、その落下してきた光の球体を見る

静電気がバチバチと音を鳴らし、まるで唸りをあげているような場所の中に、それはいた

「サクライ、トモキ……イトシロ、キョウヤ」

金色に輝く、長くしなやかな髪は先端で二つに結ばれ、イカロスに負けず劣らずなスタイルを深い青色の衣装で包んでいる少女

赤い瞳を持つその顔は凜々しく引き締まっているように見える。だが、どこか幼さを覚えさせ、人懐っこい子犬のイメージを思わせる。そして、背中には純白の大きな翼を持ち、首には無骨極まりない、鎖つきの首輪が装着されている

紛れもなく、イカロスやニンフと同じ、エンジェロイドと守形は判断できた。

だが、彼女達と大きく違うのは、手には光を放つ剣と円型の盾という、中世の騎士を思わせるような装備をしている点だ。

イカロスとニンフと違い、明らかに近接戦闘を目的に置いた装備……それを目の前のエンジェロイドは隠すことも無く、抜き身の状態で持っている

そう、まるで今から任務を遂行しますと誇示するかのように

そのエンジェロイドは翼を一度、大きく震わせる。その瞬間である。

彼女は光の弾丸となって、その場を飛び去ったのである。

守形はそれを追うために、自身のマウンテンバイクに乗り、空美町の彼の家を目指すのであった。

未確認生物三体目くソイツは馬鹿なのか？ 前編

一方、こちらは空美町の中心部からは少し離れた山奥。そこにある空美禅寺では、小坊主の格好をした智樹と恭夜が住職と共に縁側で座禅を行っている最中であつた。

だが、小坊主の格好をした智樹の姿はおかしな点ばかりであり、彼の頭はちゃんと剃つた物ではなく、カツラである。なぜ、彼がそんなことをしているのかというと……

(皆さん、こんにちわ。智樹です)

彼が何事も形から入るべきだからと思つているからだ。

(何故、こんな場所で座禅を組んでいるかといいますと)

遠くから聞こえてくる鐘の音が、本来ならば心に安らぎをもたらす。

だが、智樹と恭夜は違うことを思い浮かべる。

智樹は、イカロスのこと。そして、恭夜はニンフと謎の記憶についてだ。

智樹の想像したイカロスの表情はどこか恥ずかしそうであり、目は泳ぎ、顔も赤らんでいる。そして、普段からは決して想像できない魅力的な姿。

すなわち……

(最近、妙に未確認生物がエロインデス!!)

そんな妄想をしてしまうほどに末期なのである。

次に、恭夜の思い浮かべたものだが。それは、ニンフに無理をさせているのではないかという不安。そして、あれ以降の自分はきつちりと自分らしく出来ているだろうかということ。

(クソ……忘れようとしても忘れられない。それに、こんな状態の俺と一緒に居てニンフは本当に幸せなのか?)

それほどにまで恭夜は思いつめているのである

(ニンフは必死に話題を作ってどうにかしようとして笑っていてくれるのに、俺は全く笑ってやれない)

つい、先日の話だ。

ニンフが恭夜に何かを話しかけてはいるが、全く反応をされずに悲しそうな表情をしていた

(どうして俺はこんなに後ろ向きにしか物事を考えられないんだ?)

つい最近、ずっとそんな調子である。

二人がそれぞれの思いにのめりこんで行く事が住職に感づかれたのだろう。

刹那、ほぼ同時とっていいタイミングで二人に喝を入れた。

(くっしょう……落ち着け、落ち着くんだ桜井智樹。お前なら出来る……)

(呼んだ?)

(呼んでねえ!)

(呼んだだろ?)

再び、智樹に住職は喝を入れる。

(なーに塞ぎこんでんだよ? 等の昔にネガティブは捨てたんじゃねえのか?)

(だけど……あんなことがあつたら後ろ向きにもなるだろ……)

(ふーん、だつたらお前は孤独に逆戻りだな。はははっ、気楽でいいじゃねえか)

(確かに、それもいいかもな……)

そこで、恭夜の負の気を感じた住職は再び恭夜に喝を入れる

住職に喝を入れられた箇所がじんじんと痛みつつも、智樹と恭夜は息を整え、冷静さを取り戻していく

(未確認生物に欲情するとは何事かつ! ということで煩惱を取り除くために禅寺に来ているんです。それと、最近恭夜の様子がおかしいので、気分転換と理由もありますが……)

智樹が新聞を読んでいると、折り込みチラシに入っていた禅寺修行体験というものを見つ桁為に応募してみたのである。

ちなみに、恭夜は智樹に何も知らされずに連れてこられたが、文句

の一つも言わなかったそうなの。

……と、座禅を組みつつ精神統一をしている二人を、冷たく見つめるものが、禅寺の上空にいた

先ほどの剣と盾を持ったエンジニアロイドである。

彼女は、縁側にいる人間が桜井智樹と判断すると、迷い無く、禅寺に突っ込んだ。

瞬間、強烈な殺気に襲われた智樹はほぼ本能でその場から仰け反り、直撃を免れる。恭夜はというと、己の思考の渦に飲み込まれかけていたために回避は叶わずに、砕け散った縁側の一部に直撃する。

(つつつつ……クソ、敵かっ?)

そして、即座に相手の存在に気が付き、ワントンポ送れて戦闘態勢に移る。

(最速で作製可能な武器の検索開始。それと同時に魔眼の開放)

しかし、ワントンポ遅れていたために、光の粒子が輝く剣は智樹に向けられていた

(クソ……日本刀か、それも獅子刀よりも遥かに劣る)

智樹は圧倒的なプレッシャーの前に身を硬くするだけで、動くことも逃げることも出来ない。

ただ、その少女の美しさに魅了されたかのように、その場で腰を抜



かしている。

「目標、確認。『サクライ・トモキ。イトシロ・キョウヤ』」

その剣が静かに、弓のように引かれた瞬間

「あなた達を……排除します」

「させるかっ!!」

「えっ？」

まるで、その一瞬を待っていたと言わんばかりに恭夜は手に持った刀を少女に向けた

一瞬、判断に困ったのか動きが固まるがすぐに元に戻る。そして、赤い瞳を細め、ターゲットの胴体をしっかりと捕らえるのだった。

「えっ？ 二人が狙われているっ？」

守形が桜井家に報告をしたとき、真っ先に声を上げたのは遊びに来

ていたニンフであった。その声に驚き、もう日塵の遊びに来ていた人物、そはらもイカロスのいる玄関に出てくる

「ああ、先ほど川原に見たこともないエンジニアロイドが落ちて来た。とても話し合いをしようというなどと言う雰囲気ではなかった。おそらく狙いは」

いつも冷静な守形の額には脂汗が滲んでいた。

「二人の命……」

「トモちゃんっ、恭ちゃんっ!？」

そはらが声を上げた瞬間、ニンフはすぐさま耳に手を当てるようにして、自分のシステムを作動させる

「広域レーダー展開。敵エンジニアロイドの位置及びタイプ確認ッ！」

そしてまた、イカロスもニンフと時を同じくして、レーダーを展開していた。

「敵エンジニアロイド、既にマスター達と接触しています。」

「くそ、間に合わんッ」

「タイプ出ます! 敵………局地戦闘用エンジニアロイド、タイプデ

ルタ、アストレア」

(恭夜……何とか時間を稼いでいてくれっ！)

守形とそはらはその場で祈るように目を閉じた

「……………なんだ、デルタか」

だが、そんな二人の緊張感を一気にそぐような、脱力したような声がニンフから発せられた。既に、レーダーの機能は停止している

「アルファー、どちらかというとデルタのほうが可哀想よね……………」  
「う……………ん」

386

イカロスは、ニンフの言葉に小さく頷く

「はっ?」

「あのっ?」

意味の分からないそはらは、会話をしている二人をおろおろと見つめる

「……………いいのか、あの二人は?」

彼女の戸惑いを代弁するように、守形は静かに質問した

「デルタなら、恭夜一人で十分だと思うわ。それに、トモキでもどうにかできると思うし」

ニンフは、あっさりと応えた

「その、つまり、弱いと？」

恭夜ならまだしも、唯の中学生の男子でも勝てそうなほどの？

「弱かないわ。メツチャ強いわよ？ 近接戦闘ならアルファより上」

居間のちゃぶ台の前に座って、お菓子を食べだすニンフに倣うように守形とそはらもその場に座る。イカロスは人数分のお茶を用意し始める

「だったら」

「私たち第一世代の戦闘エンジニアロイドはそんなに多くの機能は積めないの」

お菓子を口に頬張りながら、ニンフは答えていく

「例えば私は電算能力と感情制御を積んだ分、戦闘能力は恭夜と互角に戦えるか微妙だし……アルファーは戦闘能力と電算能力を積んだおかげで感情制御は弱いでしょ？」

確かに、以前襲ってきたハーピーというエンジェロイドとの戦いで、ニンフが手も足も出せなかったというのに恭夜はボロボロになりながらも何とか応戦していた

つまり、ニンフの戦闘能力は現実にそれほど高い訳ではないと言うのが分かる

イカロスも、この頃は多少はましになったが、それでも、まだまだ感情を上手く表現できていない

「つまりね、デルタは戦闘能力と感情制御を積んだために、電算能力が並みの人間以下なの……つまり」

ニンフはイカロスの入れてくれたお茶を一口含み

「バカなのよ」

恭夜の持つ刀の間合いを遥かに凌ぐ剣の切っ先は、確実に恭夜としては不利なものであった。本来の獅子刀ですらハーピーを撃退することも出来なかったのだから当然とも言えるだろう。

そして、イカロスやニンフが離れた場所にいる今であれば、一切邪魔は入らずに、多少の時間を掛けてでも任務は遂行できるはずだった。

そう、恭夜に切りかかろうと……踏み出した足が縁側の床に躓いて、二人に挟まれるように顔面からこけなければ

とても静かな時間が少しの間続いた

だが、彼女は仮にも戦闘用エンジニアロイド。この程度では大きなダメージを受けないためにか、すぐに立ち上がる

「うっ、あふ、ふあふう」

鼻血が出ていた。その上、泣いている。

そこで二人は今まで思っていたことも忘れ、同時に思った。

(ああ、まためんどくさそうな(やつが)のが来たなあ)

出てくる鼻血を押さえつつ、うつ伏せに倒れたままの彼女を見て、  
恭夜は対応に困っていた。

ちなみに剣は、こけた衝撃でアストレアが驚いてしまったためにシ  
ナプスに送還され、持っていた盾はその場に転がっていた

最初、守形が見た凜々しさは影も形も残ってはいなかった。

(何しに来たんだろうなあ、コイツ。嫌だなあ、トラブル臭がぶん  
ぶんするし)

(とりあえず、害はなさそうだし放置しておくかな……武装解除)

そのまま、二人は呆然としてみると、彼らの様子を眺めていた住職  
さんが、ごほんと咳払いし

「とりあえず、次に移ろう。次は滝行だ」

住職は、この羽根つきずっこけ美少女を無視する方向で決定したよ  
うだ。

「あ、はい」

「え、ええ。了解です」

言わずもがな、二人もそのつもりである

そうして立ち去ろうとする三人の背中に

「ハイハイハイ！ 私もやります、私も！ はいはいはいっ！」

ずびっしと手を上げたアストレアは立ち上がって猛烈にアピールをしてくるのだ

ということだ………

白装束に着替えた智樹、恭夜、アストレアは禅寺の近くにある滝で打たれることになった

智樹と恭夜は何故か二人に挟まれるように真ん中にいる未確認生物その三を無視しようと、瞑想を続ける

一方、アストレアはチラツと肩目を開けると、とりあえず弱そうな感じのする智樹を見やった。

（ニンフ先輩のマスターは強そうだし、イカロス先輩のマスターも一筋縄ではいかなそうだけど、ニンフ先輩のマスターよりはきつと劣っているはず）

先ほどの失敗を言いたいらしい。確認しておくが、智樹たちは一切罫を作って等いなく、唯のアストレアの自爆になるのだが、彼女はそうは思っていない様子である

（とりあえず、ここはしばらく行動をして油断を誘うのが得策。そ



れに、運がよければ二人同時に………)

とりあえず形だけでも二人と仲良くなる 二人、当然アストレアに気を許す 油断をして後ろを見せたところをグサツと アストレア、超賢くて、超強い

アストレアの頭の中ではそういった考えが浮かんでいた

(ふふ、自分を殺しに来たとも知らずに)

アストレアは自分の素晴らしい作戦に酔いしれながらも、きらっと瞳を輝かせ、智樹を見つめた

確かに、この寒空の中、長い間、滝に打たれ続ければ、自ずと体力を消耗し、精神も磨り減る。そこを狙えば確実に相手を討ち取れるかもしれない

(さあ、もっと油断しなさい！ さあさあさあさあ！！)

だが………

(さっぶうううううっ?)

アストレアも一緒になって滝行をする必要性は全く持って見られない。

当然、彼女ががちがちと身体全体を震わせると、そのまま気絶し、ばしゃんとつつ伏せに滝つぼに倒れてしまう

「オイッ！ 大丈夫かつ？」  
「おいおいっ？ 仕方ねえな」

智樹はいきなり隣で倒れたアストレアに驚き、すかさず駆け寄る。恭夜もほぼ同時に駆け寄ると、うつ伏せに倒れた上体から仰向けにして呼吸を確保すると、辺りを見渡した

「はあ、トモ坊。俺は住職さんと呼んでくるから見ててくれ」

「えっ、いや、俺が呼んでくるから恭兄が見ててくれよ」

「……………」

智樹と恭夜が無言で見つめあう。だが、智樹が次の行動に移る前に既に恭夜は陸に上がり、走り去っていた

「あつ、オイッ！！ それはずるいぞ！！」

だが、その声で恭夜が止まるはずも無く智樹は仕方なくアストレアに目をやる。そして、以上がないかを確認する。

そこで、智樹はあるものに目を奪われてしまった

濡れた白装束がぴたっと張り付き、その全容を露にしている。彼女の胸にある双丘。先ほどは余り気にしなかったが、その大きさ、張り、形は、イカロスに負けず劣ら……………いや、もしかするとそれ以上のものだった

(呼んだ?)

刹那、智樹の煩惱がぐいんと持ち上がった。

(呼んでねえ！ 呼んでねえ！)

智樹は股間を押さえつつ、恭夜が連れてきた住職さんの行動のおかげで、アストレアに別状は無かった。

(クツソウ、なんなんだ、コイツはっ)

そして、元気を取り戻したアストレアは、その後も修行に参加することになった

(俺たちは煩惱を取り去りに来ているのに)

(クツソ……こいつのせいで折角の修行に身が入らないっ?)

恭夜が床掃除を終わらせ、立ち上がるうとしたときに、アストレアの頭が彼の泣き所に直撃する

「なんでこっつなるっ!?!」

そして、智樹にいたっては目の前でスカートを揺らしながら雑巾ダッシュをしている。右に左に彼女が踏み出すたびにスカートはめくれ上がり、彼女の清楚とした純白のパンツが完全に丸見え状態になる。

「ユーターン！」

そして、復路では、彼女の巨乳がたぶたと前後左右に揺れ、智樹の目を奪った。

「かあっつ！！」

そして、突如現れた住職によって喝を入れられるのだった。

その後も、彼らの修行はアストレアによって邪魔をされ、とてもではないが修行をしに来たようには見えず、友人と合宿に来ているようだった

未確認生物三体目々ソイツは馬鹿なのか？ 前編（後書き）

どうも、お久しぶりです。作者の絃城です。

今回の内容につじつまを合わせるために、前回は多少修正いたしました。

ついにアストレアが降臨いたしました。

シリアスから打って変わってギャグという、なかなか着いていけないだろうと思いますが、勘弁していただきたいと思えます

今回は智樹の六道地獄をどうやって恭夜に観察させるかが一番悩みどころです。

久しぶりの投稿なので、誤字脱字がありましたら報告していただければ修正いたします

それでは、次回もいつになるかは分かりませんがよろしくお願いいたします

未確認生物三体目々ソイツは馬鹿なのか？ 後編（前書き）

お久しぶりでございます。

今回も然程長くはありませんがよろしくお願いします

未確認生物三体目〱ソイツは馬鹿なのか？ 後編

「……………」

智樹は精も根も尽き果てていた。今は修行を中止し、寺の木の根元でダメージを癒している最中である。

そして恭夜はというと、アストレアと一緒に住職さんに何処かに連れて行かれた。

（ダメだ、このままでは……………これ以上、刺激を受けたら俺は……………俺は、本当に）

「あ、いたいた」

「トモ坊、メシ持ってきてやったぞ。コイツが……………」

一瞬、ぴくつと智樹は身を震わせたが、恭夜も一緒に居ると分かっただために少し安心できた。

「はい、コレ。ジューシヨクさんがご飯を持って行って」

見ると、アストレアの手の上にはお盆があり、その上には先ほど食べ損ねた昼食が載せられていた。

そこで、智樹は恭夜の方をちらりと見る。まるで、何かを確認するように。

恭夜もその視線に気が付いたために、問題ないとジェスチャーで答える。それを見た智樹は、安心したのかアストレアに向かって一応だがお礼を言う

「あ、ああ、サンキュー」

だが、それでも智樹は内心びくつきながら、少しずつ彼女から受け取った昼食を口に運んだ

瞬間、アストレアはニヤツと口元をゆがめた

（かかった！）

智樹はぱくぱくとご飯を口に入れ続けている

それを見ていた恭夜は、何故彼女が口元をゆがめているのかを考える。

（確かに、さっきまで下剤もってニヤニヤしてたけどさ………メシにも混ぜてないし、手に持ったままだしなあ）

恭夜が見たまんま、アストレアの手には智樹に隠すように小さな小瓶が握られている。その小瓶のラベルには『下剤』と書かれている



(ああ……大方、智樹のメシに混ぜようとして忘れてんのか。この子、頭弱いみたいだし)

実際に、恭夜の考えたことはアストレアの頭の中で考えられており、入れ忘れたことに気が付いたのか、突然焦り始める

そして

「ちよ、ちよっと待って！ 返して、返して！」

突然アストレアは智樹に飛びつき、その持っているお盆を奪い取るうとしていく

(ああ、やっぱり……)

恭夜は内心呆れながらも、自分の分の昼食を落ち着いて口に運んでいる。勿論、その光景から目をそらさずに

「ちよ、何だ！ 押すな、押すな、押す……」

「あんっ？」

そして、アストレアは木の根に引っかかって転び、その豊かな胸を智樹の顔に押し付ける結果となった

むにゅっとした柔らかく温かい圧迫が智樹の顔にのしかかる。あらゆる種、幸せだろうが、このままではまた、あの住職さんが……

「どどどどけえっ!!」

「きゃ、ちょ、ちよつと、押さない……………きゃうんっ!?!」

「ちよつ、トモ坊っ!! それは不味いだろ!?!」

つい、恭夜までもが叫んでしまったのには理由がある。何故なら、智樹が無理矢理引き剥がそうとした瞬間、今度は智樹の足がすぐわれ、アストレアのスカートの中に押し付ける結果になってしまったからだ。

……………その時、智樹の意識は遙か高く昇った

そして、全ての時間が停止する

坊、トモ坊

聞こえてきた声。そちらを振り返ると、そこには大好きだった、死んだはずの祖父が笑って立っていた。

「じいちゃんっ?」

いいんじゃない?

「えっ?」

人間だろうが、未確認生物だろうが、そこにおっぱいがあ

るなら

さあっと、風が智樹の頬を撫でた

いいんじゃない？

「イイんだね？」

その言葉を最後に、智樹を含め、全てに時間が戻り、時が動き出す刹那、智樹の身体はまばゆい光に包まれ、アストレアの目の前でゆっくりと浮き上がっていく

智樹の後光からは、かの阿修羅が悠然とアストレアを見下ろしていた。

「な、に………」

「俺にはついていけないよ……まあ、頑張れよ」

恭夜が昼食の乗っているお盆を持って寺の屋根に飛び上がる。

それと同時に、アストレアは言い知れない恐怖に襲われ、体を引きずるように智樹から離れる。だが、腰が抜けているのか、立ち上がる力が出てこない

天啓というものがある。ごく一部の人間にしか到達できないそれは、おおよそ凡人では成し遂げられない偉業や考え付かない策を思いつけるものらしい

それが、智樹にも現れてしまったようだ

「なんなの？」

「はあ、禅寺に来て煩惱が爆発するって……やっぱりお前はかわんねえな、トモ坊」

恭夜は残っているご飯を口に運びながら呟く。

そして、智樹の六道が発動した

六道、それは人が死後に導かれる六つの世界のことを指す

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、そして天道

これは人としての罪を償うため避けられぬ道なのである。

(という訳で、禅寺の修行で編み出しました)

一瞬、智樹の実態がぶれて、一瞬、境界線と溶け込む。

だが、すぐさまにその姿は再構成されるっ……………

確かに、恭夜には聞こえたそう。

「きゃあああああつ!？」

その瞬間、少女の叫び声が上がった

お釈迦様と同じ姿になった智樹から嵐が巻き起こり、アストレアの周りに逃げられないように空気の壁が現れる

刹那、智樹の姿がぶれ、雷様のような姿となり、その直後、アストレアの足元から風呂釜のようなものが現れ、熱湯がざぶざぶと注がれた

### 智樹地獄道

雷様姿の智樹はやかんをどこから取り出し、そのお湯をアストレアの白い肌にとぼとぼと掛けていく

その様子を眺める恭夜は様々な意味で感心しているが、いろいろな意味で智樹を見る目が冷たくなっていく

「あつう、やつ、あつうつ!」

またも智樹の姿がぶれ、今回は何十、何百ものミニ智樹へと変身する。ちなみに、眺めている恭夜の目にはゴキブリのように認識されている。

そして、そのゴキ……ならぬ、ミニ智樹は一斉にアストレアに襲い掛かり、彼女のありとあらゆる部分を揉み出し始める

#### 智樹餓鬼道

再び智樹の姿が変身し、今度はいやらしそうな猫の姿に

「やっ、やああああんっ」

そのまま、猫特有のザラザラした舌で、アストレアの太ももや、ふくらはぎ、そしてパンツまで舐め始める

ちなみに恭夜は、見るに耐えなくなってきたのか刀を手に造りだし、R18に引っかかりそうなタイミングで智樹の暴走を止めようとしている。

#### 智樹畜生道

そして、今度は落ち武者のような姿になり、さっきに満ちた瞳でア

ストレアを見ると、握っている刀でアストレアに襲い掛かる

「きゃあああああ！」

もちろん切るのは服だけ

### 智樹修羅道

「うう、出口はどこにあるの？」

もう女の子の大事な部分と乳房を隠す程度の布地しか残っていない服を腕で守りつつ、アストレアは智樹が消えると共に、きよろきよろと辺りを見回す

「あっ」

すると、彼女の目の前に一筋の光が差し込む

（光が見える。きっとあそこが出口）

そう思って彼女は走り出し……直にアストレアは絶望する。

「ようこそ、人間道へ」

素っ裸の智樹が、彼女を待っていた

刹那、この後のことを想像してしまったのか、かっとな少女は顔を赤らめる

そして、智樹が少女に歩み寄り始めた瞬間……

きらりと何かが一閃され、智樹の胴体に叩きつけられる

「欲情するのはいいけどな……ここは作者がR15指定を掛けるんだ。それ以上の行為はこちらとしても見過ごせないんだ。悪いな、トモ坊」

作者とは一体誰のことだろうかわからないが、恭夜が智樹に持っている刀で峰打ちをする。

鈍い音と共に智樹は倒れ、今まで展開されていた智樹の世界が消える。ちなみに智樹の世界が消え去った今もまた、智樹は素っ裸である

流石に屋外で裸体を晒させたまま親友を放って置けるほど恭夜も酷い性格をしていないために、自分が羽織っていた白装束を智樹に被せ、アストレアに向き直る

アストレアは混乱した頭で、恭夜に向かってぺこりと頭を下げなが



らお礼の言葉を述べようとした瞬間だった

「あ、ありが  
」

「はあ……トモ坊もめんどくさい事をしてくれるよなあ。ほら、そのままじゃ寒いだろ？」

智樹にボロボロに切り裂かれた衣服と全く同じものが彼女の手に持たされる。

「着替えて来いよ、話はその後でいいだろ」

「は、はい………」

アストレアは混乱しながらも言われたとおりにお寺の中に戻り、着替える

(あー、さっき誰かに身体を操られた気がするんだよなあ………さく世せ界かいの修正力かなんかかな?)

恭夜は握り締めている刀を鞘に納め、彼女が戻ってくるのをぼけつと待つ

そして、着替え終わったのか戻ってきたアストレアに肩を叩かれた

(今のタイミングならば殺せたと思うんだけどなあ………やつぱり、コイツは殺しかさそういのには向かないんだらうな)

しみじみと恭夜は思いながら、振り返る

「サイズは……合ってるみたいだな。で、本題だが……」  
「はいっ？」

刀の柄を握りながら、アストレアに向かって恭夜は殺気を当てる。

その殺気に気が付いたのか、少女の顔は徐々に青ざめていく。ちなみにだが、彼女の武装はゼロ。初めに送還されてから戻ってはいない

「あんまり度が過ぎた真似をするようなら……」

チャキッと少女にその刃を見せつける

「いっ、いっいっ、いっめんなさあぁいっ！……」

こうして、アストレアは二度に渡っての恐怖と敗北を覚えたのである

冬というのは、食料の調達に関して厳しい季節である。というのは、動物だけの話に限らず、川原で一人、ホームレス生活をする中学生に關しては、この定説が見事に当てはまる。

その日も、とてもとても寒い晴れの日であった。川原で一人、ホームレス生活を営む守形英四郎は、好敵手である熊を尻目に川で釣りをして、今晚のおかずを入手しようとしていた。

そんな時、何かが墜落してくるような音が聞こえた

守形がそれに気が付くよりも早くに……………

ずどんと、川の中央にソレは落ちた。

「不測の事態発生により、回路停止、回路停止」

ソレは紛れも無く、あのアストレアであった。ただ、目を回して気絶しているのだが。

アレから、そう、このように空から彼女が降りてきてから何度かあの二人を襲撃しているようだが、そのたびにどちらか片方に軽くあしらわれているようだ

どうやら、最初に遭遇した際に、アストレアに大きなトラウマを二

人が植えつけてしまったために、彼女は一人に対して苦手意識を持っているようだ。

今回は、衣服に切りつけられた後がないところから察するに……おそらく智樹にエッチな悪戯をされ、逃げてきたのだろう

守形はソレを不憚に思いつつも、彼女を川から引き上げて毛布を掛けてやった。

その瞬間だった

「初期化開始。再起動します」

そう、意識の無いアストレアは咳くのであった。

「任務再確認」

守形の表情が変わるのに時間は掛からなかった。

「……『夢』、ダウンーだけが見るといふ不完全かつ特殊な現象。十一年前、一体のダウンーの見る『夢』とシナプスが繋がるという原因不明の事態が発生。だが、特に危険はないとして放置することをシナプスの最高評議会の判断とする。」

守形は一語一句逃さぬように、表情をゆがめつつ、彼女を見た。

「だが数週間前、シナプス中枢にダウンナーが進入した形跡を発見。中枢には『石版』が存在し、今回『石版』への干渉は見られなかったが、シナプス最高評議会はコレを危険と判断し、警戒レベルを一気に最高まで引き上げ、早急にそのダウンナー『サクライトモキ』を排除する必要があると判断をした。」

「続き、『裏切り者』『追放者』と呼ばれる十三番目の存在が確認されたために、シナプスの最高評議会はその存在を危険とみなし、排除する必要があると判断をした。番外固体である『タイプゼロ』を所有している恐れがあり、その記憶が完全に戻る前に『イトシロキョウヤ』の排除、もしくは捕縛が可能ならば捕らえる。私の任務は『サクライトモキ』『イトシロキョウヤ』の両名を早急に排除し、その原因の解明に」

そこで、ぱちつとアストレアの瞳が開いた。そして、そこで守形がいることに気が付き、思わず口を手で隠す。が、もう遅い

「あっ……」

「なるほどな、つまりは智樹の夢が『シナプス』とやらに繋がっていて、ソレを危険に感じたお前たちは智樹を殺すことにした……と」

守形はメガネをくいつと指で掛けなおす。

「だが、もう一方が何のことなのか理解が出来ない。恭夜、アイツが追放者であり裏切り者……確かにアイツは本来表に出してはいけない『魔術』を俺達に知らせた。いや、俺は過去にその存在を知っていたから然程驚きはしなかったが……」

その奥の瞳は、しっかりとアストレアを捉えている。

(どうしよう……)

一方、アストレアは泣きそうであった

(再起動中にうっかり機密をしゃべっちゃった……何とかしなきゃ。なんとかしなきゃ)

しばし、熟考。すると、ぱっと彼女は顔を輝かせた

「な、なーんて変な夢、見ちゃったなあ」

欠伸の演技をしつつ、そう呟いた

(どうよ、この完璧なごまかし)

「エンジニアロイドは眠らないのではなかったのか？」  
「はづうっ！」

(そうだった……)

アストレアはじりじりと守形から距離をとり、ゆっくりと立ち上がる

「それはアレよ。えーとえーと」

「つまり、この空美町の上空には『新大陸』が浮かんでいるということか」

「し、新大陸ツ？新大陸なんかじゃないわ、シナプス………あっ」

わざとカマをかけた守形は、一層敵しくアストレアを射すくめた

「ほう、シナプス？」

（また機密を知られちゃった……もう、コイツ）

わけが分からず、混乱し始めたアストレアはその手に光の剣と円形の盾を召喚する。

（殺すしかっ）

「やあああああー！」

大きく剣を振りかぶり、守形へダッシュ。しかし、咄嗟に守形が横向きになると、アストレアは石に蹴躓き、びたんと顔から転んでしまっ。

(か、かわされたっ？ しかも反撃されたっ？)

鼻からぽたぽたと血を流しながらも、アストレアは立ち上がる

(この男、一体)

刹那、彼女の後ろに人影が忍び寄る。

それは……

「ふふっ」

荒縄を持った生徒会長、五月田根美香子だった。

その気配を感じ取れなかった彼女は、そのままぐるぐると縄に巻かれ、数分後には後ろ手を縛られ、さめざめと泣くアストレアが地面に座らされていた



未確認生物三体目々ソイツは馬鹿なのか？ 後編（後書き）

やっちまった……………

途中で余計な電波をはさむんじゃないかな……………

恭「ああ、全くもってその通りだな」

作「きよ、恭夜さん？」

恭&恭「作者……………俺の最強はちょっとばつかし響くぞ」「」

作「あれ……………なんで作品違いのアナタまで！？ てか、その台詞違

ッ……………」

恭&恭「俺達の創造者様クリエイターよおッ……………」

作「だったら敬ええええええ、そして尊け（ryぶべらあ……………」

雪の乱・出現させるな危険（前書き）

「ひっく、ひぐ、えぐ、えっく」

地面に座らされ、さめざめと泣くはアストレアである。

「なるほどねえ、あの二人を殺しにねえ」

会長はどこからか大振りのナイフを取り出すと、それをアストレアの首筋にぺたつとくつつける

「デルタちゃん？」

「はい、ゆっ、ゆるしてっ！」

「ねえ、デルタちゃん」

「すみマセン、すみマセン、すみませんすみませんすみませんっ！」

アストレアは肌でこの少女がターゲットである二人よりも性質の悪い存在だと悟ったのか、涙を流しながら、許しを乞うのだった。だが、そんな彼女の耳には予想外の言葉が響いた

「協力するわっ」

ぐつと親指を立てている。

「え……………」

会長はとても優しい表情でアストレアの肩に手を置き、しゅるしゅると縄を解いてやった。

「そういうことならもっと早く言ってくればよかったのに。私もそろそろあの二人をどうにかしないといけないって思ってたの」

この時、アストレアには、会長が女神のように神々しく見えた

(美香子……………またそんな、新しい玩具を見つけたような顔をして)

ただ、守形だけは彼女の思惑にうすうす気が付くのである

「でも、あの二人は手ごわいわよ?」

会長からしてみたら大嘘である

「せ、せはじっ」

そして、それを信じるバカ

「では一体、私はどうしたらっ」

アストレアは自分を助けしてくれる彼女に上目遣いで聞いてみると、会長はゆっくりと口元だけ笑みを浮かべながら

「そうねえ、まずはこの国古来の戦い方を学ぶ必要があるわ……」

その言葉と共に、空美町の上空から白い粉雪が舞い降り始める

その雪は翌日も降り続き、かなりの積雪が予想されていた

## 雪の乱・出現させるな危険

(ああ、平和ですなあ)

窓の外では雪が降り続ける中、智樹はストーブの利いた教室で、朝の始業開始までゆったりとしているのだった。

「トモちゃんトモちゃん、今日は恭ちゃんとイカロスさん、学校来てないの？」

「あー、なんかニンフが風引いたとかで二人で看病してるってよー」

「えっ、エンジェロイドって風引くんだ」

幼馴染のそはらとそんな会話を交わしつつ、智樹は今日という日ののんびりと過ごそうと計画していた

(久々に未確認生物のいない学校だし、今日一日は平和に……………)

「あっ、恭ちゃんっ！今日は学校に来ないんじゃないの？」

「ん、まあ、そのつもりだったんだけどさ。ニンフが風邪うつしたくないって俺を追い出したんだよ」

「ふうん、それでイカロスさんは？」

「流石に一人には出来ないからイカロスに任せてきた。だから今日は来れないと思うよ」

そはらと恭夜の会話を聞いた智樹は、再び安心する。

この調子ならば、久々に学校で平和に過ごせるからだ。

だが、そんな彼の考えは数秒も持続することなく打ち砕かれることとなった。

なぜなら、臨時放送のチャイムが鳴り響いたからである

『合戦よ』

スピーカーから聞こえてきた会長の声に、智樹は頭に矢が突き刺さったような痛みを覚えた。嫌な予感、マックスである

『全校生徒は今すぐグラウンドに集合。男子チーム、女子チームに分かれてこの国古来の戦い方……雪合戦をするわあ』

智樹の頭には何本もの弓が突き刺さった

「おいおい……サバゲの次は雪合戦って、この学校はこんなのでいいの？」

恭夜の呟きが教室に虚しく響いた

とうとうとで……………

「ふふふ」

女子チーム大将、五月田根美香子

本人曰く『副賞』アストレア

そして、同じく副将、見月そはら

その他、一般女子生徒

（（なぜ、俺？））

男子チーム大将、桜井智樹

副将、絃城恭夜

軍師、守形英四郎

その他、一般男子生徒

こういった陣容である

「ルールを説明するわあ」

まるで三国志に出てくる諸葛孔明を彷彿させる様な衣装に身を包んだ会長は拡声器を取り出すと、互いの陣に聞こえるように声を張り上げる

「この雪合戦は通常のフラッグを取り合うものではなく……仮に雪玉を当てられたとしても戦闘不能でなければ、いくらでも戦線に復帰してもよくなってよお。その上で相手の大将を戦闘不能にしたら、そのチームの勝利となるわあ」

ルールが説明される中、智樹と恭夜はほぼ同時にため息を吐く

(ああ、やだやだ。適当に負けて、暖かい教室に戻ろう)  
(ニンフに気を使ってもらって学校に来てるのに、風邪引いたら最悪だよなあ)

彼らは、そう考えていた。だが、次に発せられた会長の言葉に、智樹だけはその考えを覆された

「なお、勝ったほうには……負けた方を一日『好きにできる』権利が与えられるということだ」

瞬間、男子チーム全体が揺れた。

そして幾ばくかの静寂の後



「お、御館様」

誰かが言った

「御館様」

また一人

「御館様っ」

それはだんだんと大きくなり

『御館様っ』

大きくうねりとなって、智樹に聞こえてきた

彼はゆっくりと立ち上がり、その拳をぐっと固めた

「どつちやら……時が来てしまったよつじゃ」

「おい、智樹なにを……?」

智樹は一瞬で鎧兜を身にまとうと、その瞳をぎらっと輝かせた

「敵は本能寺にありいー!!」

『ウオオオオオオッ』

男子チームの咆哮が木霊した

「守形先輩？」

「なんだ？」

「またですね」

「まただな……………」

男子チームの要二人は、ため息を吐きながらも会長の思いつきに赴くのだった

その頃、女子チームは

「なんか、アッチ随分と盛り上がっていますけど。会長、ヤですよ、私。負けたら好きにされるなんて」

そらは向こうの陣営を眺めながら会長に抗議する

「勝てばいいのよ、勝てば」  
「そんなんっ」

しかし、そんなものを会長が聞き入れるはずも無かった。

そして、両陣営がざわめく中、たった一人がやる気に満ちた瞳で敵の陣営を見つめていた

（なるほど、負けたら全てを失う。これがダウンナーの戦い方。ふふ、おもしろい）

アストレアであった

（私はシナプス最高の局地戦闘エンジニアロイド、タイプデルタ、『アストレア』！ 掛かってきなさい、ダウンナー共！ 私の力を見せてあげるわ！）

こうして、それぞれの思惑の中、合戦開始の法螺貝がグラウンドに鳴り響いた

最初にアドバンテージを奪ったのは女子チームであった。

力や持久力、スピード。あらゆる面で女子は男子に劣っているはずなのだが、あるものの指揮のおかげで、五分以上に戦局を有利に運んでいた

「左翼展開。敵の横つ面を狙ってえ。右翼は敵の先陣を」

対象である会長の指揮である。それが男子達の荒削りな攻めを、受け流すようにしているのだった。

大将の器で、戦争というものはほぼ決定するのだ

だが……

「殿ッ、敵の副将及び大将以下数十名が物凄い勢いで突撃してきましたッ」

「何ですってっ?」

一騎当千の猛将が大局を大きく左右することもある

「流石は会長ですけど、攻めが転じすぎて守りが手薄ですよッ!!  
左翼展開、敵の本陣を強襲する!!」

「うおおおおおっおおおっお!!!!」

恭夜の率いる副将隊が敵本陣に切り込み、有効大打撃を与える。その後、本隊である智樹の率いる小隊が敵戦力の要である『猛将』を押さえに掛かる

「見んな、ワシに続けえい! まずは敵の『猛将』を抑えるっ!!」

その智樹が向かう方向には、エンジェロイドのアストレアの姿

彼女はその場で身構えると、少しだけ微笑んだ

(なるほど、まず最も戦闘能力の高い私を排除するということね。  
やるじゃない)

瞬間、アストレアの動力炉が熱くなる

(面白い、受けて立つわ！)

「うおおおおおおっ！」

「さあっ、来なよ」

智樹はアストレアを微塵も気にせず、その横を通り過ぎた

(アレ？)

そのまま、智樹は雪玉を補充していたそはらの下へ

「へっ、私っ!?!」

「やれっ、やれやれっ、そはらを仕留めれば後は雑兵だけだっ!」

「やっ、ちょ、トモちゃんっ?」

智樹の号令で、周囲を取り囲んだ男子は一斉にそはらに砲撃を開始する。直に雪だらけになってその場に尻餅をつくそはらに

「埋める埋めるッ！ 確実に息の根を止めろっ！」

「おいおい……後でどうなっても知らねえぞ俺は」

追い討ちとばかりに雪を何度もかぶせ、完全に生き埋めにしていく  
智樹たちを見て恭夜は呟く。

……仮にも昔病弱であったそはらに対し、このような行動を取れるとはなかなかの鬼畜である。

しかも、幼馴染に……

智樹はその作業を終えると、一仕事を終えたサラリーマンのように額の汗をぐっと拭った。

「ちよ、ちよっとちよっと！」

それに納得がいていなかったのは見逃されたアストレアである。

「私はっ？」

わざわざ自分を指差して、アピールをした

「ああ、そうだった。アイツはヴァカだからほっといても大丈夫」

そう言って、他の者達に笑いかけた

「なっ？」

それにカチンと来たアストレアは、近くの雪を固め、まずは小さな雪玉を作る。

「ゆ、ゆるせないい、見てなさいよお」

それを雪のある地面で転がし、転がし………どんどんと大きくし、自分の何倍もの大きさの雪玉を作ると、ぐいっと持ち上げた

一つここで彼女に不幸があったとしたのならば、そこに恭夜が雪玉を持って立っていたことだった

彼女はそれに気が付かず、彼らに向かって持ち上げた雪玉を投擲する体勢に入る

「くらええええええええつ！」

そのまま、智樹たちに向かって投擲をする。それだけの動作で完全

に智樹を見返せるはずだった

だが……

「智樹、そこ右に避けなっ。そらっ！」

恭夜は持っていた雪玉をアストレアの足元目掛けて投げつける。アストレアはそれに気が付き、くるっと身を翻し綺麗に避けた。

そう、雪玉を持っていた両手を離して、くるっと身を翻して

「あっ」

つまり、アストレアが智樹たちに投擲することは無く、頭上に持ち上げられていた雪玉は支えを失い、彼女の下に落ち、トドメを刺した要するに、自爆したというのが早いだろう

しばらく、不憫だなあというムードが全体に流れた。

もちろん、雪玉を投げた恭夜本人も。

「よーしっ、皆の者。流れはこっちにある。一気に畳み掛けるおっ  
！！」



そして、日が暮れる頃には、ほぼ体勢は決したのだった。

「大勝ですな、御館様っ」

笑い声が満ちる男子チームの陣屋。そこでは智樹らがコーラで祝杯を互いに飲み交わしていた。

それを尻目に、恭夜は守形と陣屋の隅の方で何かの話をしている

その場の空気は酷く重く、とてもその場にそぐわない雰囲気である

「恭夜、ニンフの様子はどうか？」

「風邪……のようですけど、やっぱり契約の枷が関係しているんですかね？」

「それは絃城家の宝刀を使って契約を破棄させたんだらう？ だったら問題は無いんじゃないのか」

一つ向こうの世界では、智樹やその他一般生徒たちが笑いながら明るい雰囲気を作っているというのに、ここだけが切り離されているようにも思える

「何で先輩が絃城家に伝わる宝刀のことを知っているか気になるところなんですけどね……………」

「……………」

「まあ、いざれ分かることですね。その通りですよ、契約については完全に破棄しましたから」

「分からない事だらけだな……………」

「はい。世界は謎に包まれている……………」

二人はしばらく黙りあっていると、智樹が二本のコーラを持ってやってくる

「あれっ？ 恭夜も先輩もどうしたんすか？」

「ん、まあな。ちょっとした世間話さ」

「……………」

智樹の質問に、恭夜がいつものように感づかれぬように話す。守形はその後ろでメガネをくいと持ち上げ、その様子を見守っている。

「まあ、二人も楽しんでくださいよっ！ 折角の大勝なんだからさ」

そう言って、コーラを二人に押し付けて皆の元に戻っていく智樹

「楽しめか……先輩、今の話は無かったことにして今を楽しみますか」

「いいのか……本当に？」

「ええ、漸く取り戻した親友です。それを失っていいほどの話じゃありませんし」

「そうか……では、俺達も戻るとするか」

「そうしますか」

だが、彼らの知らないところで既に、事態は急変していたのだ

恭夜と守形が智樹たちのいる方に戻ると、なにやら衣服のほつれた男子生徒が転がり込んできたのだから。

智樹は、今まで悪戯をしていたアストレアから離れると男子生徒の言葉を聞いている。

「謀反です………」

その内容を横から聞いていた恭夜、守形は、めんどくさそうな事になると悟り、二人はその場から目をそらす

瞬間、男子チームは凍りついた

「も、モテ男共が……モテ男の奴らめがっ、裏切りをっ」

詳しく聞けば、一般的に男子チームの中でもモテる方の男たちが、

女子が可哀想だということ、捕虜を次々に解放してしまい、その上、女子チームに寝返ったのだという

それを聞いた智樹は唸り声をあげた後、叫んだ

「打ち首じゃああああ！！ 全員捕らえて、打ち首につ！！」

「御館様っ！！」

「なんじゃ、今忙しいっ」

「それが……………」

その伝令の男子生徒は、表情を青白くして、震えた声で伝えた

「囲まれております。四方を」

その言葉が智樹に届いた後、四方から歌が聞こえてきた。

ソレは紛れも無い、空美中の学校の校歌である

「し、四面楚歌……………」

男子の誰かが呟き、智樹は陣営の入り口を睨む。そこには、ニヤッと微笑む会長の姿があった。

「お、おのれ……」

智樹はぐつと雪玉を手に取り、怒りに歯を食いしばった

「ナメるなああああああ！　モテない男の怒りを思いしれえええええ！！」

「あー、わりい智樹。俺はノーカンだから」「……………」

「あれ…恭夜？　それに先輩？」

それと同時に走り去る恭夜と守形。そして、一般性と数名とそこに取り残される智樹

「チクシヨオオオオオ！！うらぎっ」

ならば、お前たちも思い知れ

智樹が叫びきる前に、どこからとも無く声が響く。

その声に、両軍の動きは止まった

踏みにじられた乙女の心を、思いしれえ。

「な、何だこの不気味な声はっ」

唐突に響いた謎の声。そこで、男子の一人が世の帳の奥で、黒い影を見つけた。

「あ、アレはっ」

智樹が見る。そして他のモノ達も

そこには……

人間の何十倍、いや、百倍近くの大きさの雪だるまが智樹たちを見下ろしていた

いや、ただの雪だるまなどではない、そんなに生易しいものではない

「み、見ろ、あれは」

その雪だるまを後ろから見た男子生徒の一人が叫んだ

「ポニーテールっ、あの雪だるま、ポニーテールをしていますっ!!」

……とある地方では、雪だるまは雪の精として描かれる。

ここからは、智樹ではなく恭夜の視点でお話しよう。

守形とともに先に逃げた恭夜は、校舎の屋上で缶コーヒーを飲みながらグラウンドを見下ろしていた。

だが、つい先ほど現れた雪だるま。いや、そはだるまとここでは表記しよう。

アレを見た瞬間にむせ返り、口に含んでいたコーヒーを噴出した。

ちなみに、耳には強化の魔術が施されており、些細な会話まで全て聞こえている

何故なら、彼の行使する魔術よりも高度な術式（呪い、怨念、怒り）が組み込まれており、魔力反応が一切無いからだ。

そもそも、精霊をその身に宿し、一体化するなどという行為は上位の魔術師であるものでも幾らかの段階を踏まなければなしえることなど出来ない。

そう父親に教えられてきた恭夜にとっては驚愕するに値することなのだから。

「いや、ちょっと待て……なんだこの光景は？」

それも、明らかに敵と味方の判別が付いており、智樹の味方を今現在しているものに限って蹂躪されている。

（あー、無理。今回は助けられんわ。あんなの親父でも倒せねえつて。イカロスでも無理じゃねえか？）

漸く落ち着きを取り戻した恭夜は、再びコーヒを口に含み、その光景を眺める。

そはだるまは、数分にも満たない時間で残存兵をほぼ壊滅させ、最後にその巨大な拳をある生徒に振り下ろす

言うまでも無いだろうが……智樹だ

周りには味方が倒れており、その巨大すぎる攻撃範囲ゆえに回避すらもままならない。

要するに、智樹はその拳を避けることもできずに直撃する。

その周りでは、女子チームとモテ男の同盟軍が残党狩りを行っている

（ま、俺はどうなっても知らんって言ってやったし……仕方ねえよな）

女子チームは、既に虫の息となった智樹になだれ込むように雪玉を投げつけている

その後、大将である智樹は虫の息同然の状態で逃げる最中、名も無き女子生徒にトドメを指されたという。

これが、後の世に伝わる『三時間天下』の全貌であった。

（ああ、そういえばあの子も居たんだっけ……）

地上では、アストレアが一人、雪に埋もれて動かなくなった男子達



を見つめつつ、恐怖している姿があった

そんな時、耳に強化の魔術を施していた恭夜の耳に声が聞こえた

……おおい

つまり、彼に聞こえるということは地上のアストレアにも聞こえていることとなる

「おおい、助けてくれえ」

彼女はその場できよろきよろと辺りを見渡すと、彼を発見した

「おおい、助けてくれえ、凍え死ぬ……」

恭夜は足に強化の魔術を施し、屋上から飛び降りる。勿論、彼を救出するために。

だが、アストレアが先に動いたために空中に連続する悪戯鏡トリック・チェインズミラーで足場を造り出し、立ち止まる

そして、その場で眺めることにしたようだ

「もっつ、しょうがないわね。ほら、じっとしてて。じっと」

アストレアは智樹の雪玉に近づき、その固まった雪玉をほぐそうと手を触れる

そこで、彼女は気が付いたように動きを止めた

(まあ、確かに今なら確実に殺れるな……………)

彼女は、しばらくそこで考えるように立ち止まり、智樹に見えない位置に剣を召喚し、ゆっくりと振りかぶった

後はそれを振り下ろすだけで、彼女の任務とやらは一つ完了するのだろう。

(はあ、あの子には悪いけど、トモ坊を死なせるわけにいかないんだよ)

恭夜が足元である連続する悪戯鏡を強く蹴ろうとした瞬間だった

トリック・チェインズミラー

「なあ、それも、『マスターのご命令』ってやつか？」

それを聞いた瞬間、アストレアの身体がこわばれるのが恭夜には見えなかった。だから、恭夜は足を静かに下ろす

何より、彼女の姿は智樹には見えていないし、音も出していないというのに智樹がそう発言したことが気になったからだ

「なっ？」

「はあ……………お前たち未確認生物はどいつもこいつも何一つ自分で決めて行動できないのな」

智樹の首だけがゆっくりと彼女に向けられる。彼の瞳には、ただ驚き、戸惑っている少女の姿が映っているのだろう。

そこには恭夜の姿は映っていない

「それは……………お前が考えて決めたことなのかよ？」

その質問を聞いて、恭夜は思う。

エンジニアロイドとはマスターの願いをかなえるためだけの存在。つまり、そこに自分の意思は存在しない。問題は、それをやりたいかやりたくないかではなく、出来るか出来ないかの二択にされる。

……………ならば、何故作成者はこの子達に感情を与えたのだろうか

ただ命令をこなすだけならば感情はいらない。そもそも、考える機能なんていららないのだ

(そうだな……………トモ坊。お前は、お前はそっいう奴だよ。)

そして、アストレアの動きも止まった。

言われた答えを考えるかのように

そして……

「うるさい……」

彼女は躊躇っているのだろうか、一瞬だが間が開く

「マスターの命令を遂行することにエンジェロイドに存在意義があるんだからっ！ 黙って殺されてよ、もぉおおお！」

アストレアはぐっと目を瞑ると、一気に剣を振りかぶりなおし、バツトをスイングするように智樹の首を狙う

そのために、その場に踏みとどまっていた恭夜の判断が遅れてしまった

「なによっ、かわいそうなもの見るような目をしてええええええ！」

（ヤバ、あの子逆切れしてんじゃん！？）

間に合わない、恭夜がそう思う。智樹に至っては死んだ、そう思ったとき。ソイツは現れた

「久しぶり、アストレア」

智樹をマスターとするエンジェロイド、イカロス。そして、今日はニソフの看病をしているはずの存在

「ひっ？」

「んなつ!？」

刃が智樹の首に触れる瞬間、アストレアの手は硬直するように止まる。そして、急に飛び出した恭夜は勢いのままに雪の上を転げる

そして、アストレアはその場でイカロスに頭を下げる

「イ、イカロス先輩ッ、お久しぶりですっ!」

「う……………ん、元気、そうね」

イカロスは下げられた彼女の頭をゆっくりとまで上げる。

(どうなってんだ……………一体?)

恭夜がそう思いながら立ち上がり、彼女達に近づいていく。

そこで、アストレアは少しだけ身体の緊張を解いた。

(あれ、イカロスの奴……………なんか怒ってないか?)

だがアストレアはいいように解釈したのだろう、笑顔でイカロスの顔を見る

「先輩もお元気そうぞ何より……え？」

恭夜の考えは当たっていたようで、イカロスは彼女の肩をぎゅっと掴む。それも、かなりの力らしく、アストレアのシールドアーマーが少しだけ軋む音がした。その肩をアストレアが見やった後、イカロスに視線を戻すと

（ああ、やっぱり……トモ坊に危険が生じると思ったんだろっなあ）

「アストレア、もし、マスターに何かあったら」

その瞳は真紅に変貌し、イカロスの周辺では静電気が唸りをあげる

（あー、イカロスには戦闘じゃ多分勝てないからなあ……そろそろっ！？）

「許さない……から」

イカロスの掴んだシールドアーマーにひびが入った

アストレアは、イカロスの向こうに鷹のイメージを見る

声の無い絶叫を彼女は上げた

（ムリムリムリムリっ！ イカロス先輩を怒らせたら殺されるっ！  
絶対にこころされるうううう）

そして、幼子のように身体を恐怖で震わせた

（仕方ない、ここは一旦シナプスに戻って）

そこで、フラッシュバックのようにマスターの言葉が彼女の頭を奔る

覚えておけ、デルタ

ベータは裏切り、ガンマーは失敗した。この上お前まで失敗してノコノコ戻ってくるようならば……

彼女のマスターは持っていたグラスを握り締めて割ると

おしおき……だ

そう言われたのである

（か、帰れない）

アストレアは、吹雪の中その場にひざまずいたのだった

そして、恭夜も思う

（おそらくこの子もこっち（地上）に居座るんだらうなあ……今度

も智樹に世話してもらおうとするかな)

こうして、アストレアはシナプスに戻ることも出来ずに、地上での  
サイバル生活に望むことになったのだった



雪の乱・出現させるな危険 (後書き)

いいのだろうか？

こんな感じで？

ああ、無常……頭痛い

就職活動どうしよう……クリエイター学校に行くためにも金は必要だし……バイトの時間増やすかな……

高三にもなって……でも夢のために俺はここで小説を書き続ける。

きつと……

風邪と桜とりんご飴 前編（前書き）

冬も抜け、春が訪れる。

春の木漏れ日は人々を温かく照らし、小鳥のさえずりが、新緑の芽吹く香りが、平穏な日常の始まりを予感させる。

そんな春うらかな休日朝……恭夜はベットの中で蹲すくまっていた。

つい最近には生徒会長の思いつき、娯楽である雪合戦に強制参加させられ、終いにはサバイバル生活を現在送っているアストレア、守形のところに仕方なく食料を与え、ニンフの風邪の看病をし……

その結果

「うう……ごほっ、ごほっ……頭イテエ……風邪引いたかな……」

どうやら風邪を引いてしまったようだ。

しかし、現在の時間はニンフと彼がいつも起きる時間の三時間前。朝の五時前である。

彼は布団の中をもぞもぞと動き、ベットのすぐ隣に設置してある恭夜専用の冷蔵庫の中からミネラルウォーターと頭痛止めを取り出し、

身体を起こして頭痛止めをミネラルウォーターで流し込む

実際のところ、恭夜は幼い頃に一度風邪を引いて以来、風邪を引いたことが無かったので少々戸惑い気味のようだ

「ああ… やっぱり会長の思い付きには叶わんわ… なるべく誰にも悟られないようにしないとなあ… 心配掛けるのもアレだしさ」

一通りばやくように呟き、再び枕に頭を乗せて眠りに付こうとする。

だが、頭痛止めを飲んだにも関わらずに頭痛は治まるどころか、頭の中に近所迷惑も考えずに夜中の三時頃まで土木工事をしている工事現場があるのではないかというくらいにガンガンと痛む

だが彼も自分の表情の制御や、痛覚の偽装などの魔術は習得しているので、それを使いなんとか日常レベルまで様々なものをカットする。

だが、通常ならば頭の中で行われる演算などと言ったものができないために、恭夜は紙にそれらの術式を書き込み、ポケットに入れることで代用することに決めたようだ

しかし、彼はわかっている。そのようなことをしてもその場凌ぎでしかないという事を。

そもそも、彼は父に言われているのだ。

『感情の制御、痛覚の偽装などの魔術は日常では余り使つな。その

魔術はあくまで『偽装』し偽っているだけなのだからな。つまり、その効果が切れてしまえば結局その身にすべて降りかかる。そのことを忘れるな』

要するに、彼の父が言いたかったことは痛みはどこまでも続く。だから、我慢する必要があるときに無理をするなどということを書いたかったのだろう

だが彼は親友や、友人、そして新たな家族を手にしてしまった。

今まで失ってきたものを取り戻した。だからこそ再び失うことを恐れている。

だから、彼は勘違いしてしまう。

『誰にも心配を掛けない』ということが、誰にとっても幸せなことであるということ

しかし、彼もまたそれが間違いであるということに気が付いているはずなのだ

だからこそ、彼は気が付きたくない。

もしものことを考えると、彼はどうしても孤独が怖くなってしまっから

恐れてしまう。今の幸せがどこかに消えてしまうのではないかと

「親父…俺はやっぱり魔術師には向いていないみたいだよ……」

最後にそう呟き、彼はベットの中で静かに眠るのだった

## 風邪と桜とりんご飴 前編

春の木漏れ日は人々を温かく照らし、小鳥のさえずりが……以下略  
ともかく、そんな春うらかな休日朝。

絃城家に家族として迎え入れられた彼女は何もすることもなく、少しだけだが違和感を感じさせる私服姿の恭夜の横で、彼が彼女の為に大量に買い込んでいるお菓子を食べながら、テレビを眺めている

（私は電子戦用エンジェロイド、タイプベータ、ニンフ。マスターのいないエンジェロイド）

ツインテールの少女は、面白くなさそうにテレビのチャンネルを変え。まだ彼女の好きな昼ドラが始まるまでは相当な時間が空いているため、先ほどから面白そうな番組はないのかと、リモコンを弄ってはいるが、どうも目当てのものは見つからない

（エンジェロイドとはマスターの命令を遂行することに存在意義があるわけだが……私にはそのマスターがない）

青く透き通った綺麗な髪の少女……ニンフはゆっくりと後ろ、自分の背中へと視線を送る。そこには、もう、あの七色に輝く綺麗な透明な羽は無い。先のハーピーとの戦いで損傷し、そのままの状態である

それを確認したニンフはどこか遠い目をしつつ、ため息を吐いた

(だからこうしていつもテレビばかりを眺めているわけだが……)

『それでは次のニュースです』

テレビから聞こえてくるアナウンサーの声。同時にニンフの目に淡い桃色が反射した

「ん？」

ニンフが視線をテレビへと戻す。そこには……

『全国的にいよいよ桜が満開ということで、ここ空美町でも桜祭りが開かれ、連日たくさんの人たちが訪れています』

桜一色に染まった画面が映され、空美町の桜祭りの盛況振りを報道するニュースが流れていた。

(桜……そうか、もう、あれから一年も経ったんだ)

一年前。それは、彼女がイカロス連れ戻そうと地上に降りてきた時

智樹、守形、そはら、そして恭夜にであった時

恭夜と初めて出会い、敵対していた時でもある。

そして、彼がマスターという呪縛から開放してくれた時

何より……彼に、生まれて初めて優しくされる嬉しさを教えられたとき

ニンフの頭には、去年の桜祭りでのことがよぎっていた。

桜祭りの最中にカップルの覗き見をしていた智樹。それを付け狙っていた私に『楽しむ』ということに咳き去っていった恭夜。

そして、モテない事を訴える智樹。可哀想だからという理由で持て男ジャミングをかけてあげたら、本人からよりも先に恭夜がありがとうの言葉と、お礼にりんご飴をくれた恭夜

春は、ニンフと彼ら二人との思い出が詰まった季節でも合った。

「っ？」

何故か顔が赤くなって、ニンフは慌てて、両の頬を抑える。なんだかとてもむずがゆい思いになったのである

（恭夜……あのときのこと覚えてるかな？）

別に覚えていようがまいが、それは恭夜の勝手である。ちなみに、智樹が入っていない理由としては単純に恭夜へ対する想いのほうが



大きいからだろう。

しかし、ニンフには分かっている。彼が覚えていようといまいとそれは彼自身の勝手だということを。

けれど、何故か彼と記憶を共有できたらと考えると、とても嬉しい気持ちになる

「……………ちに、……………とな」

「えっ?」

恭夜の呟きに驚いて、ニンフは彼を観察する。だが、恭夜は複数の紙に何かを書いているだけで、こちらに話しかけてきたわけではないようだ。

「?」

不思議そうに小首をかしげるニンフをよそに、恭夜は朝からの悩みを心の中で抱いていた

その原因は、急激に悪化してしまった風邪のこと。

素直に告白してしまえば別段気にするほどのことでもないというのに、彼は彼女や友人達に余計な心配を掛けたくないという思いで隠し通そうとしている

だからかわからないが、彼は急に何かが思い立ったように、何かを書いていた紙をポケットにねじ込むとゆっくりと立ち上がる

「そつだな」

そして、壁に掛けられている上着を羽織ると

「桜祭りにでも行くか……」

「えっ？」

そんな台詞を吐いて、棚から財布を取ると上着のポケットに入れた

(恭夜……もしかして、覚えてるのかな?)

驚きの表情は直に喜びに変わり

「わーいっ」

ニフはいそいそと外出用にと恭夜に買って貰ったワンピースをクローゼットからもって来るのだった。

まるで、久しぶりのお出かけにはしゃぐ子供のようにである

そして、彼女は桜祭りで彼の行動が気になって仕方なくなってしま

うのであった

「……………」  
「……………」

花びらが舞い落ちる公園では、親子連れやカップルが楽しそうに出店を回っている。綿菓子を頬張る子供や彼女に金魚をプレゼントしようとして躍起になる少年など、見ていてとても幸せそうな雰囲気である。

ならば、どうして彼と彼女が無言になってしまったのかというと

そんな桜祭りの見物客が一切近寄らない一角があり、そこに彼の親友が……………

「なあ、なにしてんだ？」

「なに……してんの？」

ほぼ同時に呆れ顔になって尋ねる二人と

「なにつて、みりや分かるだろ？ 叩き売りだよ、叩き売り」

ねじりハチマキに丸ひげ、サラシにハツピという出で立ちの智樹が  
みかんのダンボール箱の前に立って応えるのだった

みかん箱には『ともき屋』と手書きで書かれている

「ほしいDVDがあるんだよっ！ でも金がねえ！ そこで桜祭り  
だ。人はいっぱいいる、つまり売り上げもがっばがっば！」

オレって頭いい……そう呟く智樹に、ニンフはかなり冷たい視線を、  
恭夜はまたかと言った哀れみの目で彼を見る

（ま……仕方ないか。智樹だもんね）

（あー、何でコイツは平然とこんな馬鹿なことやっていられるん  
だろーな…痛っ!?!）

一瞬だが恭夜の身体がびくつと震える。

だが、ニンフはともき屋のラインナップを見て、至極当然な質問をしていた。

「ちょっと持って……こんな売れるの？」

「え？」

ダンボールの上に並べられたものは…

『梅干し、の種』(一個二十円)

『パンツロボ(半壊)』(二百円)

『じいちゃんの遺影』(プレミアム価格二万円)

確かに、コレでは売れる道理はない

「売れるわけないな……もう少し商品を考えるよ」  
「なっ？」

ニンフに言われ、恭夜にも言われ、智樹は少し後ずさる

「だ、だけどっ」

「売れるわけないだろう」

「うおっ？ 監視？」

そして、突然掛けられた声に智樹は更に大きく後ずさる。そこには、守形、そはら、イカロス、会長の四人が立っていた

ちなみに、イカロスは頭にお面を二個、手首には風船三つ、指には水ヨーヨーが四つ、背中には綿菓子や焼きとうもろこしを背負っており、おそらく会長が面白がって買い与えたものと推測された

「でも出店かあ、面白そうねえ。会長達もお店出してみましようかあ」

会長は流行っていない智樹の店を見る否や、にやあつと微笑むとそんなことを口にした

「ちょっとやめてくださいよ、ただでさえライブル店多いのに」

「イカロスさん、一緒にお店出そ？」

「は……い」

「やめろつて！」

「仕方ない。俺も秘蔵の品を売ってみるか」

「ニンフ、俺達も出してみるか？」

「どつちでもいいわよ？」

「ら、らめえ！」

智樹の叫びも虚しく、そはらとイカロスの『てんしのおべんとつやさん』、会長の『会長のおもちやさん』、守形の『セレクトショップ 新・大・陸』がオープンする運びとなった。

それも、当然どれも『ともき屋』のまん前である

ちなみに、恭夜とニンフは智樹の必死の泣きつきがあったために智樹の手伝いをする事になった

「さあ、いらっしやいらっしやい！イカロスさんの作ったおいしいおいしいお弁当ですよ！」

イカロス、そはら、二人の美少女が切り盛りする店は、その弁当の味も相まって、男性客を中心にどんどん売り上げを伸ばして行き

「ベレッタM92にトカレフTT-33……もちろんオモチャ、オモチャよあ？」

妙にリアリティのある『オモチャ』を売る会長がそはら・イカロスペアに追いつがる。

一方……

「……………」

守形の『セレクトショップ 新・大・陸』、『ともき屋』共に客足はゼロのままである。

(クソツ、完璧に客を取られちゃった。このままじゃ)

そもそも、あんな商品が売れるはずも無いということもあり、彼は全ての面で完全敗北しているのだ

だが、智樹はそんなことはいざ知らずといった風に唇を噛み締め、打開策を練る。だが、いい考えは浮かばず、助けを求めるように周りに視線をやると、先ほどから桜の木下で気持ちよさそうに眠っている恭夜と、その隣で胸に大量の饅頭を抱えて食べているニンフと目が合った

「きよ、恭兄っ、ニンフ、頼む、力を貸してくれ」

「むうあ？」

「え？」

「頼むよ！ どうしてもDVDが欲しいんだ！」

恭夜は眼を擦りながら身体を起こし、ニンフは饅頭をしばらくもぐもぐと咀嚼しながら

「別にいいけど……」

「恭夜がするなら、私もいいけど」

ゆっくりとそう答えた



「あ、ありが」

「ただし、忘れてるようだから言っておくけどな。親しい友人とかが近くにいるときは恭兄って呼ぶな…昔からの約束だろ？」

「うっ？」

それは、二人の暗黙の了解である部分。知らないうちに、誰が言っただけでもないが二人は無意識のうちに他に友人などがいる場所で、恭夜は『トモ坊』、智樹は『恭兄』となるべく言わないようにしていた

だが、智樹はそれを忘れるほどにDVDが欲しかったようで、ニンフがいるにも係わらずに『恭兄』と呼んでしまっていた。

だから、恭夜は確認も兼ねていたのかはわからないがそれを条件に出したようだ

「ねえ？」

だが、ニンフにはその理由が分からない。だから不思議に思い尋ねる

「どうした？」

「その『恭兄』って、どうしてトモキは呼ぶの？ それに、恭夜もトモキのことを『トモ坊』って呼ぶよね？」

「に、ニンフっ！」

それを聞かれた恭夜は右手を自分の頭に当てる

「ねえ、どうして？ どうして？」

「やめろって、ニンフ！」

そして、智樹もその理由は当の昔に忘れてしまっているが、何故かそれは聞いてはいけないことなのだと思いいニンフを止めようとする

「どうして……だろうな。いや、本当にどうしてだろうな」

「えっ？」

「気が付いたらそう呼ぶようになっていた、それだけの理由。たったそれだけの理由だよ。」

だが、恭夜は思い出すようにそう呟くように答えただけだった。

「まあ、そんなことはいつでも話せるだろ。な、ニンフ？ だから、智樹にアイディアを出してやるうな」

「む、分かった。じゃあ今度はちゃんと教えてね？」

「分かってるって、いつか必ず話してやるからな。」

「うん、分かった」

智樹はその光景を何故か内心焦りながら見ていた。

だが、ニンフがゆっくりと頷くのを見てその焦りは消え去った

「それで、まあ。本題なんだが……ここに今並んでる商品は廃棄にするとして、ニンフ。何かアイデアあるか？」

「なっ、廃棄っ！？ 俺の意思は無視っ！？」

尋ねられたニンフは数秒考えると、答える

「私もそのアイデアには賛成。だからね、アルファーたちみたい  
に食べ物屋にしたらいいと思うの。たとえば、お好み焼きとか」

「まあ、確かに無難だしいいアイデアだと思うな……で、作れる  
のか智樹？」

「お好み焼きなら得意だ！ 任せとけっ！」

ということ、新装開店

「さあ、安いよ旨いよ、特製お好み焼きだよっ！」

熱した鉄板の上でお好み焼きをひっくり返しつつ、『お好み焼き  
智樹』と書かれた出店から、通行客へと声を掛ける。既に丸ひげな  
どは消しており、爽やかにバンダナを頭に巻いている

ちなみに、恭夜とニンフはその後ろの方にある桜の木下でその様子  
を眺めている。

さらに余談になるが、出店や鉄板などは会長の家の五月田根家から借りたものである

「トモちゃんお好み焼き屋を始めたんだ。じゃあ一つ貰おうかな」

一旦、お店を休憩したそはらとイカロス、会長は智樹が新しい店を始めたと聞きつけ、様子を見に来ていた

「へい、まいどー」

爽やかな笑みをそはらたちに向け

「それで……お客さんたちのお好みは？」

だが、その笑みは一瞬で邪悪な変態なものへと変貌する

「は？」

「こちら、当店のメニューとなっております！」

バンと智樹が指差した先には、お品書きが書かれている

・おっぱい盛り…五百円

「程々が好きなアナタはコレっ！ おっばい盛り！」

とって、キャベツで上手く丸めて固めて乳房のようにし、梅干しを頂点に置いたお好み焼きを会長に渡した

・おっばい半玉…四百円

「控えめ好きなアナタはコレっ！ おっばい半玉！」

とって、キャベツの量を少なくし、少し盛り上がっている程度にしたお好み焼きをニンフと恭夜に手渡した

ニンフは軽く退きながら智樹を眺め、恭夜はとりあえずそれを口にした

・おっばいF玉…七百円

・おっばいE玉…六百円

「そして、おっばい愛が深すぎるアナタにはこれっ！ おっばいF玉、おっばいE玉」

と違って、二段盛りをイカロスに、三段盛りをそはらに渡した。

当然、そはら、イカロス、会長の三人はどう反応すればいいのか分からず、渡されたお好み焼きの載った皿を眺めるだけである

「味は確かにいいんだけどさ……セクハラで警察のお世話になりたくはないだろ？ それと、周りを良く見てみなさい」

「恭夜……食べたんだ」

一人、冷静に渡されたお好み焼きを食べていた恭夜はニンフのお好み焼きを指差しながらそう呟いた。

そして、智樹は恭夜に言われたように周りを見ると、そこには集まって、ひそひそと噂話をしている女性達がこちらを見ている姿があった

「アレっ？」

智樹はごしごしと眼を擦ってみるが現実が変わることは無い。

「ニンフ、お好み焼き屋はコイツには無理のようだから次のアイデアどうぞ」

「うん。お好み焼きやがダメなら、じゃあ、アイドルグッズとかはどう？ 女の子、こつこついうの好きでしょ？」



恭夜は桜の木下で欠伸をしながら、うたた寝を始めている。

ニンフはその横で寄り添うように抱えていた饅頭を食べ、桜の花びらを片方の指でつまむ

という訳で、新装開店第三段！

「ねえ、お兄さんお兄さん。どう？ ハアハア、現役中学生のパンツだよ？ 今ならブロマイドもつけて安くしとくよお？ ハアハア」

智樹の手には家の庭で拾ったそはらのパンツと彼女の隠し撮りの写真が握られていた。もはや、ただの犯罪者である

そして、その後ろにはチョップを構えたそはらが立っていた

瞬殺…そして撃沈

「ぐう……………」

「あ…恭夜、寝ちゃった……………」

ニンフはその光景を呆れ顔で見た後に、隣でついに眠ってしまった恭夜の顔を見る

(どうしたんだろう……………いつもはこつこついうときでもちゃんと起きるのに)



ニンフはそれについて考えてみるが、よくよく考えてみると、恭夜はニンフに、いや、誰に対しても弱みを見せたことが無い。

それに、どんなときでも飄々としている。

(あれ……そういうえば、恭夜って一度でもトモキとか私に隙を見せたことあったっけ？ それって、もしかして……)

だが、直にニンフは頭をぶんぶん振ると、大きく深呼吸をした。

(ううん。恭夜に限ってそんなことないよね……無理なんてしてないよね?)

そんな時、目の前で倒れていた智樹が急に立ち上がる

「ん、どうしたの？」

ニンフの声掛けに、智樹は顎あごに手をやった。

「恭夜…モテ男………そうか。ニンフ！ モテ男ジャミングだ！」

智樹は良いことを考え付いたというように、そう叫ぶのだった

風邪と桜とりんご飴 前編（後書き）

どうも、お久しぶりです。作者の絃城恭介です

ほのぼの…思惑……

上手い具合に表現できていたら絃城としては嬉しいです

最近思った以上に時間が無く、書き溜めることも出来ない現状です。

次はいつだせるのかなあ……

カオスに日和……ダイダロスに空のマスター…オレガノ、そしてオ  
リジナルのタイプゼロ。

絶対に詰まるだろうなあ。

なにか、サブストーリーで執筆してほしいものとかありましたら遠慮なくお願いします。

それでいくらか書き溜めを作れますので……

それでは次回までいつになるかは分かりませんがよろしくお願い  
いたします

ではノシ

風邪と桜とりんご飴 中編(前書き)

彼は夢を見る。それは、遠い遠い昔の夢

( コレは智樹たちと出会うよりもっと前の、幼少の頃の記憶？ )

そこには、白一色の純白に包まれた病室だった。ベッドの上には、幼子を抱いた懐かしき母の姿が見える

その隣には、魔術師らしからぬ笑顔を零して母と笑っている父の姿があった。

彼は、望まれて生まれてきた子供だった。

一切の穢れを跳ね除け、温室のような環境で甘やかされて生きてきた。彼もそれを幸せに思っていた。コレは、彼が一歳になったころの記憶

次に見えた光景には、一人で書齋に籠って本を読んでいる彼の姿があった。

彼が読んでいる本は『泣いた赤鬼』

( この話の内容は確か )

とある山の中に、一人の赤鬼が住んでいた。赤鬼はずっと人間と仲良くなりたいたいと思っていた。そこで、「心のやさしい鬼のうちです。どなたでもおいでください。おいしいお菓子がございます。お茶も沸かしてございます。」という立て札を書き、家の前に立てておいた。

しかし、人間たちは疑い、誰一人として赤鬼の家に遊びに来ることはなかった。そのことを赤鬼は非常に悲しみ、信用してもらえないことを悔しがり、終いには腹を立て、せっかく立てた立て札を引き抜いてしまった。

そして一人悲しみに暮れていた頃、友達の青鬼が赤鬼の元を訪れた。赤鬼の話聞いた青鬼はあることを考えました。

それは、「青鬼が人間の村へ出かけて大暴れをする。そこへ赤鬼が出てきて、青鬼をこらしめる。そうすれば人間たちにも赤鬼がやさしい鬼だということがわかるだろう。」という策であった。これでは青鬼に申し訳ないと思う赤鬼だったが、青鬼は強引に赤鬼を連れ、人間達が住む村へと向かうのだった。

そしてついに作戦は実行された。青鬼が村の子供達を襲い、それを赤鬼が懸命に助ける。作戦は成功し、おかげで赤鬼は人間と仲良くなり、村人達は赤鬼の家に遊びに来るようになった。人間の友達が出来た赤鬼は毎日毎日遊び続け、充実した毎日を送る。

だが、赤鬼には一つ気になることがあった。それは、親友である青鬼があれから一度も遊びに来ないことであった。今村人と仲良く暮らせているのは青鬼のおかげであるので、赤鬼は近況報告もかねて青鬼の家を訪ねることにした。しかし、青鬼の家の戸は固く締まっております、戸の脇に貼り紙が貼ってあった。

それは「赤鬼くん、人間たちと仲良くして、楽しく暮らしてください。もし、ぼくが、このまま君と付き合っていると、君も悪い鬼だと思われるかもしれません。それで、ぼくは、旅に出るけれども、いつまでも君を忘れません。さようなら、体を大事にしてください。ぼくはどこまでも君の友達です。」という青鬼からの置手紙であった。

赤鬼は黙ってそれを2度も3度も読み上げ、涙を流して泣いた。その後、赤鬼が青鬼と再会することはなかった

(こんな内容だったはずだ……)

このときの彼の年齢は三歳。

だが、彼にはこのお話に出てきた言葉で一つだけわからないものがあった。

その言葉とは『友達』

別に、『友達』という漢字の読み方がわからない訳ではない。彼には『ともだち』という言葉の意味が分からなかったのだ。

(ああ、確か……本を親父に見せて聞いたんだよな )

『お父さん、ともだちってなに？ ぼくのもだちってどこにいるの？』

そこに居た、彼の父と母はお互いの顔を見ながら泣いた。

だが、彼にはどうして二人が泣いているのかわからなかった。

『どうして泣いているの？ 何かいけないことでもきいたの？』

『違うよ、恭夜……母さん、恭夜を外に連れて行ってやってくれな  
いか。私にはその子と一緒に笑う資格なんてないんだ』

『本当に良いんですか？ この子はそんなことを知ってもきくとア  
ナタを怨んだりしませんよ？』

『いいのだよ、母さん。どうせ厳しく当たることになるのだ、ならば私は厳しい父親でいるよ……』

その日から彼と父親の会話は一切無くなった。『友達』の言葉の意

味と、『友達』を手にすることを望んでしまったから。

(そうだ、親父はこのときから………本当に親子そろって不器用だよ。なあ、親父)

そして、彼に友達ができた。

その友達は非常に明るく、いつも笑っていて、彼と一緒に笑ってしてくれた

そんな毎日を過ごす中で、その友達からある女の子を紹介された

『トモちゃん、そのひとだあれ?』

『そはらの新しいともだちだよ』

『よろしくね、そはらちゃん』

彼と少年と少女は互いに時間さえあれば遊ぶようになっていた。

そのときから彼は孤独というものを嫌いになった。

家に帰れば母がいるが、父は彼と一切の会話をしない。そのせいか、彼は父を苦手になっていく

(そういえば…小学の中学年くらいに喧嘩したんだよな)

そして九歳の時に、今まで仲良くしてきた友達との、初めての別れを経験する



その理由は、彼の父親の発した言葉が原因であった

『恭夜、こっちに来なさい』

『え…なに、父さん？』

何年ぶりかに話しかけられた父の呼び声に、彼は言われたように父の元に行く

そこで、彼に告げられた言葉は日常を壊すには十分過ぎた

『空美町から引越すことになった。今仲良くしている友人には別れを言っておきなさい』

『え……どう…して？』

彼の父は引き出しの中から銀色の指輪を取り出すと、それを指に嵌めて何かを呟く

そして、それが終わると同時に少年の足が鉛のように重くなり、動かせなくなる

『恭夜……お前には絃城を継いでもらう。その修行の為に、最低十年はかかる』

『絃城を…継ぐ？ どうしてそのために修行なんかが必要なの！？』

『魔術師……絃城家は先祖代々受け継がれてきた魔術師の家系なのだ。そして、お前にはそれを継ぐ義務がある』

父の目は逃げるということを許さない目だった。何より、彼は足を動かせない

だが、そんな父の表情は何処か辛そうだった

彼はそれに気が付き、問うのをやめた

『分かりました……』

『私のことを怨んでもかまわない……嫌ってくれてもかまわない……すまない。本当に、すまない……』

そして、彼は次の日に今まで仲良くしていた少年にわざと嫌われるようなことを言って、大喧嘩をした。

それは、とても小学生のするような喧嘩ではない。殴り、蹴り、お互いが本気で傷つけあった。

結局、その喧嘩に勝利したのは彼だった

『悪いなトモ坊……俺の勝ちだ』

『なっ……このっ……！ 恭兄のバカやろおおおお……！』

そして、彼は次の日に空美町からいなくなった。

(そうだ……俺はこの日から強くなるって決めたんだ。孤独なんて気にならなくなるくらい強くなるって……)

そのときから彼は孤独になった。

父から魔術を教わっている最中にすら孤独を味わっていた。父は他人で、彼は魔術を教えてもらっただけの師弟関係だと思った。

そこから、彼は死ぬ物狂いで努力した。

天才は努力をして天才となる。彼は本来ならば十年もかかるという修行を少しでも早く終えるために、考えた。

そして、父を越すまでは行かなかったが、魔術師としての知識を全て頭に叩き込んだ。

(ああ、親父……俺は魔術を知ってよかったと思う。誰かの力になることができるからさ)

遠い日の夢を見た彼は、今をどう思っているだろうか？



風邪と桜とりんご飴 中編

春の木漏れ日が桜の木から差し込む。爽やかな風は恭夜の頬を撫で、眼を覚まさせた

しかし、恭夜が目を覚ました要因としてはそれだけではない。偽装したにもかかわらず痛み続ける頭と、突如現れた雷雲の音によって目を覚まさざる終えなかったのだ

「なあ、ニンフ……俺が眠ってる間に何があったんだ？」

「えつとねえ、トモキに頼まれたからモテ男ジャミングを掛けたの」

立ち並ぶ出店に風が吹き、舞い上げられた桜の花びらが一直線にそこに集まっていく。その桜を目で追うように女性たちはそちらへ視線を向けていく

そこには、人のシルエットがあった。

「なんとなく状況は理解したけどさ……ニンフ、まさかうつかり俺にも掛けちゃったとか言わないよな？」

「えっ、どうして？」

そして、そのシルエットの方とは別に恭夜に視線を向けてくる女性の姿もあった。

「流石にそんなことしないよな」

「ゴメン…手伝わって言ってたから…で、でもっ！ 恭夜には申し訳程度に掛けたくらいだから、単純に恭夜の元の格好良さもあるんだよっ」

「本気かよ…つかさ、そういうことは好きな相手ができたら言うんだぞ。わかったかニンフ？」

「えっ、あ、うん」

「どうすっかなあ…あー、頭イテェ」

更に痛み始めた頭を抑え、ポケットの中にあるはずのとある紙を探す。だが、その紙はポケットの中から見つからない

( ちょっと…まで。あれが無いと…偽装ができないぞ… )

衣服にあるポケットを全て探すが、何も出てこない

「に、ニンフ…俺のポケットに入ってた紙とか知らないよな？」

なるべく無理をしているのをばれないように恭夜はニンフに尋ねる。

「紙？ 紙って、ポケットに入ってた落書きの書かれた紙？」  
「た、多分それだっ」

ニンフはうーんと可愛らしく悩むと、周りを探し始める

「たぶん恭夜が眠ってる間に、風に飛ばされたと思う」  
「ま、マジかよ……」

(やべえ…こんな会話してるだけでくらくらしてきた)

恭夜は智樹のほうを見るが、既に女性に囲まれた上に

「ナンバーワンの、TOMO K Iです！」

と、ホスト風の白い服を着て、打ち震える女性達に笑いかけている  
ために助けを求めるのは不可能

次に自分の隣に居るニンフを見るが、小さく『がんばって』と言っている  
のでおそらく助けにはならないだろう

そんなことをしているうちに、先ほどの女性陣がこちらに向かって  
くる

(そうだ、守形先輩っ！ どこだ、先輩)

必死にきよろきよろと辺りを探してみるが、時既に遅し。女性の波  
は留まることを知らず、ニンフと恭夜を囲んでいた

(く…魔眼の開放も出来ない…それにニンフを置いていくのも論外)

どうすることも出来なく、恭夜はニンフの手を引いて智樹のほうに向かうのだった

(仕方ねえな…トモ坊と馬鹿やって何とかやり過ごすか…)

恭夜もどこから取り出したのかわからないが、智樹とはまた違った味の出ている黒いスーツに身を纏い、周りを囲む女性達に笑いかける  
それが始まりだった。

『キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアア!』

黄色い声が空美町の空に轟いた。



途端、先ほどとは比べ物にならない量の女性が智樹と恭夜の元になだれ込む女の波、波、波、大波小波！

『抱いてええええええええ！』

「オツフ」

「ちよっ！」

ニソフの目の前で、彼ら二人は女性の波に飲み込まれていった。

「困るよ、君たち。まずはドリンクを入れてくれないと」

「まっ、入れてくれたらコイツがサービスしてくれるぜ」

恭夜の発言に、近くの女性二人がむぎゅっと智樹を両側から抱きしめた

「オウツ！」

「私入れるわ！」

「私もよ」

その声を遮るように前後左右から更に手が押し寄せってくる

「オオウ！」

「何本だつて入れてあげるんだから」  
「私だつて！」

そして、青空ホストクラブとも言つべき出店にあるソファアに智樹が腰をかけると、その周りを女性が取り囲むようにして座った。

智樹ハーレムの完成である

「ねえ、アナタはサービスしてくれないの？」

「ええ、申し訳ございませんが家族が見ていましてね。私は裏方に徹しているんですよ」

「あら、ちよつと残念ね」

そんな智樹の後ろの方ではせつせとドリンクを運んだりしている恭夜が別の女性に声を掛けられているようだが、全てを華麗に受け流している。

だが、誰にも気付かれてはいないだろうが相当の汗を流しているためにスーツの中はぐっしりと湿っている

「恭夜っ、飲み物足りないぞー！」

「分かつてるっ、今そつちに運ぶ」

そんな光景をぼつと眺めているニンフは違和感を感じる。

それは、前回に感じた微妙な違和感。

( やっぱり… 恭夜辛そうにしてる。調子でも悪いのかな？ )

刹那、ニンフは胸をぎゅっと手で押さえた。

( えっ、何？ 今、動力炉が痛く…… )

再び、チラツと恭夜を見る。そこには、嬉しそうに女性に囲まれている智樹に表情一つ変えずに忙しそうにドリンクを運んでいる恭夜の姿があった。

だが、その表情はほとんど感情が込められていない。ただ、無理して作った笑顔のようだ

( 何だろう、恭夜は何も言わないし、私を大事にしてくれているのは嬉しいよ… けど、どうしてそんなに辛そうに笑顔を作っているの？ )

そう思うと、嬉しさと何か分からない感情がニンフに芽生える

「ピンドン入りマース！」

「了解っ」

だが、やはりそこには先ほどと一切表情を変えずに笑っている恭夜の姿がある。そして、智樹の声に応え、ピンクドンペリ…のビンに入ったジュースを彼の元に早足に持っていく

「シャンパンタワー入りマース」  
「了解」

置いてある机の上に器用にシャンパングラスを並べ、組み立てていく。そういった作業の合間に恭夜の表情を見ると、先ほどとは打って変わり、一瞬だけが激痛に耐えるような厳しい表情をしていた。だが、直にその表情から作り物の笑顔になり、辛そうな部分なんて微塵も見せない

( やっぱり…おかしいよね。 あんな辛そうな表情してるんだもん )

恭夜は素早くシャンパンタワーを組み立てていく

「トモキタワー、入ります」

そして、作業中、そんな声が聞こえた

「はあっ？ トモキタワー？」

恭夜も流石に訳が分からず、智樹のほうを見ていた

そこには……………

「お待たせしました、トモキタワー、入ります」

ブリッジの状態、ズボンを脱ぎ、股間の部分にピンを立たせている智樹がいた。

それを興奮した表情で見つめる女性達。その視線を一身に受けながら、引き締まった表情で周りを見る智樹。

その瞬間に、ニンフに『ぶちっ』と何かが切れる音が聞こえた。

その音のした方向をニンフを見ると、頭を抑えながらニンフを手招きする恭夜の姿があった。実に、ニンフがそれに気が付き移動するのにかかった時間は一秒とかならなかった。

「どう…したの？」

「モテ男ジャミングを解除しろニンフ……流石に俺もキレそうだから」

「う、うんっ……い、今すぐ解除するねっ」

恭夜の普段は絶対に見えないような怒りの表情に、ニンフは後ずさりながらもモテ男ジャミングを解除する。

恭夜はそれを確認するや否や、ニンフをお姫様抱っこのような体勢で持ち上げ、その場を即座に離脱し、智樹を遠めで見れる桜の木下で止まる

（お姫様抱っこ……嬉しいけど、恭夜の身体凄い熱かった……本当

に大丈夫なのかな？)

智樹にゆっくりと女性達が近づく。そして、恭夜がその場から消えたことに気が付かぬまま、彼女たちに智樹が笑いかけると

「トモキタワー、入りま」

瞬間、トモキタワーは、女性達に踏み潰された。しかも、ヒールで

当然だが、その下にある智樹の男の子の部分も一緒に

「あ、あれ？ オ、オヤオヤー？」

智樹が状況を理解する前に

「ちよ、キミたち、ぎゃあああっあ！」

女の子達から殴る蹴るの暴行を受け、結局……………

「な、なぜ」

出店は破壊され、智樹自身もボロボロにやられてしまっていた

「何故だつて？ そんなことも聞かないと分からないダメな脳みそになつちまったのか？」

「きよ、恭…夜っ！？ ヒイツ、す、スミマセンッ」

そこには、鬼の形相の如く怒りを露にした恭夜の姿と、隣でそれに脅えるようにしているニンフの姿

「俺も多少のことまでは許すつもりだったが…以前にも言った事があつたよなあ？」

「他人の迷惑を考えろでありますっ！！」

「そつだ、分かつてるなら別のこと探そつな。分かつたか？」

「わ、分かつたであります」

そついうと、恭夜はニンフの方を見て尋ねる

「そついえばさ、さつきから食べてた饅頭つてさ、どつから買つてたんだ？」

「え？ 買ってなんかないわよ。ほら、こつやって桜の花びらを捕まえて」

と言つて、落ちてきた桜の花びらを背伸びしながらキャッチした

そして、いつからそこにあつたのか、天使の羽が装飾で付けられている機械の上の穴にぽとツと花びらを入れた

すると、ニンフの持っているのと同じ饅頭がポンスッと出てきて、あらかじめ置いてあるざるの上にぽとんと落ちた

「結構おいしいけど、食べる？」

もぐもぐと食べながら、出来立ての一つを恭夜に差し出す

恭夜はそれを受け取り、口に入れる

「ん、確かに美味しいな。って……ニンフ？」

「なに？」

「コレを初めから商品にすればよかったんじゃないか？」

「えっ」

そう言って、恭夜はニンフの頭の上に手を乗せて撫で始める

ニンフも気持ちよさそうに撫でられているのを見て、智樹が不貞腐れたように恭夜に言葉をかけようとしたとき

「あの……」



違う誰かに恭夜とニンフに声が掛けられた

「これ、いくらですか？」

そこには、興味津々な女の子や子供連れの母親が集まっている

恭夜はニンフを更に撫でた後、智樹と顔を見合わせる

そして、三人で頷き、笑顔で『お客様』に声をかけた

『いらっしやいませ。天使のおとしものへようこそ』

そして、結果

「フハ、フハハハ。くるしゅうないくるしゅうない」

大儲けであった。

「ま、コレもニンフのおかげなんだから感謝しろよ智樹」

「分かってるって。いろいろ紆余曲折もあったけど二人のおかげだよ、ありがとう」

智樹が二人に向かってお礼の言葉を述べると

「ううん。恭夜のアイディアが無かったら成功しなかったから、恭夜のおかげだよ」

「いや、ニンフがいなかったら……成功……できなか……」

その瞬間、恭夜の足がふらふらとよろめき、終いには地面に崩れ落ちた

「なっ、恭夜っ！？ どうしたんだよっ！？」

「え、うそっ。やっぱり……気のせいじゃなかったんだ」

「どういうことだよニンフっ？」

「え、だって…恭夜の親友のトモキが気付いてないから私の気のせいだと思ってたのに……」

「そ、そうだっ！ 俺、みんなのこと呼んで来るから、ニンフは恭夜の事見ていてくれっ！！」

「えっ、ト、トモキ！？」

先ほどの馬鹿をやっていた智樹の姿はどこにも無く、真剣にこの状況を何とかしようとしている。

ニンフは恭夜が突然倒れたことで、少し焦っていたが、智樹の曖昧だが的確な指示のおかげで何とか落ち着きを取り戻すことができたようだ

そして、冷静になったニンフの目の前には頭を抑えながら蹲る恭夜

の姿。

それは、今までに見たことのないくらいに弱さを曝け出していた

「ねえ、恭夜はどうしていつも何も言ってくれないの……………」

ニンはそう小さく呟き、桜の木下まで彼を運び、膝枕の上で彼を眠らせるのであった。

風邪と桜とりんご飴 中編（後書き）

前書きの部分は完全に蛇足だった気がすると思っています作者の絃城です。

もはや前書きほとんど関係ない。

結構ペースをつめて書いてはいますけど、プロットが適當すぎてここまで書くだけでも丸一日かかります

まあ、前回からの書置きもありましたのでこの速さで投稿できましたが……

次回、風邪と桜とりんご飴が漸く完結する予定。

『きつと、彼にも心から人を思える日が来るだろう。彼は、そんな日を心のどこかで待ち望んでいる』

ナレーシヨンのな、次回の簡単な予告

では、また次回で会いましょう

風邪と桜とりんご飴 完結(前書き)

内用が完全にオリジナルストーリーになってしまったために結構短いです。

それでもいいという方はどうぞお進みください

## 風邪と桜とりんご飴 完結

ニンフの膝の上でピクリとも動かずに眠っている遠目から見る恭夜の姿からは、苦痛というものは見られない。

だが、あくまでそれは遠目で見たときに過ぎない。表情こそは余り辛そうではないが、額からは汗がだらだらと流れ、何かをうわごとのように呟いている

やはりそれは、彼女が恭夜と出会って初めて見る弱さにも思える

恭夜はいつでもそうだった。たとえ自分がどんなに傷を負おうと、弱みを一切に見せずには戦っていた。

日常でもそうだ。ニンフの看病を実は眠らずにこなしていたり、智樹の周りに迫る危険を排除し、それでいていつも笑っているようにも見えた。

おかしい話だろう。こんなにも他人の為に尽くしているというのに、誰よりも孤独を恐怖しているというのは

だが、こうしてみれば恭夜も唯の人間だということがよく分かってしまった。

こんなにも脆弱で、一人でいたら崩れてしまいそうなのだから。

「私たち家族だったんじゃないの……？」

彼女は恭夜の額に流れる汗をハンカチで拭い、看病を続ける

本当ならば桜祭に来ること事態、恭夜にとっては大変なことだったのでろう。それでも、彼は心配を掛けまいとこうして彼女を連れて桜祭に訪れた

つまり、恭夜の根本的な部分に彼女の存在は大きな影響を与えていたのだらう

「知ってるんだよ……恭夜が寝ないで私の看病してたこと」

彼女は眠っている彼に語りかける。

まるで、自分のせいでごうなってしまったのだと言わんばかりに。

彼女は泣きたかった。堪えていなければ不意に涙が零れてしまいそうなくらいのところまで来ていた。

だが、彼女は泣けなかった。以前、恭夜は彼女に対してこういったのだから

『思いつきり泣けよ……もう泣かなくてもいいくらいにさ』  
と。

だからこそ彼女はこんなことで涙を流したくない……そう思っていた。

けど、今まで彼が彼女にしてくれたことは大きい。それなのに彼女は何も出来ない。その無力感だけで、涙腺が決壊してしまうのは時間の問題だった。

「おーい！ ニンフっ！！」

「あっ……みんな」

だが、彼女は何とか涙を押し留める。恭夜が元気になったら、これからは隠し事をしないで欲しいと言っ為に。

だから、せめてみんなの前では気丈に振舞いたい。

彼女はそう思う

「ふむ……やはり無理をしていたようだな」

「えっ？」

守形は恭夜の現在の姿を見てそう呟く。まるで初めからわかっていたというように

「そうね、ここに来たときから何処か調子が悪そうだったものね」

「会長？」



それに続けて、会長も顔をしかめて言う。

「えっ、じゃ、じゃあ、会長も先輩も恭夜の調子が悪いことに気が付いてたんですか!？」

「私…分からなかった」

それを聞いて、智樹、そはら、ニンフは落ち込んだように下を見る。

イカロスにはニンフの膝の上で眠っている恭夜の額にどこから持ってきたものかわからないが冷やされたおしぼりを載せる

「ニンフ……あなたなら…気が付いていると思ったのに」

「なっ! どういうことだよイカロスっ!？」

「落ち着け、智樹」

イカロスの肩を掴んで前後にがくがくと揺すぶろうとした智樹の手を守形が止める

「そもそも、お前らは気が付けるはずが無かったんだ。考えても見る、こうしてこの場にいる者の中で気が付いていたのは俺と美香子とイカロスだけだ。この意味は分かるか？」

守形はメガネをくいっと持ち上げ、冷静に言う

「つまり、恭夜はお前らの前では完璧を演じる必要があったんだ。そうしなければいけない理由があったんだろう……」  
「なっ……どういう」

まるでその全てを知っているというように守形は告げていく

「だが、この考えは俺の憶測でしかない。だが、考えれば」  
「先輩……それ以上は野暮って奴ですよ……」

その時、守形の言葉がその本人によって遮られる

「お、おい。まだ寝てないとダメだろ!？」  
「大丈夫…夫だつて。ニンフ……頭…重かつたろ……」

そう言つて、恭夜は一言一言を苦しそうに言いながらニンフの足の上から頭を上げて立ち上がるうとする

だが

「ダメッ！ 起きちゃダメ!！」  
「なっ……俺は…大丈夫だから……な？」  
「ダメッたらダメなの!！」

恭夜の頭はニソフによって強制的に元の位置まで戻され、押さえつけられる

「なんで泣いてるんだよ？ ……お前は…笑っていて……くれよ」  
「だって…家族って言ってくれたのに……自分ばかり無理して…何も言ってくれないんだもん」

恭夜はその言葉を言われてしまっただけでは何も言い返すことは出来ない。何故なら、それは彼が心配を掛けまいと自分が無理をしてしまった結果にこんな事態を引き起こしてしまっただけだからだ。

恭夜は心配だったのだ。こうして他人に迷惑をかけて嫌われてしまうのではないかという思いや、自分を残して置いていかれることが「なあ、恭夜…俺さ、前にも言ったけどさ、何でも一人で抱え込むなんて寂しいじゃんかよ」  
「うう…ひっく…ぐす…寂しいのよ…何も教えてもらえないのって…」

だが、そのおかげで恭夜は自分の心配していたことは何の問題でもなかったということに気が付くことができたようだ

（ああ……そうだよ。俺は気が付きたくなかったただけなんだ……今を守ることを考えて……明日<sup>あした</sup>を見ようとしなかったから）

未だに頭の中はぐちゃぐちゃにかき混ぜられているような感覚を味わっているのだろう。

だが、その言葉の意味はその頭でも痛いほどに理解できたようだ

（そう…だったな。知らないより…教えてもらえない方が、よっぽど辛いってことを俺は一番知っていたはずなのにな……）

自分のしてきたことは唯の欺瞞であり、友に対する侮辱でもある。

何より、今を自分から壊すようなことをしていた自分が馬鹿に思えたのだろう。彼は痛む頭を抑えながら小さく笑った

「ああ…これからはみんなに話すよ……本当にゴメンな」

「バカ……恭夜のバカっ!!」

ニソフの罵声が頭にガンガンと響いてはいるが、恭夜はそれを自分に対する罰だと考え、甘んじて受け入れるのだった

「まあ、それはいいんだが……とりあえず病人を野外に放置しておくのは様々な要素を考えてもいいことはないだろう」

「そうねえ、とりあえず桜井君のお宅に行きましょうかあ」

「ま、まあ。確かに病人を外に出したまんまってのはいけないんで認めますけど……どうして会長はそんな笑顔なんですかつ!？」

冷静に意見を述べる守形、そしてそれに賛成しつつもニヤニヤとし

ている会長。

それに対し、智樹は誰もが思うであろう疑問を聞く

「ニンフさん、恭ちゃん起こすの手伝ってくれる？」

「あ、うん。恭夜、今日は無理しちゃダメだから」

「分かってるよニンフ」

その横では、そらとニンフが恭夜に寄り添い、両側から彼を支えるように抑えている

「お、おい…そんなにがちりと押さえられると……歩きにくいって…」

「「いいのっ！」」

「分かったよ……けど、一つだけ寄りたい場所があるんだけど……いいか？」

「「？」」

「ほら、あそこ」

恭夜は一つの出店を指差し、二人に向かって頼むと手を合わせる。

その表情の多少は辛そうなのだが……二人は一つだけだということで仕方なく付き添いながらその出店に向かう

恭夜が来たのは『りんご飴』と出店の上の看板に大きく書かれた出店だった

「え、こじって……」

「スミマセン、りんご飴二つもらえますか？」

「あいよ、りんご飴二つで四百円だよ」

出店のおっちゃんは少し大きめのりんご飴を二つ恭夜に手渡し、恭夜は引き換えにポケットから四百円を払う

「ねえ、恭ちゃん？」

「ん、どうした？」

少し苦しそうにだが、そはらの質問を聞くために耳を傾ける

「どうしてりんご飴なの？」

「それは……さ、ほら。好きなんだろ……りんご飴」

「……覚えてくれたんだ恭夜」

一つをニンフに手渡し、もう一つをそはらに渡す。

「まあ……な。お前は……笑っている方が断然可愛いんだ……だからさ、笑ってくれよ」

「うん……だから、これからはちゃんと話してくれるよね？」

「ああ、約束する……」

「ふふっ、恭ちゃんもニンフさんも嬉しそうだね」

「「なっ！！？」」

約束を交わした二人は今まで以上に中睦まじく、桜井家に歩いて向かう。そはらもそれを嬉しそうに見守りながら歩く

風邪で辛そうな恭夜の表情だが、それよりも孤独を払拭した彼の表情は何処か晴れやかなものだ

桜の舞い散る道を、二人に支えた貰いながら歩く恭夜の姿に、孤独を恐れる魔術師の面影は残ってはいなかった

これは、一人の少年が絆というモノを知ったある日の出来事のことである

風邪と桜とりんご飴 完結（後書き）

うーん、結局誰の視点だったのか作者も分からなくなる始末。

それでも作者なりにコレでいいと思いつつ書いていたので間違っ  
つてはないはず。一応見直しもしたし、結構分かりにくいだろうけ  
ど読めないことも無かったからきつと大丈夫なはず……

けど、まだまだ原作以上に面白く出来ていないので、もっと感動で  
きて面白くなるように頑張って生きたいです。

まだまだ未熟な作者ですが、これからもどうかよろしく願いたい  
します

以上、作者の絃城恭介でした



夢と記憶と曖昧なもの（前書き）

彼は夢を見る。

その光景は子供の頃から見続けてきた夢の中での光景。そう理解しているはずなのに、目が覚めたら泣いている。

夢の中では確かに笑っているはずなのに……どうしてだろうか？

何か悲しいことでもあったのだろうか？ 分からない。わからないけど悲しくなってしまう。

そんな夢だった

『空に……捕まってる……』

その声も、夢の中で幾度と無く聞いた少女の声。

『本当は　　貴方に助けて欲しくて……天使を送ったんだけど……』

だが、彼は夢の中でも眠ってしまっている。声は聞こえど、返事を返すことすら出来ない

『でも……もういいわ……』

そして少女は悟ってしまったかのように続けるのだ

『だって、天使があんなに嬉しそうに、楽しそうにしているところ

見たことないもの………』

前髪が顔を隠すように揺れているので、少女の表情は読めない

だが、何処か悲しそうだということは彼にも分かっていた

『これ以上……巻き込みたくなっちゃった………』

しかし、少女は告げることを別れとしようとしているのか、語りかけることをやめない

『私も……助けて欲しかったけど……もう……眠る』ことにするね』

そして、少女は彼の傍から離れ、その白き翼を空に向かって羽ばたかせるために大きく開く

『それじゃあ………』

そこで、少女は忘れていたという風に彼に願いと言って告げる

『ねえ、最後に一つだけ……お願いがあるんだけど

』

少女は最後まで言葉を言い切る前に翼を羽ばたかせ、大空へと舞って行く

『私のこと………忘れないでね………』

そして、それを聴き終えた瞬間に彼は夢の中で眼を覚ますのだ。

『……………』

何故だかわからないが、悲しくって、あの少女とまた話したくって  
唯一人、広大な草原に吹き抜ける風を感じながら……

頭の中はまだまだぼんやりとしているが、彼の頭でも一つだけ分かることがある

この夢を夢で終わらせてはいけないのだということ

だが、醒めない夢は無い。だからこそ彼は忘れないように夢の中で頭の中に刻み込む。いくら忘れようと、この夢の欠片だけは忘れないようにするために

それが、彼に出来る忘れないための方法だから



## 夢と記憶と曖昧なもの

『夢？』

突然、智樹から自分の夢について話されたために『新大陸発見部』の部室にいた全員はほぼ同時に聞き返すのだった。

ちなみに、何故都合よく全員がこの部室にいたかといえば、最近になって人数がだいぶ増えたこともあって部室を掃除していたところだからだ。

もちろん、コレは守形一人の意見ではなく、ここに通っていた全員の総意だったためにこうして掃除をしているわけなのであしからずそして、智樹はその言葉に全員から疑問の声を返されたためにポリポリと頭を掻きながら、気まずそうに答えるのだ

「いや……たかが夢……なんだけどさ」

そこで一旦区切り、少し言おうか言わないかを悩んだ後に、やはりいうことに決めたようだ

「ほら……例の夢……ここんところずっと見てなかったから気にしてなかったんだけどさ……昨日久しぶりに見たら何か……変でさ」

智樹が言い終わるや否や、守形はすたすたと智樹に近づくと、彼の肩にぼんっと手を乗せ

「それはお前の新大陸に行きたいと言う願望がない！ それはない！」

と、智樹に言おうとしたところ、完全に否定されていた。

「ま…それはいいとしてよ、どんな内容だったんだ？」

「そういわれてもなあ……恭夜も知ってるんだろ？ あの広い草原で女の子と遊んだり話したりする夢をさ」

「そういわれてもな……俺もずっとあの夢は見えないからわからないんだよ」

智樹は恭夜に夢の内容をなんとなくが伝えるが、恭夜もその夢に關しては心当たりがないらしく、頭をポリポリと掻いている

「それに智樹、確かに俺とお前が何度か同じ夢を見てるって言うてもよ……」

「ああ、うん。恭夜が言いたいことは分かるからそれ以上言わないでくれよ…どうせ他のみんなには伝わってないだろうしさ」

「ま、そんなもんか」

そんなことを二人で話していると、ニンフは思い出したかというようにイカロスに話しかける

「ねえ……アレ……いいんじゃない？」

「え……？」

イカロスもニンフの声に気が付いたようで、疑問系で言葉を返す。要するに『アレ』という言葉の意味がいまいち伝わっていないということだろう

そして、ニンフはイカロスが思い出すように続ける

「昔シナプスで流行ったでしょ？ アレよ」

そこで、イカロスはニンフの言う『アレ』が分かったのか、少し不安そうに言葉を返す

「でも……アレは危険じゃ……」

「なんだ、なんだ？ なんの話してんだ？」

そこで、恭夜と会話をしていたはずの智樹が、二人の話に気が付き、内容が気になったために質問をしていた

その質問に対し、イカロスは答えるか迷うかのような仕草を見せた

が、智樹の言葉ということもあってか、胸の前に手を組みながら静かに答える

「『ダイブ・ゲーム』……」

その言葉を聞いてた全員は、その言葉の意味が分からずに一斉に黙る。そして、唯二人はその言葉に疑問を持ったために尋ねるように聞き返す

「『ダイブ・ゲーム？』」

言うまでもないだろうが、その二人というのは新大陸発見部の部長である守形英四郎と、魔術師でありある程度の知識を所有している絃城恭夜である

その二人の質問に対しイカロスは押し黙ったままなので、ニンフは小さくため息を吐いたかと思うと説明を始めた

「文字通りダウンアの夢に潜入する遊びよ。昔シナプスで流行ってたの」

そこで、守形は今まで何度も会話の中で聞いてきた一つの言葉に対して質問をする



「シナプスとは」  
「ストップ」

だが、その言葉を言い終えるよりも先に、ニンフによってその言葉は制止された。

「言い忘れていたけど、『シナプス』についての質問は一切禁止よ。私たちの最上位機密事項に設定されているし」

それを言うニンフの表情はいつもの表情とは一転して真剣みがあり、その後ろで黙っているイカロスを見る限り聞かない方がいいということは明白の事実であるように

「知らない方がいい」

終いには、釘を刺される始末だ。

「知らない方がいい……？」

守形はそれでも諦められないのか、その言葉に対し疑問を返す。

だが、それについて言葉を返したのはニンフではなく恭夜であった。

それも、直接みんなに聞こえるような声では言わずに、守形にだけ聞こえるように耳元でこっそりと

「先輩……ニンフのあの表情は本気だ。今は知らない方がいいって言っただったら、聞けるときを待った方が適切ではないんですかな？」

「だが、それは……いや、お前が言うのならそうなのだろうな。分かった……」

守形はアストレアの言っていたことを思い出したのか、反論するのをやめ、静かにニンフを見つめる

「で、どうするの？　ダイブゲームを使えばトモキの夢に行けるけど」

ニンフは恭夜をちらりと横目で心配そうに見ながらも、直にその表情から強気な表情に戻し、尋ねる

「やる？」

その言葉に、そこに居た智樹、守形、そはら、恭夜は顔を見合わせ、夢に潜入するかしないかを話し合い

その結果出た答えは、夢に潜るということで決まったようだった

ニンフの取り出した旧式のカードから現れた機械をニンフが操作すると、新大陸発見部の部室の空間にバチバチと静電気のような力が作用し、音を鳴らす。

それから数分としないうちに空間には大きな歪みが発生し、穴のようなモノを形成していく。

それは一つの扉のようなものに恭夜は感じたようだ。

「コネクトかいし  
接続開始：リンクゲート開門」

ニンフがそう宣言すると、その空間に出来た穴は完全にそこに発現し、歪みを感じさせないものとなった

だが、その接続された穴は何かを吸い込むような音を鳴らしながら、その中に誰かが入るのを待っているように感じる

「それじゃ、気をつけてね」

それは、恭夜が久々に見るニンフの戦闘服のような姿で言う言葉。

恭夜にはその言葉の意味が分かっている。だから聞き返さない。

だが、智樹はその言葉に対して思った疑問を口に出していた

「気をつけてねって……お前らは来ないのか？」

「智樹……忘れたのか？ エンジェロイドは夢を見ない…眠らないんだ」

「そう…今、恭夜が言ったように、「夢」は私たちにとって禁忌だから」

ニンフとイカロスは空間に開いた穴の前で立ちながら、寂しそうに、それでいて真剣に言葉を返してきた

「マスター……本当に……気をつけて」

「ん、ああ」

と、イカロスの言葉に対して智樹は普通に答える

「恭夜も気をつけてね……」

「まあ、無理はしないって約束したからな」

「うん」

と、朗らかな雰囲気でニンフに返す恭夜

その表情には、つい最近までの仮面を被っているような恭夜の顔は無く、一人の人間のものとしての感情を見せたものだった

「それでは、コレより桜井智樹の夢に潜入します」

ニンフがそう宣言すると、そこに居た夢に潜入する予定のメンバーたちは穴の中に飲み込まれていく

轟と音を立てながら、現実に残る二人の姿が彼らの視界からぼやけていく。

そこで恭夜が見たイカロスの表情は不安そうなものだった。

現実と夢を繋ぐ穴に飲み込まれた四人は、見渡す限りの草原に立っていた。

そこは、智樹と恭夜が過去に見たという夢に酷似しているのか、二人はぼうつと突っ立っている

「ここが…トモちゃんの夢……」

「……………」

「やて、とりあえずどうするっ？」

智樹自身も本当に自分の夢に入れるとは思っていなかったために、守形の質問に多少焦りつつ答えた

「ん〜…そうっすねえ、いつもならここで翼の生えた女の子が『バサバサ』っと来るんですけど……お、来た来た」

智樹は風切り音の聞こえた方向に向かって能天気両腕を伸ばしながら

「おーい！」

と、叫ぶ。

しかし、空から降りてきたものは遥かに人間のサイズを超えた前時代の生物がそこにはいた。族に言うプテラノドンの何かだ

「随分大きな女の子なんだな、智樹？」

「アレ？ あれねえ？」

「ちょ、トモちゃん…アレって！？ きゃうっ！？」

守形の突っ込みにたいして、智樹は依然混乱したままだ。おそらく、この夢は智樹の夢ではないのだろう

「とりあえず逃げろっ！」

恭夜のごもつともな意見を聞いた残りの三人も恭夜の後を追って走る

「にしても…こんな夢見るのはこの中じゃ先輩くらいツスよ？」

「ふむ…すまんが、その通りだ。よく分かったな恭夜」

「まあ、俺はこんな夢みないツスから」

「お前らなんでそんなに余裕そうに走ってんだよっ！！？」

智樹が後ろから泣き顔で全力疾走している。そはらもちろん逃げるのに必死のようだ

「まあ鍛え方が違　　うっ！？」

「んなあああああああ！？」

その瞬間、足元に穴が開き、地の底に転がり落ちる。それだけではいざ知らず、インディージョー　ズ顔負けの丸岩が背後から転がってくる

「くしょおおおおお！？　早く、早く終われこんな夢ええええ

！！」

「ゴメンゴメン、間違えちゃった」

その後可愛らしく『てへっ』とつけて、ニンフは夢の中に入ったみんなに謝る。だが、その謝り方が気に入らなかったのか、智樹はニンフに噛み付く

「『間違えちゃった てへっ』じゃねえだろうが!!」  
「なによ、そんなに怒らなくてもいいじゃない」

ニンフは心底面倒そうに智樹に対応する

「まあ、別に死に至るほどの危険って訳じゃないんだし」  
「全員がアンタみたいな超人じみた身体してないの!! 普通の人なら十分死ぬわ!!」

智樹は一通り叫ぶと、一旦落ち着き、懐に手を入れながら話す



「まあ、いい。収穫もあったしな」  
「あ、洞窟に生えてた宝石」

そう言って取り出したのは夢の中で洞窟に生えていた宝石のような石  
それを眺めながら卑下た笑みを浮かべながら智樹は言う

「見ろよこの輝き、きつと相当な値打ちもんだぜえ〜!〜!」

くっくくくと笑い

「これで一生遊んで」

その瞬間、智樹の手にあった宝石は消え去った

「まあ、所詮夢だってことだな……残念だったな」

恭夜はフツと笑い、智樹の肩を叩く

「恭夜が言うよう所詮は夢の中のものだから持って帰る事は出来な  
いわよ。元が夢なだけに」

「……………」

「じゃあ、あらためて智樹の夢に送るね」

そういって、再びニンフは機械を弄り出し、手を振る

「いってらっしゃーい」

「いってきまーす」

ニンフの声に、そはだけが言葉を返し、再び四人は夢の中へ

しかし、訪れた夢の中は地獄のような光景だった。辺り一面は火の海で、地面には見渡す限りの人が死んだように倒れている。

そして、その中心に立つ人物はこう呟くのだ

「また…滅ぼしてしまった」

その人物とは、この場にはいないはずの会長だった。会長はこちらに気が付くなり銃器をこちらに向け、引き金を何のためらいも無く引きまくり、乱射する

「ニンフさん、ニンフさん！！ 一番来ちゃいけない人の夢に来てますよおおおい！！？」

四人はまたしても会長から全力疾走をしながら逃げる。考えてみれば夢の中では全力疾走以外していない。

その瞬間、再び四人は穴に飲み込まれた

次に訪れた夢の世界は、メルヘンチックなところだった。恭夜はその瞬間に何かを悟ったのか、そはらから一步後ずさり離れる。

「ん、どうしたんだ恭夜？ 後ずさりなんかして」

「んー、まあ。気にすんな」

そんな会話をしていたら、どこからか聞き覚えのある声が四人に聞こえた。その声を聞いて、何故かそはらが顔を真っ赤にしているのは秘密だ

「あ、あの家からだ」

トモキが指差した方向には一軒家があり、その窓から見えたのは

「もうっ、一緒にお風呂に入りたいなんて、トモちゃん本当にエッチなんだから」

そこにはバスタオルを巻いたそはらが、ミニ智樹を胸に生めながら嬉しそうに嫌がっている姿があった





夢から戻った男子三人の中でも、もっとも傷を負ったのは智樹だ。  
その理由は言うまでも無いだろう

そして、その智樹はぼろ雑巾のようになった身体を動かし、尋ねた

「それで…結局どうなのでしょう…：わたくしの夢にいけるのか、  
いけないのか」

「おっかしいなあ…：ちょっと待ってて、今調べてるから」

流石にニンフもおかしいと思ったのかカタカタと機械を弄りながら  
原因を探る

「って…あっ！！　なにコレ、トモキの夢になんでかプロテクトが  
かかってる！！」  
「プロテクト？」

守形の質問じみた呟きにニンフは何も返さぬまま、更に機械を弄る

「むつかあー！！　夢の癖に生意気なっ！！　ちょっと待ってて、  
今すぐクラックするから」

「……………」

その言葉を聞きながら、イカロスは不安そうな表情をしながら智樹にこういうのだった

「あの…マスター…ダイブゲームはもうやめたほうが……」  
「へっ…なんで？」

だが、智樹はその言葉の真意が分からずに聞き返す

「なんでって…その」  
「よしっ、クラック完了!!」

だが、イカロスが答える前にニンフの高らかな宣言が響き、言つことはできなかった

「今度こそ真正銘のトモキの夢よ!!」  
「おー、じゃあ行くか」  
「あっ………」

智樹は再び穴の中にのそのそと歩いて入っていく。その瞬間、イカロスが止めるように言葉を漏らしたのを守形だけは見逃さなかった

「……………」

「ん、どうしたんすか先輩？」

「いや……………行くぞ、恭夜」

「？ そうすつすか」

そして、再び四人が穴に入り、夢に向かうと……………そこは何処か寂しげな場所だった

「やっと来れたね…トモちゃんの夢」

「……………」

そこは、智樹には見覚えの無いところなのか首を傾げてる

そして、一通り何かを考え終わったのか口を開く

「違うつ、全然違うつ！！」

「えっ、違うの？」

「分かるだる恭夜なら…俺達の見た夢はもっと綺麗な草原で…こんな無機質なところじゃないだろ！！」

恭夜もここには見覚えが無いのか、一瞬だが悩んだ後に答える

「ああ、俺もこんな夢じゃなかった気がする

つ痛！？」



そう答えた恭夜だが、心臓がドクドクと大きく鼓動を刻んでいる。だが、智樹は自分の考え、言いたいことに夢中になっているためにそれに気が付かずに続ける

「くそう、ニンフの奴何回間違えたら気が済むんだ……」

「それにしても凄くリアルだね……ここ……まるで夢じゃないみたい」

「いや……ここは夢だ」

守形は、足元に植えられている植物を見て宣言する

「え？」

「この冬眠している木なんだが」

守形はこの場にいる全員が納得できるような言葉をいい、最後に恭夜に確認を取る。

恭夜もその理論に穴が無かったというように言うために、智樹、そはらも同じように納得した

「つまり」

「夢の中ってことか」

「ああ……」

だが、守形と恭夜だけはその理論を真実とは考えていないのか、他の誰にも気付かれないうようにポケットの中にその木になっているどんぐりを入れる

「ねえ、アレなんだろう?」

そこでそはらが、ある一つの建造物に気が付き指を指す

「石…版かな?」

「何か描いてあるね」

そこには、何かが殴り書きにされた一つの石柱……いや、石版のよ  
うなものがあり

「読めない…ね」

「ああ……」

だが、そはらは何か感じるものがあつたのかこういう

「でも……なんかこの文字気持ち悪い…怒っているような…悲しんでいるような……気持ち悪い……」

口を押さえながら、本当に気分が悪そうに言うのだ。

そして、もう一人は別の意味で脅えていた

(この文字…昔どこかで見たような…痛っ…ダメだ…思い出せない)

頭を抑え、石版を見る恭夜はその違和感を掴めずにいた。

(そらは『怒っているような、悲しんでいるような』って例えたけど…俺もそう思う。一概に怒りとも取れないし悲しみとも取れない…くそ、何かが…足りない…足りない？ 何でそう思うんだ？ くそ…)

そして、何も分からずままに時は流れていく

「帰るか……」

「うん……」

智樹のその言葉に、そらは力なく返事をし、恭夜と守形もそれを追う様に答えたのだった

「ちがうちがう！ 絶対にあってる！ 絶対にトモキの夢だもん！」

戻ってきた智樹にニンフは猛抗議をしていた

「だから、俺の夢は草原で……」

「あってるもん！」

「だから……」

「あってるー!!」

ニンフは智樹の言葉に拗ねたように「あってる」と返す。それを恭夜は少し嬉しそうに眺めているのは秘密だ

「はあ…もういいや、たかが夢だし」

「……」

その言葉を聞いて、イカロスは小さくほつと息を吐き出した

「イカロス、ゴミ捨てを手伝ってはくれなか？」

「あ、はい」

イカロスは守形と一緒にゴミを運んで部室の外に出て行った

「恭夜も私のこと疑ってるの？」  
「いや、別に疑ってなんかないさ」

そういいながらニンフの頭をなだめるように恭夜は優しく撫でる

「まあ、俺としても収穫はあったしな……」

ぼそりと、ニンフに聞こえないように恭夜は呟く。

「え？ 恭夜、今何か言った？」

「ん、いや。何も言っていないぞ」

「そう？ ならいいんだけど……」

そう言って、撫でられているニンフは気持ちよさそうに目を細めながらぼわわとしている

「で、ニンフ。これがなんだか分かるか？」

そう言って、恭夜はポケットから忘れていたというようにどんぐりを取り出し、ニンフに見せる

「なにして、唯のどんぐりでしょ？」

「ま、ニンフがいったように唯のどんぐりだ……」

そこで、恭夜の頭の中にあった一つの理論が完成する。

「それがどうかしたの？」

「いや、なんでもないさ。じゃあ、帰ろうか」

「うん」

こうして、彼らの長いようで短い一日は終わるのだった。

ある二人の、理論を完成させて……………

## 夢と記憶と曖昧なもの（後書き）

はい、作者の絃城恭夜です。

すっかりこの物語の根元に当たるストーリーを書き忘れていたためにここで補完する形になりました。

いろいろと時間軸が変わりつつありますが、なるべくは違和感がないようにしているつもりです。本来ならばダブルデート前、もしくはアストレア出現前に書けばよかったのですが……

とりあえず保管したので良かったということにしていただけと助かります

それでは、次回までにまた日が開くと思いますが、未永くよろしく  
お願いします

補習っ！！（前書き）

学校の六時間もある授業の終わりを知らせるチャイムの音が生徒達を授業から開放する。

平日の放課後、それは学生にとっては授業を忘れて遊べる貴重な時間。もしくは、部活動に励む事の出来る僅かな時間だ

もちろん、それは帰宅部……いや、新大陸発見部に入部してしまっている恭夜、智樹にとっても同じことだ

特に、智樹はHR中に顔から笑みを零しながら、わくわくと言うのが一番わかりやすい表情をして、HRを過ごしていた。

彼の考えでは『やっと自由になれる気がする』らしい。

もっとも、自由になれるのは成績に問題のない生徒だけなのだが……

「それでは解散~~~~」

HRの解散を教師が告げると、智樹は意気揚々と立ち上がり

「よし、帰る帰るっ」

だが、それは突如誰かに背後から制服を捕まれたために止められて



しまう

そして、スタドが出てきそうなの『ゴゴゴッ』という音が聞こえてきそうなくらいに恐ろしい声で

「待て桜井……お前は補習だ……」

その合間にも、ゴゴゴツと鳴り響いているような錯覚を覚えながらも、智樹は何のことだろうかと冷や汗をかきながら無言でいる

「まさか、こないだのテストの点数の酷さを忘れるほど……馬鹿じゃないよな……くん?。」

こうして、智樹はなす術もなく教師に補習者の集う視聴覚室に連行されるのだった

補習っ！！

視聴覚室の扉には『本日視聴覚室は補習の為に使用します。教頭』と書かれた紙が張られていた

そして、視聴覚室の中には智樹以外にも何故か三人の姿があった。その三人とは、そはら、ニンフ、そして恭夜だ

智樹はそれを見て、ついつい尋ねてしまう

「なんだよ、お前達も補習か？」

と、智樹が尋ねると三人は答える

「英語の点数が酷くて……」

と、そはら。

「なんかおもしろそうだったから……」  
「お前は帰れ」

と、ニンフ。

「で、なんで恭夜もここにいるんだよ……普通に頭いいだろーが？」  
「ん、何でって……ニソフと一緒に行くって言われたのと………お前に勉強を教えろと全教科の先生に言われてさ」

「あの…本当にすみマセンでしたっ！！」

「まあ、ツケにしといてやるよ……つかさ、俺が一番不思議なのは何であの人がここにいてるかって事なんだよな」

恭夜は智樹の耳元で誰にも聞かれないようにこっそり話ながら指を指す。

その指の先にいるのは、智樹が精一杯突っ込まないようにしていた会長の姿があった。

「いや、俺にわかるかつ！？」

「じゃあ聞いてみるよ」

「俺がつ！？」

智樹は恭夜に言われるがままに、会長に尋ねる

「あの…まさか会長も補習じゃないっスよね…」

そう尋ねると、会長はスタド使い顔負けの『ゴゴゴッ』という音を背後に出しながら黒いオーラを出しながら答える

「その…まさかよ……」  
「」「」「へっ!?!」「」

智樹と恭夜、そしてそはらまでも同時に驚きの声を上げる

「そんな馬鹿なっ!! 会長滅茶苦茶頭いいのに補習なんて!!  
一体何の教科の補習なんツスか!?!」

智樹も流石に疑問に思ったために半狂乱状態で尋ねる。

すると会長は不機嫌そうに顔を歪めながら答えた

「道徳………」

その瞬間、ニンフを含むその場にいた人間は「なるほど」と心の中  
で納得する。しかし、会長はそれを知ってか知らずかは分からない  
いが、智樹に言うのだ

「でも、桜井君も大変ね……」  
「へ? なにがスか?」  
「あら、知らないの?」

そう言って、一枚の紙を智樹に見せ付ける

「これ……先日女子が秘密裏に行っていたアンケートなんだけど……」

その紙の上の方には『空美中・彼氏にしたい男子、アンケート結果発表』と書かれている。

智樹はそれを無言で受け取り、自分の名前を探していく。上から順に名前を見ていくが、智樹の名前は見つからない

そして、最下位の辺りの順位に近づくに連れて、彼の顔は次第に暗くなっていく

オマケに、智樹が自分の名前を見つけるよりも早く、会長は智樹にトドメを刺すことに決めたようだ

「『彼氏にしたい男子』……こっちでも桜井君はダントツでビリよ？」

それを聞いた智樹は、紙の一番下に書かれている名前を見て、絶望したかのように辺りの空気を重くしていく

「ちなみに、恭夜君は上位五位内に食い込むほどの人気者なのよ？」

智樹は上位五名の太字で書かれている生徒の名前を見る。そして、第四位に絃城恭夜という名前を見つけたのだ

それを見つけた瞬間とほぼ同時に、視聴覚室の窓が勢い良く開け放たれ、空美中の誇る三人の美少女が智樹に向かって一斉に罵声を浴びせる

「……モテない上に馬鹿なんてかわいそ……ぷぷっ」「……  
「な、何だお前らっ!?!」

突然のことに智樹は驚き、反射的に聞き返してしまうが、その問いに答えたのは三人組ではなくそはらだった

「トモちゃん直に女子更衣室とか覗いたりするから人気ないんだよ」  
「そはらっ!?!? お前まで!?!」

余りにも悲惨な状況なので、恭夜は智樹に助け舟を出そうとするが

……

「……もう一度小学生からやりなおしたら?」「……  
「ふ、ふざけんな!?!」

恭夜が助け舟を出す前に智樹が自分から泥沼に足をぬかるませて行く様な状況に入っていくためにどうしようも出来ないようだ

「小学生は小学生でも俺は小学六年生なんだよ！！ お前らは精々小学五年生だろっ！！」

「じゃあアンタは小学四年よっ！！」

「三年生！！」

「二年生っ！！」

だが、そんな問答を彼らが繰返しているよりも、遥かに斜め上を行く者がいたのだ

「センセイ！！ コノ感じなんて読むんでしょーうか！！」

その勢い良く元気な声を上げて質問をしているのは、アストレアだった

それを見て、彼らは一斉に頭の中で思った

(うわぁ…幼稚園イターツ！！)

そして、それを見ていた会長がふと呟くように言う

「とにかく…白黒はつきりつけたほうがよさそうね…なんなら会場を外に用意するけど…どう？」

その言葉は智樹に向けられて言われたものらしく、智樹は手に持ったアンケートの結果が書かれた紙をグシャッと握りしめ、小さく答えた

「望むところですよ……」

その合間にも三人組は智樹に罵声を浴びせ続けている

「バーカばーかー!!」

「変態　　!!」

「バーカ!!」

その言葉を聞いていた智樹は心の中で熱く闘志を燃やす。様々と間違っ入るようだ

（お前らに……教えてやる）

そして、拳を硬く握り締め

（俺が本当は賢いってことをなっ!!）



という訳で

『第一回空美中学校・かしこい子選手権、開・催』

会場は空美中の生徒達の熱気によって興奮状態である

ちなみに出場選手は智樹、ニンフ、そはら、会長、アストレアの五人

そして、ステージの隣には実況席のようなものが設置され、守形、  
恭夜、イカロスの順番で座っている

「春はうらら、原稿はグダグダ…皆さん、テスト期間はどうぞお過ごしでしょうか？司会進行役の守形英四郎と」

「問題の解説約の絃城恭夜と」

「問題を考えました…イカロスです……こん…にちわ」

それぞれの自己紹介が終わると、守形が簡単にルールの説明を始める

「それでは、簡単にルールの説明をさせていただきます。クイズは一問一答の早押し形式！！クイズに正解するたびにシートが一段上にあがる形式になっており、先に十問正解して一番上に上り詰めた人が優勝となります」

そのルール説明の最中に、恭夜はずっと智樹を見ていたのだが、声援という声援はなく、むしろ罵声ばかり浴びさせられているのを見てマイクに向かってこういう

「あつと桜井選手物凄い声援ですね！ 完全にアウエーです」

そんなこと実況している最中にも智樹は空美中の大半の女子に『バ―力』『変態！！』などといわれており、智樹はそれに対し『ウルセー！！』と即座に対応していた

そんな中、そはらだけは右隣にいる会長に向かって些細な疑問を尋ねていた

「あの一、会長？ 何ですか…このシートの下にある』？』って書かれたボックス……」

「ああ、それはね」

会長がそはらの問いに答える前に、第一問目が出題される

「それでは第一問、道徳の問題です。道端にジュースの空き缶を捨てている人がいます、どうしますか？」

それを聞いていた選手の中で、真っ先にボタンを押したのは会長で

あつた

智樹とニンフも答えようとボタンを押そうとしたが、余りの速さに負けてしまったようだ

そして、会長はゆっくりと口を開いてこう答えたのだ

「皆殺し。」

答えた瞬間に『ブブツ』という音が鳴り、会長の立っていたシートのが抜ける。会長は重力に逆らうことも出来ずに、下に設置してある『?』ボックスに落下した

そして、会長が完全に『?』ボックスに落ちると、『?』と書かれていた紙がペロンとはがれ、透明な箱の中に会長の姿が見えたこと思うと……

「こっ…コレはー!」

守形が驚きの声を上げたと思うと、透明な箱の中では複数の赤いぬるぬるとした生物が会長に纏わり付いているのが見えた

「タコだ

ッ!!

落ちた先はタコツボ地獄

ッ!!



だが、そはらも先ほどの会長と同じようにシートの底が抜けて『？』ボックスの中に『ズボツ』という音を立てて突入する

先ほどと同じように完全に『？』ボックスにそはらが入ると、『？』と書かれた紙がペロンと剥がれ、その中身が露になる

その透明な箱の中にはピンク色の動く物体が数匹存在し、先ほどのタコたちのように胸や陰部に顔を突っ込み、ブヒブヒとそはらに集まっていったのだ

次に、問題に答えたのはアストレアだった。『算数の問題です、 $1 + 1$ は？』という簡単な問題をアストレアは自信満々に「ごじゅう！！」と答え、そはら、会長のように『？』ボックスにズボツという音を立てて突入した

アストレアが落ちた透明な箱の中には数え切れんばかりのウナギが蠢いており、胸や……………（以下略）

そして、特に酷かったのは智樹だった。

「アハハっ！！ 見んな馬鹿だなっ！！」

「問題。目の前に女子更衣室があります、どうしますか？」

智樹は悩むそぶりも見せずに、ボタンを素早く叩き、自信満々、意気揚々と答えた

「覗くつ　　！！！！！」

空に向かって手を上げて、満足そうに答えた智樹も先ほどの三人同様にシートの底が抜けて『？』ボックスの中に突入する

そして、透明な箱の中には……

「あーつと肥溜めツ！！　桜井選手が落ちた先は肥溜めつ！！！！！」

先ほどまで智樹の周りで罵声を浴びせ続けていた女子達は箱の中を見て一斉にその場から逃げ出す

更に、実況をしている守形の隣では恭夜が腹を抱えて大爆笑しており、既に救いなどどこにもなかった

「コレは臭い、唯でさえモテない桜井選手！！　女性陣から物が投げ込まれます！！！」

彼の落ちた透明な箱の中にカッターや尖った鉛筆、消しカスなどが次々に投げ込まれる。

実況席ではイカロスが小さく正解を答え……

そんなこんなでクイズ大会は進んでいったものの

「せ、瀬口たかひろ」

みんな……

「山盛りおにぎり!!」

散々な結果で

そんな中

「だんご大家族」

ニンフだけが順調に正解数を伸ばし

そして

「ニンフ選手九問正解!! 後一問で優勝ですっ!!」

「それにしても桜井選手酷い…未だに一門も正解はなし!! 落ちすぎて埋まっています、埋まっています……って、いい加減に哀れになってきたな」

「えー、もはやニンフ選手の優勝は確定かと思われませんがここで保健体育からの出題」

そういつて守形は手元の問題に目を移すが、理解できないものがあったらしく

「……………なんだコレは？」

「……………え？」

「いや……………」

イカロスとのそんなやり取りの後に、守形は気を取り直して問題を読み上げる

「問題 ……二年C組の見月そはらさん」

そはらは自分の名前がいきなり出されたことでなんだろうかと問題を聞く。しかし

「 ……の、スリーサイズはいくらでしょうか？」

「ちよっつ……………先輩なんですかその問題！！！」

「いや…問題を作っているのはイカロスで ……」

「イカロスさんなんて問題作っちゃってんのー！！？」

イカロスは頭の上に？マークを浮かべながらそはらを見るだけだ

「えー、解答者は ……」

「いるわけないでしょっ！！ ……いないでしょ！！？」

そはらは顔を真っ赤にしながら怒ったようにつぶやく



「そもそもこんな問題答えられる人なんて」

その瞬間にそらの耳にボタンが押される音が響いた。そのボタンを押した人物は……智樹だった

そこから智樹の怒涛の追い上げが始まった。問題としてはどれも智樹が変態だということを自らさらけ出しているといっても過言ではないくらいの問題を次々に解いていく。

そもそも、何故智樹は女性のはいているパンツの色や、入浴時間が分かるのかということもあり、女子生徒たちからは再び変態と叫ばれる始末。

だが、智樹は別段気にした様子もなく女性徒たちを見下す。ついに現在トップのニンフと並んだのだ

そして、最後の問題が守形の口から出題された

「おっと…コレは先ほども出た問題ですが、もう一度出題します…問題!」

守形は下がってきたメガネをくいと持ち上げ、問題を言う

「目の前に女子更衣室があります。どうしますか!？」

言い終わる瞬間…智樹は素早く解答ボタンを叩いた

それを見ていた女性徒たちは一様に悔しがり、あまつさえ涙を流すものもいた

「お…終わった……」

「あのゴキブリ桜井が優勝なんて……」

それを聞いていた智樹は口元をにやりと歪め、再度泣きそうな女子から泣いている女子、その他の女子を見下し、腕を組む

（クッククック…今まで散々モテないだの馬鹿だの罵ってくれたな…だが、勝ったのは俺だったな…明日からは散々罵ってやる。ヴァーカとな！！）

「では、桜井選手。答えをどうぞ」

智樹はフツと左手を上げ

「答えは… 覗かな……」

その瞬間、振り上げようとした左腕は何者かによって止められた。

それは、彼の本能に当たる精神の部分だった。

コレを答えてしまえば桜井智樹は桜井智樹ではなくなってしまう。  
そう、本能が告げるのだ。

『目の前に…目の前に女子更衣室があります。覗きますか？ 覗きませんか？』

そこには男子が夢見る花園が、楽園がある。智樹はそれを知っている。この問いに答えることを躊躇っていた。

例え嘘だとしても、それは智樹のプライドを傷つけることなのだろう。

その葛藤は智樹の左腕を額の前にもって行き、敬礼のポーズをとる

「まさか…自分と戦っているのか？」

ある男子生徒が呟く

「クイズなんだぜ、嘘でもいいんだ!!」

またとある男子が叫ぶ

「馬鹿な真似はやめろー!!」

そして男子生徒たちは一斉に叫んだ

『言っちまえ桜井ー!!!!!!』

そして、背筋を伸ばし、完全な敬礼の姿勢を取ると、智樹は答えた

「……覗きます」

その瞬間に、シートの底が抜けて一直線に肥溜めの中に突き刺さる。智樹は勝利よりもプライドを貫いたようだ

その直後、答えを訂正するようにボタンを押したニンフが

「覗かない」

と、正解を答えて無事にクイズ大会は幕を下ろしたのである

補習っ！！（後書き）

その後のことは語るまでもないが……いつもの如く校庭に埋められた智樹は全裸で呟いていた

「へーんだ！ どうせ、どうせ俺はモテないですよー。どうせ馬鹿ですよーっだー！」

いじける様に、誰かに慰めてくださいと言わん風に智樹は呟く

それに対し、アストレアが智樹に向かって楽しそうに『バーカバーカ！』と言っている。

智樹はアストレアにだけは馬鹿にされたくないのか、必死になって反論をしている。

また、ある場所では恭夜とニンフが夕暮れの木下で吹き抜ける風を心地よさそうに浴びながら座っている。

ニンフは恭夜に向かって学校であった出来事を楽しそうに話すのだ。恭夜もそんなニンフの姿を嬉しそうに見ながら話を聞いている。

そんな日常の光景を、モニター越しに見る女の子がいた。

「ふふ…楽しそう」

モニターからギャーギャーと聞こえる声や、嬉しそうな声を聞きながら、女の子は呟く

「とちがってまだ刷り込みが解けてないのが気がかりだけど…良かった…楽しそうで…私の娘達…」

だが、直に危険を知らせるアラート音が彼女の耳を劈く

彼女は突然のことに、外の映像を映しているモニターを覗く

『探したぞ…研究者…』  
ダイタロス

そのモニターには、二体のハーピーを引き連れた空の王が映っていた

彼女はそのことに驚き、声にならない声を上げた

『そうだな…先日、再び地蟲が一匹このシナプスに侵入して…流石に放っては置けんと『サクライトモキ』の夢を隈なく調べていたら　お前のアクセス跡が見つかった。空の女王の封印を解

き、地上に落としたのはお前だな……研究者？』

それに対し、女の子は気丈にモニター越しに言い返す

「だからなに……？　言っておくけどこの家の周りに張り巡らせた

「分かってるさ、ダイダロス…今日はお前に伝えに来たんだ」

「えっ!？」

『第二世代のエンジェロイドを完成させた…『ゼロ』には及ばんがな……』

その言葉を聞いて、ダイダロスは小さく震える

『そうだ、お前の造った第一世代を遥かに凌ぐ戦闘力を持つ……第二世代だ』  
「何を…する…つもり？」

ダイダロスは聞きたくない事実、いや、実際には気が付いているのだが聞かすにはられない

『「何を？」…クク、決まっている』

その狂気に染まった顔が再び歪む。それはおもしろいことだと言っ

様に

『（アルファ）と（ベータ）を……………破壊する！！』

少女の先ほどまで見ていた地上に繋がるモニターには幸せそうな娘達の姿がある。

そして、目の前のモニターにはそれを破壊するという残虐非道で冷酷無比な男がにやりと笑っていた



悪夢とスイカと空腹と（前書き）

彼は夢の中で何もすることもなく空を眺めている。

それが、彼と智樹の夢の差なのだ。智樹が寝ている方が多いというのに、彼の場合は自分の意識がハッキリした状態でこの夢を見る。

それがどういった理由があつてかは分からないが、そうであるのなら何かの意味が必ずあるはずだとして、彼はこの夢に現れるはずの少女を待つのだ。

そして、それから数分にも満たない時間が過ぎた頃に、少女は突然現れ、彼に抱き付いた

「キヨウ君っ！！！」

「うおっ？」

それに彼は驚きはしたが、いつもの少女がこんなことをしないということを知っているので、少女の表情を見ずとも焦っているということが悟ることができた

「良かった…本当に良かった……」

「それはともかく…俺がここにいるって事は伝えたいことでもあったんだろ？ だったら感動の再会とかやってる場合じゃないだろ」

そう言いつつも、彼は少女を落ち着かせるように頭を優しく撫でるのだ

「あ、あっ、そうだね。こんなことしてる場合じゃなかった!!」  
「そんなに慌てなくても俺はいなくならないよ」

「うん、そうだよ。聞いて、キョウ君。大変なことになったの」

「

その瞬間に、彼が優しく撫でていたはずの少女の頭は突如消失し、彼の目の前から消え去ってしまった。

「なっ おいつ!?!」

彼が驚いているときに、少女の代わりに二つのシルエットが現れる。その片方のシルエットは、彼が常日頃見ている彼女のものと酷似していた。

いや、正確に言えば彼女そのものだった。その綺麗な空のように澄んだ青色の髪を、両端で縛ったツインテールは間違いなく、彼が家族として一緒に暮らしているニンフのものだった

彼がそのシルエットをニンフだと視認したの後に、もう一つの陽炎のように揺らめくシルエットに声を掛けられた

「お人形遊びしましょ」

「なに……?」

余りにも唐突な言葉だったために、彼は言葉を返す。だが、その言葉に返事が返ってくることはなく、その代わりのように、そのシルエットの隣でぐったりとしているニンフの顔が強く殴りつけられた殴られた衝撃で、ニンフの耳に当たる部位が破壊される。それは一度では終わらずに、彼の前で何度も何度も見せ付けるように殴りつけられ、破壊されていく。

彼は一瞬何が起きているのか理解できなかったが、直に状況を理解し、その行為を止めにかかる

「なっ やめろっ!！」

だが、彼が近づこうとしても何か分からない力によって近づくことすら叶わずに一方的にニンフは破壊されていく

「クスククス……お人形遊び、しましよ……?」  
「やめろっ……」

彼は壊されていくニンフの姿を見て頭の中が焼け付くのではないかというほどの激痛に染め上げられていく。

「やめろおおおおお!……!」

そこで、彼の夢は完全にシャットアウトされた。

彼は悪夢から目覚めると同時に叫んでいた。あの悪夢は夢だというのに余りにも鮮明に脳内に焼き付けられており、生々しい映像が繰り返して流される

「はあ…はあはあ……」

呼吸は荒く、心臓も皮膚を突き破って出てきそうなほどに大きく、そして速く鼓動を刻んでいる。

「クソ……」

小さく、吐き出すように眩き、荒かった呼吸を整えていく。呼吸を整えることによって早鐘のように刻まれていた鼓動も徐々に正常に戻っていく。

それによつて、頭を焼き焦がしそうなほどの頭痛も治まり、彼は冷静さを取り戻していく。

（あの少女が俺に何を言いたかつたのかは分からない……けど、それはきつと悪いことなんだろうな）

そして彼は、冷静さを取り戻した頭で先ほどの夢についての考え、一つの結論を出した。

（しばらくはあの二人から目を離さないようにしないと……）

彼はその後、寝汗でびしょびしょに濡れてしまったシャツを脱ぎ、私服に着替えるのだった

同時刻、河原では純白の翼を生やした少女がうつ伏せの状態で地面に突っ伏していた。朝の早い時間なので、小鳥達のさえずりが聞こ

え、本来ならば爽やかな朝を迎えられるはずなのだが……どうやら少女はこの河原でのサバイバル生活において、まともな食事を取れずにいるようだ

（皆さんこんにちは……良いお天気ですね。お腹がすきました）

彼女の衣服から見えるその肢体は、今も尚美しく綺麗だが、地面にうつ伏せに突っ伏した状態でいるので、団子蟲や蟻と言った生物がもぞもぞと動いている

（地上に来て早数ヶ月…思えばろくに食事を取った記憶がありません。最近になってはあのご飯をくれる人もめつきり姿を見せなくなりました）

そんな時、彼女の鼻先に食べ物の匂いがふんわりと漂ってくる。今の彼女の嗅覚は、遥かに人間を凌駕しているに違いないだろう。

くんかくんかと鼻で匂いを感じ取った彼女はのそりと立ち上がる

（食べ物の匂いっ！！）

そしてまた、同時刻、同所。

河原ではサバイバル生活を送っている中学生、守形英四郎が食料を調達するためにおっちゃんイカを餌に、釣りをしていた。

狙うは大物……だが、餌が餌だけに彼は釣る事さえ出来ればそれでいいというように、浮が沈むのを無言で待ち続けていた。

その瞬間、浮がピクリと水中に引き込めれるように沈んでいく。彼はそれを見逃さずに、手に持った竿を素早く引き上げた

だが、彼が狙った魚はその竿の先には居ず、そこに居たのは、純白の白い翼を生やした少女が居たのだ

守形はしばらく、いや、実際には数秒に満たない時間を悩んだ末に、釣りの餌に使っていたおっちゃんイカを袋ごと差し出す。

少女はそれを見ると、ぱあっと表情を明るくする

「えっ！？ くれるの？ ありがとうっ！！」

少女はそれを受け取ると、中に入っているイカを一つまみし、口に運ぶ

「やった！！ 久しぶりの食べ物だ！！ わーい」

それを口の中に入れ、味わうように噛み締める

「一つ一つ味がなくなるまでしっかり噛まなくっちゃ！！ ひとつひとつ」

言葉の通りに、一つ一つを味がなくなるまで噛む少女の絵は何処か  
シユールだ

こんなことを書いているうちにも、少女はもぐもぐと噛む事を続け  
ている

「味がなくなるまで!! 味がなくなるまで」

だが、少女はあることに気が付いてしまう。

(みじめっ……!)

そう、本来ならば殲滅すべきダウンーに食料を与えられ、ガムを噛  
む如くイカを噛み続ける自分の状況に

(あまりにもみじめっ!)

そんなことに気が付きながらも、おっちゃんイカの袋を手から離さ  
ずに、地面に跪く少女

(私はシナプス最高の近接戦専用エンジンロイドタイプ (デルタ)  
アストレア  
Astrea なのに、味がなくなるまでって何っ!? なん  
の!!)

そこで、少女は自分の中で一つの結論に行き当たる。

(こうなったのも全てアイツのせいだ)



少女の頭の中には恭夜ではなく智樹の姿が真つ先に思い浮かぶ。何故なら、少女の第一目的であったのは彼だから

(こつなつたら 復讐よ……)

うつつと泣きそうな声を飲み込みながら少女は立ち上がる

(アイツを同じ目に あわせてやる……!!)

## 悪夢とスイカと空腹と

「あー……おやつ……たべたい」

昼過ぎの桜井家の縁側には、ぴよぴよと小鳥のさえずりが聞こえてくる。そこで、ニソフは暇そうに、それでいて多少不機嫌そうに、床に青色の綺麗な髪を落としながら、太陽の日差しを浴びていた

何故、彼女が桜井家の縁側で暇そうに、それでいて不機嫌そうにいるのには理由がある

まず一つ目には、彼女の第一声にあった様に、彼女の食べるお菓子が無いからである

「それに恭夜もどうしていきなり私にトモキの家に行きなさいなんて言ったんだらう？ それより……おやつたべたいなあ」

そして二つ目には、恭夜に家を追い出されるような形で桜井家に来たからでもある。

まあ、彼女にとって後者の意見は二の次であり、お菓子が無い現状の方が不満らしい

「戸棚を探しても何もなし…アルファーが買い物から戻ってくるまでなんて待てないわよお……………」

そして、彼女のお菓子の食べたいゲージがレッドポイントを超えかけたのか、ニンフは縁側で駄々っ子のように手足をバタバタとばたつかせ、叫ぶのだ

「あー！！ おやつたべたい！！ たべたーい！！！！」

しかし、次の瞬間にピタリと止まり、ニンフは何かを思いついたように呟く

「あっ、そっだー！！」

ニンフはその場から立ち上がると、とたとたと台所に向かい、冷蔵庫の前にたつ

「まだ冷蔵庫見てないんだっ。もしかしたら何か入ってるかもっ  
」

ニンフは期待を胸に、冷蔵庫の取っ手に手をかけ、中を見る。

その瞬間に、彼女の顔は何か得体の知れないものを見るような厳しいものに変わった。

何故なら、そこには彼女と同じエンジニアロイドである、アストレアがほっかむりを被り、シクシクと泣いていたからだ

流石に彼女もこの状況では質問しなければいけないと思ったのか、冷蔵庫の中に入っているアストレアに声を掛けるのだった

「何……やってんのよ……」

その質問に対し、アストレアはうつつと泣きながら答えるのだ

「冷蔵庫の中に……何一つなくて……悔しいからあいつの食料を全部食べてやろうと思ってきたのに……何一つ無いって何ですか？  
なんなんですかっ!？」

そして、今まで溜まっていたものを吐き出すかのようにアストレアは叫ぶ

「ニンフ先輩おナカすいたーっ!!」

うわーんと叫ぶように言われた言葉に対し、ニンフも己の不満を吐き出すように叫ぶ

「うっさいわねっ!! 私だっておやつ食べたいのよ!!!」

そして、二人の叫びは二重奏となり騒音を奏でる

「ごはんー!!! ごはんー!!!」

「おやつ!!! おやつ!!!」

アストレアはごろごろと転がりながら、ニンフはバタバタと手足を動かしながら叫ぶ。

その様はまるで幼稚園児と小学生低学年のようだ。

だが、ニンフはあることに気が付いたのかピタリとその動きを止めて呟く

「まって…おやつも食べ物もあるわ……」

「えっ?」

そういうと、ニンフはスタスタと再び縁側へと戻っていく。アストレアもニンフの言葉を聞いて、一緒に着いて行く。

そして、そこで彼女達の目に映ったのはイカロスが大切に育てている家庭菜園のスイカ畑。

大玉から小玉までサイズもいろいろあるが、どれも虫に食われた後ではなく、それでいて腐ってすらいない完全な状態のスイカが十個ほどある。

「アルファアが庭で……育ててるのよ……」

ニンフはそれを知っていてなお、じつとスイカ畑を眺めている。

流石にアストレアもイカロスの育てているスイカと聞いて、身の危険を感じたのかニンフに向かって言う

「マズ……いんじゃないですかね……イカロス先輩って大層スイカをかわいがっていたような……」

「そうね……ばれたらシャレにならないでしょうね……」

『でも』

そこでニンフとアストレアは一時間隔けてから『でも』と呟き

「少しくらいならばねないんじゃない!？」

「そうですね。ばれなきゃ良いんですよ、ばれなきゃ!……」

誘惑に負けてしまった。ニンフはおやつを食べたいという誘惑に、アストレアは食事という誘惑に。

ニンフはまな板を持ち、アストレアは包丁を準備していた。

二人は各々が持っていたものを縁側に置き、スイカを選んで切つて食べ手を繰返す。そのワンシーンだけを見れば彼女達は笑顔であり、とても幸せそうに見える。

「あまーい!!」

「おいしーい!!」

二人はスイカのおいしさに和気藹々と次々にスイカを胃の中に収めていく。

それから一時間もしないうちに、二人のおなかは満たされ、おなかを撫でながら縁側で幸せそうに座っている姿がそこにはあった。

「おなか…いっぱいね…」

「ええ、幸せです」

そこまでは二人とも幸せそうに息を吐きながら、共通の意見を述べる  
だが

『とじろで

』

そこで二人の心境が完全に一致する。

(どつしましよう……)

(そうね…本当にどつしましよう……)

塩、コシヨ、コンデンスミルクの残骸と、スイカの残骸が転がる縁側と、スイカ畑だった場所を見て二人の表情は一気に歪んだ

そして、アストレアはこの後のことを考えたのか、ニンフに尋ねるように言う

「マママ…マズインじゃないですか!？」

「こないだ…このスイカ畑に害虫が寄ってきたことがあってね…

……」

それに対してニンフは、思い出したくないという感じにだがアストレアに言葉を返す

「そ、それで?」

「アルファ…一匹残さず『アルテミスArtemis』で撃墜してた…

……」

「Artemisって半永久的に追いかけてくるアイツですよね…

……」

二人はうわぁーと言った感じに嫌にべたつく汗を流し、スイカ畑であった場所を凝視している。



要するに、現実逃避なるものだ。だが、それはそう長くは続かなかつた。

ガチャツと、玄関の方から誰かが入ってくる音が聞こえたのだ。とたたと足音が近づいてき、イカロスの姿が二人の目に映る。

イカロスも二人に気が付いたのか「ただ……いま……」と、言おうとした瞬間……ニンフ、アストレアは縁側にある引き戸をほぼ同時に閉めて、イカロスにスイカ畑の惨劇が見えないようにする。

それはあくまで一時凌ぎにしかならないということを知っておきながら

「ヤヤヤ、ヤバイヤバイヤバイですよ!!」

「なんか良い方法ないの？ ないの!？」

そんな会話を小声でイカロスに聞こえないように二人は会話をする。イカロスはどうしたのだろうか、彼女達に引き戸越しに「どうか……したの？」と小さく問いかける

だが、彼女達にとってはこのスイカ畑をどうにかする方が大事なために、イカロスの声を聞こえない振りをして二人で会話が続ける

「そうだ!! ニンフ先輩のハッキング!! アレでスイカにもつと育てつてハッキングするのはどうですかね!？」

「えっ!?! でも私、植物に一度もかけたことないんだけど!？」

そんな会話の合間にも、イカロスは引き戸をトントンとリズムよく叩き、二人を急かすかのような錯覚に陥らせる

「そんなこと言っている場合じゃないですよ!?!」

「そうね!! そんなこと言っている場合じゃないわっ!?!」

彼女はスイカのツタに手を翳し、ハッキングを開始する。

すると、スイカは確かに再生はしたのだが……自ら動くこと出来る化け物のようなサイズになり、そのツタをぶんぶん振り回している姿がそこにあった

「なんですかーっ!! これーっ!?!」

「し、知らないわよおお!!」

そんなことを叫んでいる合間にもよきによきと成長し続け、結果的に三メートルほどのサイズにまで巨大化する

「植物は初めてだっっていうたでしょおおおっ!?!」

そのニフの絶叫は、二階にいる智樹にまで聞こえたらしく、智樹は自室の窓から顔を出してニフに一喝を入れる

「おいっ!!! ウルセーぞっお前ら!!!」

だが、その瞬間に哀れにも智樹は巨大化したスイカの化け物に頭から捕食されてしまった。

「ぎゃああああっあ!!! ちょ、なんだコリヤっ!? 溶けるっ!!! 溶かされるううううう!!!」

スイカの化け物はもぐもぐと智樹を噛み締め、ごくりと飲み込む。その後直に、口からプツと何かを吐き出したのである

その何かは二人の前に転がっていき、止まる

「タタタ…種になっちゃいましたよ先輩っ!!!」  
「し…しのごの言ってる場合じゃないっ!!!」

何故なら、先ほどよりもイカロスの引き戸を叩く感覚が狭まってきており、明らかに何か不信感を抱き始めているのが分かってしまったからだ。

「とにかくこの種を植えてみましょうっ!!!」  
「そうですねっ!!! 植えてみましょう!!!」

アストレアは足元に転がっていた智樹の種を拾うと、指で地面に穴を開けて、智樹の種を植えた。

すると、数秒にも満たない時間で芽が出てきたかと思うと、先ほどのスイカのようによきよきと巨大化していき、二体目の異形が姿を現した。

頭部にはスイカ模様になった智樹の顔を持った化け物が、アストレアをその触手状のつたを使ってからめ取る

「キヤアアアアツアアアツあ！！？」

その触手状のつたはアストレアの胸や陰部を執拗にまさぐり、その後にはパンツや衣服の中にもぞもぞと侵入していき、終いにはそれらの衣服を脱がせようとする

アストレアも始めこそは抵抗できていたが、次第に抵抗する力を失っていき、ぐったりとする

流石のイカロスも、我慢の限界を超えたのか、引き戸に拳で穴を開け、そこから紅くなった瞳を覗かせてこういうのだ

「ニンフ……開けなさい……」

その声に対し、ニンフは必死にごまかそうと声を上げるが、どうやら無駄のようだ

「マスターの悲鳴が……聞こえた」

ニンフは、錯乱した頭で最終手段を思いつく。それは

(こ、こうなったら……)

手には光る一枚のカード。それを翳すと、ハーピーの持っていた『プロメテウス』のような形をした筒が現れる

(証拠隠滅あるのみっ!!)

それが完全に姿を現すと、ニンフはその引き金を引く。

すると、その筒状に物体の発射口のような場所にエネルギーが収束していき、次第に大きくなっていく。

集まっていったエネルギーが顕界を超えたかと思うと、帯状の光がスイカの化け物に向かって放たれた。

その光は全てを巻き込み、桜井家を崩壊させた末に、スイカの化け物を破壊する。

破壊されたスイカの化け物からは、素っ裸になってこげている智樹と、光に巻き込まれたアストレアがぼとりと落下してきた。

燃え盛る庭、その中心にはニンフとイカロスの姿があり、ニンフは  
険しい表情を、イカロスは何が起きたのかというように呆然と立っ  
ている

ニンフはこのままでは自分に疑いの目が向けられると思ったのか、  
震える唇を動かし……

「……………でっ……………デルタがやったのよっ！！！」

「ええええええっ！！？」

そうイカロスに向かって宣言した。アストレアもその言葉に対して  
反応したまでは良かったが、イカロスにターゲットをロックオンさ  
れた挙句、アルテミスを放たれてしまったために、逃げ切ることも  
叶わず……………桜井家のあったところで大爆発が引き起こされたのだ  
った。

それからしばらくしないうちに、命からがらに河原へと逃げ切った  
アストレアは、自分に濡れ衣　　正確には犯人に違いはないの  
だが　　を被せたニンフに向かって叫んでいた

「酷いですよニンフ先輩っ！！」

「うっさいわね……だから、さっきから謝ってるじゃない」

多少はニンフも悪いと思ったために、先ほどから謝ってはいるのだが、アストレアの怒りは収まらぬようで先ほどからぶつぶつとではないが、ニンフに向かって文句を言う状況が続いている

「だいたい…どれだけ怖かったと思ってるんですかっ！？」 オニっ

「！！ オニー！！！」

そして、アストレアはまだ続ける

「大体ニンフ先輩が悪いんですよ……小っさいくせにたくさん食べるから」

「小っちやいつ！？」

小っちやいと言う言葉にピクッとニンフは反応したかと思うと、怒りをあらわにしてアストレアに近づいていく

「ちっちやい？ 誰がちっちやいですって！？」

「あっ…やば」

アストレアはニンフから逃げるためにその翼を羽ばたかせ、空に舞

う。

そして、あることに気が付いたのか、ニンフを見ながら勝ち誇った風に言うのだ。それが失言だとも気が付かぬままに

「そっか。ニンフ先輩羽がないから追っかけて来れないでしょーっ、やーいやーい!」

ニンフは一瞬アストレアを見上げたかと思うと、直に地面に視線を落とし、アストレアに背を向けて歩いてきた道に戻ってゆく

「あれっ？ あの…ニンフせんぱーい…?」

アストレアの呼びかけに、ニンフは振り返ることなくとぼとぼとその場から立ち去ってしまう。

そこで、アストレアは気が付く。だが、彼女はそれを意地を張って認めない

「…何よ…ニンフ先輩が悪いんじゃない…」

アストレアはそう不貞腐れるように呟いた後、近くにあった木の枝に腰を下ろした



「それに…二人とも勝手よ……シナプスを裏切ったくせに……」

そこで、彼女はあれっと言うように考え込む

(そういえば……どうして二人ともシナプスを裏切ったんだろう？)

そして、場所は変わって公園。そこにあるブランコには恭夜に向かって愚痴を零す智樹の姿があった。

恭夜は智樹の愚痴を嫌な顔一つせずに聞いている

「あー……くっそう…大体どうしてあいつらは俺の家を何度も壊すんだよ……」

「まあ、あいつらも壊したくて壊してるわけじゃないんだからさ…  
…な、分かるだろ？」

「まあ、わかるけどよお……せめて今晚寝る場所とかは残して欲しかったって言いたかったんだよ……」

そういう智樹の顔は、どちらかという諦めているかのような表情であり、本気で彼女達に対して怒りを出しているというわけではな

いのが分かる

恭夜もその表情からそのことを悟っているために、口には出さないが彼の愚痴に付き合っているのだ

「しかたねえな……今日は俺んちに泊まれよ。家が直るまでは家に泊めてやるから機嫌直せて。な、トモ坊？」

「むうっ……俺はそういうことを言いたいんじゃないやなくてさ　あ　あ、もうっ!!！」

智樹は頭をガシガシと掻きまると、冗談のように彼に向かって呟くのだ

「ああ…神様……いや、恭夜様……どうか私を未確認生物のいない世界に連れて行ってください……」

「いや、俺は今を気に入ってるからそんなこと　　っ？」

智樹に向かって言葉を返していた彼の背中を後ろから誰かに捕まれる。どうやら恭夜だけが捕まれたようではなく、智樹も掴まれていたようではほぼ同時に後ろに振り向いた。

そこには、黒い修道女が着るような服を着た、幼稚園児ほどの女の子がにっこりとしながら立っていた。

一瞬の沈黙が彼ら二人を包み込む。

智樹は恭夜が何も言わないのを見て、代わりにと言つようにその女の子に尋ねるのだ

「どつしたんだ？」

その言葉に対し、女の子は返すように呟く

「連れて行ってあげようか……未確認生物のいない世界に……連れて行ってあげようか？」

その言葉に対し、智樹はじわりと涙を流し女の子の頭を撫でる。それに反し、恭夜は女の子に対し謎の恐怖を覚え、頭の中に即座に武装できるように武器になりえるものの設計図を思い浮かべる

「はあく、ちつさいのにいい子だねえ。人を気遣うなんて」

そして智樹は何の疑いもなく、その女の子の頭を撫でる。

恭夜もそれを見て、先ほどの考えを捨てたのか智樹に続くように女の子の頭を撫でた。

「でもな、もう遅いから家に帰りな？ きつとお母さんとかお父さんが心配してるぞ？」

「じゃあな〜」

二人はブランコから立ち上がり、桜井家のあった場所の方に向かって歩いていく。

女の子は二人に撫でられた頭を触れて、くすりと微笑みながら呟く

「えらいつて……ほめられちゃった」

次の瞬間、智樹と恭夜の耳元で女の子の声が聞こえた

「じゃあいいのね……？ お人形遊びしても……」

びくりと二人はほぼ同時に反応し、声の聞こえた方向に顔を向ける。それが空耳ではなかったということは、お互いに顔を見合わせたことで証明されており、智樹と恭夜の背中にぞくりと何か嫌なものが通り過ぎた。

まるで、朝に見た夢の続きを今見ているかのような錯覚に襲われながらも、智樹と恭夜は唯その場で数分の間、呆然と立ち尽くすのであった

悪夢とスイカと空腹と（後書き）

ええ、最近元気が足りない作者の絃城恭介です……

気分を一新してギャグからシリアスを書いてはみましたが……文章レベル的にコレでいいのかという感じになっています。

元々気分転換で書いていたものなのでコレでいいのでしょうか……  
…財布を失ったショックと、お金が全てなくなったというショック  
で

いや、ここでこんなことを書いても仕方がない。

次回、完全シリアス。しかもおそらく上中下に分かれた話になると  
思います。

ゼロの複線もそこで回収予定。

この陰鬱な気持ちを小説にぶつけないように精一杯書いてやるんだ  
からねっ……！

うわ……「やるんだからねっ」「とかキモイ……

自分でダメージ食らってる現状に

笑ってやるっ W W W W W W W W

はあ、なにやってるんだろっ………

混沌襲来（前書き）

黒翼を生やした少女は薄暗い空間で石壁に首輪から伸びる鎖を、杭のようなもので縫い付けられ、死んでしまったかのように眠っていた。そう、眠っていたのだ。

だが、眠りから醒めてしまった少女は状況を把握すると石壁に縫い付けられるように付いている鎖を必死に引っ張り、その戒めから開放されようと足掻き続ける

ある、言葉を放ちながら

「マス…ター……マスター!!」

今にも嘎れてしまいそうな声で、少女は今現在も薄暗い空間で叫び続けているのだろう

絃城家の洗面所で、ニンフは鏡に背を向けて背中を見ていた。本来ならばそこには七色に綺麗に輝く羽があったはずなのだ。

だが、彼女の背に残っているのは生々しさの残る千切られてしまった羽の痕が残っているだけ。

彼女はそれを物悲しそうに見つめている。そして思い出されるのは、この前にアストレアに言われた言葉だ

『そっか!! ニンフ先輩、羽がないから追いかけて来れないですよ!! やーいやーい!!』

だが、ニンフにはその言葉に悪気がなかったということを知っている。だがそれでも、彼女は不安になっていく。

もしものことを考えてしまうと。ここに来る前に仕えていたマスターのことを思い出してしまうと

『そんな出来損ないは…廃棄するしかないなあ……?』

ぞくりと背中に寒気が走る。

絶対に彼がそういう事を言わないと信じているのに、信じたいのに

……

「~~~~~!!」

だから彼女は頭をふるふると横に振り、今考えてしまったことを頭の外に追い出す。

(大丈夫……恭夜は絶対にそんなコト言わない……恭夜なら)



安心しきった顔で、彼女は心の中で繰返す。まるで自分に暗示を掛けるかのよう。

それは、心のどこかで嫌われてしまうのではないか、必要とされていないのではないかという不安の裏返しであるということ。彼女が気がつけない……いや、気が付きたくない。

何故なら、本当にそうなってしまふことが怖くて、辛くて、寂しくて堪らないから。

何より、それは彼を信じていないということになってしまふから。

だから彼女は心の中で繰返すのだ。恭夜に限ってはそんなことはありえないのだと

その時、コンコンと洗面所の扉がノックされる。ニンフはそれに反応し「なに？」と返事をし、扉を開く。

彼女はてっきり恭夜だと思っていた為に多少驚きながら、そこに居た人物に挨拶をする

「あ…おはよう、スガタ」

守形は手を挨拶の代わりに軽く上げると、ちょいちょいと手を動かし、まるで着いてきてくれと言わんばかりに、無言のまま別室に向かって歩いていく

ニンはそれに気が付き、守形の後ろをおとなく歩いていった。

## 混沌襲来

「 フム、今回の記録15秒 次は20秒くらい…いや、30秒はいけるか? 」

「 まだやるの? 」

えー、と言いながらもダイブゲームを行うために機械を弄りながら守形に尋ねるニンフと、腕時計を見ながら呟く守形の姿がそこにはあった。

「 朝から何回も何回もトモキの夢にダイブしてっばかり…もう疲れたわよ 」

「 まあそついうな。敵に勝つにはまず敵を知れ…だ。何とかしてHarpyをまいてシナプスを調査せんと… という訳でニンフ次は30秒 」

そして、ぶつぶつと文句を言うニンフの意見を華麗にスルーして、自分の目的を達成しようとする守形

「 いや、40秒いけるか? 」

「 ちょっと楽しんでない…? 」

しかし、ニンフには守形の言っている意味を理解しているために、文句を言いながらもしぶしぶ了解する

「まったたく……40秒ね」

そう言って、ニンフは機械のボタンを押し、守形を智樹の夢へと転移させる。

そして、守形に言われたとおりの時間ぴったりにこちらに戻すために、あらかじめ渡されていた時計の針を見ながら時間を数える。

「いち……に……さん」

「ニンフ」

めんどくさそうにだが、きつちりと時間を数えるニンフ。例えめんどくさいと言っても、コレは下手をすれば命に関わるような作業だとニンフは知っているの、恭夜に呼ばれても数を数えるのをやめないで、そのまま返事を返す

「アラ、恭夜どうしたの？」

後ろから恭夜は近づいていき、ニンフの腕を掴んだ

だが、ニンフにとってそれは思いにもよらないコトだったのか「えっ……？」と言葉を漏らしてしまう

「来いよ、デートしようぜ」

それと同時に言われた言葉に、ニンフは数を数えるのも忘れて頬を赤らめる。だが、すぐに数を数えていたことを思い出し、恭夜に事情を話して少し待ってもらおうとする

「えっ？ あっ、今スガタが」

「いいからさ」

グイッと手を引っ張られ、持っていた時計を床に落とす。

「ちょ…ダメよ！！そんな強引に…恭夜っ！！」

一方、現在シナプスにいる守形は時計を見たまま固まっていた。何故なら、両脇には武器を構えたハーピーが二体、彼に密着しているからだ。

正確に言えば、武器を突きつけられているからだ。

それだけならば、別に守形は固まることなどないだろう。しかし、問題はそこではなかった。本来ならば地上に戻るはずの時間になっても身体は地上に送還されずに、この場に残っているからだ

「すみません…地上で何か起きたようで」

「あら、そうなの？ 心配ね……」

守形はごまかそうと、二体のハーピーに向かって事情を説明すると、驚くことに心配をされたが……

「じゃ、なくて！！ 覚悟は出来ているんでしょっねー！！」

すぐに額に血管をを浮き上がらせ、守形に向かって手に付けられている鋭利な爪を繰り出す

その瞬間、突如守形は背中を誰かに引っ張られる。

守形は状況を把握するためにとりあえず後ろを見ると、そこには智樹と恭夜の言っていた夢の少女と特徴がほぼ一致する少女が居た

「じつちー！！」

その少女は焦ったように、彼を空間に開いた穴の中に引きこもっている

守形は引っ張られている方向に身を流し、穴の中に引きずり込まれるような形で何とか逃げることに成功した。

「良かった…間に合って」

少女はベットの上に腰を下ろしながら呟く。

守形は、先ほどと違う場所に来ていたために多少は違和感を覚えたが、すぐに確認の為に少女に尋ねるのだ

「お前が……二人の夢に出てくる女の子なのか？」

風が心地よく吹き抜ける草原にニンフは恭夜に手を引かれる形で歩いていた。

その間にも、こちらに戻すことの出来なかった守形のことを考えて、不安そうにしている。

だが、同時に恭夜と一緒に外を歩いているという嬉しさもあり、ニンフはどうすればいいのか分かっていなかった。

その時、不意に彼女を引っ張って歩いていた彼が立ち止まり、彼女の名前を呼んだのだ

「ニンフ」

その呼び声に反応し、ニンフは顔をあげる

「今日お前を連れ出したのはさ、どうしてもお前に伝えたいことがあつたんだ……」

「えっ？」

ニンフはなんだろうかと思い、恭夜の顔を見る。

そこにはいつもとは少し違った感じの表情をした、恭夜の姿がある

「俺…お前のマスターになりたいんだ……」

そして、今まで彼女が願っていた言葉が聞くことができた。

初めは、彼女も聞き間違いではないだろうかと笑いながら返事をした

「あは、あはは…いきなりなにを言い出すのよ…！ 冗談きついわ  
！…」

「ニンフ」



彼女は、そう言って冗談だろうと否定する。

だが

「冗談じゃない」

そこには、ずっとマスターになってもらえたらと思いつけてきた人がいて、手を差し伸べてくれている。

それを見て彼女は、自分のコトを貶すかのように呟き始める。まるで、否定してくれると信じているように

「だって……私……羽ももうないし……」

「いいんだよ」

涙を堪えながら、言う

「ずっと『出来損ない』って言われてて 役立たずって言われ

て」

「良いんだよ」

それでも、恭夜はそれを受け入れていいと言ってくれた。彼女の心はそれだけでももう、十分動いていた。

「ずっとかわいいなーって思ってたんだ。お前を俺のエンジェロイドにしたいなーって……………」

ずっとなんとなく、ニンフの待ち望んでいた言葉と、人がいる。

だから、ニンフは確認するように聞くのだ

「…本気……………なの？」

「ああ…本気だとも」

そこに、いつもの何処か寂しげなニンフの表情はなかった。

嬉し涙。人を信じてもいいのだと心から思えるような顔。今までに無いくらいの可愛い笑顔がそこにはあった

「ほんと…………？」

最後にもう一度、ニンフは彼に向かって尋ねると、彼は手を再び差し出す。

そして、彼女の顔に触れ、流れ出ている涙を優しく拭いとる。

どこかのドラマのようなワンシーン。幸福を手に入れたと少女は涙を堪えながら、精一杯の笑顔で言うのだ

「じゃあ…早速刷り込みするね！」

「あ

そこで、先ほどまで彼女に優しく接していた恭夜が忘れていたというように指を一本立てていう

「ちょっと待ってくれ。その前に一つ命令があるんだった」

ニンフは、速く刷り込みがしたいために、涙を拭うように瞳をこすりながら命令を聞く。

「なに！？ 何でもするよ！？」

そこで、ニンフの目の前で彼の表情が歪む。だが、彼女にそれは見えていない。何故なら、こんな幸福を逃がしたくなかったから。

だが、彼女に向かって告げられた言葉は彼女の心を打ち砕くには十分すぎた

「自爆してくれ」





にじられたものによるものだろう。それほどまでに、彼女は彼を信頼しているのだから

自身が信頼する人物を……いや、もっとも好意を抱ける人の姿を偽っていた。それだけで彼女は彼に対する侮辱にも思えた

「恭夜の姿をして……よくも……よくもっ……!!」

すると、恭夜の姿をしていた何かかにやりと笑ったかと思うと、背後からパキパキと音を鳴らしながらやけに機械質な何かが現れていく

「あーあ、ばれちゃった……」

そして、徐々に姿がブレていく

「もっと……『愛』を教えて欲しかったのに……」

ニンフは、恭夜の姿を偽っていた者を睨むように見る。

「初めましておねえさま……私は第二世代エンジェロイドタイプ  
(イプシロン) 『カオス』 Chaos 『」

その、カオスと名乗る少女もまた、ニンフとは違った意味でニンフを見ながら尋ねる。それは、無垢な子供のような瞳でいて、何の悪意もないが、何処か狂っているようにも見える

「ねえ…………『愛』ってなあに…?」

「ふざけるなっ!」

その言葉に対し、ニンフは騙されていたこと、裏切られたと思ってしまったこと、その全てを吐き出すように己の主兵装である『超超音波振動子（パラダイスⅡソング）』を放つ

放たれた『パラダイスⅡソング』はカオスに向かって寸分のズレも無く命中する。その衝撃波と同時にカオスが大きな光に巻き込まれる

614

「よしっ!」

（直撃した!）

そして、ニンフはその光景を見て吐き出すように言うのだ

「はは…ぞまあみる……」

そして、彼女の頭の中には繰返されるように一つのシーンが流れている

『ニンフ…俺、お前のマスターになりたいんだ』

それは、彼女が一番言っていて欲しかった言葉。誰かに必要とされる、自分の存在を証明してくれる言葉。

それだけに彼女の吐き出した言葉は悲壮感に包まれていた

「ざまあみる……………」

今にも泣いてしまいそうな声をかみ殺し、ニンフはその場を後にするために後ろを向く。

『パラダイスⅡソング』の衝撃によって巻き起こった砂塵が彼女の後ろで晴れると、そこにはカオスの姿はなく

「なにがざまあみるなの？」

彼女の耳元で、不思議そうに尋ねるカオスの姿がそこにあった。

ニンフは余りにも想定外の出来事だったのか、ワンテンポ遅れてカオスの方を振り向こうとしたが遅い。

「なっ……………!？」



完全に振り返る前に強烈な力で首輪を掴まれ、空中に持ち上げられる

(ウソ……確かに……直撃したはずなのに……!!!!)

ニンフはその手から逃れようとするが、想像以上にカオスの握る力は強く、脱出することは叶わなかった。

そして、カオスの目が戦闘時のイカロスのように色が変わって行く。まるで標的を排除するためのように

「私は……ますたーからイカロスおねえさまの可変ウイングの核を取って来いって言われた……シナプス最高の動力機関……可変ウイングの核を」

「可変……ウイングの……核？ そんなもの何に」

首を締め上げられているというのに、ニンフは必死に声を絞ってカオスに聞く

「シナプスにはエンジニアロイド以外にも強力な兵器がたくさんある……それこそイカロスおねえさまの使ったような地蟲を全て消せるような……でも、それを動かすための動力がないんだって」

そして、カオスは続けるように言う。

「でもね……私にはそんなことは興味ないの……だからね、イトシ

ロ「キヨウヤに化けて、おねえさまに教えてもらおうと思ったの」

だが、ニンフにはカオスの言っていることの意味が理解できない

「教えてもらおう…？ 何……を」

苦しそうにだが、カオスに向かってニンフが尋ねると、カオスはニンフを地面に放り投げ…

「だから言ったじゃない……」

ニンフは咳き込む暇もなく顔を上げると、そこには先ほどまで前に浮いていたカオスの顔があった

「『愛』ってなあに？」

ニンフには答えることは出来なかった。いや、答えようとしてもそこまで頭が回らなかったのだろう

「だってそうでしょ…？ エンジェロイドはますたーの命令を遂行するのが存在意義なのに おねえさまたちはシナプスを裏切った！」

まるで面白いものを見つけて、興味を持った子供のような瞳でニンフを見ながらいうのだ

「ますたーはおねえさまたちが愛に狂ったって言ってたけど……エ  
ンジェロイドには『愛』なんてプログラムされていない……だから……  
知りたいの」

その言葉にウソはないのだろう。だが、カオスにはその言葉の意味を確かめる術がこれ以外には思いつかなかったのだろう

「愛ってなあに……？ おねえさまはイトシロキョウヤと愛し合っ  
てるの？ ……ねえ」

「……私……は……」

『家族』……確かに恭夜はニンフにそうは言っているが、それはきつと友人としてや家族に向ける言葉に近いのだろう。

恋人といわれれば唯の居候、愛人かといわれれば友人……

だからニンフは返す言葉に詰まる。

「……あーあ………やっぱりニンフおねえさまじゃだめかあ………」

そうこうしているうちにカオスは痺れを切らしたのか、ニンフの返答を待たずにその姿を彼女に近い人間のものに变化させる

「そうよね、羽もないようなできそこないじゃねえ……?」

その姿は、彼女達エンジニアロイドを使って智樹や恭夜を弄ったりして、みんなで楽しもうとしている会長のものだ

「貴様アツ!!!」

ニンフはそのことに激怒し、拳を固めて殴りかかるが、簡単にカウンターを受けて地面に転がる

「大体お前は何がしたいんだ？ 恭夜はお前を可哀想だと思っているだけじゃないのか？」

そして、ニンフが立ち上がる前に再び別の姿に変化し、ニンフの心を抉るように痛めつける

ニンフはそれに対し、どこかが壊れてしまったかのように『パラダイス』ソング』を連射する

「貴様ツ…貴様アツ!!!」

だが、ニンフの放つ『パラダイス』ソング』はカオスの展開している防御システムの前に何の意味もなさない

「出来損ないの癖して恭ちゃんを狙わないでよ……私、ニンフさんのこと大っ嫌い」

「うるさいうるさいうるさいうるさい!!!」

ニンフはそれを聞かないように、聞きたくないために唯叫び続ける。

「ニンフさ…本気で恭兄がお前のこと家族なんて思っていると思っ  
てんのか？ 違うぜ…恭兄は唯自分の過去と今のお前を重ねてるだ  
け」

「うるさいっ!!! だまれ…ダメレ…黙れエエエツ!!!」

そして、目の前で先ほどまでニンフに向かって心無い言葉を浴びせていた四人が集まって、クスクスと笑いながら何かの会話をしている

「そっだ、こっうしましようか？」

「ああ」

「そっね」

「それがいいんじゃないか？」

「この………ビチグソがアアア!!!!!!」

それに対し、もう抑えることの出来なくなった涙を流しながら、ニンフは叫ぶ。

だが、それさえ気にした様子も見せず、何かが決まったというようにニンフに向かって全員が顔を向けたかと思うと……

一番現れて欲しくない人の姿が現れる

「きょう  
」

それでも、ニンフは今までの彼を思い出し、何とか耐えようとした。堪えようとした。

「ニンフ…お前は廃棄処分だ。この羽もない……出来損ないめ……!!」

「うわああああアアアアああアアああアアああッッ!!!!!!」

それでも、たとえ違う存在だとしても…その言葉だけは言って欲しくはなかった。

だからだろうか……それを聞いて、ニンフの中に芽生えつつあった人の温かみ、繋がり、思い出と言ったものが全て壊れていくような音がした

「クソツ　　クソオツ！！　ビチグソがつ！！　ビチグソがああ  
ああ」

「ふふっ……………」

そして、壊れてしまったラジオのように繰り返すのだ

「クソクソクソクソクソクソ　　グチャグチャにしてやる……  
グチャグチャにしてやるうっ！！！」

そこにはニソフの悲痛な叫び声が響き、カオスはそれを聞いてせせ  
ら笑ったのだ。

「ねえ…おねえさま。　私は愛を知りたいの　　」  
「ビチグソがあっ！！！！！」

ドオオオン

その頃『Royful』<sup>ロイフル</sup>と言うファミレスでは、智樹、そはら、

恭夜がボックス席に座って食事をしながら談話をしている姿があった。

ちなみに、智樹はうどんを、そはらはジュースを、恭夜はパフェを食べている。

「なんだろう…今の音……………」

「さあ……………」

「まあ、どっかで工事でもしているんじゃないか？」

そう言つて、智樹はうどんの汁を啜りながら、恭夜はスプーンでパフェのアイスの部分をつついて切り離しながらそはらの疑問に対して言葉を返すのだった

623

「それにしても、恭兄が甘いもの食べるなんて本当に変わったよなあ。あの時はアイスクャンディーですら食べなかつたしさ」

「あ…そういえば恭ちゃん甘いもの食べなかつたのに」

智樹が恭夜の昔話を切り出すと、そはらも思い出したというように恭夜に向かって尋ねる

「んー、まあ。こつこつものも食べたい気分てのがあつてさ…………まあ、それを言うならお前もじゃないのか、トモ坊？」

「何がだよ……………」

「分かつてるんだろ…………なんだかんだ言つてもアイツ等のことし



「っかり見てやってるじゃねーか」

恭夜はその問いに対して先ほどスプーンで切り取ったアイスを口に運びながら曖昧に返す。

そして、その仕返しとも取れるような言葉を智樹に返すのだ

「うぐっ……」

「うん…だけど、それを言ったら恭ちゃんもそうなるんじゃないかな？」

「なにがさ？」

押し黙る智樹。そして、そはらの質問の意図が汲み取れない恭夜は不思議そうに返す

「確かに最近は恭夜もニンフも元気って言うのかなんていうか……」

「だって…ニンフさん見てたらそう思えるよ。だってほら…ニンフさんが初めてここに来たときより楽しそうだし、何より恭ちゃんも昔みたいに」

「なっ　　バカ言うなよっ……俺はなんも変わっちゃいねーし、何もしてねーよ!」

そう返す恭夜表情を見てそはらはクスツと笑うと、先ほどまで黙っていた智樹と、たった今そはらに向かって怒鳴った恭夜はそこで同時に口を開いた



唯一人その場に残されたそはらはジュースをストローで飲みながら、  
外を眺めて小さく呟くのだった。

## 混沌襲来（後書き）

結構頑張りました。作者の絃城です

漸く混沌…カオスが登場し、タイプゼロの出番も近づいたかと……

今回は戦闘パートになりますので、期待しないで待っていただければ嬉しいです。

戦闘シーンは完全に作者の文章表現力にかかっていますので、正直自信はありません。

ですが、出来るだけいい文章になるように頑張って書いていきたいと思っています。

皆様、いつも感想ありがとうございます

それではまた次回に会いましょう

優しさとその温かさ（前書き）

深淵の世界で少女は抗い続けた。

二度と表の世界に出るはずのない究極であり不完全な少女。始まりであり終わりである存在。

それが少女に与えられた名前の意味であり、全てのエンジェロイドの雛形となったプロト（Zero）タイプ。

既に首輪に付けられ、石壁に繋がれた鎖の戒めからは解き放たれた。後は、マスターの呼び声さえあれば少女は次元を超え、空間すらも突破し、マスターの呼び声に答えるだろう。

だから、少女は深淵の暗闇の世界で唯一人翼を広げて待ち続ける。

長き眠りの果てに目覚めた彼女の意思は既に決まっているのだから。

「マスター……私は……待ちます……貴方の声を……」

四対を為す白と黒の翼を羽ばたかせながら、少女は待ち続ける。

「ニンフ………！！！」

モニター越しにニンフの惨劇を見つめる守形は届かないと知っていても声を上げてしまう

「一体…何が起きている…！！」

いつもならば冷静に全ての物事を把握する彼がここまで錯乱する事態ということは、余程酷いことがされているのだろう。

それだけに、守形の隣で同じくモニターを見る研究者の表情は、前髪で隠れてしまっダイタロスてはいるが暗いことが分かる

そして研究者は静かに守形の問いに答えた

「第二世代のエンジエロイドが…完成されてしまった……私の造った第一世代を……遥かに凌ぐ第二世代が……」

その言葉に対して、守形は耳を疑った。

ある言葉が引つかかってしまったから

「『私が……造った』……?」

「……大丈夫」

だが、それに対しての返答はなく、見当違いな言葉で返されてしまった。

しかし、彼女の言葉は彼に返したのではなく、自分に対する暗示……いや、言い聞かせたかのようにだった。

「それでも……彼女に叶うエンジェロイドなんていない!!」

その瞬間に、モニター越しにイカロスの姿が見えたのだった

## 優しさとその温かさ

突如、イカロスはニンフの前に降り立った。その衝撃で地面は若干陥没し、小石などが跳ねる

「グチャグチャにしてやる……ぐちゃ……ぐちゃに……」

その後ろではニンフが頭を抱えて、呻くように……壊れたように呟いている

目の前にいるカオスを一度睨みつけた後、後ろにいるニンフを心配そうにイカロスを見ると、感情変化の薄いイカロスの表情が険しくなった

キュイツと言う音と共にイカロスの瞳が紅くなる。

「ニンフに……何をしたの……!？」

イカロスの頭上に天使の輪のようなものが同時に現れ、それと同じくしてイカロスを中心にして強力な磁場が発生する。

「セーフティ可変ウイング安全装置解除。出力上昇……80……90……敵未確認機をロック」



一瞬の隙も与えずに、イカロスはカオスを敵に設定し、ターゲットを全ロックする。

「『アルテミス』発

そして、その全てをカオスに向かって射出しようとしたときにイカロスの動きが止まり、驚きの表情に変わった

「マス…ター……………？」

何故なら、ニンフを騙した時のように智樹の容姿に変化したカオスがそこに居たのだから。だが、エンジェロイドであるイカロスにはマスターの姿をしたカオスを攻撃することが出来ない

「イカロス……………ニンフを壊せ……………命令だ」

「命…令……………」

その命令がたとえイカロスの意思に反する物だったとしても、刷り込みをできてしまっているイカロスに拒否をすることは出来ない。

おそらく、カオスはそれを狙ってそれを命令したのだろう。

だからかは分からないが、智樹の姿をしたカオスは智樹の顔で不敵

に笑っている

イカロスは先ほどまでのロックを全て解除し、ニンフの方向に向き直る。そして、ニンフの衣服を掴む。

それによって、先ほどまで錯乱していたニンフの思考が元に戻り、驚きの声をイカロスに向かってあげる

「ちよ、アルファー!!!?」

だが、羽を失い唯の少女になってしまっているニンフにその腕を逃れる力はない。

たとえあつたとしても、イカロスから逃げることは困難だろう。

だが、そんなニンフに掛けられた言葉はまったくの想定外なものだった

「逃げて…ニンフっ!!!」

その瞬間、強烈な重力をニンフは感じた。何故なら、イカロスが先ほどまで握り締めていたニンフの身体を全力で河原の方向に投げ飛ばしたからだ。

数秒もしないうちにニンフの姿は見えなくなり、イカロスはよかつたという表情をしてその場に立ち尽くす。

何故ならそこには、彼女のマスターの智樹の姿をしたカオスがイカロスを静かに見ているからだ

「オイ…どういつつもりだイカロス……」

その声を聞いた途端にイカロスの表情から感情が消え去る

「命令に逆らうつもりか？」

その言葉に対し、表情を表に出さずにイカロスは静かに自らの提案を出す

「いえ…マスター……でも、ニンフを壊すのは」

「イカロス　お前は何だ？」

だが、それは智樹ではなくカオス。

そんな言葉が通じるはずがないのだ

「私は……」

チャラッとイカロスの首輪についている鎖の音が鳴る

「マスターのエンジニアロイド……タイプ（アルファー）」  
「ros」……」  
「Ik<sup>イカ</sup>a

静かに智樹の姿をしているカオスの前に跪くと言っただ

「どうぞ……なんなりとご命令を……」

それを聞いた智樹の姿をしたカオスはニタアと笑うというのだ

「じゃあ……おしおきだ……自分を壊せ……まずは右腕から……」  
「はい……」

イカロスが静かに頷くと、手のひらにエネルギーの球体を発生させ、命令の通りに右腕にそのエネルギーの球体を押し当て、破壊を始めるのだった

「アルファアを……アルファアを助けに行かないと……」

河原では、小さなクレーターの中心でボロボロになったニンフが震える足で立ち上がりながら、イカロスに投げられた方向の空に向かって飛んでいこうとしていた

フラフラと、今にも転んでしまいそうなほどに力ないはずなのに、ニンフは立ち上がっている。

「助けに」

だが、彼女は思い出す

自分の背中にはもう羽がないということ。

「ははっ……『助けに行く』……？ 羽もないのにどうやって？」

泣きそうなのを堪えてニンフはそういうが、一度崩れてしまったものはそう簡単には戻ってはくれない

「何が……俺ニンフのマスターになりたい」よ……何が『ホント』

よ……！」

そして、両目の端に涙が溜まっていく。

「アルファーを助けに行くこともできない……まともに戦闘することも出来ない……こんな羽もない欠陥品」

空を見上げるようにニンフが顔を上げると、両目の端に溜まっていた涙が溢れ出す

「誰が……拾ってくれるって言うのよ……！」

分かっていた。ニンフは心のどこかでこの不安を抱えていたのだ。それが今日になって深くしまわれていたのに引きずり出されてしまった。

それだけに、ニンフの心は荒んでしまった。

本当なら今すぐに慰めて欲しい。

今すぐに笑いかけて欲しい。

今すぐに頭を撫でて欲しい。

今すぐに抱きしめて欲しい

だが、今更どんな顔をして恭夜に言えばいいのかニンフには分からなくなってしまうた。

「……………ニンフ先輩……………？」

そんな時、ニンフのことを先輩と呼ぶエンジエロイド、アストレアがニンフの目の前に得体の知れない植物を持って立っていたのだ

アストレアはニンフの姿を見るなり、手の持っていたものを全てバラバラと落としてニンフに駆け寄った

「うわっ！！ どうしたんですかその傷!？」

「デル…タ？」

そして、ニンフはアストレアの顔を見てハッと思う

(そっだ……………デルタなら…!!！)

だから、ニンフは自分のことなど気にせずアストレアに駆け寄って助けを求めた

「お願いデルタ!! アルファーを助けに行つて……………きっと酷い目にあっている……………」

自分のせいで……そう続けようとしたときに、完全にニンフの涙腺は決壊し、涙が溢れ出していく。

「だから

」

アストレアもそのニンフの表情を見て、何かを察したのか翼を広げて飛び上がり、下にいるニンフに向かって言葉をかけて飛んで行くとした。

そう、行くこととしたのだ。

だが

『待て、デルタ』

その瞬間にある男からの通信が入り、アストレアはその動きを止めてしまう

『命令だ　　ベータを破壊しろ』

命令……どんなに理不尽な要求だろうと、エンジェロイドに組み込まれたプログラムは彼女達の意味に関係なくそれを遂行させようとする。

だが、アストレアは下にいるニンフを見て戸惑う。そして、一瞬の時間で自身の状況とニンフの事を見ながら口を開けて何かを言おうとする



だが、言葉は出て来ない

『どうしたデルタ……破壊しろ……』  
「マス……ター……」

その通信はどうやらニンフにも繋がっていたようで、先ほどまでの少しの希望にかけていた表情は崩れ……まるで絶望してしまったかの表情に変わっていく

『いや……ゆっくりいたぶれ……』

それをモニター越しに見た男は、更に彼女の心も身体も壊そうと命令を変更する

そして、冷酷でいて、愉快そうに笑うのだ

『クククク……逃げられると思ったか？ お前は一生私の奴隷だ……』  
『……どうした欠陥品……いつものように言わないのか……』  
『どうかマスター……廃棄処分だけはお許しを……とな！』

その男の言葉はどこまでも自分を満たすためだけの言葉だった。

だが、ニンフには二度と聞きたくない言葉でもある。

『さあ…デルタ、命令だ……まずは手足をもぎ　顔をグチャグ  
チャにしろ……』

そして、男はアストレアに対して絶対的な言葉を放つのだ

『命令だ』

その言葉を聞いたアストレアに拒否権は存在しない。躊躇いの表情は未だに抜けきらないが、アストレアは自身の剣と盾を召喚し構える

そして、申し訳なさそうに言う

「すみません…ニンフ先輩……マスターのご命令です……」

今にも泣きそうな声で、アストレアは自身に暗示を掛けるようにも  
う一度大きな声で言う

「御命令なんです…！」

「いいのよデルタ……」

その言葉を聞いたニンフは、初めからわかっていたというような口調で、力なくアストレアに言葉を返す。

「わかってる……エンジニアロイドはマスターの命令に逆らえない…  
…はは…何夢を見てたんだろうな…私………」

その言葉を言ってしまうえば…ニンフに残るものなど何もなくなってしまう。だが、現状ではそういうしかないのだ

一糸の希望もなくなった今、残ったものは絶望だけ

それを言うニンフの表情は、泣き顔。先ほどから涙を流し続けているせいで、瞼は閉じかかっている。

「人形が……夢なんて見れるはずない…のに」

だが、そんな絶望しか残されていない彼女にも救いの手は差し伸べられる。

予定調和…いや、バットエンドは誰かの小さな行動一つで…いや、想いだけでも変えることが出来る

だって

世界は…そんなにも

理不尽なことだけでは構成されていないのだから

「ふざけんな………そんなこと誰が決めたって言うんだよ」

そこには、ニンフが信用したくて…信じたくて………思い続けていた  
少年が立っていた

恭夜は地面に這い蹲って泣いているニンフを見て、静かな怒りを燃やす。

それは、家族として…一人の人間としての感情。嘘偽りのない本当の感情

「エンジェロイドは夢を見ちゃ

いけないってか……？」

「キヨウ……ヤ？」

いつもならば決して表に出さない怒りの感情。

「そんなこと……誰が決めた……？」

その表情を、ニンフは久しぶりに見た。

「エンジェロイドは」

そして、アストレアはその表情を初めて見る。いつもは笑っていて、誰に対しても一線を気にしてそれ以上の距離を詰めることのない恭夜の印象を持つ彼女も、また戸惑ってしまふ。

それだけに、アストレアの思考回路はグチャグチャに掻き混ぜられる

「マスターの命令を聞かないといけないのか？」

それは、そこに居る誰に向かっても放たれていない。だが、その瞳は空の彼方を見た後にニンフに向けられる

「エンジェロイドは羽がないといけないのか…？」

その言葉は、確かにニンフの胸に刻まれていく。

「りんご飴が好きだったり…お菓子が大好きだったりしちやいけないのか…？」

そして、アストレアもまたその言葉に対して言葉を返そうとするが、やはり声に出すことが出来ない

「誰かと一緒に笑って…泣いて…人を好きになっちゃいけないのか？」

「そ…それは」

漸く口に出せた言葉も、恭夜の声によって掻き消される。

「違うだろ……そんな当たり前の感情を…想いを誰だって持っているだろ!！」

『だから…』恭夜は続けるようにそう呟くと、ニンフの前にしゃがみ込んで手を差し出しながら言うのだ

「俺は……その想いも、そんな感情を持っていてもいいと思う」

ニンフは、その差し伸べられた手を見て再び目の端に涙を溜めていく

「だってそれは……その『人』に与えられた感情なんだからなあ、お前もそう思うだろ智樹？」

ニンフに差し伸べた手でニンフを強引に抱きかかえるように胸に押し付けた後に、いつの間にかそこに居た智樹に向かって恭夜は問いかけた。

「ああ、俺もそう思う……だってそれが感情つてもものだろ？」  
「うわああああああん!！」

その瞬間、ニンフは恭夜の胸の中で大きな声を上げて泣き始める

「キョウヤツ!!キョウヤあぁっ

うわぁぁん!!」

それを見ていたアストレアは動揺…いや、自分がどうすればいいのかがわからないような表情で立っている。

自分がまるで、悪役になってしまったというような表情で

「後は頼むぞ…トモ坊」

「ああ…任されたよ恭兄」

恭夜はニンフの頭を優しく撫でながら、その背中も同時にさすっている。

「なあ…アストレア」

その声に、アストレアはビクッと身を震わす

「俺…前にも言ったよな……それは本当に自分で決めたことなのかよって……」

その表情もまた、アストレアは初めて見るもの。



本当の気持ちの籠った言葉……それだけにアストレアは言葉に詰まる

「自分で決める……!! お前が何をしたいのか……!!」

その言葉は、アストレアの心に深く突き刺さる。

何故なのかはきつと彼女自身もわからないだろう。それでも、確かに響いたのだ

それを見ていた男は、機嫌の悪そうな声で再びアストレアに通信を入れる。今度はニンフには繋がずに

『デルタ』

「はいっ……マスター……!!」

『カオスがいつまでも空の女王に止めを差さずに遊んでいる……行つて止めを刺して来い。そのダウンナーは後回しにする』

「はい……マスター」

その通信が終わるや否や、アストレアはキッと恭夜、智樹を見据えると翼をばさりと羽ばたかせ、空にとび立ちながら言うのだ

「後で……必ず殺しに来てやるから……!!」

だがそんな言葉を出しても二人の真剣で、真っ直ぐな瞳の前にはアストレアはたじろいでしまいそうになる

「~~~~~!」

声にならないような声と共にギリツと歯を噛み締めると、アストレアは無言でその場を飛び去ってしまう。

そして、それを見届けるように彼女を見ていた二人はフツと息を吐くと、ほぼ同時に咳く

「「こんな田舎町であんな大きな音がするかよ……………」」

その後に、恭夜だけはニンフを抱えたまま立ち上がり歩き始める。

「なっ…………いや、行くのか…………恭兄？」

「まあ…今行かなかつたらきつと取り返しの付かないことになるだろっからさ……………」

そして、抱えているニンフを智樹の腕に渡すと背中に大きな白い翼が現れる。

「え…………キョウ…………ヤ…………？」

「悪いな…ニンフ。今はずっと慰めていてやりたいけど…俺は俺  
が出来ることをしたいんだ」

その言葉は、彼にとっては一種の強迫観念。

あの『絃城恭夜』達の夢を見てしまった以上、この身は誰かのため  
にあるべきという想いを優先させてしまう。

それが、どの世界、どの時代、どの人格も、様々な『絃城恭夜』に  
与えられた決して変わることはないモノ

知ってしまったら二度と後戻りは出来ない。

だから、彼も例外なくその中の一になってしまった。

だが、恭夜はそれを後悔することはない。何故なら、彼もまたその  
生き方を格好いいと思ってしまったから。

だが、恭夜には守るべき約束がある。

だから、自分のことも考えられる。

「だから……俺は無力なりにも行動をするんだ

」

その背中に生えた白の翼を大きく羽ばたかせ、恭夜は空に舞い上が  
っていく。

「お前の心を守れたように……もっと誰かの心を守ってやりたいからさ」

その言葉で、ニンフは恭夜に行かないでと言えなくなってしまった。だって、その表情はいつものから笑いではなく、心からの笑顔がそこにあつたからだ

（ああ……ダメだなあ、私……行かないでって言いそびれちゃった）

だが、先ほどまで泣きじゃくっていたニンフの瞳にはもう涙は無かった。

「絶対に……戻ってきてね!!!」

それが今、彼女に出来る最高の餞別の言葉

彼もそれに対し、笑いながら答える

「約束は守って見せるよ」

はるか上空をアストレアは高速で飛び続ける。

だが、その表情はいつものような柔らかいものではなく、何処か困惑しており、イライラを隠せてはいない

「何よ………!!」

そして、吐き出すように叫ぶ。

「何よ何よ何よ何よ………!!」

彼女の頭を駆け回るのは、先ほどの智樹の放った言葉。

『俺…前にも言ったよな……それは本当に自分で決めたことなのかよって……』

初めはなんとなく聞き流せていた……だが、今は違う。智樹や恭夜、そういった人との関わりを持ったアストレアは迷ってしまった。

今までは命令を忠実にこなせばいい、そう思っていたから何も考えることなんて無かった。

けど、今は違う。

マスターでもない、唯の他人に言われた言葉に彼女は真剣に考えている

いや、考えようとしている。だから彼女は答えの出ない問題のせいでイライラが溜まっていく

『自分で決める…!! お前が何をしたいのか…!!』

再び、彼女の頭の中を智樹の言葉が奔る。

「イカロス先輩もニソフ先輩もあんな奴にたぶらかされちゃって…  
……地蟲に惚れちゃったわけ!? 地蟲なんて見下ろして踏み潰す  
だけの存在じゃない!!」

そんな言葉を言っではいるものの、実のところは答えなんて当の昔に出ていたのだろう。

だが、自分に素直になれなかった彼女はここまで自分を偽り続けてきた。

それだけに…反動はうかがい知れない

「アラ…アストレアおねえさま……………」

いつの間にか、アストレアはカオスのいる場所まで飛んできたようだ。

だが彼女はその言葉に言葉を返すことなく無言で剣を振りかざす

その剣は寸分の狂いも無く

「私も                   好きになっちゃったわよ!!!」

カオスの翼を切り裂いた

カオスは状況の判断に困っているのか一瞬動きを止める。そして、彼女のマスターである男も驚いたのか、声を荒げてアストレアに命令を繰返す

「なっ……………!?   何をしているデルタ!!!」  
「あっ…いえ、好きになっただって言うのは友達としての好きで  
」

その言葉を言ってしまった彼女は、少々テンパリながらその言葉について訂正を加える

『何をしているデルタ!!!   早く空の王女に止めを刺せ!!!   聞いているのかデルタ!?!』

「……………」

アストレアは小さく呻いたかと思うと、その首輪に付いた鎖に手をあて、握り締める。

そして

「うるさーいっ！……！」

バッキイインという音を鳴らして、鎖を自らの手で引きちぎった

「驚いた…自分で鎖を切るなんて……ねえ、それは愛なの？」

そういいながら、先ほどまでイカロスに攻撃を加えていたカオスは興味深そうにアストレアに質問をしながら、拳による攻撃を行う

「わからないわよ！！　だって私…バカだもん！！」



それに対して、アストレアは手に持った剣をその拳を弾き返すように振る

「けど……これは自分で決めたことだわ……」

そして、アストレアは自分を奮い立たせるようにもう一度、大きな声でカオスに向かって言うのだ

「自分で……決めたことだわっ！！！！」

初めて地上に降りてきたときの凜々しさで、アストレアはカオスに向かって剣を振りかざし、交戦を始める

こうして、二度目に渡る地上での大規模戦闘の火蓋は切って落とされるのだった

## 優しさとその温かさ（後書き）

### ステータス紹介

現在の絃城恭夜のステータス紹介（某運命風）

能力値（改定前のステータス）

筋力 B（A -）

耐久 D（C ++）

敏捷 C（B ++）

魔力 A ++

幸運 A +

宝具 A ++

（○）時のステータスは、魔術に寄る強化と制限解除時のみ有効

（三十二話現在のステータス）

能力値

筋力 C（B -）

耐久 D（C +）

敏捷 C（B +）

魔力 B ++

幸運 B +

宝具 B +（A +）『EX』

（○）時のステータスは、魔術に寄る強化と制限解除時のみ有効

俊捷のみ創造で翼を造った時の能力

『時は血統の目覚めを経験した後、石版ルールに触れた後の能力

宝具・模倣の魔眼

ランク：A 種別：対人宝具 レンジ：0 } 最大捕捉：

創造

ランク：B (EX) 種別：不明 レンジ：0 } 最大捕捉：

超々超音波振動刃「パラダイス」ソング」

ランク：C + 種別：対人宝具 レンジ：1 } 1 2 最大捕捉：1 0

作者の考える大まかな能力値

戦略エンジニアロイドタイプ (アルファ)イカロス

能力値

筋力 B +

耐久 A +

敏捷 B +

魔力 -

幸運 C -

宝具 A + +

宝具・永久追尾空対空弾「Artemis」(アルテミス)

ランク：B 種別：対軍宝具 レンジ：3 } 最大捕捉：

絶対防御圏「Aegis」(イージス)

ランク：A 種別：対人宝具 レンジ：0 } 最大捕捉：

超々高熱体圧縮対艦砲「Hephaisstos」(ヘパイストス)  
ランク：A - 種別：対軍宝具 レンジ：5 } 最大捕捉：

弓矢型最終兵器「APOLLON」(アポロン)

ランク：A ++ 種別：対城宝具 レンジ：0 } ? 最大捕捉：

電子戦用エンジェロイドタイプ (ベータ)「Nymph」(ニンフ)

筋力D (C +)

耐久C (B -)

敏捷D (B +)

魔力 -

幸運D -

宝具C (B +)

( ) は羽がある時のステータス。現在は羽が無いために全てのパラメーターが大幅にダウンしている

宝具・超々超音波振動子「パラダイスソング」

ランク：C + 種別：対人宝具 レンジ：0 } 最大捕捉：1 }

局地戦闘用エンジェロイドタイプ (デルタ)「Astraea」  
(アストレア)

筋力B

耐久B

敏捷A (A ++)

魔力 -

幸運 B -  
宝具 B +

(C) 時のステータスは彼女の馬鹿のスキルを発動しなかった際の能力。要するにシリアスパートでのステータス

宝具・「chrysaor」と「aegis」L」

要撃用エンジェロイドタイプ (ガンマー) 「Harpy」(ハーピー)

筋力 C  
耐久 C  
敏捷 C  
魔力 -  
幸運 C  
宝具 C +

宝具・プロメテウス

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：2〜 最大捕捉：

第二世代エンジェロイドタイプ (イプシロン) 「Chaos」(カオス)

筋力？  
耐久？  
敏捷？  
魔力 D -  
幸運 E -  
宝具 E X

カオスだけは自己進化プログラム「Pandora」（パンドラ）を搭載しているために魔力に対する抵抗を持っている

膨大な魔力を抵抗<sup>レジスト</sup>することは出来ないが、軽減をすることは可能。  
まだまだ能力値に伸び代があるためにステータスは不明

宝具・自己進化プログラム「Pandora」（パンドラ）

ランク：EX 種別：対人宝具 レンジ：0 最大捕捉：1

プロト（Zero）タイプ雛形エンジェロイド（オメガ（ゼロ））  
「Gaea」（ガイア）

筋力？

耐久？

敏捷？

魔力？

幸運？

宝具？

宝具・羽根型思念操作式兵器「Pranesu」（パネース）

ランク：？ 種別：対人宝具 レンジ： 最大捕捉：

全てのエンジェロイドの雛形となった試作型エンジェロイドであり、謎のエンジェロイド。

その能力はイカロスに酷似しており、カオスすらも超える可能性を持つ

イカロスたちが第一世代というのならば、ガイアはその前に作られ

ているので第ゼロ世代プロトタイプであり、実験的に様々な機能を搭載している。そのためにも余りにも危険な存在となり薄暗い空間に幽閉され、機能を停止させられた。

だが、彼女のマスターの声？により再起動

出番はまだ無いが、後々この物語の重要部分を掻っ攫っていく予定

結構デタラメだけどこんなもんですかね？

PS

総閲覧数10万人突破。これからもよろしくお願いします

## 激闘の末に（前書き）

久々の前書きでのコメントです。

今回の内容は前編、ほぼ原作。後編、オリジナルの歪んだご都合主義のストーリー

比率にするのなら6・4くらいの割合。

やっぱりシリアスは苦手ですね……………

次回からまた閑話に戻れることを祈りたい



## 激闘の末に

「驚いた……自分で鎖を切るなんて……………」

固めた拳を突き出しながら興味深そうにカオスは言う。

「ねえ……それは『愛』なの？」

「わかんないわよ！！ 私、バカだもん！！」

その拳に対して、同じように剣を振るアストレア。

インファイトを繰り広げる二人を中心に激しく空気が振動している。

盾と剣を上手く使いながらアストレアはカオスを攻めていくが、カオスも同じように拳を使ってアストレアを攻めていく。

リーチの長さの問題もあって、アストレアの方が優位にいるのも事実。カオスの攻撃を受け流した後に、超加速で相手を攪乱し、放たれた攻撃をその盾で防ぎ、手に持った剣で攻撃を繰返す。

カオスは矢継ぎ早に攻撃を繰返すが、アストレアの防御の前には何

の意味もなさない。

そして、カオスからある程度の距離をとったアストレアは手に持った剣『超振動光子剣・クリュサオルchrysaor』のリミッターを解除し、巨大化させる。

カオスはその武器に脅威を感じたようだったが、それに気が付いたときには既に遅かった。

「どっせええええええい!!」

アストレアは目にも留まらぬスピードで一気に間合いを詰め、カオスを一刀両断するかのように『超振動光子剣・クリュサオルchrysaor』で斬りつけたのだ

大きな爆炎が空中で巻き起こり、アストレアは相手の姿を確認するために一度動きを止めてその爆炎を視認している

だが、その爆炎の中からカオスは衣服に多少の焦げ目を残しながらも、ほぼ無傷の状態で飛び出し、アストレアから距離を離していく  
アストレアはそれに遅れて気が付き、すぐにその後ろを追いかけていくが、瞬間加速型の彼女のスピードでは、カオスに追いつくことが出来ない。

「クスクスクス……ちょっと驚いちゃった……なんて破壊力……なんて加速……でも」

「待てー!!!」

カオスは後ろから近づいてくるアストレアを見て、楽しそうに笑いながら手の前にエネルギーを集束し、高エネルギー体を作り上げていく

「もう!!! 近寄らせない!!!」

そして、その高エネルギー体をアストレアに向かって解放し、ビーム状の波動攻撃を行う。

その瞬間に耳を劈くような轟音が発生し、そのエネルギー全てがアストレアに向かって押し寄せていく。とてもではないが、回避をするような時間は残っていない

アストレアは避けるという選択肢を消されたために、左手に持っている盾『a e g i s s l l (イージスllエル)』を展開し、その攻撃を防ぐ

「くっ…っううっ!!!」

瞬間的な防御力こそイカロスの絶対防御圏「a e g i s s」すらも超えるが、その持続時間は短い。

そのために時間が進むに連れて、彼女の前に張られているシールド

は掻き消されていき、その余波で皮膚を切り裂かれる

そんな痛みに、苦痛の表情をアストレアは浮かべるが、諦めの表情は見えない

「う……うううッ！！ 負けるもんか……だってこれは自分で決めたこと……」

そして、自分を奮い立たせるようにもう一度叫ぶ。

「自分で決めたこと……なんだからあああああ！！！！」

その瞬間に、アストレアの展開していた『a e g i s s l l（イージスIIエル）』が完全に消え去る。

そして、それを見るや否やカオスは更に追撃を掛けるためにもう一度手の中にエネルギーを集束させていく

「さよなら……アストレアおねえさま」

徐々にカオスの手の中にあるエネルギー体が成長して行き、先ほどよりも少し大きめの高エネルギー体が出来上がる。

それをカオスは一寸の躊躇いもなく開放しようとした……

だが

「超々超音波振動刃『パラダイスⅡソング』!!」

突如、空を切り裂きながら飛んできた振動刃によってカオスの手の中に集束していた『それ』は爆発した

「やったか……!?!」

そこには赤い獅子の装飾の施された鞘と、刃こぼれ一つもない刀を持った恭夜の姿があった。

恭夜は爆発した空間をじっと見ていたが、その中から既にカオスがなくなっていたことに気が付く事はできていなかった

「クスクスクス……ちょっと驚いたけど……そんなのじゃ私は壊せないよ」

「なっ……はやッ!?!」

突如、恭夜の背後に現れたカオスはそういいながら、容赦なく彼の背中目掛けて拳を振りかざす

それに対し、恭夜は翼を閉じることによって緊急的な防御を行う。

だが、完全に防御の姿勢を取ったというのに恭夜は空中を転がるかのように吹き飛ばされた。

「な…クソ……………少しくらい話が出来ると思っただけどな……………」

強く弾き飛ばされたために彼の脳は揺れ、ふらついてしまう。

「コレで……………さよなら……………」

彼は近づいてくるカオスの攻撃を避けようと動こうとするが、脳が揺れているため身体が思うように動かない。

同じように翼も彼の脳が操作しているものなので動かすことが出来ない。

彼はこの絶望的状况で、先ほどまで地上で過度のダメージを受けたために動くことの出来なかった少女が居ないことに気が付いた

「いいえ…さよならはあなたの方……………カオスChaos」

そこには、先ほどまでの生々しい疵痕が残っていないイカロスの姿があった。

「イ、イカロス先輩ッ!!」

「イカロスっ!?!」

それを見たカオスは、ありえないものを見るかのような目をイカロスに向けて尋ねる

「どうして……? あんなに壊したはずなのに……まさか、自己修復したの? アストレアおねえさまとダウンナーと戦っている……こんな短時間で?」

そして、くすりと笑ってからもう一度口を開いた瞬間

「すこ」

ガツと言う音と共にカオスはイカロスに顔を掴まれる。

「なっ……イカロスっ!! 待てっ!!」

それを見た恭夜は制止しようとして手を出すが、遅かった。

イカロスはそのまま急加速し、その場から数秒も満たない時間でカオスの顔を掴んだまま大分遠くまで離れていく。

アストレアはその後を追う様に飛んでいく。恭夜もまた、何かの思惑があるのだろう。アストレアと同じように追いかけるように飛んでいく

「ばかやろっ……」

そう呟きながらも、彼は彼女らに何かを伝えるべく羽ばたくのだった

「速度上昇…マツハ10、マツハ11……」

「何を…するつもりなの？」

イカロスはカオスの顔を掴んだまま、音速の壁を突破するほどの加速をしながら空を突き進んでいく。

カオスの問いは完全に無視し、自分の行おうとしていることを達成しようとする

「マツハ17…マツハ18……」



そこでカオスの姿ぶれ始め、再び智樹の姿に変化してイカロスを威圧するように問うた

「オイ……何をするつもりだって聞いてんだ……イカロス」

その言葉、その姿、その声にイカロスはピクリと反応するが、智樹の姿をしたカオスに呟くように聞くのだ

「マスターは泳ぎが得意……」

「え………?」

智樹の姿をしたカオスはその言葉の意味を理解しかねたのか、意外そうな表情をする

「でも…エンジェロイドは泳げない……あなたは泳げるの？ カオス!」

そこで、今まで以上のスピードを出しながらイカロスは潮風の吹くほうに飛んでいく。

「付近を検索……日本海溝…深度8200……敵未確認機を沈黙さ



「……わから……ない」

「？」

「私も……愛が何なのかわからない……」

イカロスは、四人でデートをしたときのことを思い出しながら言う

「でも……マスターとデートに言った時……動力炉が痛くて……動力炉が……痛くって……動力炉が……！ 痛くって……！！」

それを言うイカロスは涙を流していた。自分の中に渦巻くよく分からない感情が理解できなくて、苦しくて、動力炉が痛くって……

けど、イカロスはマスターである智樹のことが好きで

分からなくなっ……

「どうして……！！？ 私……マスターのことを考えると……動力炉が痛い……！！ これが『愛』なの……！！？ わからない……わからないの……！！」

それでも、イカロスがカオスを放っておけない理由は唯一つだ

「でも……アナタを放っておいたらきつと……マスターにも危害が及ぶ……それを考えたら……私……壊れてしまいそうで……！！ だか

ら!!」

高速飛行していた状態から一気に上昇し、勢いをつけて海へ向かって下降を始めた

この行動は、たとえ自分が壊れようとマスターである智樹を守りたいという彼女の心からの想い

「私は……大好きなマスターを守るっ!!!!」

そして、轟音と共に海水は天高く水しぶきを上げた。海面は大きくゆれ、イカロスがカオスを海水に叩き付けた部分と、そこから少しだけ離れた部分の海水が足りなくなり、渦潮が巻き起こっている。

そして、天高く舞った海水は数秒もしないうちに雨のように海に降り注ぎ、視界がよくなる。

「はあはあはあ………なっ………何てことするんですかイカロス先輩!!  
私が助けなきゃ今頃イカロス先輩も」

そこには、息を切らしながらもイカロスの両腕をホールドするように掴んだアストレアの姿があった

「敵見確認機…沈黙………深海に…沈降して  
え…どうして…

…!？」

「え…どうかしたんですかイカロス先輩？」

「……………けないと……………マスターも……………ニンフも……………悲しんでしまっ  
…離してっ!! 助けないとっ!!」

イカロスは力なくアストレアの腕から逃れようと暴れるが、アスト  
レアはイカロスの言っている意味が分からないので掴んでいる腕を  
離すわけにも行かない

「だから、どうしたんですか!？」

「ニンフの…マスターの大好きな人が……………深海に……………だからっ!!」

「ニンフ先輩と先輩のマスターが大好きな人って……………えっ…嘘…  
…だって私より遅く飛んでたのに…なんで!？」

そんな話をしているうちにも、イカロスのレーダーにはカオスと恭  
夜を示す赤い点と黄色い点が深海に向かって沈んでいくのが表示さ  
れ続けている。

「ダメ……………あの二人が悲しむ……………助けないと……………離して…アスト  
レア」

「でも…イカロス先輩もボロボロじゃないですか!! ダメです、  
先輩までいなくなったらこれからどうするんですか!!」

「お願い……………だから……………」

彼がイカロスとカオスの姿を再度確認した時には既に、イカロスがカオスの顔を掴んだまま急上昇し、海面に向かって急下降しているところだった。

目の前にはアストレアがイカロスに向かって飛んでいたのが彼の眼からも見えたから、彼は迷わずに海水に飛び込んだ

それと同時に、カオスが深海目掛けて叩きつけられたせいで潮の流れが変わり、身体強化無しではまともに泳げないような状態になった。

(クソ……まだ間に合うだろ……どこだ…カオス……)

海中で目を凝らして、小さな少女の姿を探すが既に光の届かないようなところまで潜っているためにその姿を見つけないことすら叶わない

それに、光の届かないような海中ということは、既に人間の身体がまともに機能しないということだ。どんなに優れた身体能力を持っていたとしても、重力や圧力と言ったものまでは人間の能力では凌駕することは出来ない

そして、それは魔術師である彼でも同じように言えることだ。どんなに身体を強化しようとも、不死身になつたというわけではない。

そもそも、生身の人間が深海に向かって沈降しようという考えが  
りえないのだ。

(ヤ…バ……身体が…圧迫され……)

「ゴボツ  
」

たかが800メートル……されど800メートルで彼の身体は限界  
を迎える。

それは普通の人間ではありえない数値だが、エンジエロイドのカオ  
スは違う。それよりも暗い海のそこまでたった一人で沈んでいくの  
だ。

(どうして……たった一人の……小さな女の子の話も聞いてやれない  
んだ……)

薄れ行く意識で、そんなことを思いながら間に合っはずも無い海面  
を目指して身体を動かす。

そこで、彼の記憶にはない、一つの言葉が頭の中に浮かんだ

(な……プロト(Zero)タイプ……雛形エンジエロイド)  
オメガ)……?)

「『Gaae』  
ガイア

海中で眩くようにそう漏らすと、彼の頭に直接響いてくるような言葉が聞こえてきた

『マスターっ!! やっと…呼んでくれた…今…今すぐ…私はそこに行きます!!』

マスター…その呼び方を彼はされたことが無い。

だから、疑問に思った。イカロスのマスターは智樹…アストレアとニルフは現在未契約…ならば、この声は誰のものなのか。

だが、相手は彼のことをマスターと呼んだ。

そんな疑問を頭で考えながらも、確かに彼は見た。

自分を抱えて海上を目指して海中を上昇していく少女の姿を……

「イカ……ロス？」

だが、どこかが違う。イカロスは桃色の翼で……何より泳げない。だが、この少女は足を動かし泳いでいる。

ならばこの少女は誰なのだろうか……



「もうすぐで……呼吸が出来ます……耐えてください、マスター」  
「お前は……?」

そこで、彼を抱えた少女は海中から空中へと舞い上がり、二人のことを唾然と見ているアストレアとイカロスを凝視する

そして、ポロリと零すように呟いた。それと同時に、恭夜もむせ返りながらも空気を吸い込む

「そう………やっぱり私の後継機は完成してたのね………」  
「ごほっ……なっ……私の後継機?」……だつて?」

まだ整っていない呼吸で、自分を抱えている、おそらくエンジェロイドであろう少女に恭夜は聞き返した

だが、少女はそんなことよりもというようにイカロスとアストレアに近づくと

「あ……あなたは誰?!?」

しかし、アストレアはカオスとの戦闘、そして傷ついたイカロスを掴んでいるためにどうしても警戒してしまう

「私は……私はプロトタイプ、雛形エンジェロイド（オメガ）が

イア……この方の、マスターのエンジェロイド」

「え……嘘……初期ナンバーって余りにも危険だからって機能停止させられてたんじゃないの………」

アストレアはガイアの言葉を聞いて啞然とする。イカロスもまた、ガイアの存在が信じられないのか目を見開いている

「ちょ……まで……俺がお前のマスターだって？」

そこで、恭夜はガイアの言っていることについていけずにガイアに尋ねる

「はい。刷り込みもされていますし……違つのですか？」

すると、ガイアは首をかしげながらも恭夜の質問に答えた。

しかし、それは恭夜にはまったく覚えのないこと。それだけに疑問が深まっていく。

「違つても何も……ああっ……！」

抱えられながら器用に頭を掻きながら叫ぶ。そして、大きな声を出

したことによって頭を冷やすことに成功したようで、冷静になることができたようだ

「わかった、とりあえずもついいよ……」

そういって、恭夜は抱えられたままアストレアとイカロスに向かって言う

「とりあえず……智樹とニンフが心配してるだろうし、智樹の家に戻るか」

「……うん」

「……はい」

「ガイア……悪いけど離し

」

恭夜はガイアに身体を離してもらおうとそういって、何を勘違いしたのか

「分かりました。マスターのことは私が責任を持って智樹さんのお家に連れて行きますね」

「なっ　　違っ」

そう言って、イカロスとアストレアに場所を聞いている

その間に恭夜はアストレアとイカロスに助けを求めたが、無駄だっ

た。

「イカロス…誤解を解いて」

「早く…マスターに会いたい」

「なっ…アストレア　　って、待て、道案内するにしても人間に優しくっ!？」

と言った具合に、どちらも智樹の下に戻るということが頭に定着してしまっているために話にならない

イカロスとアストレアを追う様に飛んでいるガイアの腕の中で恭夜は諦めたように呟く

「あー、もっとうにでもなれよ……………」

こうして、この戦いは幕を閉じた。

そう『この』戦いは

モニター越しに戦闘中継を見ていた守形は無事に戦闘が終わったと  
のことで、ダイダロスに地上に送ってもらうことが出来た。

もちろん、転移先は桜井家。

だが、戻ってきた守形は目の前の光景を見て瞼を擦った。

しかし、先ほどと何一つ変わっていない光景がそこにはある。

そこにはアストレアとイカロスの頭に大きなたんこぶが出来ていて、  
智樹の前でしゅんとしている姿と、ニンフとガイアにはさまれる様  
に座っている恭夜の姿と、智樹が怒っている姿があった

「……………どういう状況なんだ？」

「上っ！！！」

そう言われて、守形は上を見ると天井に大きな穴が開いていた。

守形がそれを見て唾然…とまでは行かないが、いつものことかと思  
って見上げている間に、天井の惨劇について説明をする智樹

「ニンフの…怪我の手当てをしていたらですけどね……………帰ってきま  
してね…天井『ドーンっ』て突き破って来ましてね……………」

そう言って智樹がため息を付いたかと思うと……………

「きちんと玄関から帰ってこんかーいつっ!!」

ちやぶ台を勢い良くひっくり返し、イカロスの頭を握り締めた拳でぐりぐりとしながら抑えるつける

それに対しイカロスは何処か嬉しそうな表情で対応をしている

守形はそれを見て、しばらくかかりそうだとふんで恭夜の方に近づいていく

「恭夜、今回は随分と……………」

「いや……………なんすか…そんな目で俺を見て……………」

「まあ、そんなことはどうでもいいか……………後で話したいことがあるから一人できてくれないか？」

「まあ……………いいですけど」

「それじゃあ、頼んだぞ」

たったそれだけの会話をして、守形は智樹に投げ飛ばされたちやぶ台を元に戻し、その前に座る。そして、ガイアを手招きする。

ガイアは手招きされていることに気が付くと、とてとてと歩いて守形の隣に座った

「お前にも話があるんだ」

「……………なんでしょうか？」

恭夜はガイアが守形の方に行ったのを見て、ニンフに話しかけた

「なあ…ニンフ」

「な、何…キョウヤ？」

それに対して、ニンフ少し焦ったように返事を返した

「羽が無いこと気にしてるの気付いてたのに何も言っていられなくてゴメンな……」

「え…そんな…そんなのキョウヤが謝ることじゃ」

「それでもだよ……俺がちゃんと自分で言っていればお前はそんなに辛い思いをしなくて済んだだろ。だから、ゴメンなニンフ」

だが、ニンフはそんなことを言われなくても恭夜に対する思いは変わらない。

「うつん。キョウヤは私のこと認めてくれたもん……そんなこと気にする必要なんて無いよ」

「そうか…ありがとなニンフ。それとな…お前に一つ聞いておきたい事があったさ」

「ん、なに？」

「マスター…欲しいか？」

「えっ…？」

その言葉に、ニンフは混乱する

「不安…だと思ったんだ。俺からすれば気にすることでもなかったけど、お前からしてみれば不安でしょうがなかったはずだと思った。今までいいように使われて、裏切られて…」

それを言う恭夜はニンフではない何処か遠くを見ている。まるで、自分の過去を見るかのような目で

「だから…お前に羽が無くても、俺がお前の翼なってやる。不安だと思わせない…その方が俺達家族みたいだろ？」

「いい…の？」

恭夜の言葉に対して、ニンフが目を潤ませながら聞き返す

「いいよ」

「私みたいな…出来損ないで…本当にいいの？」

「ダメ…なんていうわけ無いだろ？」

「あっ…！」



その瞬間、智樹が何かに気が付いたかのように声を上げた

「どうしたんだよトモ坊？」

「いや…ニンフに羽が」

「あ、本当だ……いままで生えなかったのにい！？」

恭夜がニンフの背中にある羽を見ながらそついい終わる前に、恭夜の身体は空に浮かんでいた

「見て見てキョウヤっ！！ 羽が生えた！！ 生えた！！」

「ちよっ……いや、うん。いいかもな…たまには」

それに対して恭夜はニンフに何かを言おうとしたのだろうが、やめたようだ。

そこには今までに無いニンフの笑顔があるから。

「いっっ！！ アルファー、デルタ」

下にいるイカロスとアストレアに向かってニンフは呼びかける。

「空を飛ぶのっ！！」

そうやって空に舞い上がっていくエンジェロイドたちを見て、守形の隣にいるガイアは呟くのだ

「うん…マスターも嬉しそうだし、あの子達も嬉しそう。」

「……お前は行かなくてもいいのか？」

「ええ…私はマスターを見ていられるだけで幸せですから」

守形の問いに対してガイアは短くそう答えると、その姿を目に焼き付けるかのように空を舞う三対のエンジェロイドと恭夜を見つめているのだった

こうしてカオスとの戦いは終わり、彼女達エンジェロイド、彼ら人間に再び日常は戻ってきた。

新たなる住人ガイアを加え、彼らは日常を迎える。

いつまた過酷な運命が向かってきたとしてもそれを乗り越えられる気持ちを持たないためにも。

この時間を彼らは大事にするのだ。

そう、この時間を



激闘の末に（後書き）

アレからしばらく時間が経ち、いろいろと落ち着いたところで守形と共に抜け出し、河原へときていた

「それで…話っているのは何ですか？」

そう、守形と二人で誰にも聞かれないような場所で話すために

「俺は研究者…いや、お前達の言う夢の女の子に会った。いや、助けられたというのが正しいだろう」

「夢の女の子って…まさか…俺達の知らないところでダイブゲームをしたんですか？」

恭夜の言うように、夢の中の少女に会うためにはダイブゲームをする以外に方法はない。

「ああ、それでわかったことが二つあるんだ…」

「…二つ？」

「話を続けるが構わないか？」

そういわれて、恭夜は初めて自分が思考の渦に飲まれかけていることに気が付いた

「あ、大丈夫です」

「そうか……二つというのは、一つはエンジェロイドのこと。もう一つはガイアのことだ」

「どっちも重要なことをまた……」

「まあ、そういうな」

そう言って守形はポケットから一つの薬の様な物を取り出す。

「それは？」

「夢の少女とやらがお前にな……それで、ここからが本題だが

」

そう言って守形は話を始める

一つ目<sup>タイタロス</sup>にあげられたエンジェロイドのことについて。彼女達を作った研究者は智樹や恭夜の見る女の子のことらしい。そして、ガイアは彼女が造ったものではなく、十三番目と呼ばれているシナプスを裏切り、石版<sup>リトル</sup>の一部を奪い取っていった男が造ったモノとのことだ。

その十三番目は白と黒で一对の翼を持っていたが、逃げ出す際に白い翼を失い地上に落ちたらしい。そこで十三番目は自分を助けてくれた少女と恋に落ち、この地上に子をなした。

だが、人間とシナプス人のハーフは翼を持たぬが特別な能力を持つてこの世界に生まれた。

「ここまで理解はしてくれたか？」

「……先輩……理解するも何も、コレって……」

「そうだ……恭夜。何の因果か分からないがお前はシナプス人のハーフかもしれない。だが、その確固たる証拠もまだ無い……だがな、その可能性がお前にはある。俺はそれを伝えるためにお前を呼んだんだ。」

メガネを指で持ち上げなおしながら、守形は続ける

「もっとも……お前はそんなことを気にする必要はないだろう？」

「ええ……こんなことで変わるって言うなら俺は」

「いや……それ以上はいい。お前がすることは『今』を守ることだ。『明日』を考えるのは俺の仕事だ。」

守形はそついうと、夕日を見上げて呟くのだ

「『過去』を変えることは出来ない……俺たちは前を見て進むしかないだろ」

その呟きは何処か翳りを見せていて、それでいて自分に言い聞かせ

るようだった。

「そう…ですね。」

「ああ……………」

こうして、再び日常への時間は動き始める。

より良い方向に向かって

家族と辛味と優しさと（前書き）

お久しぶりです、絃城です。

今回は完璧に閑話、日常ストーリーです

智樹、イカロス、その他主役級は誰も出ません。完全に絃城家のお話です

それではどうぞお進みください



## 家族と辛味と優しさ

彼の土日は朝食を作ることに始まる。

キッチンの前で自前のエプロンを身に纏い、冷蔵庫の中身を確認する。そして、冷蔵庫の中に余っている食材で出来る料理を考える

そして、その材料で作ることの可能な料理を作るはずだった……

「おはようございます、マスター」

……はずだったのだ

「あ、ああ。おはよう。なに……してるんだ？」

だが、彼は目の前で起きていることを認めたくなかった。何故なら、めんどくさいと言いつつも料理は彼の趣味であり楽しみである。

それだけに、目の前に完成されつつあるものを見たくなかった

「朝食を作ってるんですよ。あれ、マスター？　どうかなさいましたか？」

「いや……ありがとうございます」

「いえ、エンジェロイドたるものマスターのお世話をすることくら

い出来て当然ですから」

「えっへん」というように、イカロスほどではないが大きな胸を張って、嬉しそうにそういうガイアを見て、彼は表面上笑いながら心の中で泣くのだった

だが、彼はまだ希望を捨てきれない。何故なら、料理を作ることだけが料理ではないのだから

「はは…なんか手伝うこととか無いか？」

そう彼はガイアに尋ねる。

だが、返ってきた言葉は誰もが容易に予想できたものだった

「いえ、大丈夫ですよ。マスターは朝食が出来るまでもう一眠りでもしてください」

「……そうさせてもらおうよ」

そう言って、彼はとぼとぼと自室に戻っていくのだった。

その後、その様子を見ながら料理をしていたガイアは気が付いたように小さく呟く

「もしかしてマスター…料理がしたかったのかな？ 昔から料理するの好きだったから……」

こうして、彼らの一日が始まるのだ

ニンフがいつものように朝食の時間にリビングに自室から向かうと、階段を元気なく歩いている彼の姿があった

(アレ……キョウヤ、寝坊でもしたのかな……?)

ちなみに、いつもならばニンフは朝に台所以外で顔を合わせることは少ない。むしろ無いに等しかった。

何故なら毎日のように早起きをし、彼は朝食を作っているからだ。

それだけに、ニンフにとって朝の早い時間に彼の後ろ姿を見ることが新鮮に感じた。

(けど…珍しいなあ。キョウヤも寝坊するってみんな知ってるかな

?)

他の人が知らなそうなことを知ってしまったニンフの表情は嬉しそうに綻ぶ。

そして、まじまじとその姿を後ろから歩きながら見ていると、彼はその視線に気が付いたのか振り返りニンフのいる方を見た。

そこで初めてニンフの存在に気が付いた彼は小さな声で「おはよう」と言っ、そのまま彼がいつも座っているソファアの上に腰を下ろした

(でも、何処か残念そうな表情をしてるのはなんでだろ?)

ニンフもリビングに入るといつも自分が座っている、テレビに近いところに設置されている椅子に座った

そして、眺めることが習慣となったテレビのスイッチを押し、画面に目を移す

『えー、それではニュースです。昨日、日本海付近で大きな爆発のようなものが確認されました。当局の見解では……………』

テレビに入っているニュースに興味が湧かなかったのかすぐに画面から視線をそらし、再び彼のいる方にニンフは視線を向ける

そこには新聞紙を横目に台所を見ている彼の姿が会った。そこで、ニンフは一つの疑問を抱いた。

いつも料理をしている彼がソファに座って新聞紙を読んでいるということは一体誰が朝食の用意をしているのかということ

そこでニンフも同じように台所に視線を移し、台所にいる人物を確認する。

台所に視線を移したニンフの目に映った人物は、彼のことをマスターと呼ぶ、全てのエンジェロイドの雛形になっているエンジェロイドのガイアが手際よく料理をしていた。

それで、ニンフは一つの結論に行き当たる

(もしかして……キョウヤって料理を作ること楽しんでたのかな?)

だが、ニンフが今まで見てきた料理をしている彼の姿には笑顔はない。ただ、淡々と料理を造っている姿しか記憶にはないのだ。

だから、彼女は今思いやった結論を自分の勘違いと認識し、何事も無かったように再びテレビの画面に目を戻そうとした……

その時

「朝食が出来ましたよー!!」

リビングにあるテーブルの上に料理を並べながら、ガイアはニンフと彼に向かってそう言ったのだ

ニンフはその場から立ち上がりテーブルの方に歩いていく。彼も同じようにソファから立ち上がってテーブルの方に歩いていった。そして、テーブルの前に四つあるうちの一つにニンフが腰を下ろすと、彼も同じようにテーブルの前の椅子に腰を下ろした。

「ん？ お前は座らないのか？」

だが、ガイアだけは二人が座っているにもかかわらず立っているからか、彼は尋ねるかのように聞いた

それに対しガイアは答える

「はい、私に食事という行動は無意味ですから」

その淡々としたやり取りは、初めてこちらに来た時のイカロスや自分のことをニンフは思い出してしまった。

それに対し、彼は納得がいかなかったのか更に問う

「じゃあ食事って言う行為を出来ないのか？」

「いえ、出来ないことは無いですが食事で得られる

「じゃあ食えないことは無いんだろ」

そう言つて彼はガイアの言葉を最後まで聞かずに開いている椅子を指差しながらそういうのだ

「あの…マスター？ 特に意味はないので……」

「意味があるとか無いとかそんなのはどうだっていいんだよ。食事はみんなでした方が楽しいだろ？ それに家族なんだろう？ 理由なんてそれだけで十分だ」

その言葉を聞いて、ニンフもキョトンとしてしまった。

何故なら、彼にしては簡単すぎる理由だったからだ。

「ですが……」

そして、その威圧にすごんだのかガイアは口ごもってしまふ

「そもそも、意味が無くても理由があればそれでいいんだ」

ガイアにそう言い聞かせる彼の姿は、何処か哀愁を漂わせている。まるで、孤独というものの寂しさを知っているというように

ニンフには確かにそう見えたのだ。

「ねえ、オメガ。キョウヤもこう言ってるんだし言っとおりにしたらいいんじゃない？」

だから、ニンフは彼の言葉を後押しするようにガイアに向かってそういう。

だが、それでもガイアは口ごもる

「しかし……………」

「分かった…じゃあ俺もお前と一緒に食べるって言うまで食わないからな」

そう言っただけは手に持っていた箸をテーブルの上に置くと、どこからか新聞を取り出しそれを読み始める。

流石のニンフも彼が食事をしないと知っている以上は食べることに抵抗を許してしまう。そのために彼の後に続くように箸を仕方なくという風にテーブルの上に置く

「…………ニンフ？ お前は食べていてもいいんだぞ」

「もう、キョウヤが食べないって言ったら私も食べられないじゃないかい」

「いや、だから食べて」

「キョウヤもさっき自分で言ったじゃない。食事はみんなでした方がいいって。それに…私もキョウヤの家族なんですよ？」



ニンフは頬を多少赤らめながらも、彼に向かって確かに伝える。

すると、彼は難しそうな表情になると頭を掻き始めた

「いや…あのなあ、確かにそう言ったけどさ…お前まで無理する必要はないんだぞ？」

「いいの！！ 私だけ食べてたら説得力無いもん」

「いや、確かにそうかもしれないけどさ…ああつ！！ 分かった、ガイア。今から俺の作った料理を美味しいと思えたらこれから一緒に食べる。良いな！！」

そして、返す言葉に詰まった彼は勢いだけで宣言する。しかし、その表情は何処か楽しそうだ

その言葉に対しガイアも多少驚いたと同時に、反射的に「ハイ」と言ってしまった

「よし、じゃあお前らは椅子に座って楽しみに待ってるよ。絶対に美味しいって言わせてやるからなっ！！」

彼はそういいながら台所に入っていく。

ニンフはきつと大丈夫だと心の中で呟きながら、彼の後ろ姿を見ていたのだった。

「さて…と、ああは言ってはみたけど……………朝食の分の食材はガイアが使っちゃってたんだよな……………」

恭夜は開けている冷蔵庫の前でそう呟くと、中身を確認し終えた冷蔵庫の戸を閉じる。

残っている食材は豆腐、唐辛子、ひき肉……………その他調味料

「うーん…コレだけ材料が残ってるなら作れない事もないんだけど……………朝からアレはちよつとなあ……………まあ、一品料理だし大丈夫かな」

そう言つて彼は中華なべを強火で充分に熱し、サラダ油を中華なべに馴染ませていく。

その中にひき肉を投下しぼろぼろになるまで炒めたとしようと、それをなべの端に寄席今度はニンニクと生姜を投下し油に馴染ませるようように炒めていく。

先ほど炒めていたものに更に豆板醤も鍋底にふれさせるように追加

し風味を引き出し、油になじんだところで甜麵醬も加え、全体を炒めあわせる

そして、紹興酒、醤油、砂糖、コシヨウを加え、さらに炒めると全体の色がつややかになり、いい匂いもしてくる。

「あ、鶏がらがない……本当は嫌だけどコンソメスープの素で代用するか」

素を溶かしたスープを中華なべに適量入れ、そのまま煮立つまで煮詰めていく

煮だつて来た所で切つてあつた豆腐を加え、潰さないように2〜3回ほどかき混ぜたら再びじっくりと煮る

再度煮だつたところで、水に溶かした片栗粉をだまにならないように少量ずつ加え、少しずつかき混ぜる

最後に焦がさないように手早く混ぜあわせたら、仕上げにラー油を適量……

「よし、完成だ……っと、その前に味見しとかないとな」

台所にあるスプーンを素早く取り出し、少量を中華なべから掬い取つて口に運ぶ。

「うん…やっぱり微妙に違和感があるな…まあ、でも…俺に出来ることはしたさ」

口ではそういいながらも、やはり完璧な材料で作るの出来なかった事を彼は心のどこかで悔やみながら皿を取り出し、完成したそれを盛り付けていく

そしてそれをテーブルの前で座って待っている二人の下へと運んでいく

「待たせたな。朝にはちょっと合わないだろうけど、食材がコレしかなかったから勘弁してくれよ」

「ねえ、キョウヤ?」「あの…マスター?」

「ん、なんだ?」

恭夜のもって行った皿の中に入っているものをみて、二人は同時に彼に尋ねるかのように言葉を発した

「なんて料理なの? こっちに来てからも初めてなんだけど……」

「すみません…この赤いものは食べ物なんですか?」

それを聞いて恭夜は啞然とする。シナプスにはこういった料理はなかったのかと

「ニンフ、これは麻婆豆腐って言う中華料理だ。それとガイア、俺は料理って言っただろ？ 食えないもの作るつもりもないし、味見もしてるから大丈夫だ」

「ふうん…食べてもいいの？」

「ああ、食べてくれ。ほらガイア、お前も食べるよ」

「は、はい」

ニンフはやつと食べれるといった風に彼が皿と一緒に持ってきてくれたレンゲを使って麻婆豆腐を口に運ぶ

ガイアも同じようにおどおどしながら口に運ぶ。

だが、二人の反応はまったく別だった。

「キョ…キョウヤ…辛いつ！ 美味しいけど辛いつ！！」

「はあ？ ニンフ、結構甘めに作ったほうだぞ」

「水っ！ それか何か飲み物っ！！」

「しかたねーな。ほら、お茶で良いだろ」

そう言って、彼はコップにお茶を注ぎニンフに手渡す。

「……………美味しい」

そんな間に、ガイアは黙々と皿の中に残っている麻婆豆腐を口に運

んでいく

「辛いけど……それ以上に美味しい……もっと辛いのを食べてみた  
いな……」

そんなことを呟いていたものだから、彼の耳にはしっかりと聞こえていたようだ。

「どうだ？　美味しくなかったか、ガイア？」

それを言う彼の表情は少し嬉しそうで、その言葉は少し意地悪のよ  
うに聞こえた。

それに対してガイアは困ったようにだが、少し遅れて言葉を返した

「美味しい……です」

「ちゃんとみんなでご飯食べてくれるって言うならこれからもたま  
に作ってやるぞ？」

「……はい」

「よし……じゃあ、お前の作ってくれた料理みんなで食べようか」

「はいっ」

こうして、彼らはガイアを新しい家族として迎え、新たなる一日の  
一歩を歩き始めたのだった。

今まで以上に楽しい日常を、平和な日常を……彼は今を歩き続ける。  
わからない明日は全て先輩に任せよう。

だって、『今』を守る事が彼のちいさな約束なのだから

ぜったいに、ぜったいにやくそくだからね

それは、あの時みた記憶の物なのだろうか。それともホンモノの彼の記憶なのか……それはきつと彼自身にも分かってはいないのだろう

家族と辛味と優しさ(後書き)

麻婆豆腐：別にA BやF a t eのネタから取ったわけではない……

……とは言い切れないです。

どっちかって言うと作者がマーボー、中華料理全般が好きって言うのもありますが……

作中のマーボーの創り方については無言です。

それでは新章・それぞれの日常をコレからよろしくお願いします



## 浴衣と縁日と矛先と（前書き）

小鳥のさえずりが聞こえるほどいい天気、学校の中庭で五月田根美香子はテーブルを用意し、優雅に紅茶を楽しんでいた。

そう、はたから見ればそう見えるほどに完成された光景なのだ。

だが、それは彼女の眩きによって一蹴されてしまう

「五週…いえ、五話ね……」

そして、飲んでいた紅茶のカップをテーブルの上に静かに置き、テーブルの一部を陥没させるほどの圧と、置いたまま握っていた紅茶のカップを粉碎するほどの握力を維持しながら、額に青筋を浮かべるその表情は怒り一色

「五話の間……会長出番なかったわ……！！！」

ミシミシと音を立てながら崩壊していくテーブルを気にも留めず、怒りの矛先の行く先を探す

（どついつことかしら……？ みんな私に出番がない間にバトルやらお涙やらラブやら、あまつさえ新キャラまで登場して大活躍して……会長だけ今の今まで出番なし？）

そして、気が付けば会長の周りにあった草木は生気を失い、枯れている

(この怒りをどこにぶつけねばいいの…？ 原作者？ それともこの小説の作者？)

「…いいえ、会長わかってる……殺るべきはあの二人」

## 浴衣と縁日と矛先と

秋、空美町の神社は縁日でそれなりに賑わっている。そんな中で、石の上に座ってのほほんとしている少年、桜井智樹がいた。

（みなさんこんにちわ智樹です。今日は珍しくみんなで近くの神社の秋の縁日に来ています。大変だった第二世代エンジェロイド襲撃騒ぎもおさまり　　ニンフも羽が生えたようのでめでたしめでたし　　）

「ああ、それにしても……やっぱり平和が一番ですなあ」

片手に持っている焼きイカを齧りながら、本当に気分をよさそうにそう呟く。

所は変わって神社の鳥居の下では、背が高く顔が整っている少年

絃城恭夜と、雛形エンジェロイドであるガイアが浴衣を着て縁日の出店の様子や人の流れを眺めていた。

だが、恭夜の目が追う先には必ず空の青のように澄んだ色の髪をしている少女、ニンフの姿がある。

ガイアも彼と同じものを見ていたいという想いがあるのか、同じようにぼんやりとニンフを眺めている。

しかし、ガイアのそんな思いに恭夜が気が付くはずもなく……

「さて……と、俺はもう少しここにいるからお前もどっか見て周ってきたらどうだ？」

そう言っつて、鳥居のすぐ近くにある階段に腰を下ろし座り込む。

その表情には別段いつもと変わったものもなく、純粹にガイアに楽しんでもらいたいと思っつての言葉なのだろう。

それに対しガイアはどう言っつて良いのかわからなかつたようつで、こくりと頷いてから人ごみの中に入っつていっつた。

それを恭夜は見送ると、既に暗くなりつっつある空に浮かぶ星を見上げる。

「もう秋か……なんやかんやでいろいろ在っつたけど早いもんだなあ」  
今までのことを思い出しながら、恭夜は苦笑いしながら呟く。しかし、その苦笑いの中にはどことなくだが本当の笑顔も混ざっつているようつにも見える。

実際のところ、恭夜はこんな日常を本気で楽しんでるのだろうつ。  
今までは自分唯一人が異端で、他のみんなは正常。

そんな世界で彼は生きてきた。それが父の最期の贈り物、気まぐれ

ではあつただろうがその贈り物のおかげで彼の心はここまで強くなることが出来た。

昔からの親友を取り戻し、新たなる家族を迎え入れ、頼れる仲間を手に入れた。

だが、彼はそれだけでは本当の意味では満たされていない。だからこうして毎日の日常を楽しもうとしている。

人間とは強欲な生き物で、一つ願いが叶えばまた次の願いを叶える為に行動をする。

彼も…恭夜もそれに例外なく該当している

「しっかし…さっきからチリチリと肌を突き刺すような感覚、それに嫌に噴出す汗は何か悪いことが起きる前兆なのか？」

そう呟き、彼は周りを確認する。

後ろを見るが、後ろには下に続く階段があるだけ。次に左右を確認するが、雑木林があるだけで何も無い。そして、前方を確認すると

………

『ぎゃあああああああ！！！』

彼に聞き覚えのある声が…叫び声が聞こえてきた。

その叫び声の聞こえてきた方を見ると、的屋のおっちゃんに捕まっ

た智樹の姿があり、その近くでにやついている会長の姿が確認できた。

「嫌な予感しかしねえな……模倣による創造開始」

そこで彼は万が一の可能性を考え、早急に翼を創りだし空に羽ばたくそして一定の高さまで羽ばたくと彼はそこで一度停止し、もう一度さっきの騒ぎがあった場所を眺める。

だが、その眺めた先にはこちらを眺めてにやりとした表情を浮かべる会長の姿があった

「な……冗談だろ？ 地上からここが見えるはずはないよな？」

合ってしまった視線をそらしながら自分に言い聞かせるように彼は呟くと、その場から更に離れようと翼を羽ばたかせようとした

その瞬間

「すみません、来て貰います。」  
「んなつ！？」

物凄いスピードで飛んできたイカロスに捕縛されてしまった。

「あー、やっぱりね……薄々分かってたさ、視線が合った瞬間からさ……」

そして、イカロスに捕まった彼は諦めたように翼を消すと、ぐでーんとした格好でそう呟くのだった。

「うふふ、会長から逃げようなんてどうして考えたのかしら？」  
「クッソウ……恭兄だけ逃げようたってそうはいかねーからな！」  
「いや……あの……てか、イカロスを差し向けたのはお前かよ!？」

そんな会長の言葉と、泣き目でこちらを見ながらそう叫ぶ智樹の言葉の前に恭夜は困り果てていた

だが、智樹の言葉を冷静に考えた恭夜は智樹にそう聞かずにはいられない

「いや……俺じゃない、会長の差し金だってさ」

「ああ…やっぱりか……………」

縄で捕縛されている智樹と、両脇を黒服に囲まれた恭夜は力なく項垂れる

そんな二人の姿を気にも留めず、会長は手をパンパンと叩くと

「それじゃあ今年の催し物

あ！ 忘れていたわ、女の子は

こっちよ〜」

『?』

「そうそう〜」

忘れていたというように会場の前に残っていた女性陣を会場の『おんなのこ』と書かれたプレートのあるゲートの中に誘導し、残った男性人のまえに戻り、改めて話を始めた

「じゃあ残った男の子達に改めて……………今年の催し物は

」

そう言って、会場の前にある大きな幕を黒服たちに開かせ

「ヨーヨー釣り対 決〜」

握りこぶしをグッと胸の前で固め、そう高らかに宣言したのだ





そう言つて会長は飛び込み台のような場所からプールの中に飛び込む。そして数秒潜つていたかと思うと、釣竿をもつて座っていた的屋のおっちゃん（ジューダス）がピクツと動いたかと思うと……

「フィッシュユー!!!」

持っていた竿を片腕で豪快に振り上げると、「MAKIKO」とかかれた水着を着た女性の胸を鷲掴みにしながら会長が水面へと現れたのだ

「きゃあああああ!?!」

「どっ、ばいんばいん』でしょ?」

そついいながら、これ見よがしに見せ付けるように胸を揉みながら会長はそついうのだ

「見る智樹!! プールの中に女子達がっ!!」

そこで守形は気が付いたことを智樹に向かって叫ぶ

そして、プールの中にいる女子達も同じように叫ぶ

「なにコレっ！！」

「なにコレえー！？」

ばしゃばしゃと両腕を縛られた女子達が叫ぶ様は絶景。智樹のような男達の心を十分に食いつかせるようなものだった。

しかし、そんなことはどうでも良いと思っている恭夜は本当にどうでも良いといったような表情でそんな光景を眺めている

（あれ…？ コレなら俺が捕まえられた意味なくね？ 別に興味ねー）

だが、それとは真逆に智樹は驚愕の表情を浮かべながらプールを覗き込んでいる

「ルールは簡単。二人一組になって一番大きなヨーヨーを釣り上げたチームの勝ち、OK？」

それをいいことに明らかに智樹を狙い撃ちにするような言葉を並べ、会長はルールの説明を終えると

「それじゃあ、桜井君抜きでヨーヨー釣り対決開

「うおっほんー！」

そこには、いつの間にか縄から抜け出した智樹がどこかのおっさんのような格好をしながら竿を振り回す姿があった

「今日は風がうんチャラ……潮がうんチャラ……」

そう思ったと思うと、智樹は会長の方を見てニコツと笑いかける。会長もそれに対しニコツと笑いかけると……

「それじゃあ、改めて　ヨーヨー釣り対決……」

「うそ……」

「冗談でしょ……?」

プールの中でそういう女子を尻目に、会長は開始の言葉を宣言する

「開始ッ!!!」

「キヤアアアアア!!!」

それと同時に、プールの中に浮かんでいる女子達の悲鳴が上がったのは言うまでもないだろう

「さあ、始めりました五月田根プレゼンツ大ヨーヨー釣り対決!!  
実況は毎度おなじみ私、数学の竹原と」

「解説の……イカロスです……」

「そして今回は解説に特別ゲスト、絃城恭夜さんを迎えています！  
！」

「あ、ども。ゲストに仕立て上げられた絃城です」

そんなノリノリの実況を行う数学の竹原の言葉に余り乗り気ではない恭夜が面倒そうに答えている

「この勝負は制限時間内に一番大きなおっぱ……いえ『ヨーヨー』を釣り上げたチームの勝ち！！ 我先にと男の子達がプールの中の女子を追うッ！！」

「おい、やっぱり目的はそっちなのか！？ ヨーヨー釣りという名のセクハラ大会なのかこれは！？」

「しかし……その中でも圧巻なのはこの二組！！」  
「無視か？ ゲストの言葉完全に無視なのか！？」

そんなことを恭夜が言っている合間にも、守形・智樹ペアと的屋のおっさん・会長ペアが成果を挙げていく

「守形・桜井ペアと的屋のおっさん・五月田根ペア……！！」

だが、そんな二組でも大きな差がある。

いやらしい手つきで女子の身体に触りながらメジャーを片手に計測を開始する智樹と、紳士的に、そういう言葉が合う会長……

はたから見れば智樹はただの変態。もつとも、この競技に参加している男子は女子からして見れば唯の変態でしかないのだが……

「桜井選手早い!! 今度はダブルゲットおお!!」  
「きゃあああ!!」

実況の声と、女子の叫びが会場に響く。だが、この競技を純粹ひじいに楽しんでる智樹はそんなことを気にせずにいやらしいことを続ける

「パイ拓パイ拓!!」  
「いやああああ!!」

どこから取り出したのか不明だが、水着の上から胸に墨を塗り半紙のようなものに女子の胸を押し当てて記録を残す智樹はもはや唯の変態でしかない

そして、勢いのままに智樹は漁を続ける

「さらに四匹目ゲットおお!! 早いぞ、桜井選手!!」  
「きゃあああ!!」

しかし、釣り上げられたのはニンプ。智樹は胸にある山を見るが、小山にも満たないサイズしかない山しかない。

「ちょ……変な事したらタダじゃおかないんだからね!! 絶対に計測なんてさせないんだからっ!!」

そんなことを言うニンフを智樹は一度眺めたかと思うと……

「大きくなって帰って来い……………」  
「きゃっ!?!」

ニンフをそんな言葉と共にプールの中にキャッチ&リリースした。

「あーっと、桜井選手ニンフをリリース!! 素晴らしい、小さい魚は海に返す……釣り人のマナーですよね……………」  
「いや…確かにそうかもしれないけど何か違うかいか……………じゃなくって、俺も早いうちに関係者だけでも拾いに行くかねーと」

そう言って恭夜は浴衣を脱ぎ、貸し与えられた水着の姿になってプールに飛び込む

「おおっと!! ここで全大会の好成績者の絃城選手もプールにダイブ!! この勝負わからなくなってきました!!」

そんな実況を聞き流しながら恭夜はリリースされたニンフを見つけ

ると泳いで近くにより、抱きかかえるように掴むと片腕でロープを掴んで上に戻る

その間およそ数秒

「はあ……毎度のことだけど人を巻き込まないで欲しいよなあ……」  
「あ、ありがとう……キョウヤ」

そう呟きながら、先ほどまで彼が座っていた実況席の隣に椅子を置いてニンフを座らせると彼は再びプールに向かって歩いていく。

そう、彼の回収すべき人物はもう一人ばかりいるのだ

「そういえばもう一人いるんだよなあ……ニンフ、ガイア見なかったか？」

「え…オメガだったらまだプールの中にいたような……」

「へー、アイツまだ捕まってないんだな……んじゃ、もう一泳ぎしてくるかな……」

そう言っただけ彼は再びプールの中に飛び込むと、ガイアの姿を探す。その途中で無言で泳ぎ続けるそはらのような人物を彼は見かけたが見なかったこととして捜索を続行する。

端から徐々に真ん中に向かって彼は泳ぎ、ガイアを探すがなかなか見つからない。



彼はまさかと思い、少し深いところまで潜って再びその姿を探してみると本当の底の方に彼女の姿を発見することが出来た。

（ふーん、浴衣姿も結構にあってたけど水着姿も似合ってるんだなあ…………）

そんなことを彼は思いながらガイアの元に近づくと、ガイアは彼の姿に気が付いたのか複雑そうな表情をして彼を見上げた

だが、彼はそんなことをお構い無しに彼女の腕を掴むとそのまま水面を指して浮上していく。

しかし、世の中そんなにも都合よく物事は進まない

「言い忘れていたけど…………妨害も自由よ」

そういつと同時に拳を水中の中で即座に放つ会長

「なっ…聞いてねえ！！ 囧、囧になりそうな奴は 居た！  
！」

目の前でもやりと笑って拳を放ってくる会長を見ながら、彼は囧になりそうな人物を探す。そして発見したのが智樹だった。

「悪い、トモ坊…お前の犠牲は忘れん」

「なっ…身体が勝手に!？ まさか恭兄の仕業 モベラツ!  
?」

水中にもかかわらず鈍い音と共に智樹が会長の手によって轟沈させられる。

その間に彼はそそくさと水面に顔を出し、縄をガイアを持った状態で這い上がっていく

「ふう……ちょっと焦ったな」

「あの、マスター? 良いんですか…あんな事をしてしまっても」

そんなことを呟く彼に、ガイアは尋ねるように聞く

「まあ…尊い犠牲だったと言っておくさ……」

その質問に対し彼は眼を泳がせながら、体に纏わりついている水を手で払う。

「それに、俺はこんなことで他人から顰蹙買いたくないしさ」

「顰蹙……ですか?」

「そ、顰蹙。別に俺もあいつの気持ちかわからないわけでもないけどさ、節度って言うものがあるだろ? 何事も限度を超えない程度に楽しみめて事だよ」

そう言っつて、彼はニンフが座っている実況席の方までガイアの手を引っ張っつて連れていく。

ガイアはその握られた手を見ながら、どことなく嬉しそつについていく

「ねえ、キョウヤ…さっきの悲鳴っつてトモキの声よね？」

椅子に座っつていたニンフも戻っつてきた彼を見るなり質問を始める

「んー、間違いではないだらうな」

それに対し、彼は曖昧に返す。もっつとも、彼が曖昧に返したということとはほぼ確定ということなのだが……

「もしかして、ヒトミゴクウっつて言っつやつ？」

「難しい言葉知っつてるんだな……ニンフ」

ニンフから聞きたくないようなことを聞いてしまっつた彼は、ニンフの頭に手をぱんと置くと撫で始める

「この前の昼ドラでそんな言葉聞いたのよ」

ニソフは目を気持ちよさそうに細めながら、そういつ。

（ああ、昼ドラってそんな内容の奴もあるんだ……）

それに対し、いろんな意味で感心している彼。

「あのマスター、ヒトミゴクウとはなんでしょうか？」

そして、その言葉を聞いて頭の上にクエスチョンマークを浮かべているガイア。

「別に知らなくてもいい言葉だよガイア」

そう言って優しく言葉を返す彼の姿はまるで、年頃の娘の見たくない姿を見てしまったような表情だった

結果だけを伝えるのならば、大会の優勝者は五月田根美香子であった。

学校の中庭で大会の勝者となった彼女は、ペアとして参加した的屋のおっちゃんと一緒に優雅に紅茶を楽しんでいる

それに対する的屋のおっちゃんはロックで昼間からウィスキーを味わっている。

教育の現場としてはどうかと思われる光景だが、この二人がいる前でそんなことを言える人間がいるはずもなく……

無言の時間がゆっくりと過ぎていく

そして、しばらく時間が過ぎると……的屋のおっちゃんは椅子からがたりと立ち上がると、彼女に背を向けるように立つ

彼女もそれに気が付き、尋ねるように声をかけた

「行くの…?」

「ああ……」

その問いに的屋のおっちゃんは短く返す

「そう……来年も……よろしくね」

そして、彼女もそれを止めることなく見送る。

数羽の鳥達に囲まれながら、的屋のおっちゃんは無言でその場を立ち去った。

その姿が完全に見えなくなるまで彼女はその姿を見送ったかと思うと、飲んでいた紅茶のカップをテーブルの上にある皿の上に静かに下ろすと……

「…………ふう」

学校の校舎が近くにある、大きな木を見る。

そこには両足を縛られ、見るも無惨に縄で吊り下げられている桜井智樹の姿があった。

それを数秒ばかり彼女は眺めると……………

「スッキリ」

そう、満面の笑みで呟くのだった

## 浴衣と縁日と矛先と（後書き）

どうも、作者の絃城です。

今回は恭夜メインで話を組み立てていたので、智樹のほうの話は割愛させていただきました。

そのせいで若干…いや、大分無理矢理感がありますが、次回以降もこんな感じになるかもしれません。

コレも作者の限界ですので、どうか生暖かい目で見守っていただけると嬉しいです。

同時に、リリなの二次の方も少しずつ執筆をしておりますので、近いうちに最新話を投稿するつもりです。

それでは次回は今回よりまともになるように、じっくりと時間をかけて書かせていただこうと思っています。

それでは次回、未定。

楽しみに待っていただけると嬉しいです

## 幼馴染三人（前書き）

私は電子戦用エンジニアロイド・タイプ 「Nymph<sup>ニンフ</sup>」

マスターのいないエンジニアロイドである。私は今、非常に後悔している。

先日こんな私のマスターになってくれると彼は言ってくれたのだが、羽が生えた事に浮かれてうっかり

インプリティングをするのを忘れていたのだ。

とはいえ何も難しい話じゃない。「ねえ、インプリティングしましよ?」と一言言えば済む話で

「ねえ、キョウヤー」

「んう、なんだニンフ?」

一言言えば 彼は私のマスターに……なんだけど

「ううん……なんでもない……」

「ん?」

何でだろう……上手く言えない



「マスター、ここはどうやってやればいいんですか？」

「ほお、ここまで出来るようになったのかガイア。ここはだな

」

オメガはキョウヤが知らない間に契約関係にあったとかで、もうここでの生活に慣れてるし……

私もキョウヤをマスターって呼びたい。けど、どこかでそう呼ぶのを恐れているのかな？

ああ、こんな思いを抱えながら今日も私は一日を過ごします。

## 幼馴染三人

この家、絃城家に彼の身内以外のものが出入りする事は珍しい事であるという事を先に教えておこう。

もともとこの家は彼の父が彼のために与えた工房でもある。だが、彼はこの家に人避けの結界だけを張っただけで魔術的な作用はあまり施していないのだ。

それでも人避けの結界に関しての彼のスキルはかなりのものであり、本来ならば彼の意思で招き入れる以外はこの家に気が付くことはできないはずなのだ……

そう、そのはずだった……

「なあ、さっきまで見て見ぬ振りをしてたけどさ………どうやってこの家を見つけた？　つか、どうやって入った？」

彼がいつの間にかこの家に入っていた智樹、そはら、イカロス、アストレアに向かってそう尋ねた。

アストレアに至っては勝手に冷蔵庫の中から林檎や蜜柑を取り出して食べている。

智樹は雑誌をイカロスの準備したお茶を飲みながら読みふけている。

そして、彼の質問に答えたのはそはらだけだった。

「えっとね、恭ちゃんの家にも一度も来た事なかったからね、トモちゃんと一緒にいこうって言ったの。それで最初は私とトモちゃんの二人だけだったんだけど……恭ちゃんの家が見つからなくて……えへへ」

「つまり……だ、最初はアストレアにこの家の探索を頼んだけど失敗して、イカロスに頼んだら見事に辿り着く事ができたと……こんなところか？」

「うん。大体というよりほぼ全て正解だよ」

彼はその言葉を聞くと盛大にため息をつき、再び尋ねる

「それで、どうしていきなり俺の家なんか来たいと思ったんだ？」  
「さっきも言ったけど私が恭ちゃんの家に来たことが無いって言うのが一つ目の理由で、もう一つ理由を言えば、たまにはトモちゃんの家以外で遊びたいなって」

そうやってそはらは現在いる部屋をぐるりと眺めると笑顔で彼の顔を見たのだ

「はあ……別に遊びに来るって言うのは問題ないけどさ、これからは

勝手に入ってくるなよ？」

「はい！」

彼は今度はしびしび納得したというようにため息を吐くと、そはらに向かつてそういふのだった

（それにしたつて人避けの結界をイカロスに看破されたのはあんまりいいことではないな………今度ニソフに協力してもらつて、新しく術式を組むかな）

しかし、その言葉とは裏腹に内心はあまりこの家に人を招き入れたく無い様でもある。その理由こそわかりはしないが、彼なりの理由が在るのだろう。

「で、トモ坊……何か言う事はないのか？」

ついさつき考えていた事を頭の端に持つて行き、彼はお茶を啜りながら何かの雑誌を読んでいる智樹に向かつてそう言う

「ん、あ？ ああ、お邪魔してます」

それに対し智樹は一瞬考えたかと思うと、さも当然のようにそうつと再び雑誌の方に目を向けた

そんな智樹に対して彼は即座に頬をつまみあげると、多少の怒声混

じりの声で再び言うのだ

「そうじゃないだろ？ ほら、何か言う事はないのか？」

その間にも彼は智樹の頬をつまんでいた手を頭にスライドし掴み上げる

はたから見ればギリギリという音が聞こえそうなほどに強く掴んでいるように見える。

「いだっ！ いだだだだあぁっ！！ 痛いっ、痛いっ！！」

「そはらは俺の家に遊びに来たらしいが………で、お前は俺の家でなにをしてるんだ？」

「痛いっ、イタイイタイイタイ！！ まずは手を離せっ！！ 痛くて会話になら イテエエエエツ！！！！」

「あの……」

そこに、申し訳なさそうにイカロスが彼に向かって声を掛ける。

ちなみにこの間にも智樹の頭は彼の手によってがちりと万力の如く力で掴まれている。

「ん、どうしたんだイカロス？」

「あの……その……怒ってはいませんか？」

それを尋ねるイカロスの表情……いや、正確にはその瞳は智樹の顔と彼の顔を行ったりきたりしている。

彼にとってはこうやって智樹と（私刑）会話を行う事は日常であり、昔から変わっていない事だ。

だが、その行動はイカロスにとっては智樹に対して彼が怒っているように見えてしまったようだ。

「いや、別に怒ってなんかないぞ？ むしろ気分は悪くないし」

「ですが、その……それでしたら……どうしてマスターを痛めつけるような事を………するんですか？」

それを聞いた瞬間に彼は智樹の頭を掴んでいた手から力を抜き、智樹を解放した。

そして、呆れたようにイカロスに言うのだ

「イカロス……人と人との間に出来た絆って言うのはさ、毎日の……日常の積み重ねなんだ。お前には今の行為が一方的な虐めに見えたと言うなら仕方ないけどさ、別に理由もなくトモ坊を傷つける事なんかしないさ」

つまり、彼にとってはこの行動は彼と智樹の間に積み重ねられてきた日常の証なのだ。まだ十台半ばの年齢の彼だが、これは彼の持論

であり積み重ねてきた時間の中で見つけた一つの答えだ

「日常の…積み重ね…？」

「そ、日常の積み重ねだ。こんな事を仲もよくない他人にやってみる、それが本当の痛めつけるってことさ」

イカロスはその言葉の意味を自身の中で繰り返す。その言葉の意味が自分にも分かりそうだから

「ねえー、キョウヤー」

「何だニンフ？」

そして、彼もまた自分が言った言葉を心の中で繰り返す

( 日常の積み重ね……か。そうだな…この持論は変わらないさ )

その後、ニンフの彼を呼ぶ声に引かれ彼はその場からニンフの元に歩いていった

ニンフの呼び声に引かれて俺はニンフの座っているとこまで歩い

ていった。

もつとも、かつて知つたる我が家の、それもリビング内の距離を歩いたというのもおかしな話だと思っただけどさ

「で……どうしたんだ？」

「えーとね、デルタがみんなでトランプやりたいてって言ったから」

そこには、既に何敗したのか分からないほどペケ印の付けられたアストレアの姿がある。

うん。下手の横好きって言うのはこういう奴の事を言っただろうな……にしても、これはポーカーか？

配置からしてアストレアがエースの3カードで　ん？　ニンフはハートのストフラでその隣だからそはらが9の4カード……あれ？　スペードの10JQKAって……純正のロイヤル？

「……人数的にUNNOウッにしないか？」

「キョウヤ、UNNOってなに？」

皆さんはウノというカードゲームをご存知だろうか？

簡単に言えばもつとも早く手札をなくしたものが勝つゲームなのだが



「まあ、数字と色合わせ、騙しあいも入ったゲームだな」

「ふうん…それって何人で出来るの？」

「とりあえずここにいる全員程度ならできるかな」

それにウノなら運も在るけどそれ以上に策略を重視できるゲームだからな

「じゃあみんなを集めてそれやりましょ」

「そうするか……」

俺は先ほどにあつた事をなかつた事にし、智樹とイカロスを手招きで呼び寄せ、惨敗続きであつたであろうアストレアを起こし、テーブルの前で静かに座っているガイアにも声を掛け、ウノについてのルール説明を行い、ルールに準じてそれぞれに七枚の初期カードを配つた

机を囲んでいる順番としては時計回りに俺 ニンフ ガイア そはら アストレア イカロス 智樹だ

「で、罰ゲームとかはありで良いのか？」

そして、俺は忘れていたというように全員に尋ねるよつに聞くと…

……

「もちろんアリだ！ 勝負には罰ゲームは付き物だからな！」

真っ先に智樹が威勢よくそういったのだ。

「そんじゃ、反対意見もないようなら罰ゲームはアリの方向で行くぞ？」

そう言っても誰からも反対がなかったので俺は罰ゲームアリでゲームをスタートさせる事にした

「そんじゃ、トップがビリに何でもしていい権利を与えるとしてみスターだ」

「えっ！？ なにその罰ゲーム」

「よっしゃ！！ 絶対に勝つからな」

「負けないんだからあゝ！！」

「はあ…ビリにならなきゃ良いってことじゃないの」

「……大丈夫かな？」

「……………」

こうして、絃城家で初のウノ大会が開催されたのだよ

中盤の状況を教えるのならば、俺の手札は三枚…内二枚はドローツ  
ーという手札。ニンフとそらは後一枚で上がれる。智樹とガイア  
は二枚で後一枚切れればリーチ、アストレアは…何故か手札が二十  
枚近くある。イカロスは角度的に良く見えないな…

「悪いなニンフ…ドローツを二枚だ」

「え…<sup>ベナルティ</sup>累積返しできないから四枚も引かないとダメじゃない。折角  
後一枚だったのに……」

そう言ってニンフはこっちを見ながらしびしび四枚を山札から回収  
する

「でも…まだわからないわよ」

そして、回収した手札から同じ数のカードを三枚だし、手札を二枚  
に減らすニンフ。先と色が変わり、次順のガイアが二枚のうちの一  
枚を出す

「リバーです…えっと、ウノです」

「あつ…やつと手札減らせると思ったのにい」

そはらは悔しそうにそう呟く。それに反してニンフはチャンスといわんばかりに残り二枚のうち一枚を再び出す

先ほどと色は変わらず彼に順番が回ってきた

「出せねえ…山札から一枚つと　　お、ラッキー、悪いなトモ坊  
ドロー4だ、それとウノ。色は緑だ」

「なっドロー4にスキップって…また振り出しに戻ったじゃねえか  
よ…!」

「コレも勝負だからな」

そして、智樹がスキップされた事によりイカロスが手札からカードを一枚出す

「アストレア、ドロー2…回避できる？」

「そ、そんなあ…」

手札を何度も見たアストレアは情けなく声を上げると山札から追加で二枚手札を回収し、スキップのカードを出した

「けど…まだ諦めないわよ!」

「ごめんねアストレア、私の勝ちなの」

そう言っただけで、アストレアは最後の一枚を出してこのゲームの勝者となった。

「ってことは…俺の家のルールだとコレで終わりだな。」

俺は自分の手札の一枚を公開する。ちなみにこの家のルールだが、勝者以外は残った手札の点数の少ない順に順位が付けられていく。

ちなみに俺は役手じゃなかったから+1点で二位、ニンフは役手と数字で+5点で三位、イカロスは約手二枚で+8点で四位、そはらはドロー4が一枚手にあつたために罰則8点と約手で+12点で五位、そして一点差で智樹が六位で当然だがアストレアが+112点でビリ

「まけたああああ!!」

そう言っただけでアストレアは盛大に手を上げたかと思うと力なく背中から床に倒れるように寝転がった

「そんじゃまあ、罰ゲームだけどうするんだガイア？」

「そうですね…マスターはどんな罰ゲームがいいと思いますか？」

ガイアは彼に向かってそう質問するが、彼はその質問に呆れながら言葉を返した

「ガイア…それじゃお前が勝った意味がないだろ？ ほら、何でも良いから自分で決めな」

そうガイアに言って、彼は彼女の言葉を待っている

「でしたら…アストレアは今もっている食べ物を食べるのを禁止…でどうでしょうか？」

「いや…俺に聞かれてもだな」

そう、彼が言いかけたときだった

「えええええっ！！ 酷いです！！ 横暴です！！」

アストレアは手に持った林檎と蜜柑、そしていつの間にか追加されていた濡れせんべいを手に持ち、彼の言葉を遮りそう叫んだのだ  
それをみた彼はクツと笑いを漏らした。それにつられる様に智樹とそはらも一緒に笑い始める

三人はそれぞれの笑いを見ながらさらに笑いあい、笑いが留まる事を知らないように思えた

しかし、エンジェロイドたちは何故彼らが笑っているのかを理解できないうる

「あの…マスター？ どうして笑っているんですか」

そして、それに対して一番初めに質問をしたのはイカロスだった。そして、その質問に智樹は笑いながら答えた

「クッ…ププ、秘密だイカロス」

正確には答えていないのだが、智樹はそれ以上のことを言わない。続いてニンフは彼に質問をする

「ねえキョウヤ、なにがそんなに可笑しいの？」

「ッぷ…お前らにもこんな日がいつか来るからその日まで楽しみにしてろって」

そして、彼も智樹同様に明確な答えを出さずにそう答えたのだ

そんな二人の答えを聞いて更にエンジェロイドたちは難しい顔をして彼らの顔を見て、何故彼らが笑っているのかを考える

「うーんとね、私達が笑ってるのは別に可笑しかったからじゃないよ。ただね……うっん、ここからは秘密だよ、トモちゃん、恭ちゃん」

「ああ、秘密だな」

「そうだな」

そはらが最後にそう答えて、彼らは再び笑い始めた。

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）

それぞれ、幼馴染三人はそう心の中で呟くのだった。

この日のその後は、三人の楽しそうな表情が変わる事はなかった。



## 幼馴染三人（後書き）

どうも作者の絃城恭介です。

前回の更新から約一週間で更新をすることが出来ました。

しかし、この前の活動報告でお知らせしたようにこれからの更新スピードは牛歩レベルを超えて亀レベルまで落ちるでしょう。

理由としてはまあ、就職活動という人生の最大の第一関門と言っても過言ではないものです。

ここで躓けばいろいろとニート……よく言えばフリーターコースまっしぐらですから

それでも、更新スピードは一週間前後で出来るように頑張ります。

まあ、私の言う事は7割が当てにならないので頭の片隅にでもこんな事かいてたなあ程度に思っていただければ助かります。

ちなみに次回は文章が半分ほど完成しているのでそれなりに早く出せると思います

それでは、またいつの日にかノシ



新入部員っ！？（前書き）

夢を見る。それは幼い頃の夢。まだ家族と共に暮らしていた頃の夢だ。

『恭夜！ ほら、こっちに来いよ』

その夢の中には父がいて、母がいて、そして がいた。これは幼い頃の脳内に焼きついてしまった光景の一つだ。

『どうしてだよ親父！ 俺がこの家を…絃城を継ぐんじゃないのかよ！？』

はいつも俺に優しくかった。だから、俺はその優しさに甘えて生きてきた

『ごめんな……ごめんな……俺の素質が無かったばかりに俺が背負うはずの重石をお前に背負わせる事になっちまって……』

だけど、いつの日から の姿を見る事はなくなっていた

『お前は強いんだな恭夜……』

その言葉は誰が誰に対して言ったものだったのだろうか。思い出せない……確かにそこにおいて、一緒に笑って、泣いてくれた人だったはずなのに

思い出そうとすると身体が痛む。

いや、本当に痛んでいるのは身体なのだろうか？

わからない。知りたくない。こんな思いをしたくない。

でも、本当は分かっているんだ。

本当に痛いのは身体じゃなくて心なんだと。

『お前は俺の事を忘れる恭夜……それはきつと悲しい事だろうけど、時間が経てばそれすらも忘れられるようになる。だから』

それを言う　　の表情は笑っていたのか、それとも泣いていたのか  
……………それすらも分からない程に記憶の磨耗は進んでいる。

今を生きる代わりに過去を捨てて、それでも尚を過去の思いを捨てきれない。

過去の未練に縛られ続ける人間。それが俺の本当の姿なのだろう。

だけどこの思いは夢から目覚めてしまえばきつと忘れてしまうのだろう。だってこの夢を見せているのは　　なのだろうから。

『お前は…強く生きる』

その言葉だけはきつと、いつまでも俺の中で響き続けるのだろう

こんな事を考えても、ここにいる『俺』は『俺』であって『俺』で

はない。

そんな矛盾を抱えて、俺はここに存在している。

そして俺は夢から目覚める

「この事を忘れちゃってもここにある思いだけは忘れんな」

それは夢の中の俺が現実の俺に向かって放った言葉だった。

そんな気がする





新入部員っ！？

「 ター 朝です てください」

誰かに身体を揺すられている。

一定のリズムを刻み、俺の無意識の中にある睡眠欲を刺激してくれる。

「 メガ きは るのよ」

「 え そんなこと 」

だが、寝ぼけてはいるが聞こえてくる会話に一抹の不安を覚えた。

(この会話…いや、確定だがニンフとガイアだろうな……………)

そんなことを俺はまだ脳が覚醒していない状態で考える。そして、徐々にその二人の声は俺の耳の近くに寄って来ているようだ。

「せーの」



ニンフのそんな声が聞こえたと思った瞬間、俺の耳には生暖かい風……いや、吐息の感覚が訪れた

当然そんな感覚に慣れているはずもなく　　そもそも、こんな  
ドッキリイベント的なものに反応せずに居られる奴がいるのなら教  
えて欲しい

「はうあつ!?!」

一瞬身体が跳ね上がったと思うと一気に脳が覚醒し、今自分が置かれて  
いる状況を把握する事ができた。

先ほどまで俺の頭……正確には耳の在った場所には、ニンフとガ  
イアの顔がある。そして、その表情は少し驚いているようだ。

(いや…驚きたいのは俺のほうなんだが……まあ、十分に奇声を  
発して驚いたけどさ。ああ……不覚だ)

そんなことを心の中で呟きつつ、俺は先ほどの奇声を無かった事に  
するためにいつものように言った

「おはよう。ニンフ、ガイア」

心臓が飛び出しそうなほどに鼓動を刻んでいるが、俺はそれを何と

か押さえつける。

「あ、うん。おはようキョウヤ」

「え、あ…おはようございますマスター」

二人が俺の言葉に少し遅れながらも返事をしてくれた。

俺は更に先ほどのことを無かったように進めるために続ける

「そんじゃ今から朝飯の準備するから」

だが、やはり無かった事にはできなかった。

「もしかしてキョウヤ、耳が弱いのか？」

「弱いんですか？」

「うっ」「と俺は漏らすように声を出すとニンフはにやりと笑い、ガイアは俺から目をそらして」「ぶっ」「と声を漏らしていた

「弱いんじゃないさ、慣れてないのさ…！」

自棄になりながら俺がそう叫ぶと、ニンフとガイアは笑いを堪えな

がらこつ言った

「まあ、朝ごはんにしましょ？」

「それじゃあ、私達はリビングで待っていますね」

「あ、ああ」

こうして、俺達の一日が始まるんだ

空美中、新大陸発見部の部室ではいつものようにいつものように同じ面々が顔を合わせている。

それは今日も変わらずに繰返されている

「では」

そう声を上げたのは守形だった。

「来るべき冬休みに向けて、新大陸発見部の活動予定を会議する」  
「……………おい、ちょっと待て」

その言葉を聞いて、そはら、会長、イカロスは拍手をする。だが、それに対して守形に質問するものがいた。

その人物は桜井智樹。彼は椅子にロープで縛られており、不満そうな表情で言うのだ

「新大陸発見部の会議ですよね？」

「そうだが？」

だが彼の期待しているような答えは返ってこずに、守形はさも当然そうに答えたのだ。しかし、智樹は続けて言う

「じゃあ俺関係ないですよね？」

「？ 何を言っているのか分からんが」

智樹はそういうが、守形は本当に意味が分からないといった風に返事を返す。そこで会長は智樹を見ながらいつものようにささやくように告げるのだ

「桜井君の入部届けなら守形君からもう受理してるけど？」

「んなっ!？ ちょ、アンタ……何勝手に……」  
「おっと…来客のようだ」

そういつて、守形はコンコンとノックされているドアの方に歩いていく

「人の話をき って、なんだよ恭夜」

智樹がそう叫ぼうとした時、彼の肩を恭夜はトントンと叩き……

「良いじゃないか面白そうで」

最高にいい笑顔でそう言ったのだ。

だがその表情を見て、言葉を聞いた智樹は恭夜に噛み付くように言葉放つ

「なっ!! 恭夜だって先輩の事だからもう勝手に入部させられてるはずだ!! ね、そうですね会長!？」

「うっん、会長の守形君から貰った入部届けは桜井君のだけよ」

その言葉を聞いて、智樹は啞然とした表情になり恭夜の方を見る

「対策済みだったの。それに俺は家の事情もあって部活には入れないって事になってるしな」

そういう彼の表情はいい笑顔をしている。

「な、なっ、この裏切り者ッ！！」

「裏切り者とは失礼な、これは知謀つてものだけ」

やはり、智樹と恭夜の間には決定的な頭の差があるようだ。

そんな会話をバックミュージックに、守形は新大陸発見部のドアをノックした者に応接するためにドアを開き

「はい、こちら新大陸発見部」

そっぴいかけて、守形はドアの前に立っていた人物を見て目を見開いた

「あの……新大陸発見部に入部したいのですが……」

チリンという鈴の音と共に、女性の声が守形の耳に入っていく

そして、守形の頭の中に一つの言葉が流れる

現実よ……アンタは

「初めまして……」

その瞬間、彼の脳裏にはダイブゲームによって得た情報という名の記憶が駆け巡る

建物の中にいくつも並んだ何かの装置のようなもの

その中に入っていた翼の生えた、人間と対して変わらない姿をしている翼を生やした者達

そして、寝言で呟いていた少女の顔

「二年D組……」

「あれ、どうしたんすか先輩？」

「今回は俺も智樹と同意見ツス先輩」

いつの間にか口喧嘩を終えていた二人が守形の後ろからひょっこり

と顔を出してそう尋ねた。

「風音……日和です……」

だが、守形は頭の中を駆け巡る記憶の映像のせいで何も答えない。  
智樹と恭夜はドアの向こうにいる少女の姿を見つけてぼおっとそちらを見る。

「入部……しても良いでしょうか……皆さん」

今だから言えることだが

俺達二人は絶対に彼女の事を忘れない



何故だって聞かれても、これは俺達の過ごしてきた日常での出来事だからとしかいえない

だけど、一つだけ答えられる。

俺達は確かにここにいるのだと

## 新入部員っ！？（後書き）

前書きにあった話は一応なにかの複線になります。

おはようございます、こんにちは、こんばんは。作者の絃城です。

今回の話は前回に書ききれなかった分と、前書きを足しただけの話になってしまいました。

つながりこそ余りありませんでしたが、今回は絃城家でのウノ大会の後日の話でした。

原作では桜井家で智樹が覗きシステムを使ってうんたらかんたらって所です。

今回は日和と智樹と恭介があれれな展開に……………ならないのかな？

それでは次回ノシ

清純な心？（前書き）

ちやぶ台の前で丸印の中に「寿」と書かれた湯飲みを手にテレビを横目に見ながら智樹は心の中で呟く

（こんにちわ、桜井智樹です。突然ですが　　）

そして、そんな智樹の後ろの方にある火燵コタツには新大陸発見部の面々と、恭夜家御一行がわいわいとガヤついている。

（明日からあの新大陸発見部に……毎日顔を出さなくてはならなくなりました）

心なしか智樹の表情はめんどくさそうである

（昨日……新入部員が入ってきたでしょ……？）

そこで少し時間は遡る。

「あの…入部しても良いですか…？」

その言葉を聞いて守形はメガネを片手で持ち上げながら少し考え込

むよつな仕草を取る。

「あの……」

「OKじゃないの？ 守形君部員欲しがってたじゃないの？」

「イヤ……」

それを見て、日和は守形に向かって再び自分が入部をしたいという旨を伝えようと入部届けを胸の前で守形に見えるように構える

そして、会長もまた守形に日和の入部について別にいいのではないかということ聞くのだ。

だが、守形は短く答えると再び自分の思考の中に戻ってしまう

(どうする……こいつの正体はまだ不明な部分が多い……あまり近くにおきすぎるのも危険なのは )

現在、守形の脳内ではシナプスで見た光景が自身の思考を補助するように流れている。

しかし、その思考もある一言によって中断されてしまった

「でもよかったわね。彼女が入れば部費も増えるわ」

「へ？ 部費？」

会長のそんな一言を聞いて智樹は疑問を浮かべたのか会長に聞き返

すよつにそう言ったのだ。

「部員が6人以上になると中規模部活動と認められて……部費が大幅にアップするの」

そこで、守形は智樹と恭夜のほうを見たかと思うと

「入部おめでとう」

「オオイ!!」

突如、日和の手をがっしりと握り締めて先ほどの考えていたすべてが無かったかのように入部届けを受理したのだ

しかし、智樹は突っ込むようにそう声をあげたと思うと小さくため息を吐いてから自分の道具の置いてある方に振り返り、帰る準備をしようとした

「はぁ……まあいいや……じゃ、俺は帰りますんで」

だが

「あら、そういつわけには行かないわ」

「へっ?」

がっしりと会長につかまれた智樹はその足を止めざる終えない

「中規模の部活ともなると監査も厳しくなるの。ほら…だって名簿だけの幽霊部員を増やして部費を取るような不正が起こるでしょう？」

そして、脅迫まがいの笑顔を浮かべながら会長は智樹に向かってこう言ったのだ

「だから桜井くん……これから『毎日』新大陸発見部に顔を出さないダメよ？」

そして時間は現在に戻る。

智樹の後ろではがつがつと桜井家のエンゲル係数を鰻上りにする勢いでイカロスに料理を作らせて食事をしている守形

そしてもう一方ではバケツいっぱいコルク弾を積み上げ、ガトリングのような形状をした機関銃のオモチャ？ や、マシンガンのオモチャ？ と言ったようなものを膝の横に配置しながら手に持った

ハンドガンのオモチャ？ を使って智樹に向かって「ペコーン」という効果音を出しながらコルク弾を放つ会長の姿がある

(何とかしなければ……!!！)

そして智樹は心の中でそう叫ぶのだ。

(毎日新大陸発見部に顔を出すことは毎日この二人に関わるってこと……!! そうなれば俺の平和が崩壊するのは必死!! なんとかっ……!! なんとかしなければっ……!!！)

ぺこんぺこんとコルク弾を頭に受けながら、智樹は思考を繰り広げるのだ

(でもどうやって …… !!？)

それでは、ここらで智樹から恭夜に視線を移してみよう





清純な心？

「……………」

「ん、さっきからだんまり決め込んで智樹のほうなんか見てどうしたんだ風音？」

火燵に座ってそはら、ニンフ、アストレアがそれぞれ話したりくつろいでいる中で智樹のほうを無言で見ている日和の姿を見て、同じように火燵の近くで座布団に座っている恭夜は日和に声を掛けていた

「えー!? は…はいつ!?!?」

「いや、そこまで驚かなくても……………」

「そ、それに…………さ、桜井君の事なんて……………」

「ん、そうか？」

そう言っつて恭夜は少しばかり挙動不審になっている日和を見ながら話を終わらせる。

「ねえねえ風音さんってさ、彼氏とかいないの？」

そして、そのタイミングを見計らっていたかのように会長は日和に

向かってそんな質問を投げかける

「えっ!？」

それに対して日和は過剰なまでの反応を見せ、顔を紅く染め上げながら俯き加減に答えるのだ

「わ、私…そういうの……」

「は…清纯なんだね」

その答えを聞いて、今度はそはらが感心したように言葉を返していた。そして、そはらは多少の毒気を込めながら彼女達よりやや前方にあるちゃぶ台でお茶を啜りながら何かの本を読んでいる智樹に聞こえるように言うのだ

「女の子の前で平気でエッチな本を読んでいる誰かさんとは大違い。恭ちゃんみたいに少しは大人になれないのかな」

「んなっつ……!？」

それを聞いていた智樹はあからさまな反応を見せながら嘸み付くように守形のほうを指差しながら言い返すのだ

「ナンだよっつ!! 俺ばっか攻撃すんなよっ!! ここにもう一

人空美町一の変態がいるだろっ!？」

「はーん、もう一人って……自分が変態だって事は自覚してたのか  
トモ坊」

そこで少し冷たい目で智樹を見ながら恭夜が智樹に向かってそう呟く

「なっ!？ ち、違うぞ……い、今は言葉の使い間違いという奴で

」

「ぶっ……ククク、いやなに……そこまで反応しなくても冗談だって。

まあ、お前が自覚があるってなら悪かったって」

そう言って、さっきの表情とは一遍して恭夜は智樹に笑いながらそ  
ういつのだ。

778

「くそお……恭兄には口論勝てる気がしないんだよなあ」

「そして智樹、さっきの事についてだがそれは違うぞ」

守形は智樹に向かってグライダーの部品を造りながら言うのだ。

「はえ？」

「この秘境など探しつくされた世界に……なお新大陸の存在を信じ  
る純粋な探究心……そう!! それこそが新大陸発見部に必要な『  
清純』な心……!!」

メガネをくいつと持ち上げなおし、守形は続ける

「その部長であるこの俺以上に清純なものなどいやしない……!!」

その瞬間、恭夜だけが守形の後ろに噴火する火山や時化で荒れ狂う海峡の光景が見えたそうなの。

そのせいで少し引き気味の恭夜と初めから圧倒されっぱなしの智樹を除けば、守形の持論を聞いていたその他メンバーは守形に向かってぱちぱちと手を叩いていた

「く、クソウ……」

「ま……アレは仕方ないさ」

そう言って智樹を慰める恭夜だが、智樹はぐずりながら言葉を放つ

「俺だって清純なのに……」

うっうっとうと泣く智樹を見ながら恭夜は無言で背中をさすっている

だが、智樹はそこで何かに気が付いたように日和のほうを見たかと思つと、恭夜と智樹にこっちに来てくれといわんばかりに手招きを行う

「んー、いきなりどうしたんだよトモ坊？」

「どうしたんですかマスター？」

二人は先ほどとは打って変わり、本当にどうしたのだろうかという表情で智樹に尋ねる

「恭夜は俺と一緒に手伝ってくれ、頼む！！」

「いや、別に良いけどよ……」

恭夜が智樹にそう答えると、智樹は救われたというような表情で恭夜の手を掴んでぶんぶん縦に大きく振った。

そうしているところを見ても、恭夜と智樹の互いに依存し在っていないと言つことが判る気がする。

「イカロス、お前はあいつらを絶対にこの部屋から出すな。絶対にだぞ」

「……………」

そう言つとイカロスは無言でこくりと頷いた

「で、俺は具体的になにを手伝えればいいんだ？」

「まあ、恭兄は今何もする事はないんだけどさ」

そういって、智樹は日和に向かって二人にしたのと同じように手招きをする

「風音さん風音さん、こっちこっち」

すると、日和は智樹に気が付き親切な事にも少し顔を紅潮させながらも来てくれた

「あの…なんですか？」

「ま、何も言わずに付いて行ってくれと助かるよ」

そう言って恭夜が風音に微笑むと、日和はよく分かってはいなさうだが

「えっと…その、分かりました」

と言っておとなしくついて行くことになった

そして、智樹、恭夜、日和は二階にある智樹の部屋に向かうのだった。

そして一方、智樹に彼らを部屋から出すなという命令を受けたイカロスは襖の前で静かに立っていた

「さて……トイレトイレ……」

そういつて立ち上がった守形を見てイカロスは襖の前に立ちふさが  
る。

守形は何事かと一瞬考えたが、直に考えるのを放棄し、左右に歩く  
するとイカロスもその動きに合わせてようと左右に動いたために襖に  
額をぶつけてしまい、その場にこけてしまう。

それを見ていたその場の全員が無言でイカロスを眺めながら何かを  
考えていたように見えたのはまた後の話

智樹の部屋に入った日和は今にいたときよりも目を泳がせていた。

それもそのはずだろう。智樹の部屋の壁には露出の高いグラビアのポスターが貼られていたり、本棚に普通の本と一緒にエロ本が混ざっていたりと……

とにかく、この智樹の部屋はそらや恭夜と言った幼馴染以外には少し厳しいものがあるといっておこう。

そして、日和はそれらのものに慣れていくはずもなく、どうしても部屋の中で一人視線を泳がせてしまうのだ

「なあトモ坊？」

「あ、ちよつと待ってくれ…今探し物が……」

そして恭夜はと言うと、智樹の行動を見ても未だに解決しない手伝いの内容を考えているがやはり何もわからないので智樹に声を掛けてみる。

だが、智樹は押入れの中に頭を突っ込んでダンボールか何かをこそごそとあさっていてまともな返事は返ってこない

「はあ、別に良いんだけどさ」

「あ、あのっ、絃城さん聞いてもいいですか？」

そして、日和はその空気に耐えられなくなったのか少し慌てたかのような顔をしながら恭夜に話しかけた



「ん、どうしたんだ風音？」

「桜井君は一体なにを」

「分からん…俺も手伝えって呼ばれただけだしさ。それといい忘れてたけど恭夜で良いよ。苗字はあんまり好きじゃないんだ」

日和の質問を最後まで聞くことなく恭夜はおそらく聞かれたであろう質問に答える。それと同時に苗字ではなく名前で呼んで欲しいという事も伝えた。

恐ろしく手際のいいことだった。

「あの、苗字が好きじゃないってのはどうし」

「……聞いているかね風音君？」

「あ……す、すみませんっ！」

そして、今度は苗字を呼ばれる事が嫌いだという恭夜の発言の意味を聞こうとした日和だったが、先ほどまで何かを探していた智樹に声を掛けられたために反射的に謝ってしまったようだ

「それではコレより君の入部試験を行う」

「入部…テスト…？」「何だそりゃ…初耳だぞ？」

という二人の声を聞いて智樹は答えるように言い始める

「さつき守形部長が言ってたたる…？ 新大陸発見部には清纯な心が必要だと すなわち 君がどれだけ『清纯』なものを愛せるかテストさせてもらう…」

「清纯なものを愛する…？」

「そう」

そこで、その会話を日和と一緒に話を聞いていた恭夜は漸く智樹の『手伝ってくれ』という言葉の意味を悟った

(はぁ…要するに日和がこの部に入らないで欲しいってことか。俺は部活に入っていないからどうこう言いつもりはないけどさ…)

そんなことを恭夜が頭の中で思っている最中にも話は進んでいる

「コレだっ！！」

「~~~~~っ！！？」

智樹がダンボールの中から取り出したのは純白のパンツ。

それを見た日和は顔を真っ赤に染め上げながら口元を押さえ、声にならない声を上げていた

(それはどうかと思うぞトモ坊…)

その光景を日和とはまったく違った呆れたような顔をしながら、恭

夜は智樹の顔をジト目で見ているのだ

だが、智樹はその恭夜の顔をまったく意に介さずに話を続ける

「あ…あの、これが清純？」

「ハア！？ 何を言っているんだねチミは」

そう言って手に持ったパンツを上に掲げてどこぞのジーンズ屋の元帥のように言うのだ

「見よ…！ この白さ…！ コレが清純以外のなんだというのか…

…！！ 君も清純を愛しているというのなら」

そう言って掲げたパンツをゆらりと下ろしたかと思うと……

「ごうっ！」と言ってパンツに顔を埋めたりだとか、頭からパンツを被ったりだとか、匂いを咬んでみたりだとか……

とにかく変態のするようなことをして日和の入部を阻止しようとしている

（確かに……そんなことをすれば10人中8人位はドン引きしてくれるだろうけどさ……お前の事をよく知っている俺でも流石に引くぞ）

そんな恭夜の内心を知らない智樹は続けざまに言った

「さあ、新大陸発見部に入部したいのならばやってみなさい!!」  
「……」

パンツを手渡された日和はそれを恥ずかしそうに眺めながら顔を赤らめる

（まあ、どうせ　　どうだできまい？　　そう俺の作戦は無理難題を吹っかけコイツに入部を諦めさせる事!!　　コイツが入部しなければ俺は悠々自適幽霊部員に戻り遊ぶ事ができる。さあどうだ、これはできまい　　とか思ってるんだろっなあ）

と、恭夜は考えながら智樹の眼を見る。

恭夜は読心術を使えるわけではないが、ある程度の考えなら見抜くことの出来る技能を持っている。そして、恭夜が智樹の目を見て考えた結果は

（どうやら中的ようだな……で、肝心の風音というと　　何っ！？）

その当の本人である日和は渡されたパンツと智樹の顔を数度見たかと思うと、決心を決めたかのようにパンツに顔を埋めたのだ。

それを見た智樹は『ナ、ナンダッテ』というような顔をしながら日和の事を見ている。そしてまた、恭夜はというと同じようにはいえながそれなりに驚いていた。

その驚きの内容に若干の違いはあるのだが……

まあ、心の声を見てもらえば一目瞭然だろう

智樹（ナニイイイ！！　しよ、正気が貴様アアアアツ！！  
？）

恭夜（そ、そこまでしてこんな部活に入りたいって………どういう  
こったい！？）

とりあえず、恭夜はともかく智樹に言う事があるとすれば『お前も  
な』と言ってやりたい。

「あ、あの………コレで…入部………」

「まッ…まだまだあ！！　全然足りん！！」

「え……？」

智樹に返された言葉を聞いて日和は一瞬悲しそうな顔になる。そこで恭夜はどうして日和がこの部活に入りたいのかが分かった気がした。

だが、そんな気がしたは直に確信に変わった。何故なら

「ついて来いっ！！　つ、次のテストだ！！」

そう言っつて智樹が日和の手を掴んだ瞬間に、日和の顔が嬉しそうに

なつたのだから

(はあ…俺もお前も本当に下手だよなあ。なあ、トモ坊)

そして恭夜も走り出した智樹の後ろをしつかりと追いかけて走る。

まず初めに智樹が日和にさせたことは女湯を高所から覗かせる事だった。だが、日和は健気にも遂行する。

ちなみに高所まで行くのに危ないと思つた恭夜が補助用の見えない壁を造つたのは誰も知らないし教えるつもりも無いようだ。

次に智樹は白いスク水を持ってきて日和に渡した。が、日和は恥じらいながらもそれを着て智樹に姿を見せた。

ちなみに余りにも彼女の姿を他人に見せるのが忍びないと思つた恭夜が認識障害の結界を張つて、その空間だけを他所から隔離していたのは誰も知らないし教えるつもりはないようだ

他にもいろいろと手を尽くした智樹(恭夜)だったが結局日和は最後まで智樹の言う事を聞き通した。

そのおかげもあつてか智樹は最後の砦であろう店に入った。その店の名前は『回転寿司・人生堂々巡り』

智樹、日和、恭夜の順にカウンター席に座る。

ゴウンゴウンという回転寿司で聞こえる音を耳にしながら、智樹はつかれきって憔悴している

(はあ…今日は無駄に魔力使った気がするよ……………にしてもだ、何でここが最後なんだ?)

そんなことを思いながら恭夜は智樹のほうを見ると、日和も同じことを思っていたのか智樹に向かって声をかけようとしていた

「あの……………」

そう日和が尋ねようとした瞬間、智樹は指をパチンと弾くと

「大将…いつものやつを……………」

そういったのだ。

おそらく智樹の指す大将であろう人物が『ハイ』と答えると、寿司が流れている場所から一っだけ目を疑うものが流れてきた

それを見た日和は顔を赤らめた

「さあ…コレが最後のテストだ」

「……………えっ!?!」

流れてきたものは

シャリの上にパンツが載った寿司

だった。

（あー……これは予想外だった……最初のネタをここで使ってくるなんて……）

恭夜はそこで考えるのを完全にやめた。どうしようもなく馬鹿らしくなってしまうから

「白い皿、白いシャリ、白いパンツ……コレこそ清纯の極み……相変わらずいい仕事をしていますな……」  
「へいっ！！ ありがとうございます」

その呟きに大将が答えた後、智樹は日和に声をかけた

「どうしたのかね……食べないのかね？」



そういう智樹だが、内心では冷や汗をたらたらと流している

(さあ…いくらなんでもこれは無理だろう…頼む、もう言ってくれ。新大陸発見部の入部やめますって言ってくれ！)

だが、日和は手をプルプルと震わせながらも箸を使って智樹の用意した寿司(セクハラ寿司)を口に運ぶ

そして、口に入れようとした瞬間

(無理!!)

智樹は目から涙を流しながら日和の箸に掴まれていた寿司を自分の持った箸で奪い取り口に放り込んだ。

(もう無理…無理だよ…こんなにいい子だまくらかして…世界中にわびたい気持ちだよ…!!)

「？」

(ていうかアンタどれだけ清纯なんだよ!! 見ているこっちが恥ずかしくて生きているの辛くなるよ…!!)

そこで智樹は溜息をつくど、諦めたかのように言うのだ

「はあ……大体風音さあー…なんで新大陸発見部に入りたいと思っ  
たわけ…？」

「え…？」

「どう考えたって変なところじゃん…なあ、恭兄」

「ん、ああ。確かに変な場所だとは思っよ」

何処か恭夜が上の空で智樹の問いに答えると、日和が答えた

「そ、それは…そのー」

一瞬日和が智樹の顔を見て顔をそらす

「いろいろあるんですけど…なんかロマンチックじゃないですか  
…さつき部長さんが言っていたように、この秘境なんて探しつく  
された世界に新大陸があるなんて…」

それを言う日和の表情はどごその一枚の絵画のように智樹の目には  
映った。

それと同時に恭夜は何かの気配を感じたのか湯飲みにも簡易の茶葉を  
入れた後にお湯を注ぎ、ずずすと啜り、呟いた

「トモ坊…口は災いの元だぞ」

「へっ…？それがどうしたって言うんだよ？」

「ま、身をもって知ると良いよ。」  
「？」

そんな一連の会話の後に、智樹は日和に向かって話しかける

「でも、アレですよ？ 新大陸発見部にはアイツらがいるんですよ？」  
「？」  
「ほう……それはどんなやつらだ？」

智樹はどこからともなく聞こえてきた声に正直に答える

「そりゃあ空飛ぶ変態に、人をおもちやにすることしか考えていない悪魔。殺人チヨップ女に未確認生物」

そして、答えきった瞬間に智樹は固まる。

何故なら、智樹の後ろからはどこぞのスタ ド顔負けの『ゴゴゴゴッ』という音が聞こえた気がしたからだ。

もちろん、実際にはそんな音はしていないのだが……

「……………イカロスから、大体の話は聞いた……………お前の行動もほぼすべて見ていた……………途中で何者かの力のせいで見る事ができない部分もあつたがな……………」

そこで後ろにいる全ての人間の顔を見てしまった智樹は、ぎこちな  
い動きで席から立ち上がると言い訳のようなことも一言も言わずに  
その場を後にしようとした……

「だから言ったじゃねえか……口は災いの元だつてさ」

が、すべてが遅すぎた

「まあ待て、折角だから俺達の『清純』も味わっていけ」

そして、守形が手に持っていたものを智樹の口目掛けて発射した

白い石鹼の握り！！

「づぶうつ！？」

そして、それに続くように今度は会長が手に持っていたものを智樹  
の知り目掛けて発射する

白色電球！！

「ぐはあっ!?!」

口からは石鹼のせいで泡がぶくぶくと吹き出し、尻に刺さった電球は電源も無いのに何故かピカピカと光っている

「親父、トロの握り一丁よろしく」

「へ、へい。トロの握り一丁承りました!」

それを横目に恭夜は何事も起きていないように寿司を注文している。そんな恭夜を見て日和は遠慮しがちにだが尋ねる

「あ、あの…良いんですか?」

「ん、なにが?」

出来上がったトロの握りを受け取りながら日和に聞き返す恭夜。

「さ、桜井君……です」

「ま…俺はちゃんと言ってやったし、いいんじゃないか?」

「え、えっ?」

だが、日和には恭夜の言葉の意味がいまいち伝わっていないようだ。だから取り乱すし、呆然としてしまう

そんな合間にも智樹はそはらの『真っ白な空手着』……清純突きを  
受け取りボコボコにのされていく

「分かりやすく言うならば、日常ってこった」

口に入れた寿司をお茶で流し込みながら、恭夜は日和に向かってそ  
ういうのだった。

そして、智樹の処分を終えた全員が恭夜と同じように寿司を注文し、  
食事を始める

「まあ、とにかく新大陸発見部入部おめでとう。歓迎する」

そして、守形が日和に向かってそういったのだ。

だが、日和が見つめる先は違つところ

「ねえ、日和ちゃんって呼んでいい？」

「しめさば、しめさばおかわりっ!!」

そはらがそう尋ねてもやはり見ている場所は違つところ。アストレ  
アに至っては純粹に食事を楽しんでいる

さて、日和がどこを見ていたかというところ……寿司の流れるベルト

の上、しかも端っこで壁にぐっぐつと頭を打ち付けられている智樹を見ていた。

その表情は大丈夫だろうかや、心配だなあといった表情である。

その表情に気が付いた恭夜はそれ以上言うまいと思っていたが、余りにもその表情が不安そうだったので日和に向かって言葉を放った。

「まあ、心配するなって。確かに見た感じは重症だけどあくまで見た感じだけだからさ」

「あの…なんでそう思える」

「何でって、コレでも手加減してるな」

「えっ!？」

そんな日和の驚きの声を聞きながら恭夜は確かに笑うのだった

こうして風音日和は新大陸発見部の部員となり、智樹の言う平和って言うやつは完全に奪われたんじゃないかって俺は思ってる

あ

そうそう、そういえばこんな事があったな。

それは2月14日、俗に言うバレンタインだった。俺はいつものように名前無しのチョコがいっぱい入ってる靴箱から靴だけを取り出し守形先輩に渡した。

まあ、別にそれはいいとして……

「ちくしょーっ！！ 昔から恭夜だけはチョコ貰いやがって……忌々しい、忌々しいぜ」

「いや、お前だつて入ってるかもしんだろ？」

「へーへー、どうせ俺には関係ないですよーだっ！！」

そんな会話をしながら智樹が自分の下駄箱を開けたんだ。

そしたら



「……奇怪な……」

「誰かが間違えて入れたんじゃないんですか……?」

智樹の下駄箱に綺麗にラッピングのされた箱が入ってたんだ。

そらは少し怒り気味に、先輩は素でそう呟いていた

「で、差出人は誰なんだトモ坊?」

「え……ああ。えっと……って、名前がねえっ!?!」

「やっぱり!! 差出人の名前が無いって事は間違いなんだよ!!」

「ウルセー!! そうならなおさら今すぐ間食してやる!!」

そう言つてトモ坊がラッピングをはいで中身に手をかけようとしたとき、その動きがピタリと止まったんだよ

それで俺は何事かなあって思いながらトモ坊の手のなかにあるそれを見たんだ

「……なんだ……これ?」

「ホワイトチョコか……バレンタインなの?」

結局、差出人は分からなかったけど俺には予想がついている。だって、俺が見る限りアイツは間違いなくトモ坊に好意を持っている。

けど、それは言わないでおこう。

人の恋路を邪魔するのは野暮ってもんだろ？

清純な心？（後書き）

どうも久しぶりというほどではありませんが作者の絃城恭介です。

今回の話は結構原作忠実ではないのだろうかと思っています。所々恭夜のシーンを入れているために若干の違和感を感じましたらそれは私の力不足ですorz

そして、この小説の今までのどのシリアスパートよりも執筆するのが難しく、未だに完成が見えていません。

何より作者的にもこの日和編というのは大変気に入っているので、あの原作のよさを残し、なおかつ主人公チートなんて走らないようにしなければなりませんし……そもそもこの主人公はチート設定ではないし

強さ的に言えばギリギリのところまでハーピー二体から時間を稼ぐくらいしか出来ませんし……まあ、人間のレベルでは物凄いですけどね（汗

とりあえず長くなりましたがここまで読んでいただきありがとうございます。ございました。

余談ですが私、絃城恭夜はツイッターなるものを始めました

名前は固定ではありませんが今のところはここの名前と同じです。

ツイッターでも更新予告などをする予定なので、よかったら検索してみてください

それでは、次回までサヨウナラです

## ある日の日和（前書き）

とある日の朝。

空美町にある多くの畑のうちの一つで、雑草をむしっている少女の姿があった。畑仕事をしているためにその手は泥や土で汚れてしまつてはいるが、肌に荒れ等はなく綺麗な肌をしている

（私の名前は風音日和です）

少女は畑仕事で一区切り付いたのか、ふうと息を吐き出す

（2年前、両親が相次いで他界しました。それから毎朝、両親が残してくれた畑の世話をし、弟達に朝ごはんとお弁当を作つて

ようやく自分が登校します）

そして、舗装された道の方から少女と同じ年齢ほどの女の子たちが歩いてくると、少女は自分の顔を隠すように農作物の方に身体を向けて地面を見つめてしまう

（辛いと思つた事はありませんが、一つだけ困つた事があります）

女の子たちがその場から遠ざかると少女は胸をなでおろす

（だつてこんな泥だらけの姿……人に見られては恥ずかしいですし  
）

そして、畑仕事を終わった少女は手や顔についてしまった泥や土を水で洗い流し、制服に着替えなおす

その後に、いつもの通学路を歩いて学校に登校するのだ

（ましてや　　）

「あつ、オイ！！　トモ坊、ちゃんと下を見て歩けつて！！」

「大丈夫大丈夫　　ハアツ！？」

そして、少女は何かに気が付いたのか別の場所に視線を移す

（好きな人には、とても見せられません）

「あーあ、だから言ったじゃんかよ……ん？　おつ、おはよう日和」

「あ、あの……一体なにが？」

そこには少女の好きな少年と、少年が兄の様に慕っている少年がいた。

「まあ、見た通りなんだけど……簡単に説明するなら、風に飛ばされたブラを追っかけて前方不注意になったところで　　こつ…

……」

「恭兄……助けてくれないのか？」

「……………」

（今、私の質問に答えてくれた人は絃城恭夜くん。学校では話しかけにくいと女の子の間ではちょっと有名な人です。そして、現在悲惨な目にあっているのは桜井智樹くん。ちょっとエッチだから学校中の女の子から嫌われてる人）

だが、少女の少年をみる目は優しいものだった

（でも……毎日をいつも楽しそうに生きている　　私の……好きな人……）

そして、二人の少年の姿を見た少女はもう一度小さく微笑むとその後ろを歩き始める

（私の名前は風音日和です）

朝日は三人を照らすようにさんさんと輝いていた。





## ある日の日和

六時間目終了のチャイムが校内に鳴り響き、今日一日の授業を終えた生徒達は帰りのSHRを適当に聞き流し、帰宅の準備をする。

そんな中、日和はつい先日入部したばかりの新大陸発見部の部室に足を運んだのだが……

部室の中では智樹を頂点に、非常に高い三角形が形成されていた。唯一人、ドアの横に立つ恭夜を除いてだが

「あの……?」

その光景を見た日和はいまいち状況が理解できずにすぐ近くに居た恭夜に日和は尋ねてみるが、恭夜が答える前に会長、美香子が質問に答えるように言うのだ

「そりゃ、頭の上に『肥』乗つけたまま学校に来ちゃねえ……」

もつとも、それを言いながら鼻を摘み消臭スプレーを部室に撒く會長の目はいつもと変わらないものだが

「そ、そんな事いっちゃかわいそうですよ会長……おかげでトモちゃん……今日一日、学校中からハブにされて」

そういうそはらだが、美香子と同じように鼻を摘んでいるので説得力の欠片もない。

「はあ、自業自得って言っちゃ可哀想だけど……コレばかりは俺にもどうしようもなくてさ……」

そして、何処か遠くを眺めながらそういう恭夜の顔には悲壮感が漂っていた。

一連の会話に一区切りがつくと、智樹はそはらに向かって一歩近づいてみる。だが、そはらは身体をビクッと反応させ、後ずさりをしてしまう。

「……………」

「……………あつ、いや」

無言で床を見つめている智樹を見て、そはらは言い訳のように言葉を発する

「ち、違っただよトモちゃん？　今のは」

「いいんですよ……………」

そこで、智樹はそはらの言葉を遮って言い始める。

「自分が嫌われ者つくらい……分かってましたよ……」

そして、そついい終わると智樹は部室のドアの方に歩いていく

「帰りますわ……」

「……気をつけるよ」

そして、ドアの横に立っていた恭夜がドアを開く

「あっ……」

それを見て日和は声をかけようとするが、そはらとイカロスの声によって掻き消されてしまう

「じゃ……じゃあ私も」

「マスター……私も……」

その時、智樹から呻くように声が聞こえた

「う……せ………」

その咳きを完全に聞き取る事ができなかったそはらたちは一斉に『えっ』と聞き返す。しかし、智樹の身体がわなわなと震えだしたかと思うと智樹は叫んでいた

「ウルセー……ッッ!!」

瞬間、部室の時間が止まった。

「ナンだよ、汚いものを見るような目しやがって!! 俺はこれから一人で生きていくんだ!! ウワアアアアア!!」

だが、その場の全員が見ている場所は智樹の頭の上だ。

それに気が付かぬままに智樹はドアを跨いで走り出したと思うと、乱雑のドアを閉じてどこかに走り去ってしまった。

バンツと音を鳴らして閉じられたドアによって数秒の間静寂が訪れたが、それも守形の声によってなかった事にされる

「さて…部会でもするか」

「そっね〜」

だが、そんななかで唯一人真剣に智樹を心配するものが居たのも事実である

(どうしよう……桜井君……とても傷ついてる……！)

まあ、いつもの事だと思いますがね。

「お願いニンフさん……リーダーで桜井君を探してくださいっ！」

「えっ？」

そこで突然お願いされたニンフは少し驚きながらもお菓子を食べる手を止めた

「だって、あんなに傷ついてて……もし自殺とか考えちゃったら

「……それはないと思うけど……ま、いっか……」

呆然としながらも、ニンフはリーダーを起動し近辺情報を確認する。

「居たわよー、学校の裏山……って」

瞬間、ニンフの顔が真面目なものに変わる

「えっ!?!」

「どうしたんだニンフ?」

「ちょっと待ってキョウヤ……魔術なんて使っていないわよね?」

ニンフは恭夜に少し焦りながら尋ねる

「お、おい。日和が居るのに不用意に魔術とか　　って、それに魔術は必要な時意外使わない」

「って事はジャミング!?　ううんそんなはずは　　」

そこで、今まで冷静だった守形がいつものようにメガネを直しつつ言った

「我々は自体を甘く見すぎていたようだ……」

「守形先輩?!?!」

「どうせいつもの事だろうとタカを括ってはいしたが　　間違い

なく、今の智樹は普通の状態ではない……そして、智樹の身に

何かが起きている……!!　裏山に行くぞ……!!」

(まさか…桜井くん……早まらないで。早まらないで　　)

急遽、智樹の異変を察知した新大陸発見部のメンバーと一緒に行動をしていた恭夜だが、目の前の光景に再び頭を悩ます

「……と、智樹が

「……」

何故なら、そこには……ミニ智樹溢れていたのだから

「ああ……ホントにいつぱいだな」

そう恭夜が呟くと、そらは現在起きている状況に頭が追いつけずに智樹に声をかける

「……………トモちゃん……?」

その声に智樹はピクリと反応を見せたかと思うと話し始める

「お前らは……所詮他人だ……」

「えっ……?」

その言葉を聞いたそはらは足を止めてしまっ

「この世で自分を慰められるのは自分だけなんじゃーい！！ だからカードで完コピ人形『ともきち』を造って慰めてもらってたんじやー！！ 文句あるかーッッ！！」

その瞬間、そこに居た全員がほぼ同時に思った

(いや…別に文句はありませんが…)

「もっつ……帰るよトモチちゃん！！」

「嫌だ嫌だ！！ 俺は此処でともきちと暮らすんだー！！」

そう叫んだ時だった。智樹の身体(全裸)に誰かの上着が掛けられたのだ

「風邪…ひいてしまいますよ?」

だが、余りにもリアルに心配されてしまったためにどう返していいのかわからずに智樹はその場で固まってしまっ。

だが、すぐに何かを思い出したのか日和に向かって叫ぶのだ

「危ないっ、風音ーッッ！！」



「えっ？」

智樹の視線の方向を見た日和。そこには日和のパンツを下から覗くともきちの姿があった

「きゃ…きゃあああああつ!?!」

それに気が付いた日和はスカートのすそを押さえ、顔を赤面させて地面にしゃがみこんでしまう

「マズイッツ!!」

そついう智樹の手につかまれているともきはホカホカしだしたかと思うと、おもむろに呟いた

「パンツイイ」

それを聞いた智樹は額に汗を垂らしながら、全員に聞こえるように叫ぶ

「くっ…しまった…みんな逃げろオオオオ!!」

『えっ?』

その瞬間だった。ともきちが自由気ままに動き出したかと思うと、女性の身体を狙って動き回り、捕まえた女体をその小さな手で揉み始め、舐め、服の中に潜り込む

その場に居た女性陣は全員ともきちの魔手に犯されていく

「どういうことだ智樹!？」

「ともきちは……俺の完コピ人形。だけど理性だけはコピーできなかったんだ!! だから人気のない森の中で造ったのに!!」

そんななかでも会長だけはともきちに反撃を試みるが上手くいかないようで苦戦している

「英くん!! こいつ等ふにゃふにゃしてて攻撃が聞かない!!」

「何か…何か弱点はないのか!？」

「弱点はあるっ!! 俺だけが知っているともきちの弱点は

」

『ここだ!!』』といいながら、男の子にとってはどんな人間だろうと明確な急所である部分を蹴り上げる。

すると、ともきちはがくがくと痙攣を初めたかと思うと白い煙となつて消えてしまった。そして、その場に蹲った智樹

「ともきちが消えた……」  
「でも…どうして桜井くんまで……?」  
「シンクロ率が高すぎたんだ……」  
『シンクロ率?!?』

いつの間にか解説を始めた守形の声に、全員が耳を傾ける

「ともきちが智樹の完コピ人形……だが、あまりにもシンクロ率が高すぎて…ともきちの股間のダメージがそのまま智樹に伝わるんだ……!」

それを聞いたそはらと日和は驚愕の表情になる

「そんなんっ……」  
「それじゃあともきちを攻撃したら桜井くんが……!」  
「いいんだ……」

二人の心配そうな声を遮って、智樹はそういう。

「いいんだ…やってくれ……」  
「でもっ!」  
「やってくれ……」

股間を必死に押さえながらそういう智樹の顔は、死地に赴く勇敢な兵士を思わせるものだった。

それをみてしまった日和は『出来ない』といえずに、涙を流しながらそれに従った

「さて…弱点もわかった事だしやりますか」

「あれ…？ どうしてそんなにやる気なのキョウヤ？」

「どうしてですかマスター？」

「そんなの決まってるだろニンフ、ガイア…楽にしてやるためだよ」

なぜかニンフとガイアはその一言に形容しがたい恐怖を覚えた。

そこから作業は早かった。イカロスは『永久追尾空対空弾「Artemis」』（アルテミス）で次々ともきちを抹殺し、ニンフは『超々超音波振動子「パラダイスIIソング」』で一体一体確実に潰し、恭夜はゴム手袋をつけた手で茸をもぎ取るような手つきで意気消沈させていく。

そのたびに智樹本体は吐血をしながら身体を痙攣させ、傷ついている。

そして、最後の一体を会長が捕まえ日和に差し出す。

「さあ、最後の一匹よ風音さん…！」

「えっ……!!」

「桜井くんを……楽しんであげて……」

そう言つて、会長は幾人ものともきちを抹殺してきた血濡れのバットを日和に手渡す。

そして、日和は数秒の間目に涙を溜めて考え抜いた結果……その手に持ったバットを高く頭上に振り上げ

すいか割りの如くの勢いでバットを振り下ろした

それは、ある日の日和に起きた悲しい出来事だった

そんなわけで、昨日の智樹は大変だった。精神的にも、肉体的にも……  
そして、今日も朝早くから農作業に勤しんでいる日和は泥や土で汚れている。

（ああ……また泥だらけになっちゃった……）

そう思いながらも日和は熱心に畑に生えた雑草をとる作業を続ける

（もしこんな姿、桜井くんに見られたら……）

「あ、あれヒヨリじゃない？」

そんな声に反応して、日和は道路の方に顔を向ける

そこには私服姿の智樹、恭夜、イカロス、ニンフ、ガイアが並んで歩いていて。そこで日和と智樹の目が合ってしまった

（どうしよう…桜井くんに見られたっ！！ きっ…嫌われちゃうっ  
…！）

「お、見ろよ恭兄！！ このグリーンピース美味そうだぜ」

「ん、そうだな…じゃあ今日はトモ坊の家でグリーンピースご飯でも振舞ってもらうかな」

「おっ、それ良いな。風音、このグリーンピースお前が育ててんの？ よかったらもらってもいいか？ 風音も来るだろ？」

(ああ……やっぱり私は )

「あ……でも、もらっても大丈夫？」

「あー、確かに……もらっても大丈夫だったか日和？」

(桜井くんが好きなのです)

「桜井くん……」

それは、今まで日和にとってコンプレックスであった部分だ。だが、智樹はそんなことすら気にしていないという風にいつものように話しかけてくれた。

ありのままの自分を受け入れてもらえた。

それだけの事実は日和の心を動かした。

「私……あなたの事が好きです……」

瞬間、智樹とイカロスの目が見開かれた。

そして、そこに居た全員の声が一斉に重なった。

『え…？』

「ここから物語は急加速を始めていく。」

それは、誰にも予想のつかないほうに向かって



## ある日の日和（後書き）

どうもお久しぶりです、作者の絃城恭介です。

今回の話は原作と特に変化なしでしたね。ただ、本来ならこの一話前にあるはずの『36・疑惑』の話がない理由としては、本来あるはずのニンフのフラグを恭夜が根こそぎ持っていた為にルート自体が消滅しました

それ以外にもアストレアの気持ちも恭夜の出現によって智樹が7割、恭夜に3割と言った具合に気持ちが変わっているのがルート回収ならず……そういう設定になっています

そちらは智樹に対する思いのほうが大きいため恭夜ルートの対象には入っていません。

ガイアはまた別の設定で使用不可

えーと、本当のアトガキはここまでで、ここからは作者の世間話になります

私、絃城恭介は7月25日に横浜に出現する予定です。その理由は、企業見学（就職予定先）に逝かなければいけないからです。

横浜に詳しい人とかいますかね………小説に関係なく完全に私情ですけどね

ま、ここまで読んでくれてありがとうございます。

ここで一つ選択肢を取りたいと思います。

1、EX編（閑話シリーズ）を人間の日和がいる間に次回に挟んでみる。時間軸は現在よりちょっと前。

2、そんなものはどうでも良いからとつと話を進めやがれ

以上の二つです。1を選択した場合は三月初旬の雪が解け切ったある日の事でやってほしい内容を記述していただければ嬉しいです。

2は、この作品を楽しんで読んでもらっていると受け取らせていただきますのでよろしくお願いします

それではまだ決まってすらいない次回をお楽しみにノシ

itosirokyosukで、ツイッター検索すればおそらく絃城恭介で出てきます。

よかつたらどつぞ

## 忘却の詩（前書き）

忘却の録音は誰がしている事なのか？

それは誰の意思のものではなく、自分自身の意識が無意識に自分を、そして他人を傷つかせないように行う事。

悲しみの連鎖は止まらない。絶望の連鎖は止められない。

悠久の時は傷を癒してはくれない。それはただ、傷の痛みを停滞させているだけ。

忘れる事ができるのなら、それは心が弱かった自分が傷つかないようにしているだけ。

ならば俺は自身の存在の消滅を忘却という名目で消し去ってしまう事ができるだろうか。誰の記憶にも残る事のない事を良しと出来るだろうか？

それは否

覚えていて欲しい。忘れないで欲しい。記憶の片隅にでも良いから覚えていて欲しい。

忘れられる事は『そこ』に居たという証を剥奪される事。それは存在の否定に他ならない。

その結果、アイツが悲しみの果てに考えた最善の方法は『忘れた』という事にする事。

他の誰かが悲しまないように自分を偽る事。だけど、そんな風に覚えていてくれる人が居るだけでもう、俺は安心して最後の役目を果たせる。

だから存在の忘却だけは避けなければならない

それが俺に出来る唯一の『絆』の証明だから。

## 忘却の詩

絃城家には絃城恭夜と桜井智樹がリビングで意味もなくテレビの電源をつけながら話しをしていた。現在の絃城家にはニンフとガイアの姿はない。彼女らは今日、恭夜に桜井家に行くように言われたためだ。

何故このような状況になってしまったかというと、それは昨日の出来事にある。

『桜井くん…私…あなたの事が好きです』

それは日和から智樹に対して言われた言葉。智樹はこの十五年そのらの人生で一度もモテた事がなく、日和からの告白にかなり動揺しているのだ。

「いや、恭兄……実は俺達全員が白昼夢を見ていたのかもしれない。だから俺を」

「寝ぼけた事言っただけじゃねーよ」

テレビから聞こえてくるバラエティ番組から笑い声が聞こえてくる。

「そもそも、あの時には俺以外にもニンフもイカロスも聞いてるんだ。とにかく、お前は日和の事をどう思ってたんだよ？ それによつて対応も変わってくる。好きなのか、嫌いなのか……どうなんだよ？」

自分の意見を封殺された挙句、選択肢は好きか嫌いかの二択と来た。智樹はそのために口を噤んでしまう。

そもそものところ恭夜はやっぱりかと言ったふうであり、結論から言えばこの件に関しては口を出すつもりはなかったようだ。それならばどうして、こうして智樹と会話をしているかといわれれば理由もない。

親友からの相談を無碍にもするわけにもいかない。ただそれだけの理由ともいえないものだ。

「どうしても答えないとダメか……？」  
「……………」

その数秒の無言を肯定と受け取ったのか、智樹はすつと息を吐き出したかと思うと再びゆっくりと息を吸いなおし答えた

「好きか嫌いかで言われれば嫌いじゃないよ……」

「どうせお前の事だ、自分じゃ相手に釣り合わないか思ってる？」

「うぐ……ははは、やっぱり恭兄にはお見通しって訳か」

恭夜から遠慮もなく言われた言葉が凶星だったのか智樹は力なくテーブルの上に手を置く。それを聞いていた恭夜は明らかに表情を不機嫌なものへと変えていく

自身を過小評価し、他人を過大評価する智樹を見て。

だが、智樹はそれにすら気付かぬままに話を続けていく

「だって……俺って誰かに好意を寄せられる人間じゃ

「それはお前が決める事じゃねえだろ」

そして、智樹が最後まで言い切る前に恭夜は智樹の右頬を思いつきり平手打ちにした。智樹は何が起きているのか理解できずに叩かれた右頬を押さえながら恭夜の顔を見る。

「っえ」

「それは相手に対する侮辱って奴だろうが……俺は少なくともお前をそんな風には見てないし、日和はお前の事を好きだって言ったんだ。あとはお前の勝手な理由なんて関係ない、大事なのは自分の感情だろう」



何が恭夜にここまで言わせているのかは恭夜自身も分かっていないし、智樹にだって初めて見る恭夜の側面であった。

それだけに恭夜は自分の抑えられなくなった感情を整理し、冷静さを取り戻していくように自分を落ち着かせていく

（俺は何を言ってる……最近は大変な事ばかりか口走るな……何かの夢の影響か？）

「わりいトモ坊……でも、一つだけ約束しろ。どんな結果になっても後悔するような選択肢だけは取るな。逃げるための選択肢だったら俺はお前を許さないからな」

それは、恭夜自身が歩んできた15年そこの人生で学んだ大きなこと。悠久の時は傷を癒してはくれない。それはただ、傷の痛みを停滞させているだけ。

それを恭夜は智樹に知って欲しくはないのだろう。

それを知ってしまったえば間違いなく桜井智樹と言う人間は自責の念に潰されてしまっただろうから。

「そうだな……よな。俺はきつとき、今が楽しいから今を壊したくないって思ったんだよ……もし、言葉にして伝えたら今が壊れそうだし……だからいつも正しい恭兄に答えを聞きに来たんだ。」

下を見ながら恭夜に向かって吐き出すように言う智樹。彼はいつものように平和が一番だと言っているが、こういった『非』『日常の溢れる世界も満更でもないらしい。』

だからこそ、逃げ道を探してしまった智樹なのだろう。だが、答えなど恭夜は持つておらず、本当の答えなんてものは初めから智樹の中に在ったのだ。

「けど…最初から分かってたんだ。だけど、この思いを言葉にしたら『今』が壊れちまう気がしてさ」

そして、顔を上げて智樹は恭夜に向かって笑顔を作る。

「ま、その様子なら大丈夫そうだな。俺も付いて行ってやるうか？」  
「それじゃあ風音に悪いだろ？ それに折角覚悟を決めたのに恭兄がいたらその覚悟も揺らいじまうよ」

「そうか…まあ、俺はどんな結果になっても気にしないさ。けど、自分で後悔する様な事だけはするなよ」

「分かってるって。じゃあ、そろそろ時間も時間だし行って来るよ」  
そう言って、智樹は椅子から立ち上がると玄関の方に歩いていってしまふ。

玄関のドアがガチャリと音を鳴らして開かれ、ガチャンという閉じ

る音が聞こえたのを確認して、恭夜は呟いた。

「お前が本当に好きなのは

なんだろう……トモ坊？」

その頃の桜井家ではエンジエロイド達が話をしている。その話の内容は風音日和についてだった。

「ねえ、アルファー。トモキ、ヒヨリと付き合うのかしら？」

「……………」

そうニンプに尋ねられたイカロスは、一瞬頭で考えたかと思うと何か思ったのか口を開く

「付き合っつて…何？」

「あはは…そうよね、でも……………」

「イカロス、付き合っつて言うのは好きな人と一緒にいるって事…  
…であってると思っわ」

ニンフが言葉を濁したのをみて、ガイアがイカロスに説明をするが自身がないようだ。だが、ニンフはそれに構わずに続ける

「でも、正直な話……ヒヨリと付き合うのはよくないわ……」

「……え？」

「……そうね」

ニンフの表情は何か辛いことを言わなければならないという事で少し辛そうである。イカロスはこの時点でいまいち内用を理解していないために頭の上に？マークを浮かべている。

ガイアはニンフの言いたいことを理解したのか同意するように呟く

「オメガは気が付いたみたいだし……アルファも分かってるんでしょう……だって…地上にヒヨリは」

そこまでニンフが言いかけたところでイカロスの目が何かに気が付いたかのように見開かれる。

そして、悲しそうな表情になるのだ。

「何も……なければいいんですけど」

「そうね……」

「……」

こうして、エンジェロイドたちはそれぞれにがいつも行っている日常に戻るのだった。それぞれが、それぞれの思惑を思い浮かべながら

絃城家を出て行った智樹は、日和とあらかじめ待ち合わせをしていた場所にゆつくりと歩いて向かう。その足取りは決して軽いものでもなければ重いものでもない。

いつも歩きなれた未舗装の道を歩く。だが、智樹の表情は明るいものではない。これから日和に話す内容がいい内容ではないのか。それとも、未だに答えを考えているのか……どちらにせよ、智樹にとっては重要な事なのだ。

大桜の根元まで約20分という辺りで日和が手荷物を持った状態で電柱に寄りかかり、智樹を待つように経っていた。

智樹はそれに気が付くと、急いではないが先ほどより歩くスピードを上げて日和に軽く挨拶をし、一緒に約束の大桜の根元に歩いて向かう。

その途中で一切の会話をせぬまま、二人は大桜の根元にたどり着くと大桜に寄りかかるように二人は座った。

少し季節的に早い、大桜は風が吹くたびにその枝に咲き誇る花びらを舞い散らせ、二人を外界から遮断しているかのような

そこで智樹は日和のほづをちらりと眺める。

その横顔はとても綺麗で、幻想的だった。いつも隣にいるはずのそはらとは違った感覚があり、智樹は何気なく頭をポリポリと掻く

(やっぱ……ちゃんと返事しないと……ダメだよなあ……)

その横顔は、返事を期待しているようにも見えて

「あのさあ 風音」

「素敵ですよね……」

だから、智樹は決心を固め日和に話しかけたが同じタイミングで日和が口を開いたために、一瞬判断に困ったが、自分の話を中断し日和の話を優先する事にしたようだ。

だが、智樹は日和の言った言葉について理解が追いつかずに疑問系で返してしまう

「……………へ？」

「ホラ」

日和は智樹のそんな声を聞いて、夜空を指差す。

「守形先輩のお話じゃ……この星空の上に……見たこともない新大陸があるんでしょう…？ いいなあ、行ってみたいなあ…新大陸」

それを言う日和の横顔は本当の意味で綺麗で、智樹はついつい見とれてしまう。だが、話している内容を理解して智樹は再びポリポリと頭を掻き始める

「ああ…そうね…」

そして、日和もその言葉を返した智樹のなんともいえない表情を見て何処か残念そうに立ち上がり告げるのだ

「そろそろ帰りましょうか……」

「え……？」

「ホラ……もう遅いですし……」

その言葉を聞いた智樹は多少戸惑いながらも夜空を見てから腕時計を確認し、現在の時間を確かめる。別段いつもと比べても遅い時間というわけでもないが、確かに女の子と一緒にいるということを考えれば遅いとも言える時間だった。

だから智樹も日和の言葉に従うように立ち上がり、歩いてきた道を日和から三步ほど送れて戻っていく

(風音……日和……)

いくつもの街頭が未舗装の道を照らしている。智樹は下を見ながら伝える事のできない言葉をどのタイミングで伝えようかと考えている

(俺の事を初めて『好きだ』って言ってくれた女の子……)

「あのさあ、風音……」

そして、いくらか歩いたところの街頭の下で智樹は立ち止まり、日和を呼び止める。

(俺はこの娘の事を……一生忘れない)

「こないだの…返事なんだけど」

ぼんやりとした思考回路のなかで顔を上げて、その言葉を伝えようとした。だから気が付くのが遅れてしまった

(忘れない……そう思って……いたのに……!!)

僅か数十メートル先に中型のトラックが迫ってきている事に。そして、その運転手が目を開けていないということに



智樹はこちらを振り向いてしまった日和のほうに全力で駆け寄ろうとした。そんな智樹の必死の表情を見た日和もなんだろうかと言ったふうに元向いていた方向に振り返る。

日和は一瞬驚いてすぐに避けようとした……

そして最後まで諦めずに日和の手を道路横の畑に引っ張ろうと智樹はした……

だが、その全てが遅すぎたのだ

刹那、智樹の耳に嫌な音が響いた。

目の前にはナニカに衝突し、畑の方向に車体を傾けたトラックがある。

(な………)

そして、頭から血を流し横たわる　の姿がある

目の前の現実には智樹はその身体を硬直させてしまう。先ほどまで一緒に歩いて、話していた　の姿を見て。

(あ………)

本当は理解していた。だが、理解したくないためにその名前を智樹は否定する。だが、その否定を悲しみが掻き消し、無理矢理に智樹

に今の状況を理解させる

そして、智樹は横たわる日和に近づこうとした。そう、近づこうとしたのだ

だが、智樹の目の前で突然日和が光ったかと思うと、物凄い勢いで身体はブロック状に分解され消滅していく

「オイ…なんだよコレ」

そんないきなり過ぎる出来事に智樹の頭は理解をする事ができずにパンクしてしまいそうになる。だが、ある出来事のせいで智樹はそれどころではなかった

その出来事とは、今まであったはずの日和についての記憶だけが霞がかったように思い出すことが難しくなっているという事

「どづいうことだよ……なんでっ!?!」

嫌な予感が智樹の頭の中を奔る。

完全に日和がその場から消えてしまった。それが意味する事は

『忘却』

智樹はそれを確かめるために走り出した

「ッ

！？」

突然、頭の中に何かの映像が流れ始めて目の前が真っ白になる。

その映像に映っては消え逝く女の子のことを俺は知っている。だけど、何故だろうか知っているはずなのに思い出すことが難しくなっていく

(風音……日和……)

頭の中に思い出せと命令を送り、その名前を思い浮かべるまでに夕

イムラグが発生する。それは本来ならばありえない事なのだ。俺は元々記憶の引き出しの使い方が上手い人間だった。

つまり、それが意味する事は『忘却』

誰かの意味によってその名前の人物を忘却させようとしているという事だ

(このままだと……全て忘れちまう……)

俺がこの世界でもっとも恐ろしいと思っているのは『忘れられる』という事。それは思い出にもなれず、誰の記憶にも残らないという事だ。それがどんなに悲しいかという事を俺は知っている

(あれ……俺は何を忘れるんだっけ……)

だから、誰にも同じ思いをさせたくない

「忘れてやるかよ……風音……日和っ!!」

忘れないためには言葉にする事が大事だ。それも強い思いのほうが記憶により効果的に刻まれていく。

そして、そう叫んだ瞬間に真っ白になった世界は碎けるように消えていき、先ほどまで俺がもっていた場所に立っていた。その瞬間に俺は玄関から外に飛び出す。

この『風音日和』の記憶だけが消されてしまいそうになる理由を知

っているであろう人物がいる桜井家に向かうために。

その途中に何度も何度も頭の中から日和についての記憶が飛んでいきそうになる。

けど、もう忘れるのも忘れられるのも嫌なんだ。だから俺は絶対に忘れてなんかやらない

「恭兄ッ!！」

ちようどそはらの家の前を通り過ぎようとした辺りで智樹の焦ったような声が俺の耳に聞こえてきた。

「なッ、トモ坊」

「ハアハア……恭兄、恭兄は日和のことを…風音……日和のことを覚えてるか？」

「俺もそれを確かめるためにお前の家に向かってたんだ、それに何があっただよ……こんな記憶消去」

「記憶……消去……？ 誰がッ!？ 何のためにだよ!!！」

トモ坊……だから俺はこうやって走ってるんだよ。お前が落ち着かないでどうするんだよ？

「落ち着けトモ坊……いや、桜井智樹。現状で二人だけでも日和のことを覚えている奴がいるんだ、だったら少なくともお互いが確認

できる間は絶対に忘れない。

だからこの状況の理由を知っていきそうな奴に今から確かめに行くんだよ。意味……分かるだろ？」

「理由を……知っているって　　！！　これは、これはあいつ等の仕業なのかよ！？　だったらオレは今回だけは許さない　　」

「あ、オイ！！　待てツトモ坊ッ、まだ　　ッ！？」

伝える事がある……　そう伝えようとした所で不意に頭の中に痛みが奔る。そのせいで伝えることを伝える事ができずにその後ろ姿を追いかける形で俺も走り出す

「クソ……、焦り過ぎだトモ坊」

先ほどから全力疾走を続けていたために息が上がり始める。だが、後もう少してトモ坊に追いつく事ができる……

だから、多少の息切れなんて気にせず走り続ける

残り僅か数メートルというところでトモ坊がその走っていた足を地に落ち着かせる。そして、目の前にいる誰かの肩を乱暴に掴み、問い質す様に怒声混じりの声を上げている

「くそ……　　言えよ……！！」

その怒声も初めは小さなものだった。だが、二度目の叫びは悲痛さが混じった怒声であった。まるで慟哭しているような声

「言えよッ!!」

漸く俺もその隣に辿り着く事ができた。そこで、俺はトモ坊が乱暴に肩を掴んでいた人物の姿を見て絶句した

トモ坊が掴んだという事はイカロスだと思っていたがまさか……

「おい、トモ坊………落ち着けよ」

「煩いつ!! 今はそれどころじゃないんだよ恭夜!!」

俺の言葉を一蹴し、トモ坊は再びニンフに向き直る。そのニンフをみる目には一切の虚偽を認めないというものが強く見える

「ダメなの………ダメなの……キョウヤ、トモキ………」

だが、それはニンフの今にも泣いてしまいそうな声によって戸惑いに変化する

「だって……この事実を知ってしまった人間には………消去がきかなくなる………そしたら、二人とも気が付いちゃう………!!」

「気づく……何を…だ？」

俺は何も言えずにそのやり取りを見ているしかなかった。だってそこでは

「二人の……そばにいる『非』現実は  
『非』現実は  
日和だけじゃない……!!」

涙を流しながら、辛そうに叫ぶニンフの姿があったから

その瞬間、俺の中で何かが繋がってしまった音がした。

そして同じくしてトモ坊も何かを悟ったのか、先ほどまでの表情から一変して『いつも』の何処かぬけた感じのトモ坊に戻っている  
つまりそれが意味する事はトモ坊が冷静さを取り戻してという事

「あれれ…オレ…こんな場所で何してんだ？ って、ニンフ!?  
何泣いてんだよ!? あわわわ…恭兄に見つかったら殺されるうう  
う……!!」

「あ、トモ坊…ニンフとガイア知らない てっ、どうしてニンフが泣いてるんだ!？」

だから、俺も今のところはトモ坊の演技に付き合おうとしよう。大根



役者にも程はあるが、せめてこいつらには気づかれない様に

俺も確かめないといけない事がまた一つ増えてしまったから………

『なあ、俺もこの世界では一時の夢だったのか？』

## 忘却の詩（後書き）

どうも、お久しぶりです。作者の絃城恭介です。

前回のアトガキにてアンケート的なものを取って見ましたが、その結果……………

本編を書いているだけでも大変だという事に気が付き挫折いたしました。

はい。誠に申し訳ございませんorz

次回からは本編関係のストーリーだけを書いていきます。それでは次回がいつになるか分かりませんがお楽しみに

## 矛盾螺旋（前書き）

風音日和が『地上』から消えてしまっても早くも一日が過ぎた。どうやら本当に智樹以外は彼女についての記憶が消えてしまっているという事が調査の結果に分かった。

関わりの深かった人物ほどその『忘却』は完成されたものとなり、記憶からなくなっていく。

そして、それと同時に奇怪な事が調査の結果に浮き上がってきた。

それは、絃城の旧宅が無くなっているという事。そして、本家への連絡がまったくできないという事。

前者は『忘却』についての古い文献や資料を探すために旧宅に向かった結果に発覚した事。後者はそれについて疑問を抱いた彼が本家絃城に電話で何度も連絡を取ろうとした結果だ。

「どうなってんだよ……コレじゃまるで

」

## キエテシマッタヨウダ

そう言葉にしようとしたが、身体に訪れる急激な脱力感によって口にするのを諦める。そういえば、昨日に最後にガイアの姿を見てか

ら彼女の姿を一度も見していない。

風音日和という固体が消滅してから数時間も経っていない……だと  
言うにも拘らず、同じくして何かが消え始めている。

存在の矛盾を抱えた存在は、（それが何を意味するのか？）留処な  
く消去（忘却）されていく。

この時点で彼は勘付き始めていた。もしかしたら自分の存在もまた  
『風音日和』のように地上<sup>じち</sup>では『非』現実ではないかと。

だが、彼はその可能性を否定しきる事ができない。

何故なら彼の旧宅、父母に関する隣人の記憶が全くないということ、  
そして一切の連絡が取れないという事実がここにはあるのだ。

ならば、『絃城恭夜』と言う存在の証明は自分以外に誰が出来るだ  
ろうか？ もしかしたら既にクラスメイトや新大陸発見部の面々す  
ら自分を覚えていないかもしれない

日和のように彼を覚えているのは親友である智樹だけかもしれない

「チクシヨウ……チクシヨウ……！！」

その魂からの慟哭は誰に対するものなのか？ そんなことも今の彼  
には理解し得ないのだろう。

悲しみの連鎖は続く続ける。絶望の連鎖は留まる事を知らない

また一人ここに絶望者は生まれてしまう。神の記した御伽噺ストーリーに踊らされるままに。

だが、彼はまだ真実には気付いてはいない。

B A D E N Dの筋書き（ストーリー）を書き換える事は出来なくとも、配役を与えられた主演にも脇役にも筋書きに逆らう事ができると言う事を



## 矛盾螺旋

季節はずれの巨大低気圧に覆われた空美町は朝から止むことなく強風が吹き荒れている。木々の枝が唸りをあげるかのようにねじ折れたり、外からは普段聴こえないような音が家の中に届く。

そんな悪天候だと言うのにも拘らず現在、絃城家には家主である恭夜の姿はない。その代わりにリビングに設置されたソファーには無気力にテレビ画面に顔を向けながら、頭の中では全く違う事を考えているような表情をしたニンフが居た。

その表情を言葉にするのならば後悔、悲しみ、苦しみ……その全てがごちゃ混ぜになったような表情だ。

ニンフがそんな表情をしなければならぬ理由は二つある。一つは風音日和についてのことを全て話すべきか話さないべきかの葛藤から来るもの。もう一つは、昨日起きた記憶消失の後から一度も恭夜が此処に帰ってきていないことだ。

一つ目に付いては今現在もどうしようかとニンフは悩んでいる。話そうと思えばニンフの動力炉……つまり心にあたる部分がズキズキと痛み始める。そのたびにニンフは悩み、苦しむ。話す事ができればきっと楽になれる。けど、それは同時に悲しみを運んでくる。きっとその悲しみはニンフには耐えられない。だからニンフは仮初めの現実に、目の前に垂らされた蜘蛛の糸よりも細い糸に縋り寄ってしまう。

二つ目に付いては今に始まった事ではないから初めはそれほど心配はしていなかった。だが、如何せん昨日の今日だ。もしかしたら全

て覚えていて独自に調査を進めているのではないだろうかという不安がニンフを襲う。もしそうだったら、今縋りよっている蜘蛛の糸のようなものは音も立てずに切れてしまうだろう。そして何より、ニンフは純粹に恭夜の事を心配している。

しかし、そのどちらの考えも……その感情の在処さえ理解できずにニンフは苦しんでしまう。

理解しているつもりなのだ。だが、その考えのどちらも感情が否定してしまい理解できない。

今にも張り裂けてしまいそうな思いをニンフは一人で悩み、考え続けていた。

「キョウヤ……早く帰ってこないかな」

だから、ついついそんな言葉を声に出してしまう。

それはきつと、エンジェロイドとしての感情ではなく一人の少女としての思いの籠った言葉なのだろう。本人は自覚していないが、確実にニンフは……いや、地上に来たエンジェロイドは『愛』を知り、人になろうとしている。

『好きな人に愛され、愛し合いたい』

その想いはきつと間違いなどではない。

だけど、エンジェロイドたちにはそれを理解できずに苦しむ。その



ジレンマを克服しなければ永遠に『人』にはなれないとどこか感じながらも

「動力炉が……痛いよ、キョウヤ……」

桜井智樹はいつものように学校に登校していた。それはいつもと変わらない日常であると疑わずに信じていた。そうする事で彼の言う平和な日常が訪れると思っていたから。

いつもの時間に、いつものように挨拶をし、いつものように他愛もない話をする……そんな日常を求めて彼は教室に入る。自分の席に鞆を掛け、自分の前に居る人物に話しかける。

「おはよ、恭兄」

「……んあ？ 恭兄って誰だよ桜井？」

だが、現実には違った。そこには、『絃城恭夜』と言う人間と入れ替わりで転校をしたはずの『後藤大輔』と言う人物が座っていたのだ。それは本来ありえない矛盾。『居る』はずの人間が存在せず、『居ない』はずの人間が存在すると言う……だが、他の生徒達もそれに違和感なく日常を過ごしている。あたかもそれが当然のように

「あれ、お前って親父の都合で転校したんじゃないか……？」

「確かに転校する予定はあるけどよ、流石に酷いんじゃないか？」

確かに最近風邪引いてずっと休んでたけどさ……それで、その恭兄ってのは誰なんだよ？」

「だ、誰って恭夜の事だよ！！」

「恭夜？ A組の笹宮のことか？ それともD組の九条のことか？ 少なくとも俺が知る『きょうや』って名前の奴はその二人しか知らないぜ？」

「A組でもD組でもなくこのクラスに居るはずの絃城恭夜だよ！！お前が座ってる席に座っていたさ！！」

あまりにも理解できない事が続けざまに起こる為に智樹は声を荒げてしまう。その智樹の必死な表情と、声を聞いた後藤は少し馬鹿にしたような声で智樹を諭すように言葉を返す

「はあ？ 少なくともこのクラスには絃城なんて奴はいないぜ……」

…そもそも、この席は一学期からずっと俺が座ってるぜ？」

「ッ！？」

「ナンだよ、そんなありえないような見るような目で俺を見てよ……」

…仕方ねえな。おーい見月、教卓にある座席表持ってきてくれないか」

そう言つて『後藤大輔』はちょうど教卓の前で他の女子達と会話をしている女子に座席表を持ってきてくれと手を軽く振つて頼む。彼女達もそれに気が付いたのか、教卓の上に置いてある座席表を指差しながら「コレでいいの?」と言つたようなジェスチャーを交えながら確認を取つた後、座席表を持ってきて後藤にそれを手渡すと再び女子達の中に戻つていった。

「ほら、コレ見て確認してみよ」

そう言つて手渡された座席表を乱雑に奪うように智樹は受け取ると自分の座っている列の座席を見る。

「斉藤、久保田、後藤、桜井、イカロス……ッ!？」

何度も何度も智樹は座席表を確認するが斉藤、久保田の後ろには絃城の文字は見当たらない。それどころかクラスの何処にも絃城と言ふ苗字は居なかつた。その紛れもない事実を目の当たりにして智樹の顔は血を失つたかのように青白くなつていく

「な、絃城なんて苗字の奴は居ないだろ?」

「嘘…だろ? だって、恭夜は昨日までそこに座つてたんだ!!」

それがどうして消えちまったように　　ッ!？」

だが、智樹はそれを否定するために叫ぶ。だが、その叫びすらも突如襲った頭痛によって中断されてしまう。まるでその叫びを誰かが止めるかのように

「なあ、本当にどうしちまったんだよ桜井？　顔色も悪いし、調子悪いんじゃないか？　保健室に行ったほうがいいんじゃないのか？」  
「大丈夫だ！」

後藤に差し出された手を振り払い、智樹は教室の出口へと向かった。徐々に大きくなりつつある不安を頭の中で冷静に抑え、もつれそうになる足を必死に動かしてとある一室に向かって走る。

智樹が真つ先に思い浮かべたのは守形の顔だった。なんだかんだ言ってもこの状況を解決してくれそうな人物が他に居なかったからだ。守形ならきつとこの窮地から自分を救い出してくれる。智樹はそう思いながら新大陸発見部のドアを乱雑に開けた。

そこにはいつもと変わらずにパソコンに何かを打ち込んでいる守形の姿があった。

「先輩っ!！」

「……どうした、智樹？　今日は朝の部会は　　」

だから智樹は守形に駆け寄り肩を掴み、事情を説明しようと言話を始める。

「恭夜が、恭夜が何処にもいないんです！！まるで消えちゃったかのようにクラスから居なくなつて……先輩は何か知ってるんですよね！！」

「……………」

「それにクラスの奴らに話を聞いてもそんな奴は知らないとか、誰だそれって反応するんっすよ。って、先輩聞いてますか？」

「聞いている」

そこで智樹は気がついてしまった。先ほどからずっと黙つて智樹の話しを聞いていた守形の目に……

「聞いてはいる……だが、恭夜とは誰だ？」

「なっ……恭夜ですよ！？ 新大陸発見部にも顔出してたし、一緒に海にだつて行ったじゃないですか！！」

「……………海？」

そこで智樹は悟つた、守形もまた恭夜のことを覚えては居ないのだと。

「クソっ……風音のことも忘れて、今度は恭夜かよ……どうなってるんだよ……チクシヨウツ！！」

「まで、智樹。今なんと言った？」  
「へっ？」

そこで智樹はハツとする。忘れたフリをしている人物の名前を口に出していたと言う事に気がついて。

だが、何故今のところを聞き返してくるのかという疑問も同時に智樹の頭の中に発生する。それを一つずつ考えていった結果に智樹は一つの矛盾に気がつく

それは唯一の矛盾点の中に現れた矛盾点

「先輩は風音日和のことを覚えているんですか？」



## 矛盾螺旋（後書き）

どうも、前回の活動報告から1200文字くらいしか書く事のできなかった作者の絃城恭介です

先に説明を一つ

前書きにあった御伽噺と筋書き（ストーリー）については誤字にあらずです。

前者の本来の読みは「おとぎばなし」で後者はまあ「すじがき」です。

二つを統一しなかったには理由が一応あるので考えてもらえれば嬉しいです。

そして、タイトル。いいタイトルが思い浮かばなかったので『空の境界』をパクる形になってしまったことを謝罪させていただきます。

この展開は誰が予想できましたかね？



既知感（デジャヴ） 守形

風音日和……何故かその名前だけに妙な感覚を覚えた。それと同時に他の違和感もおぼえた。先ほどまで智樹が熱心に聞いていた絃城恭夜と言う人物に関しては残念だが本当に何も思い出せない。だが、最後に呻くように智樹が言葉にした名前だけはどこかで聞いたことがあるような……

「先輩は風音日和のことを覚えているんですか？」

再びその名前を聞いた瞬間に心臓がドクンツと躍動を起こすように鼓動を刻む。なんだ、この名前は……俺はその名前の人物を知っていたような……いや、知っているような気がする

「ッ……！」

「しかし、それならば理由が いや、それではもしも……」

心拍数が上がってる……それが意味する事は間違いなく俺は風音日和という人物に覚えがあると言う事だ。なのにどうして俺は何も覚えていない……思い出せないのだろうか？

考えうるパターンは簡単に考えて二つだ。一つは単純に自分がその事柄を自ら思い出さないように記憶にロックを掛けてしまったと言

う事。もう一つは『誰か』に不都合が生じたために『誰か』の手によって記憶を消去された、もしくは忘却させられたと言う事

だが、前者に上げたものには全くの覚えがない。そもそも記憶に口ツクを掛けてしまうとと言う事はそれだけ思案するための材料が減ると言う事を意味する。果たして俺はそんなに簡単に記憶を忘れる事を選ぶだろうか？

答えは否だ。俺はそんな出来事になったとしても真実を真摯に受け止め、その記憶と向き合おうだろう。

つまり、この場合は後者が自分に適応されるわけだが……果たしてその『誰か』と言うのが誰なのかわからない。

「せん」

「智樹、風音日和についてももう少し詳しく語ってくれ」

「えっ？」

「時間がもつたない、早く教えてくれ」

「え、あ、解りました。じゃあ」

智樹が話す事と自分の記憶をてり合わせていく。

その中で自分の記憶と話に矛盾点を見つけていく。そうする事で空白になっている記憶を修正し、正確な記憶へと補完していく。

そもそも、記憶に空白があることにどうして疑問を抱かなかったのだろうかと今更になって考える。人間の記憶とは連続しているものであり、突然不連続になると言う事は理論上ありえない事だ。

実際にはありえないとは言いつれもないのだが、それを説明するとなると解離性同一性障害という言葉の意味から説明しなくてはならなくなってしまうから解説はなしだ

そして、智樹の話しを聞く限りで分かる事は一つ

「ふむ……そうになると必然的にニンフ、イカロスの両名はこの事態を把握して黙認していると言う事になるな。智樹、どちらかに説明はしてもらってないのか？」

そう尋ねると、智樹は押し黙ってしまった。様子から察するに説明は受けていないようだな

「いや、やはりその話はいい。確かに俺は覚えていたようだ、風音日和の事は」

「守形先輩……覚え　　って、え？　それって……どういう……」  
「言葉の通りだ。風音日和については思い出せた。だが、お前の言う恭夜と言う奴は何一つ思い出せない……だが」

いまだどこかに白い霧のように引っかかっている物がある。それがきつと忘れてしまっている記憶なのだろう

「お前の言う”恭夜”と言う人物は風音より付き合いが長かった。それだけは自信を持っていえる」

その白い霧のようなものは前に戻っていくたびに大きくなっていく。つまり、記憶が無意識にしる人為的にしるその記憶だけが思い出せないようにしているということだ

それが意味する事は間違いなく自分が” 恭夜 ”と関わっていたと言う証明になる。

たとえ忘れてしまったとしてももう一度思い出せば言いだけの話だろう

「智樹、取り合えず授業にもどれ。イカロスが心配するだろ？ わ

ざわざ忘れたフリなんかしていたんだろ……」

「えっ……はい」

智樹はそう答えるとそのまま教室に戻っていった。

だが、開いたままのドアは閉じる事はなかった。何故ならそこには、信じられないと言った表情をしているニンフの姿があったのだから

「ニンフ、聞いての通りだ。すまないが事情を説明してくれないか」

「え……嘘……だって昨日はあんなに……」

「ニンフ？」

「……まさか……… 自覚してしまった？ だったらオメガも……… けど、  
だったら……… どうして消えないの？」

「どづいうことだ………？」

そう尋ねるが、ニンフは焦点の合わない眼をゆらゆらと泳がせながらぶつぶつと呟いている。

この状況は非常に不味い、戦略的撤退を一度……いや、そんな時間はない

「すまないがニンフ、お前がカギを握っている唯一の存在だ。」 恭夜”の事を説明してくれ”

「あ……うん。そう…よね。」

助かった。あのまま泣かれていたらおそらく美香子が飛んできていただろう。

「日和……のことは思い出しちゃったんだ」

「ああ、気を抜けば忘れてしまいそうだがな」

「そう……なんだ」

そうニンフは呟いた。まるで何かを言ったための決心をつけるかのよう

だが、ニンフが此処まで人間じみた感情を出すようになったのも”恭夜”と言うやつの存在が大きかったのだろうな

「キョウヤも……多分『非』現実の存在なの。私達の稼働歴……稼働してきたどの時代にも『魔術師』なんていう存在は存在しなかった」

『魔術師』その言葉に心臓がドクンツと跳ね上がる。

「もしそんな存在があったのなら”アイツ等”が放っておくわけないから」

そして、ニンフのいう”アイツ等”と言うのはおそらくシナプス人だろう

「それに……オメガって言うエンジニアイドはまだ完成はしていなかったの。私が初めてオメガを見たのは培養機の中に居た姿だった」  
「だが、イカロスやアストレアの記憶には何故か彼女に関する記憶があった……」

「けど、私には信じられなかった。だって、あの娘は完成するはずがないんだもの……」  
「完成するはずがない？」

それはどうということなのだろうか？

「だって……先に後継機であるアルファーが完成しているんですもの」  
「な……に？」

「だから、そのままあの娘の培養機は稼働を停止。成長するはずも自力で起動できるはずも無いの……………最後まで未完成だったあの娘は」

開いた口が塞がらないと言つのはこういつ状況を指すのだろう。現に今、にわかになンフの話信じられない自分が居る。

「だったら、どうしてガイアは地上に現れた？」

「それは……………あの娘の存在を望んだ人が居たから」

つまり、ガイアは誰かに存在を望まれたから一時の夢のようなものとして地上に現れたと言うことだろう

そもそも、そんな存在を望んだだけで現実に再現する事など可能なのだろうか？

「スガタの疑問の全てはキョウヤの存在に帰還するの」

「どういうことだ……………？」

「私も最初はわからないほどにキョウヤは自分の存在を地上に馴染ませていたの。それがどういった仕組みで、どういった意図があったかはわからないけれど……………」

そこでニンフは一度口を閉ざしたかと思つと、再び呟くような声で言葉を紡ぐ

「だけど、その存在力を弱めたのは間違いなく私達エンジニアイド。おそろくキョウヤは”変わらない”世界を望んでいた。だけど、私達がこっちに來たせいで世界は”変わって”しまった……………」

「さて…………もしそうだったとしよう。だが、そんなことを一人の人間にできることなのか？」

それは先ほどからずっと考えていた事。いくら話を聞こうとその答えには至らない

「まず、前提から間違っているの。思い出してみて、スガタはダイブ・ゲームでシナプスに何度か入った事があるでしょう。その時にドームに入ったでしょ？」

「……………」

「アレの中に在った機械は望んだ世界をその人に提供するゲーム機のようなものなの。だけど、あくまでゲームには終わりが存在するでしょ…………つまりね、終わりを迎えてしまったプレイヤーに待っているのは忘却と言う望まぬ現実なの」

一言一言を言葉にしているだけのはずなのに、ニンフの表情は徐々に真っ青になっていく

「おそろく、私が今説明した事が”何故か”キョウヤの身に起きているの」

「さて…………つまり恭夜は自ら終わる事を選んだと言う事なのか？」



その瞬間、授業終了のチャイムが鳴り響いた

「  
」

おそらく自分の言葉に対して返答しているのだろうが、何故か何も聴こえない。まるでそれを聞かれる事を誰かが拒んでいるかのよう

に。  
そもそも、こんなにもチャイムの音は大きかったのだろうか？

違う……これはチャイムの音なんかじゃない。

何故なら、この音は外から聴こえているのだから。朝からなんら変わらない強風の吹き荒れる音。耳に感じる妙な違和感……そして朝の気圧予報

「  
ッ!」

朝から感じていた違和感はコレだったのか……道理で耳が痛むわけだ。

急激な気圧の変化に人間は耐えられない

「ニンプ、イカロスを連れて来てくれ。俺は智樹と見月を呼んでく

る」

「えっ、ど、どうしたの突然？」

「頼んだぞ」

どうか、あの二人だけはまだ無事で居てくれ。

俺だけではこの事態はどうする事もできないだろうから。忘れてしまった俺にはどうする事も……………

既知感(デジャヴ) 守形(後書き)

どうもお久しぶりです。作者の絃城です。

がんばっては見たんですがこれ以上は無理。オリジナルに路線変更したとたんにコレだよ……とほほ

次回もこんな調子になるのだろうか？

むしろそんなこと無いように頑張りますが……取り合えず、学校始まってから頑張ろう

## 既知感その二（前書き）

どうもお久しぶりです。作者の絃城です。

今回も大分短く、散々待たされた結果がこれかよ……などと思われ  
るかもしれませんが。

ですが、現状ではこれが限界なんです。

次回こそきつと皆様を満足させられるような内容に！！



## 既知感その二

強風が朝から止むことなく吹き続けている。既に夕焼けが見えてもおかしくはない時間になっているというのに、空を黒く覆う無数の巨大な雲によって夕焼けは姿を現せずにいる。

まるでその夕焼けと、今現在の俺は全く同じ状況にあると考える。

地上を照らしたくても空を厚く覆う雲のせいで照らせない夕焼けの太陽。自分自身の存在していたという証を探しても何処にもそれを見つけない自分。

「はは…これなら初めから智樹に会いに行けばよかったんだろうな  
……」

まだ消え去っていない自宅の前に立ち尽くし俺は呟く。

今まで何度も何度も後悔はしてきたが、諦めようと思った事は一度もなかった。だが、今回ばかりは精神が先に病に伏せてしまった。

今までに無いくらいの虚無感と、孤独感と言う死に至る病に。

「けど……アイツまで俺の事を忘れていたら……俺はどうなるんだ  
？」

それは、完全な存在の死を意味する事である。

日和は智樹も覚えているはずだから、此処にいたと言うことを証明してくれる人が残っている。

だが、俺は違う。本家から分家の全てに至って初めからそんなものは無かったと言わんばかりに消えてしまい、今まで過ごしてきた旧宅も消え去り、家族すらも消えてしまった。

どんなに他の事は忘れようとも、家族の絆だけは信頼してきた。だが、その家族そのものが消滅してしまった。

だから唯一の親友だといつてもいい智樹に忘れられてしまっていたら俺は意味的にも存在的にも完全になかった事にされてしまう。

それは、こうして自我を持って生まれしてきた俺の存在に理由も、価値すらも与えられずに消えたという事もなる。

「まだ…忘れていない奴は居るだろう絃城恭夜。アイツは、ニンフだけは俺を覚えてくれるはずだろ……？」

今まで過ごしてきた時間が本物であるというのなら、たとえ俺と言う存在が偽者であったとしても今までの時間は本物に変わる。

ならば俺は今どうするべきなのか？ いつまでもこうして悩んでいる事に意味はないだろう。だったら、少しでも自分と同じ境遇にいる奴を助けるのが俺に出来ることでは無いのだろうか……

例え俺がその結果に消えてしまってもソイツはいつまでもこの世界に留まる事ができる。だったら、自分の代わりに存在し続けてもらうという願いは叶う。

その願いがたった今、自分を納得させるために作られた願いだとしても

「だよな……だったらせめてこっちに帰ってこれる奴を助けてやらないと……」

まずはソイツのところまで飛んでいくための翼を創りだす。

創り出した翼が完成したところで、地上を飛び立つために翼を力を入れて羽ばたかせる。その行為が更に自分の存在を薄めるという事に気付いているというのに。

「ああ……分かった気がする。あの時見た絃城の夢の意味が……」

あの時に見た誰かを助け、自分も救われ、守るべき少数のために多数を捨てた人間の夢……

別世界での絃城恭夜と言う存在の夢の意味を。

きつと、おそらくだが此処にいる俺そのものも誰かの夢の出演者であったであろうと言う事に。

あの時見た夢は、この世界の夢を見ている誰かがそうなって欲しい



と望んだ世界だったとして救いがある世界だったのだろう。だが、この世界は違ったようだ。

前回見たその誰かの世界は幸せだった。けど、この世界は絶望を望まれたんだろう。だから俺はこうして絶望しそうになっている。

きつと、その誰かはハッピーエンドでは飽き足らずバッドエンドに手をつけたのだろう。

「まあ…その作品の主演が俺だったって訳か……ついてねえよなあ」

乾いた頬に、涙が流れる。

だって仕方ないだろう。望まれたから俺はこんな幸せだった世界で一人消えないといけないんだからさ

「それでも……最低限の救いは物語に必要なからさ」

巨大な竜巻の前で空中に静止する。

そこからその中心にあるはずの影を探し、創造を使って新たに獅子刀を創りだす。

「だから、お前だけは俺が……元の日常とは少し異なるだろうけど、戻してやるから」

そして、ありつただけの魔力を模倣の魔眼に注ぎ込み『超々超音波振動刃』を使用する。

そもそも、だいぶおかしな事だとは思っていた。いくらエンジェロイドと言うデタラメな存在があつたとしても、現実を単体で捻じ曲げるほどの異能力を持った人間が存在しているという事が。

だが、そんな違和感すらもなかったものにされ、その結果にこうして自分が消える寸前でしか気付く事ができなかつた。

「パラダイスⅡソング！」

暴風の如く渦を巻いて吹き荒れる竜巻に向かって、俺は高速振動による波状のソニックブームを叩きつける。

その結果、竜巻の中から翼の生えた見覚えのある顔をした女性が姿を晒した。

「そう……か、改造されちまつたか……だよな。けど、悲しむ事はないさ」

俺の顔を見ても表情一つ変えずに、眼の色を紅く変化させる風音日和がそこには居た。

けど俺は別段驚く事も、これと言った感情を面に出すことなく話しかける。

「お前の日常は俺がちょっと違うけど前みたいなものに戻してやるから」

「……………」

あらゆる契約を断ち切る宝刀を片手に、俺は空を駆けるのだった。

できる事なら、智樹たちが来る前に何事もなかったかのように……

……

## 朽散ル者

「なあ、日和っ！！ 本当に消えるってどういう意味だと思うか？」  
「……………」

手足に付けられた鎖付き枷を獅子刀で狙いながら日和に語りかける。勿論、返事が返ってくることもなく、無言のままに暴風を発生させられてしまったため、鎖付き枷を断ち切ることもできていない。

一方的に語りかけるだけの状況だ。けど、間違いなくこの言葉は日和に届いているはずだ。何故そう思うのかと問われても、明確な理由はない。

だけど、俺はそう思うんだ。

「それはな、忘れられることだ……誰からも忘れられる。誰の記憶にも残らない……俺はそう思ってる」  
「……………っあ」

僅かながらにだが、日和が口を動かしているのを視認して俺は確信する。日和には間違いなく自我が残っているということに。

「だからさ、お前はまだ戻れるんだ。もともと”存在”していたお

前はな。この意味はわかんないだろうけどさ、きっと分かる日が来る」

日和が手に持った杖を翳すたびに真空刃のようなものが巻き起こり、背中の羽はズタズタに引き裂かれる。

「誰かが覚えていてくれる……それはきっと、何よりも素晴らしいことだろうさ」

「……いた……た……」

その度に翼を創造しなおし、日和を拘束しているであろう鎖付き枷に獅子刀を振りかざす。

六度目にして、首に付けられた枷に一太刀を入れることに成功したが破壊するまでには至らなかった。しかし、そのおかげもあってか微妙にだが呟くような声が聞こえるようになった。

「けどさ、初めから”存在”しなかった俺はさ、どうやっても消えるしかないんだ」

「……う……て」

震える声で、渴いた声でそう言う。

「だってさ”存在”しないものは誰も覚えられないからさ、忘れる

「ことも無いんだ。もともとそこには無かったんだからさ………」

手に持った獅子刀に一滴の雫が流れる。

無かったことになんてされたくない。

できることならいつまでもあいつ等と笑っていたい。

もっともっと話がしたい。

どれもが、当たり前のことだった。俺が居て、智樹がいて、そはらがいて……最近になっては先輩や会長、三体のエンジェロイドもいて、ガイアがいた。

俺が望んだから生まれたガイア、誰かに望まれたために生まれた”存在” しないはずの俺。

だったら、初めから感情の無い機械として生まれたかった。

感情が無ければ、こんな思いをしないで済んだから。

「けどよ、そんな俺でもさ……抗うことはできるんだ。例えば、この行動が予定調和になったとしてもさ」

けど、物語は筋書きなしの方が面白いだろ。ドラマ アドリブ

少しくらい、役者にだって物語を作ることは出来る。

「だからさ、これが俺の最終舞台だ。ラストステージ お前の物語くらいはハッピー  
エンドで終わらせてやるから！」

空を強く蹴り、吹き荒れる暴風の壁を越え、真空刃を切り裂き、日  
和を操る枷に獅子刀を振り下ろす。

だが、それは右手に持たれた杖で弾かれ、オマケと言わんばかりに  
再び発生させられた真空刃を身体に叩き付けられ、俺は地に落ちる  
形で終わってしまった。

日和を破壊するなら、こんなに苦労はしない。

装甲と言えば、電子戦用であるニンフですら一撃当てることができ  
れば容易く沈められる。

けど、それはできない。

「まだ戻れるところにいるお前を……お前の気持ちを殺すことはで  
きねえよ………」

地面に叩きつけられた衝撃で、脳が揺れる。

「智樹がお前のことを覚えている限り、お前は絶対に戻ってこれる  
………」

だけど、眠るわけにはいかない。

此处で眠ってしまったのは、今戦っている理由が消えてしまっから。

「もう、戻ってこれない俺とは違うお前だから

「キョウヤツ!!」

その瞬間、誰かに背中から抱きつかれた。

「どうして…? もう、一人で無茶しないって言ったのに…どうして一人で傷つくのっ!?!」

その言葉に、その声に……俺は優しく応えることはできるだろうか?

泣かずに答える事は出来るだろうか?

「私は絶対に忘れないから……忘れてたりしないから……トモキも覚えていてくれるから……」

きつとできない。

だって、俺の心はもう泣いているから。



だったらせめて、消える最後の時までこいつ等の前では笑顔でいよう。泣くことは、消えてしまってから一人でいくらでもできるから。

「ああ、そうかもしれない……俺さ、笑えてるかな？」

そう言って、背中に抱きついている人物を自分の前に抱き上げる。

「うっん、泣いてるよ……顔は笑ってるけど泣いてるよキョウヤ」

「悪いな……ちゃんと笑えてなくてさ。けど、これが終わったらまた笑えるよ」

「本当……？」

「ああ……きつと笑えるよ」

嘘だ。この戦い、この騒動が終わったら俺はこの夢を見ている”誰か”に消されてしまう。

これは誰が言ったわけでもないが、俺にはわかる。分かってしまったのだ。

「なあ、ニンフ……ハッキング、できるか？」

「えっ？」

「俺だけじゃアイツのこと助けてやれそうに無いから……」

「でも……私だけじゃ、あの風の壁は突破できないよ」

そう言つて、辛そうな表情をするニンフの頭を撫でながら、俺は考  
える。

俺だけでも翼を何度も切り裂かれた。だったら、加速力で俺にすら  
劣るニンフでは日和に届かない。だったら、俺が活路を開くか？

いや、無理だ。ニンフを抱えた状態であの風の壁を突破することは  
できないし、真空刃が来たら回避することもできずに終わってしま  
う。

考えろ……ニンフが来たと言つことは少なくとも、もうすぐ智樹た  
ちも来るのだろう。しかし、その間に無関係な人達は苦しみ続ける。

マスター……ううん、お父さん。私を……もう一度

瞬間、頭に声が奔つた。それは、俺と同じように本来は存在しない  
はずの少女の声。

俺よりも一足先に消えた少女の姿が頭の中に映る。

「模倣創造開始

」

そうだった。

初めから彼女は俺が望んだから存在していたのだ。ならば、彼女を  
俺が創る事が出来ないはずが無い。

「再現率80%……90%……」  
「嘘……どうして……？」

徐々に光が輪郭を削って行き、そこには消えてしまった少女と全く同じ姿をしたものが現れる。

「100%……創造完了。魂の再構成完了、経験の憑依及び記憶の構成完了……ガイア」

そして、彼女がコノセカイに完全に姿を現すと、閉じられていた瞼が開く。

「おはよう……お父さん」

「すまないな……俺が不甲斐ないばかりに……怨んでくれても構わないよ」

「それは違うよお父さん。私はね、お父さんが居たから生まれることができた。だからね、怨むなんてできないよ」

そう言って、ガイアはその両目をしっかりと開いて日和を見据える。

「ニンフ、日和ちゃんのこと助けてあげてね……」  
「えっ、オメガ!?!」

そういうと、ガイアは翼から複数の羽根を空に舞い散らせた。いや、それは羽根ではなく”一つ一つに意思の宿った”ガイアの兵装だった。

「パネス  
Pranesu」

ガイアの声に反応して、幾つかはニンフを守るように三角形を作っている。

「私には…貴方ほど優れた電子戦はできないから」

「ちょ…オメガ！ キョウヤー！！」

俺は、こちらを見ながら何か言いたげにしているニンフに向かって言った。

「コレは、お前にしかできないことなんだよ！！ 頼む、日和を助けてくれ！！」

その言葉が届いたのか……いや、この言い方は卑怯だな。俺は、ニンフの気持ちを利用してはいるだけか……

「分かった、やってみる！！」

ニンフはそのまま日和の頭を掴んで、声高に叫ぼうとした

「ハッキング開　　っ!？」

だが、逆にニンフも頭を掴まれ、ハッキングをする前にハッキングをされてしまう。

けど、この場にはハッキングをされる心配が無いものがあると言っことは忘れていたようだ。エンジェロイドならば、確実にハッキングされるが、俺は人間である

即座に飛び上がり、ニンフを後ろから支える

「大丈夫だ…ニンフ。お前を絶対に離さないから　　絶対にもう離さないから」  
「キョウヤ……だったら、命令して。命令してくれたら……きつと頑張れるから」

苦しそうに、辛そうに俺を見ようとしながら、ニンフは言った。

だから、俺はその願いに答える。

「命令だニンフ!!　負けんなっ!!　絶対に負けるな、負けるなよ……」

「は……い、マス……ター……」

その、俺の叫ぶような声に應えるかのように、ニンフの小さな身体から電子が粒子と結合して大きな翼を発生させる。

ぶつぶつとニンフは違う誰かに文句を言いながら、今までたまっていた言葉をぶちまけた

「私のマスターはもう……お前なんかじゃない!!」

その瞬間、日和に装備されていた拘束具のようなものは音を立てて弾けとんだ。意識を失い、地面に自由落下していく日和はガイアが受け止めてくれた。

そして、自分の力を使いきってオーバーヒートを起こしたのだろう。ニンフはぐったりと俺の腕の中で眠っている。

「なあ、ガイア……お前はさ、もっと存在していたいよな？」

「ううん……私はお父さんがいるから存在する意味が在るの。お父さんがいない世界でなんて存在する意味はないよ」

「でも……それじゃあ!! お前は何のために……たったこれだけのことをするただけに生まれてきたことになるじゃんかよ!!」

「そつだよ。でも、こうやってお父さんと会話ができる。役割も関係なく話ができるだけでもう、私は幸せなんだ……それに、お父さんが最後にお話するのは私じゃないでしょ？ ほら、親友にちゃんと話してあげないと……」

そう言っつて、遠くでこちらを見て立ち尽くしている智樹を指差すガ  
イア。

気付かなかった……来るだろうとは思っていた。だけど、気付けな  
いとは思わなかった

「恭夜っ！！」

だが、立ち尽くしていたように見えただけであった、実際にはこち  
らに走ってきている。

どうやら、本当に消えてしまつようだ

「よお、智樹……どうしたんだ？ そんなに声を荒げてさ？」

「よお……じゃないっ！！ どうしたんだよ、その傷は！？ それに、  
どうして教えてくれなかったんだよっ！！」

「何が…だ？」

智樹の言葉に意味が理解できない部分があったから聞き返す。

「何がっつて…どうして恭夜は自分が忘れられているって事を教えて  
くれなかったんだよ！！ 俺は覚えてるよ……覚えてるって言った  
だろ！？」 絶対に忘れるはずが無いだろっ！！」

それを聞いて、やはりと自分で納得をする。

俺と言う存在が忘れられていっていると言う自覚はあったが、確信は持てていなかった。だが、智樹の表情と声から察するに、俺は忘れられてしまっていたのだろう

「悪かった、智樹……それと、俺からの頼みごと聞いてくれないか？」

「わ、分かってくればいいんだよ……けど、頼みごとってなんだ？」

俺が素直に謝ると、智樹は少し恥ずかしそうに鼻を掻くと聞き返してきた。

「ニンフと日和のことを頼む……でも、安心したよ。お前だけは、俺を覚えていてくれたことにさ……けど、それもそろそろ忘れる。もう一回だけ言うぞ、ニンフと日和を頼む」

「な、ナンだよ……まるで自分がいなくなるみたいなお事言うなよ……なあ、これからも今まで通りに馬鹿やって、笑いあうんだろ？  
なあ、恭夜？」

「……………」

俺は、智樹の言葉に答える事は出来ない。



「どうして何も言わないんだよっ!! ニンフと約束したんだろ! ? ずっと一緒にいるって!!」  
「……………できないんだよ。どんなに、俺がそうしたくってもさ……………  
どんなに抗っても、できないんだよ……………」  
「ど……………どういことなんだよっ!!」

震える声で、嗚咽のような声で俺は智樹の言葉に答えた。

「言葉の通りだ……………智樹。もう、こうして離しているだけでも奇跡のような状況なんだ」  
「どうして恭夜の身体が透けてるんだよ!? どういことなんだよ……………」

叫ぶ智樹の声すら聞こえなくなってきた。身体には全くと言っていいほど力は入らない。

ニンフの身体すら支えられなくなっている。

「……………!!」

もう、何も聴こえないんだ……………

「……………!!」

だから、せめてニンフだけでもお前が幸せにしてやってくれ。

俺にはもう、何も出来ないから。

ああ、最後までニンフと話してたかったなあ

消え逝く俺と言う存在。

考えることすらもつできない。

せめて、一つだけ願いを受け入れてもらえるのなら……普通の高校生としてもう一度、もう一度だけアイツ等に会いたいなあ

それくらい、叶えてくれないじゃないか……この夢を見ていた”誰か”さん

本当にそれで良いのかい？ 本当にそれだけでいいのかい？

よく…ないさ。本当はもっとあいつ等と話していたいさ。もっと笑っていたいさ。もっと一緒にいたいさ…けど、それは叶わないんだろ？

分かったよ…でも、願い通りにはならないかもしれないよ？ 君の姿で会うことはできないかもしれないよ？

いいさ。願いが叶うなら…例え自分じゃなくなっても…

## 朽散ル者（後書き）

本当にお久しぶりです、絃城恭介です。

今回で最終話一話前と言うことになっていますが、なんていうか……いろいろとデウスエクスマキナ状態です。

まさにご都合主義……もはや王様の言うとおり！！みたいな状況です。バッドエンドを狙った結果が自分では大分ミスった感が強いですが、これが終われば正史に戻ることができるので、何とか完結を頑張ります。

今回については本当にすみませんでした。長い間お待たせしたことと、文章的にご都合主義過ぎて……

次回も……

## えびろーぐ（前書き）

朝の日差し、それが眩しいくらいにさんさんと輝きながら地上を照らす。ついさつきまでの戦いを見守っていた月は、私達をあざ笑うかのように一層輝いてから太陽の光に消えた。

だが、思う。月は本当に私達をあざ笑っていたのだろうか？

本当は、私達を見て嘆いていたのではないのだろうか？

悲劇を迎えた一人の少年の物語の結末を。そして、親友を失ってしまった少年の悲しみに暮れる心を。

もし、私が感情を持たないプログラムのエンジェロイドだったのならば、こんなに苦しい思いをしなかったのではないだろうか？

けど、それを言ってしまうえば今までの彼に与えてきてもらった、あの温かさの全てを否定することになってしまう。

それだけは絶対にはいけないんだ。

もし今、此処にいる全員が忘れてしまったとしても、私だけは絶対に忘れないよ。

この感情も、この記憶も、あの温かさも、私は絶対に忘れないから。

「ニンフ……帰ろうぜ、家にさ」

「……うん」

覚えているよ、貴方と過ごした日々を。

絶対に思い出なんかにしないから。

絶対に取り戻してみせるから。

でも、さっきから感じる違和感は何なんだろう？

## えびろーぐ

日和が無事に解放されたのは誰のおかげだったのだろうか。

あの日を過ぎてから、ぼんやりとだが頭の中に残っている人の姿がある。その人が大切な人であったということだけは覚えている。

なのに、その人の名前すら思い出せない。

先輩やそはらも、みんながぼんやりとだが記憶に残しているらしい。イカロスやニンフ、アストレア、そして日和……彼女達は、この質問をされると一切口を閉ざしてしまう。

初めのうちは無理にでも聞き出そうと思っていた。けど、できなかつた。

『いえません』『言えないの』

それぞれの反応はまちまちであったけど、皆が口を合わせたように言うのだ。

特に、その中でもニンフが一番辛そうだった。何かを伝えようと口を動かしているのに、全く声が出ていない。ぼろぼろと涙を流しながら、必死に何かを伝えようとしてくれた。

だけど、それを伝えることは出来なかった。

俺達も必死に理解しようとした。聞こうとした。その度に頭の中に

ある映像は、より強くばやけてしまった。

だからそんなことを繰返しているうちに、いつの間にか諦めてしまったのかもしれない。

思い出せないことを無理に思い出す必要はないのだと。

「あ、トモちゃん！ 今日のは日誌を先生に提出してから帰るんだよ  
！！」

そはらは、今も変わらずに新大陸発見部に顔を出している。それは、何かを覚えているために……そんな印象を受ける。

「智樹、スマンがこれもついでに職員室に持って行ってくれ」

だけど皆は諦めようとした結果、諦めきれないといった風に思い出せない『誰か』が居た時を続けようとする。

勿論、俺もだ。

とりあえず………そんな言葉が一番あっている。

頼まれた日誌を帰るついでに職員室に持っていく。それを職員室に居た担任に手渡し、どうする予定も無かったので惰性のように新大陸発見部の部室に向かって足を動かす。



足取りはしつかりとしている。けど、視線は窓の外をぼんやりと見つめ続ける。

そこに、ニンフの姿があったのを俺は見逃さなかった。

たまに、ニンフは部屋に顔を出さずにいなくなってしまうことがある。その日は決まって帰ってくるのが遅い。何をしていたのかと尋ねても、散歩をしていたの、の一点張り。

だから、事実を確かめたくてか自然に足が動いていた。

このぼんやりとした記憶の『誰か』を思い出すために。

内履きのまま校庭に出て、校庭にあったニンフの姿を探す。既に、ニンフは校門の横を歩いていたためにそのままバレ無いように後をつける。

舗装された道を歩く程度なら内履きのままでも大丈夫だったが、流石に田舎の舗装すらされていない道を歩くのは、内履きのまま飛び出したことを後悔した。

そして、歩き続けること数分。ニンフがピタリとその足を止めて、何も無い空き地を見つめている。

けど、そこは空き地にしては変だった。まるで、つい最近までそこには何かがあったかのように、雑草の一つも生えていない。

そして、綺麗な正方形を成している。

不意に、ニンフの姿が消えた。焦って、先ほどまでニンフの居た場

所を確認する。

「あれ……」

しかし、ニンフが立っていた場所に立ってみると忘れていた何かを思い出した。

「此処って……家があったんだよな」

足を一步その場から進める。そこで手を前に突き出すと何か硬い物が手に触れる。

見えない何かを触れながら、本来あるべきものを探す。

そこで、ようやくそれらしきものに手が触れた。

「やっぱり……コレは家なんだ」

触れていたものは縦に長い突起物。つまり、扉があるということ。

手前に向かって軽く引っ張ると、開いた。

開いた先には、先ほどまで何も見えなかった場所に廊下が見えた。

懐かしい匂いがした。誰かがつい最近まで住んでいたことを証明する生活臭。そして、その廊下の奥から聞こえる聞き覚えのある声。

(ニンフ……?)

声のする方向に向かって足を進める。廊下の突き当りには、一つの扉があつてその中から声は聞こえた。

一瞬、開ける事を躊躇ったが、此処まで来たのなら同じことだろうと思ひ、そのまま扉を開けた。

「!?!」

それに驚いたのだろう。開けられた扉の前にいる俺の姿を見てニンフはビクツと肩を竦めた。

「悪い……気になって後を追つて来た」

扉の先には、誰かが住んでいたということを断定させるようにリビングにはテレビやソファ、台所にはフライパンが使われたままの食器が置かれていた。

「何か……思い出した?」

けど、ニンフは後をつけてきたことを咎めることも無く、何かを期待するよつに聞いてきた。

「怒らないんだな」

「だって…私にはこれが精一杯出来ることなの。ありがと……」

つまり、ニンフは俺が此処にくることを望んでいた？

しかし、此処に来たことによつて思い出せた事はない。

「着いて来て、智樹。一人で入る勇気が無かったから……」

そう言つて、ニンフはリビングらしきところを出て廊下の横にあった階段を上っていく。俺も迷わずに後ろを着いていく。

階段を上ったところには幾つかの部屋があつたが、一番奥にあつた部屋の前でニンフは立ち止まっていた。

「ここ……あの人の部屋なの……」

「あの人……？」

「うん。詳しくは言うことができないけど…思い出してくれたらきつと言えるから」

鍵穴があるということは鍵が掛かっているのだらう。ニンフは特に

何をする訳でもなく、そのままその扉を開けた。

「入って……」

「お…おっ」

他人の家の、他人の部屋と言うこともあり多少戸惑ったが、ニンフの声に押されるように部屋の中に入る。

その部屋は何故か今までと違って生活臭がしなかった。本来ならば、もっとも強く生活臭が残っているはずの自室。それなのに、全く生活臭がしない。

窓のすぐ横に設置されたシングルベット、その横に置かれた小さな冷蔵庫。そして、勉強机。

ベットと冷蔵庫は確認してみたが何も無かった。そして、勉強机に手をかけたとき、二枚の写真を見つけた。

そこには、ニンフと二人で映っている少年の写真。もう一つには、幼い頃の俺とそはらと少年が映った写真があった。

俺は後に見た写真の裏を見た。そこには『トモ坊・恭夜・そはら』と、綺麗な字で書かれていた。

瞬間、ぼやけていた頭の中の映像に色が溢れた。

「思い…だした……恭兄……どうして俺、忘れてたんだろ」

思った以上に渴いた声が出た。

あの時、日和を助けたのも恭兄だった。

そうだ、どんな時も恭兄が頑張っていた。ニンフだって恭兄と暮らしていた。

どうして忘れていたのだろうか……どうして、忘れてしまったのだろうか

「トモキ……良かった、思い出してくれて……私、忘れなくなかった、忘れて欲しくなかった」

「ニンフ!？」

「何時も勝手に誰かを助けて、自分一人が納得したように傷ついて勝手に消えちゃって……どうしたら良いのか分からなかったよ」

確かに、恭兄がいなければこんな日常を、平和を噛み締めることはできていないのだろう。

「ああ……俺はもう、忘れたりしない」

「トモキッ!」

「きつと、帰ってくるよ……あの人は、恭兄はそういう人だから」

きつと帰ってきてくれる。

一年前のように突然現れて、馬鹿みたいに笑い会えるんだ。忘れた頃にきつと、恭兄はふらつと現れて、こう言うんだ。

『よ、久しぶりだな』

きつと……きつと……

きつと、いつか必ず。

だから、俺とニンフは忘れないよ。他の皆にも頑張っと思いついてもらえるように頑張るから。

だから、いつか必ず

『帰ってきてくれよ恭夜』





## えびろーぐ（後書き）

何とか完結。後味悪いけど完結です。

次章・未定。だけど、もう一つの世界を書こうかなくなって思っています。カオスが未救済なので。

その世界にはガイアがない、誰かが見た夢の世界ではなく、恭夜の夢見た世界と言う設定で。

このたびは長らくお待たせして申し訳ございませんでした。

それでは、次回があるかは分かりませんが、今後共に絃城恭介の作品をよろしく願いますノシ

## 夢の終わり、動き始めた時間（前書き）

どうもお久しぶりです。作者の絃城恭介です。

このたびは連載を続けることになりましたので、正史ルートである『風邪と桜とりんご飴 完結』を『夢の終わり、動き始めた時間』と言う形で分岐させました。

今度からはかなりのスローペースになりますが、失踪ではなく仕事の都合になります。

それでは正史ルート、章タイトル『在るべきセカイ』の『夢の終わり、動き始めた時間』をよろしく願います。

## 夢の終わり、動き始めた時間

夢。夢を見ている。

恭夜は何時もの夢の感覚だと思い、自分と言う名の映写機を通して  
塵気楼のような夢を観戦する。そこには恭夜自身の姿もあった。

更に、見たことも無い新たなエンジェロイドが二人いた。そのうち  
一人は恭夜のことをマスターと、お父さんと呼んでいる。そしても  
う一人のエンジェロイドは肢体に首輪と共に不恰好な鎖が付けられ  
ている。まるで、誰かに飼われているかのように。

恭夜はその夢に少しの疑問を覚える。『俺は既に継承の儀を終えた  
はずだ』と。

それなのにどうして……と、恭夜はぼんやりと疑問について思考を  
始める。その合間にも、目の前に映っている映像は流れ続けていた。

そして、映っている映像がより鮮やかに、鮮明に変わった。

その時、映像に映っていた恭夜の存在が消え去ってしまった。何の  
前触れも無く、光の粒子となり消えた。それを見て恭夜は夢の中だ  
というのに目を見開いてしまう。

何が起こった？ そんなことを必死になって考えていた。だが、そ  
れに対する答えのようなものは一つとして出てこない。

だが、考えていくうちに一つの過程にたどり着いた。

もし、この夢が絃城の並行世界の夢だとしたら……可能性し  
だいでは俺も消える

考えたくも無かった。

自分が消えるなんて事を。少し前までならば、二つ返事で「消える  
ことは怖くない」と言えただろう。

けど、今は違う。愛する家族がいて、親友がいて、友がいる。

今までの一人で味わってきた孤独を失った今、恭夜にはコノセカイ  
にいる意味を与えられた。恭夜は自分でそう思っている。

ならば　　そう考えようとした瞬間だった。

強烈な頭痛に頭の中が真っ白になりかける。そして、それと共に自  
分の名前を強く呼ばれていることにも気が付いた。

目が覚めたと自覚するよりも先に眼を開く。そこには風に枝を撓ら  
せながら、その枝先に身に付けた桜の花びらを舞い散らす桜の木が  
見えた。

そして、家族と親友と友の姿がそこにはあった。家族は涙に濡れた  
目で恭夜を見つめ、親友は心配そうな、それでありどこか戸惑って  
いるような顔をしている。友は家族と親友に何かを言い聞かせてい  
る。

（そう…か。俺、偽装の魔術の効果が切れて倒れたんだっけ……………）

未だにズキズキと襲ってくる痛みに耐えながら恭夜は自分を嘲笑う

かのように嘲笑をする。

上体を起こそうとしたが、思うように身体に力が入らないために恭夜はそれを断念する。その一連の行動によって、恭夜が目を覚ましたのだと悟ったニンフは、恭夜に向かって叫ぶような声で言った。

「ダメツ！ 起きちゃダメ!!」

言われずとも そう笑いながら言葉にして返そうとしたが、恭夜はそれをしなかった。

正確に言うのならば、ニンフの瞳から大粒の涙がぼろぼろと流れ出ていたから。

「ああ、分かってるよ」

「……本当に？」

恭夜はそう答えるが、ニンフはまるで信用していないといった風に言葉を返す。その反応をされた恭夜は今までの自分の行動を思い返す。

よくよく思い返してみれば、信用されずとも当然かと言ったように思えてしまい、気を悪くするつもりにもなれなかった。

「それに…今動いたらさ、ニンフがもつと大泣きしそうだから」

「つえ……」

恭夜がそういうと、ニンフは声にならないような声を出して必死に溢れ出てくる涙を堪えている。

その顔が恭夜には溜まらなく愛おしく感じた。

だから、一人で心に誓った。

（俺はもう……一人で抱え込まない。それはただの強がりだからさ……）

さしずめ、ニンフの声にならない声は恭夜の誓いに対する祝詞であろう。恭夜は前向きに思考を始める。

（俺は…同じ過ちを繰返さない。さっきのアレはきつと…そういう意味だったと思うから）

そこで、恭夜は唯一動く腕を持ち上げてニンフの頭の上に置く。

「大丈夫だって……答えはさっき見つけたから」  
「？」

一つの言葉、一つの行動、一つを選択肢……どこかで間違ってしまったのだろう。先ほど恭夜が見た『絃城恭夜』は。

だったら……と、恭夜は一つのことを決心する。

「絶対に無理はしないって約束する。その代わり、お前はいつまでも笑っていてくれよ」

ようやく自由になりつつある身体に力を入れて、恭夜は上体を起す。

不思議な事に先ほどまで味わっていた頭痛が嘘のように消えている。

「もう…大丈夫なの？」

「ああ、さっきも言っただろ。もう無理はしないってさ」

「うんっ！」

恭夜は心の底から笑っていた。つい最近まで時折見ることがあった鬨りと言つものが何処にも見えない。

ニンフもそれをに気が付いてかは分からないが、にっこりと笑って恭夜に言葉を返した。

「ふむ、恭夜…お前、どこか憑き物が落ちたようだな」

守形もどこか意外そうに恭夜に話しかける。

「ええ、間違いは繰返してはいけませんから」

「……よく分からんが、夢で何かあったのは分かった」

「気遣い感謝します、先輩」

「いや、俺としても良かったと思う。祝福しよう」

「ありがとうございます」

その後は、りんご飴を買って、智樹の家で騒いで、皆で馬鹿やって

とにかく、皆で今を楽しんだ。

今までの強がりから解放され恭夜は本当の意味での幸福に一步近づいた。

りんご飴をなめながら、ニンフと二人で恭夜は桜の花びらの舞い散る自宅に続く道を歩く。

919

「桜祭り、来年もみんなで来ような」

「え……?」

その言葉にニンフは驚いたかのように足を止めて恭夜の顔をまじまじと見ていた。

「なんだ、いやだったか?」

「ううん……もしかして恭夜、また無理してる?」

「無理なもんか。これを無理してるってんだったら俺は楽しむことができないよ」



「……本当に？」  
「本当さ」

雲ひとつ無い夜空から彼等を見守る月は、舞い散る桜の花びらと相まって幻想的な光景を作り出している。

それはまるで、答えを得た恭夜を……いや、彼等を祝福しているかのように世界を包み込んでいた。

## 混沌の心（前書き）

どうも、絃城恭介です。このたびは三つだけ謝罪を……

刻むような投稿になってすみません。

それと、想像以上に短くてすみません。

最後に、結構時間が掛かってしまってますみません。

以上でした

## 混沌の心

夢は夢で終わらせてはいけないということを知ったのはつい最近のことであった。夢は今の自分に対する、近いうちに起きる暗示であり、未来視の一つでもある。

既知感、それは自分ではない自分が既に体験しているということ。つまり、可能性の世界は無数に現在ある世界と繋がっているということになる。

それが意味することは、世界線は必ずどこかで繋がっているということだ。

たった一つの選択や、たった一つの言葉で世界線は変わってしまう。それはつまり、自分もまた夢の結末と同じ結末を迎える可能性があるということだ。

だから、彼……恭夜は夢だと認知している世界の中で、無限に広がっている青い空を見上げながら思考しているのだ。

（この夢は間違いなくあの女の子の出てくる夢だよな……トモ坊の話だと意識が朦朧としているらしいけど……俺の場合は意識がハッキリしてるんだよなあ）

そこまで考え、恭夜は自分と智樹の重大そうな相違点を頭の中に拳げていく。

（相違点……か。やっぱり、魔術以外は特に思い浮かばないんだけどな）

恭夜は智樹との相違点がその一点しかないと考える。実際に、恭夜と智樹の違いはその一転しかない。つまり、恭夜の方が『継承の儀』を通して夢を見ることに体性を持っているという程度に過ぎない。

おそらく、智樹も幾らか夢を見ていくうちになれ、夢の中で意識をハッキリとした状態で保つことができるようになるのだろう。

（ま……実際にそれくらいしかないんだし、特に気にすることでもないか）

そう結論を出した恭夜は、再び無限に広がっているかのような青い空を見上げようとする。

その瞬間、恭夜の背中に強い衝撃が襲い掛かった。余りにも強い衝撃だったためにうつ伏せの状態で倒れこみそうになったが、何とか踏みとどまって背中に衝撃を与えた『何か』を確認しようとした。

衝撃が強かっただけであり、特に強い痛みも感じなかったために恭夜の心は穏やかであった。

だから、恭夜の背中から聞こえてきた、声を殺しているかのような声を出しながら泣いている聞き覚えのある少女の声を聞いたとき、恭夜は若干戸惑ってしまった。

（まで、どうして泣いてるんだよ……？）

「キョウ君…良かった…もう、だめかと思ってた」

そんなことを考えていた恭夜に、夢の少女は涙声で弱々しい声を出して呟くように言った。その言葉を聞き取った恭夜は、少なからず現状で何か良くないことが起こっているのだということ悟った。

そして、恭夜は自分の言葉で夢の少女に尋ねる。

「大丈夫だ、俺は消えないから。話は聞いてやるからさ……少し落ち着いて、話したいことを俺に教えてくれ。力になれるかもしれないんだろ？」

その言葉を聞いた夢の少女は、こくと小さく頷いてから少しの間を恭夜の背中で過ごしてから、ようやく落ち着いたのだろう。口を開いた。

「あのね、キョウ君。よく聞いて、お願いだから」

「大丈夫だって、ちゃんと聞いているからさ」

夢の少女の言葉に恭夜がそう答えると、夢の少女はくすくすと笑ってから言葉を出した。

「大変なことになったの……あの子達、第一世代を遥かに性能的に超える第二世代が完成したの。近いうちにきつと、あの子達を壊しに来ると思うの。その時は」

「なっ……」

その瞬間、夢の少女の姿が突如消失したかと思うと、夢の少女の代わりに二つのシルエットが現れた。その片方のシルエットは、彼が常日頃見ている彼女のものと同様酷似していた。

いや、正確に言えば彼女そのものだった。その綺麗な空のように澄んだ青色の髪を、両端で縛ったツインテールは間違いない、彼が家族として一緒に暮らしているニンフのものだった。

彼がそのシルエットをニンフだと視認したの後に、もう一つの陽炎のように揺らめくおそらく少女のものであるうシルエットに声を掛けられる。

そして、すぐにそのシルエットが少女のものであると判断できた。なぜなら、そのシルエットが出した声は少なくとも男性のものではなかったからだ。

「お人形遊びしましょ」

その言葉を聞いた瞬間、恭夜に出所のわからない激痛が奔る。いや、正確に言えば理由はわかっている。

それと同時に、これから起きるであろう大量の映像が恭夜の頭の中を埋め尽くす。いかに脳内に映る映像といえど、大量の映像が情報として脳内に流れ続けた場合、遙かに人間の脳内のキャパシティを上回ってしまう。

つまり、どんなに優れた人間であろうとも……例え魔術師である恭夜でも、キャパシティを超えてしまった分は痛みとして身体に還元するのだ。

しかし、その一瞬に恭夜は考える余裕もないほどに情報を受信してしまったために激痛の出所を判断することができなかった。

「あ……グウツ……イテエ……」

「クスクス……まだ何もしてないのに、痛いなんてヘンなの」

少女はそう呟くと、手に持っていたニンフを投げ捨てたかと思うと恭夜のすぐ隣まで歩いてくる。

「ねえ、お兄ちゃんならわかるのかな？ 私、愛が知りたいの。ますたーはおねえさまたちは愛に狂ったからシナプスを裏切ったって言ってたけど……私には、愛ってなんなのかわからないの。ねえ、愛ってなあに？」

先ほど恭夜の脳内に大量に流れた映像と、恭夜の今対面している状況がかみ合って居ないことに恭夜は気が付く。

そして、それと同時に、この返答を絶対に間違えてはいけないのだと恭夜は悟る。

「ねえ、私愛が知りたいの。お兄ちゃんは愛がなんなのか知ってる

「？」

「愛つてのは……誰かを好きになることとか、何かに夢中になることだと思っ」

「誰かを好きになる……？ 何かに夢中になる……？ ねえ、好きってなあに？」

返した答えに対する更なる問いに、恭夜は考えるまもなく答える。

「誰かと一緒にいると楽しいと思えたり、美味しいと思える食べ物とか、心がぼかぼかと温まる事だと思う。痛いって事は、心と身体が泣いてるってことだからさ」

「痛いのは心と身体が泣いてるんだ……じゃあ、痛いのは愛じゃないの？」

「ああ、そう思うよ。幸せだと思うことが愛なんだ……きっと」

少女は少しだけ考える素振りを見せた後、よく見えなかったが確かににっこりと笑ったように恭夜の眼に映った。

「しあわせだと思うこと……そっか、そうなんだ」

少女はそう言い残すと、突然現れた時と同様に突然消えてしまった。

それを見て、恭夜は自然と言葉を漏らしていた。それも、恭夜の意思は全く皆無に。



「カオス……今度こそ間違っちゃいけないんだ  
何を言ってるんだ？」

って、俺は

## 人の温かさと言つもの

そはらの怒りを買った智樹が殺人チヨップのラッシュを受け全身ボロ布のようになって空を舞い、イカロスがスイカに水をやり、ニンフがお菓子を手を持ち、アストレアが飢え死にしかけ、守形が會長と謎の口論を行っている。

恭夜はそんな日曜日的光景を見て平和を感じる。シナプスからの刺客もなく現実的に平和な状態であつたのだが……

「しあわせつてどんな時に感じるの？」

「さあ、どんな時だろうな？」

修道服のような衣服を身に纏つた少女……厳密に言つのならば幼女なのだろうが、あくまで少女だと言つておこう。

それはさて置き、その少女の背中にはイカロスやアストレア、ニンフとはまた違った形の翼……であるう形をしたものが目視できたために、おそらくエンジェロイドであるうことが窺える。

しかし、悪意と言つた負の感情を恭夜は感じる事ができなかつたために放置しておこうと言つように考えていたのだが……

「ねえ、お兄ちゃんは誰かを好きになつたこととか夢中になれたことつてあつたの？」

「そつだなあー」

恭夜自身、理由こそ分つていないが異様にこの少女に懐かれてしまつていふと言つ事実を受け入れたようだ。なので、少女の質問を

軽く聞き流したり、受け答えをしたりしている。

「ねえ、マスターはおねえさま達は愛に狂ったっていったけど、お兄ちゃんにはんふおねえさまのことが　　きゃっ?」

だが、正直なところ自分でも分っていないことを聞かれてしまったために恭夜は照れ隠しも含めて、少女を抱き上げ、何か理由はないかと探し、少女が裸足であるということを見出す。

「そうさなあ、裸足のままじゃ外歩くのは痛いだろ?　靴買って…」

…いや、創ったほうが早いかな」

「ねえお兄ちゃん。くつつてなあに?」

しかし、少女は抱きかかえられることよりも自分の知らない単語が出てきたのかそちらを気にして質問をしてくる。

「何って聞かれてもだな……まあ、百聞は一見にしかずって言う

くらいだから実物を見たほうが早いだろ」

「ひゃくぶんはいっけんにしかず?」

「そ、人から何回も話を聞くよりも直接見てしまったほうが良いってことさ」

「ふうん、そうなんだ」

少女は何処か感心したように呟くと、抱きかかえられているために振り落とされないよう恭夜の上着をその小さな手で掴む。

見た目以上の力で服をつかまれた恭夜だが、特に気にした様子もなくスタスタと商店街の中を歩いていく。

はたから見れば仲の良い兄妹にも見えなくはないだろう。髪の色

や眼の色の違いや年の差はあるが恭夜は良い兄で少女は知りたがりの妹。恭夜としては子供は嫌いではなく、むしろ好きなほうであるために嫌々付き合っているという風には見えない。

「ねえ、お兄ちゃん？」

「んー、なんだ？」

「つくるってどういう意味？ くつつて簡単につくれるものなの？」

抱きかかえられたまま少女は不思議そうな顔をして、恭夜に言葉の意味を尋ねる。恭夜はそれに対し、嫌な顔一つせずに順を追って説明を始めようとした。

「そうだな……此処で話すと都合も悪いし、公園にでも行くか」

「都合が悪い？」

「そ、都合が悪いんだ」

だが流石に大勢の人が存在している商店街の中で魔術のことを、見た目が明らかに小さな少女に話している姿は不審者そのものであるため 正確に言うのなら魔術とは一般に秘蔵するものであるために、商店街の近場にある公園で話すことにしたようだ。

その移動の間も少女は恭夜の顔をジッと眺めたり、服の匂いをすんすんと嗅いで見たりと見るもの全てが新しいというような仕草をしている。その少女を抱きかかえて歩いている恭夜はその姿を、微笑ましい表情で見守りながら歩き続ける。

それから数分もしないうちに恭夜と少女は公園に到着し、すぐ近くにあったブランコに座った。ちなみに、少女はブランコに座っている恭夜の膝の上にちょこんと座っている。

「それじゃさっきの続きだけだな、つくるって言うのは作るのと同じじゃない漢字の創るなんだ」

ブランコの近くに落ちていた木の枝を恭夜は拾い、少女を膝から落とさないように器用に地面に漢字を書き込む。

「作ると創るってどういう違いがあるの？」

少女は再び恭夜に言葉の違いを尋ねる。

「こっちの『作る』は材料に手を加え、新しい形や、完成された状態にするって言う意味なんだ。で、こっちの『創る』は俺が勝手に使っているだけの言葉なんだけど……まあ、こんな感じだな」

そう言うってから手に持っていた木の枝を恭夜は地面に捨てると、恭夜は手のひらに少し魔力を込めて物体の形を思い浮かべる。それは徐々に形になっていき、最終的には少女の足のサイズほどの靴が手の上に完成した。

「すごい、どうしても何も無い場所からモノが出てくるの」

少女は恭夜の期待していた通りの反応をし、恭夜の手の上に現れた靴をまじまじと見つめている。

恭介は手の上に創造で創り上げた靴を少女に履かせると、少女を膝の上からゆっくりと優しくおろした。

「うん、サイズもピッタリみたいだ……で、さっきの質問についてだけだな」

恭夜は少女に履かせた靴と少女を見てから少し微笑むと、創造についての話を始めた。それを話す恭夜の姿は、自分の過去を振り返るかのようなものであった。

「ま、こんなところかな……つと、やっぱり難しかったか？」

恭夜が夢中になって説明をしている間に、どうやら少女は話に飽きてしまったのか砂場で遊んでいた。恭夜としては怒るつもりも無かった。

何故ならその姿が年相応なモノに見えたからだ。自分は魔術と言うものの存在のせいで幼い頃に遊ぶということを制限し続けていた。だからこそ、少女の年相応な行動を温かく見守ることができた。失ってしまった、本来ならば恭夜が智樹たちと遊ぶはずだった時間を自分の代わりに過ごしているように見えたから。

気が付けば夕日が公園を赤く照らしている。太陽が地平線の彼方に半分沈み、残った半分で一日がそろそろ終わってしまうのだということを告げているかのように感じさせる。

「なあ、そう言えば名前まだ聞いてなかったけどさ、よかつたら教えてくれないか？」

ブランコから立ち上がり、少女が遊んでいる砂場に近づき恭夜は少女に尋ねる。

すると少女は一瞬だが忘れていたかと言う表情を見せたかと思うと、今度は不思議そうな顔をして答えた。

「私は第二世代エンジェロイドタイプ（イプシロン）」  
カオス

「h a o s」。お兄ちゃんはこの前は自分で私のこと名前で呼んでくれたよ。どうして知っていたり知っていなかったりするの？」

「カオス　　ツツ!？」

「お兄ちゃん……?」

瞬間的にだが恭夜の頭の中に激痛が走る。つい最近にも味わったような痛みにも、恭夜は顔を歪めそうになるが何とか堪える。

そして、決定的な映像が頭の中に流れた。

「あ　　ガイア……　　そうか、そういうことだったのか。お前は…

…それでも全員が幸せになれるセカイを望むんだな」

「なにを言っているの？」

全てを思い出した恭夜は自分の過ちも思い出し、今度こそは間違えてはならないと心に決めていた言葉をカオスに伝える。

「カオス。今のマスターなんて裏切ってさ、俺と一緒に暮らさないか？」

その言葉は、果たしてカオスに届くのだろうか？

## 人の温かさと言つもの（後書き）

更新いたしました。

ハッピーエンドを迎えることができるのか……それだけを恭夜は考える。

そんな物語になるようにこれから先も書き進めて行きたいと思っています。

ではまた次回に会いましょうノシ



## 違えぬ事（前書き）

どうもお久しぶりです。

これからは書き溜めたものをちびちびと更新していくこととしたいと思います。

原作しだいで展開を多少変えていけるように……

それでは短いですがどうぞよろしくお願いします

## 違えぬ事

空を仰げば、そこには自由があった。

地上を見れば、この身体を縛り付けられるような錯覚に陥ることがあった。

海を見れば、世界の広さを思い知らされることがあった。

自分と言う存在が知る世界はあまりにも狭い。例え世界を調査しながら歩き回ったとしても、自分と言う存在が得られる情報と言うものはほんの僅かなものだろう。

だから、彼の一族は平行世界の自分と同期リンクすることによってこの広い世界を少しでも多く知ろうとした。

その過程に魔術があり、特別な力を手にし……そして、全てを受け入れた。

だが彼はそんな一族の考えを捨て、狭い世界の中でも必死に生きることを決めた。

世界を知る必要などない。

だって、ここには友がいるから。

そして今、絃城恭夜と言う人間は利用されることを前提に生み出されたエンジニアロイド、カオスに対して最大の選択を選ばせていた。

「俺はお前が地上こちうじで自由に生きたいって言うなら一緒に暮らしてやる。きつと、お前の求めている愛って言うものも理解できるようになる……だから」

「私はますたーを裏切れないの」

「なっ」

だが、まだまだ精神的にも肉体的にも幼いカオスでも理解して受け答えをしている。

「私たちは枷鎖に繋がれているから」

それが全てだった。

彼女たちエンジェロイドは決してマスターの命令に背くことはできないようにプログラムされている。

その象徴が首輪に繋がれた『鎖』なのだ。

「だったら、俺がその鎖を 縛めの象徴を断ち切ってやる」

だが、恭夜にはそれを断ち切る力がある。

運命すら変化させることのできるような特別な力が。

「冗談でも出鱈目でもない……俺にはそうすることができるだけの特別な力があるんだ」

「ほんとうに？ ほんとうにそんなことができるの？」

だから、少女がそれを望みさえすれば彼は何の迷いもなく彼女を縛り付けている『鎖』を一刀の元に切り捨てることができる。

それは紛れもない本当の意味で手にすることのできる自由。

「ああ。だから望んでくれ、俺を信じてくれるなら」

だが、世界は決められた未来から外れる事象を決して見逃しはしない。

常に世界の定められた未来への収束運動は続いている。

『命令だカオス。今すぐその男から離れる』

「え、ますたー……どうして？」

『ククク、それともその男を喰うか？』

「ますたー、痛いのは愛じゃやないんだよ。私にはまだよく分からないけど、お兄ちゃんと一緒になら分かる気がするの!？」

恭夜からしてみれば、いきなり独り言をぶつぶつと始めたかと思うと、突然苦しみだしているようにしか見えなかった。

だが、彼はどこかで気が付いていたのかもしれない。ニンフがそうであったように、アストレアもそうであるように……カオスもまた、『鎖』によって自由意志を制限されているのだと。

「カオスー!!」

「痛い……痛い痛い痛い痛い　　痛いよますたー」

だから、目の前にあるその手を掴もうと彼は必死にその手を伸ばす。

「決めるカオス！ 狂って壊れるまで辛い思いをするか、俺たちと誰も知らない未来を探すか！」

「やっぱり、痛いのが愛なの？ お兄ちゃんは私に嘘を教えたの？ 痛いよ……痛いよお兄ちゃん」

だがその手は掴むにはあまりにも遠く、小さすぎた。

「カオス！！ 待て、行くな！！」

「ますたーの命令……帰らなきゃ……答え……られなかった」

小さな手を握ろうと、掴もうと伸ばした手は虚空を掴んだだけ。空に消えていく少女の顔は、彼にはとても悲しそうに見えた。

「カオス………」

「あ、お帰りキョウヤ」

「ただいま………」

彼はニンフにそういうなり、リビングに置いてあるソファアの上に倒れこむ。

そのあからさまな疲れ……ニンフから言わせてもらえばそれは、何か大きなことを一人で抱え込もうとしている前兆であった。

だからニンフは聞かすにはいられなかった。

「ねえ、キョウヤ……何があつたの？」

「いや、なんでもな」

「嘘つき、もう無理しないって約束したじゃないの。……ねえ、正直に話して。私たち、か、家族なんですよ」

彼にニンフのその言葉は、研ぎ澄まされたナイフで刺されるかのように思えた。

（そうだ…俺は約束したじゃないか。それに、気が付いたんだろ。一人で抱え込むことは強さなんかじゃないって…それはただの強がりなんだって）

だから、約束を思い出すことができた。勘違いを正すことができた。

「ああ、そうだったなニンフ。俺さ、助けてやりたいと思うやつができたんだ」

その表情、その言葉を聴いてニンフは直感的に確信した。

「それって……私と同じような境遇の娘なの？」

「何で……？」

「だって、キョウヤがそういう時って大抵、私たちエンジェロイドが絡んでいるときだけだもの。それで、その娘の名前は？」

「カオスって言うんだ。お前たちの妹に当たる娘だよ。ちょっとばかり思い込みの激しいやつだけど、本当に良い娘なんだ」

だからニンフは安心して彼の言葉を聴いていられる。

彼こそ……彼女にとっての英雄ヒーローなのだから。

「話してくれてありがとう……私も協力するから」

「ああ、今度は絶対に一人でなんか抱え込んでやらない。絶対に相談する」

「うん」

過去に過ちの記憶を持つ彼は、今度こそ違えてはいけないのだと

……

今度こそ誰もが望む幸福を手にするために……

友を、家族を、親友に頼ることを決めたのだ。

## ユメマボロシ

最近、身に覚えのない夢ばかりを見る。

それなのに、いつものような夢のように自分の意識がぼんやりとしか滞在していないような状態ではない。つまり、自分の意識がはっきりとした状態で夢を観ているのだ。

おそらくだが、俺ではない俺が知っている……いや、経験した記憶なのかもしれない。

未だ名前も知らぬエンジェロイドに、俺のことを好きだといってくれた女の子の存在。消えてしまった恭兄。

どの夢も今の俺は一度たりとも見たこともなければ経験した覚えもないものばかりだ。

だけど、今観た夢を一つたりとも嘘だと思うことが出来ない。

結論から言うと、俺は始めから知っていたのかもしれない。

誰かが幸福になるためには誰かが不幸になるしかないのだと。そんな不幸の連鎖ゲーム……それがこの世界にいる神様って奴が作ったルールなのだということ。

だからこそ、この経験をした俺はこの記憶を夢の形で俺に見せることにしたのだろう。



「そうだよな……いつまでも、俺一人が何もしないなんてダメなんだよな」

夢を夢で終わらせてはいけない。

いつかの恭兄が言っていた言葉。

今なら理解できたような気がする。

あの言葉はきつと、自分の想いに対する誓いの言葉なのだ。

だから、この夢から目覚めたとしても忘れない。

「夢を夢で終わらせてはいけない……か。恭兄、俺も頑張ってみるよ」

これは俺なりの誓いだ。

日常を裏舞台から守ってくれる存在が恭兄だというのなら、俺は表舞台でみんなの日常の象徴になりたいという想いの。

役者不足かもしれないけど、繰り返すことだけはしてはいけない。

「俺は誰にも悲しい思いをして欲しくないから。笑顔でいてもらいたいからさ」

「俺の主力兵装は超々超音波振動刃（パラダイスⅡソング）だけ……  
どれだけうまく使ってもイカロスには絶対に勝てないし、本気の  
アストレアに至ってはスピードで絶対に勝てない……」

「ハーピー相手でも撃退が良いところだったし　結論から言う  
と破壊力も俊敏性も加速能力も、その全てで能力的にエンジェロイ  
ドに勝つことは不可能と来た。ニンフ、お前相手でも下手すれば負  
けるレベルなのにさ、やっぱり無理しちゃダメかな？」

そんな恭夜の言葉に、ニンフは若干呆れながら怒ったように言葉を返す。

「もう一人で無茶は絶対にしないって約束したでしょ」「  
ゴメン……」

しかし、恭夜の言っていることも一理あるのだ。

人間とエンジェロイドには決定的な差がいくつかある。まず、その一つが主力武装の火力の違いだ。

人間の造った最凶の武装が核兵器だとしても、一撃で大陸一つを滅ぼすまでは至らない。それに対してエンジェロイドの兵装は、エンジェロイド一体で国を一つ滅ぼせるような性能を持っているものが多々ある。

次に制空権である。人間は自力で空を飛ぶことがおおよそ不可能なことに対しエンジェロイドは単身で空を飛ぶことが出来る。

おおよそ不可能と言う理由は、恭夜のような少しだけ特殊な人間が存在するからである。

最後に、寿命の差である。人間は寿命が有限であることに對してエンジェロイドはほぼ永久的に稼動しているということだ。

よって、長期の戦いになればなるほど人間はエンジェロイドに勝つことが不可能になる。

つまり、誰かが多少の無理を通して何とかなるのならば、その無理は必要な無理になるのだ。

「けど、無理はしないって約束したからな……なあ、ニンフ？」  
「なに？ 頼まれても絶対に無理をすることは許さないんだからね」

恭夜がニンフに対して質問を試みようとすると、ニンフは頑なな態度を直そうともせず答える。

「いや、もう無理をさせるなんて言わないって……」

「そうなの？」

「本当だって。でき、聞きたいことがあるんだけどいいか？」

ニンフは少し表情を緩めると、恭夜の言葉に頷いた。

恭夜はそれを確認してから、質問を言葉にする。

「少しお前の身体を解析してみても良いか？」

「身体を……解析……？」

「ああ、本当は女の子の身体を解析するのは気が進まないんだけど……って、ニンフ？」

そこまで言ったところで、恭夜は顔を真っ赤に染めているニンフに気が付く。

嫌な予感しかしなかったが、恭夜はニンフに再び問いかけた。

「ニンフ」

「キョウヤが…私の身体を…か、かか、解析!？」

瞬間、ニンフの耳から考えすぎでオーバーヒートしたのかプシューと音を立てて白い煙が吹き出す。

「ちょ、ニンフ!？」

「キョウヤが…キョウヤが私を解析!?!？」

そして、突然立ち上がったかと思うとニンフはソファアの上に頭から倒れた。

混乱しているのか、目をぐるぐると回している。

「はぁ……ニンフも随分人間らしくなっただなあ」

ソファアの上に倒れた、顔を真っ赤に染め上げたニンフを見て恭夜は小さく呟く。

「ま、俺も信用されているってことかな……」

恭夜はソファアの上に倒れたニンフの頭を軽く持ち上げ、自分の膝の上に乗せる。

ニンフの頭は、恭夜が思っていた以上に軽く、シャンプーのいい匂いがした。

「ふぁ……昨日から考え込んでたもんだから俺も少し眠くなっちゃったよ」

そうして、恭夜もニンフに誘われるようにソファアの上で寝息を

立てて眠りにつくのだった。

## 交わる世界 前編

長い長い夢から智樹は目覚めた。

それは不思議な夢だった。今までのように薄っすらとしか記憶に残らない夢ではなく、自分自身の意識を保ったまま……つまり、明晰夢いせきむのようなものだといえる。

だから思うのだ。

「アレは……夢なんかじゃない」

「マスター……？」

しかし、得てして夢というものは現実の記憶に比べるとどうしても印象が薄いものになってしまう。

「な、なな、どうしてお前が俺の部屋にいんだよ!？」

「マスターの呻き声が聞こえてきたものですから……」

イカロスの言葉を聞いた瞬間、智樹の顔は青褪めていく。

「い、イカロスさん……もしかして私めは変なことを呟いてしまったりしていませんか?」

「変なこと……? いえ、あの人の名前と夢が としか言っていないんですけどが」

「恭兄と夢……悪い、イカロス。出かけてくる」

「え、あの……」

智樹は言いよぶの無い不安に身を駆られる。

だから、イカロスの言葉を最後まで聞くことをせずに家を飛び出した。

「夢のこと……忘れる前に恭兄に伝えないと　　って、女の子お

！？」

「きゃ……………」

だが、走り出した身体を止めることは叶わず……

無理やりに身体を捻って回避しようとした結果、小さな女の子を飛び越える形で空転して着地に失敗した。

「うーおおおお！？　じゃなかった……大丈夫か！！」

「ちよつと驚いたけどぜんぜん平気だよ、おにいちゃん」

そして、その声が桜井家まで聞こえていたのかイカロスまで飛び出してくる。

「マスター！　…………大丈夫、ですか？」

「あ、お姉ちゃんだあ〜」

女の子はイカロスのことを見るなり、イカロスに抱きついた。

イカロスはどうしていいのかわからずに、とりあえずとといった風に女の子の頭をスイカを撫でるように撫でる。

「なんだ、イカロス。知り合いなのか？」

「いいえ…………マスターの知り合いではないのですか」

「へっ？　じゃあ何でその女の子はイカロスのことお姉ちゃんって



言っただよ？」

「……………」

智樹の問いにイカロスは少しの間、無言で何かを考えるような素振りをしたが、結局何もわからなかったのか小さく呟くように言うのだ。

「私の…妹？」

「んなわけあるかあああ！！」

智樹の怒声と共にイカロスは額をぺしんと平手で叩かれる。

それを見ていた女の子は智樹の顔を見ると、少しだけだが怯えたような表情をするようになった。

「はあ………… お兄ちゃんに名前を覚えてくれないかな？」

だから、智樹は仕方なくといった風に微笑むと、女の子に優しく名前を問いかける。

「ふうか………… 風の香りで風香っていうの」

「風香ちゃん………… か。この辺では聞いたことの無い名前だな」

こんなことをしている場合ではないと頭で思っではいても、根っからの善人である智樹は現状の解決を優先したようだ。

「とりあえず、迷子って線でイカロスに似ている女性を探すとす  
かな……………」

「え、お姉ちゃんは風香のお姉ちゃんじゃないの!？」

風香はイカロスを涙目で見つめるが、イカロスは困ったような表情で智樹に尋ねるのだ。

「お姉ちゃん……マスター、この子の姉が見つかるまでお姉さんでいては駄目でしょうか？」

「まあ、そのほうがこの子も安心するだろうし……別にいいんじゃないか」

「わかり……ました」

こうして、智樹とイカロスの迷子の姉探しは始まったのだ。

1

真っ先に智樹が向かった先は浅神孤児院であった。

この浅神孤児院の管理者は、アメリカに存在してた機動兵器開発局からわざわざ退職をしてまで孤児院を立てた、浅神遼と言う二代前半の青年だ。

子供たちからの評判も頗る高く、商店街の間でも有名なほどだ。夏の間だけ限定だが、保育所として子供を無償で預かっていることもおば様たちの評判がいいことの一つだろう。

今年の夏には孤児院でフィオナと言う外国人の美女と結婚もしたそう。

「あの、マスター……ここは？」

「美空町が誇る保育園のようなところだよ。ほら、プールで会長主催で行った『第一回・どきどきウォータースライダーバトル』に参加していた浅神遼って選手覚えてるか？ あの人がこの管理人をやってるんだよ」

皆さんは既にお忘れかもしれないが、確かに浅神遼という人間は本編に登場しているのだ。それも、賞金一千万を掻っ攫っていくと言う大事を成し遂げて。

「ほら、風香ちゃん。ここが　　って、寝てるのか？」

「ええ、さっきまでは起きていたんですが日差しに当たっていたら眠ってしまったので私が背負って来ました」

「暢気な子だな……。ま、いいや。とりあえず浅神さんにこの子のこと聞いてみるからさ」

そう言って智樹は孤児院の中に入るために足を一步踏み入れる。

その瞬間だった。

『不審者が侵入、不審者が侵入。防衛システムを作動します』

不意にアラートが鳴り響くと、入り口の鉄扉が凄い勢いで閉じられる。

「な、なっ!？」

そして、数秒もしないうちに智樹の建っていた地面から粘着性の強い液状の何かが染み出してくる。

「い、イカロス、助けてくれ!!」

「了解しました、マスター」

智樹の言葉にイカロスの瞳が紅く染め上がる。その時、孤児院の方から透き通るような男性の声が聞こえてきた。

「ちよつとたんま! 待って! 誤解だからさ」  
「へ?」

その声の主は、孤児院の管理人である浅神遼その人であった。その隣には、寄り添うように少し小柄な女性が立っている。

「ごめんなさい。この人の作った‘黄昏システム’が誤作動してしまったようなの……でも、どうしてかしら」

「‘黄昏システム’って……なんすか?」

「それについてはこの人が説明したいって言っておりますので、どうぞ院内に上がってくださいな」

女性がそついい終えると、浅神遼も続けるように言う。

「フィオナが今言ったように、お詫びも兼ねて中にどうぞ。ここじやゆつくり話も出来ないだろうしね」

2

応接室……のような場所に案内された智樹たちだったが、その部屋ではプールで見た四人の少年少女が遊んでいる。

そんな中で、話は始まった。

「へえ、フィオナからは聞いていたけど……君が例の‘空飛ぶ’女の子かぁ。納得したよ」

「あの……」

「ああ、ごめんね。僕の作った‘黄昏システム’は強い力を持ったものに反応するんだ」

「強い……力？」

智樹は不思議そうに呟くと、浅神遼はその声に答えるように話を続けるのだ。

「もともとこれはね、僕のことを軍事施設に連れ戻しに来た人間を撃退するためのシステムでね……それはそうと、今日はどんな用事があつて浅神孤児院に来たのかな？」

一方的に話を続ける浅神遼であつたが、本題をを思い出したのか話を変えて智樹に尋ねてきた。

智樹としてもそのほうが助かつたようで、何の気兼ねも無く当初の目的を果たす。

「浅神さんはあの子のことを知っていたりしませんか？」

智樹の視線の先には、四人の少年少女に混ざって遊んでいる風香の姿がある。

そんな智樹の質問に対し浅神遼は首を縦に振ることはなかった。

「残念ながら風香という子供を預かったことは無いよ。それに、こ

の美空町にいる子供のほとんどのことは僕たち夫婦が知っているし……」

「ほとんど……ですか？」

「何せこの町は小さな町だからね。最近引っ越してきたという人は絃城の跡取りだけだと聞いているしさ」

智樹はその言葉に納得する。

確かに美空町は総勢七千人ほどの小さな町だ。何よりそのうちの子供。それも小学生程となれば半分以下、もしくはそれ以下の人数だろう。

実際のところ、智樹でさえこの美空町に昔から住んでいるためにほとんどの人を一度は見たことがあるのだ。

つまり、風香と言う女の子はつい最近になってこの土地に来たということになるのだ

「他に何か聞きたいことはあるかな？」

少しの間、思考に耽っていた智樹に再び声かけられる。

「いえ、今日はありがとうございました。イカロス、次に行くぞ！」

「はい、マスター」

そう言っただけで智樹とイカロス、風香は浅神孤児院を去っていく。

そんな彼らの背中を見送った浅神夫婦は感じたのだろう。

「ねえ、フィオナ。あの子達は俺たちのように未知の世界に足を踏

み入れてしまったんだね」

「そう…ね。でも、私たちは時流エンジンの暴走爆発でこんなに平和な世界に家族全員で来る事が出来たわ。遼、貴方の不思議な力はほとんど失われてしまったけど」

きつと彼らもまた、この世界の物語の主役たる登場人物の一員なのだ。

「ま、それでもいいよ俺は…こうして幸せに暮らせてるんだし。何より、フィオナと本当の家族になれた。模倣のスキルはなくなっても、俺の頭脳だけは以前と変わりはないんだからさ」

「えっと、確かちーと…だっけ？」

だから、浅神夫婦は脇役ながらにこの世界での役割を果たすつもりなのだろう。

「ふふ、そんなものもあつたな」

「またそうやって…でも、そんなところに惚れてしまったから許してあげる」

微力ながらも、彼らにも別の世界で得た力を使ってこの世界の物語をハッピーエンドに変えるために。

3

「あー、結局何も分からずか……」

「お兄ちゃん、次はどこに行くの？」

「次…か」





「わーい、はやいはやい!!」

風香にすら言葉を遮られたイカロスだったが、その表情は確かに喜んでるように見えた。

交わる世界 前編（後書き）

世界は確かに繋がっている。

そんな世界を表現できるような私になりたいb y作者



交わる世界 後編

4

「ふぁ……今、何時だ……？」

ソファアの上で気絶してしまったニンフに誘われるように眠った  
恭夜は、目を覚ましてすぐに時計を見て時間を確認する。

だが、寝ぼけ眼で時計を確認したために視界にぼんやりと映る。

「何だ……まだ四時半か……もう日も沈み始めて

あれ？」

膝の上に乗っているニンフの頭を寝ぼけながら撫でながら、完全  
に目覚めていない頭を回転させ、今度はデジタル時計を見る。

そこには4：30の左斜め上に午後と小さく表示されている。

「しまった……うたた寝したら一日が終わってるなんて俺らしくも  
ないな」

「あれ……私、どうして……って、キョウヤ？」

額に片手を当て、一人で過ごしてきた頃の自分ならば絶対にしない出来事に恭夜はほんの少しだけだが、自分が変わり始めてきたことを自覚する。

それとほぼ同時に目を覚ます形になったニンフは、そんな彼の顔を見てどうしたのだろうかと思議そんな声で声をかけた。

「あ、気がついたか……どうだ、少しは落ち着いたか？」

「あれ、私どうして気絶して……あ、そうだ、キョウヤが、わ、私を！」

朝のことを思い出したのか、ニンフは焼きまわしのように見える顔を真っ赤に染め上げていく。

恭夜は苦笑しながら、それで居て優しい表情をしてニンフの頭を軽くチョップする。

「ちよえ」

「あつ」

それは綺麗にニンフのつむじの辺りに直撃し、あわあわしていたニンフが頭を軽く抑えて上目遣いで恭夜の顔を見る形で収まる。

「どうですか、少しは落ち着きましたかお姫様？」

恭夜はそんなニンフの上目遣いに思わずときめいたり……などはしなかったが、どこかむず痒くなったのか、照れ隠しのようにニンフの頭を少し強く撫でる。

「うん…落ち着いた。でも、今のキョウヤの他人行儀な言葉遣いはイヤ」

「確かに、自分で言っていて恥ずかしいから今のは二度とやらないことにするぞ」

どうやらニンフには感づかれなかったようで恭夜は胸を撫で下ろす。そんな時、まるでタイミングを見計らって居たかのように電子ベルの音……つまり、来客者を知らせるチャイムの音が居間にあるインターホンから鳴り響いた。

恭夜はニンフの頭を膝からおろすと、画面付きのインターホンの映像を見る。

『おい、恭兄！ 頼みごとあるんだけどいるかー？』

そんな智樹の姿を見て、恭夜は面白半分に声を半音上げて言葉を返すのだ。

「ただいま、この家に人はごいません。ピーという音の後に用件を述べてください」

「なつ、留守かよ……なんて引つかかる馬鹿がいるか!! そもそもこんな留守電に入っているような機能がインターホンにあるか!」

そんな智樹のノリ突っ込みを華麗に受け流しながら、彼はニンプの顔を見る。

「なんか可哀想だから入れてあげなさいよ……」

「ま、トモ坊がここまで来たって事は相当困ってるんだろうし……そんなわけだから勝手に入ってきていいぞ」

彼がインターホン越しにそう返すと、通話状態が切れると同時に玄関のほうから扉の開かれる音が聞こえる。

それに加えて小さな女の子の楽しそうな声が玄関通路から聞こえてくる。

「トモ坊にやつ……また何か拾ってきたのか?」

「キョウヤ……その言い方ってダメだと思っけど」

そんな彼らの一言会話が終わったとき、居間の入り口に当たるドアが開けられる。

「よ、トモ坊……って、本当にまた拾ってんな。つかさ、誘拐じゃ

ねーだろうな？」

「事情を話す前に勘違いするなよ！？ てか、拾ってる云々の前に俺の家に未確認生物が集まってくるのは主に先輩と恭兄が原因なんだからな！」

「ま、なにを騒いでいるのかは別として……好きなところに座ってくれよ」

「な、な、俺の話は全スルーですか！？」

恭夜と智樹にとってのこの会話は、失った時間を取り戻すかのよう  
に思える。

「アルファ、そっちの子供はどうしたの？」

「迷子……みたい」

「迷子……みたい」って……心当たりのある場所は周って……来て  
るわよね」

そして、イカロスとニンフはいつもの調子で事情の確認をしてい  
るようだ。

「お姉ちゃんが二人も居る〜」

「お、お姉ちゃん！？もしかして私……のことみたいね」

それに加え、今回の騒動の原因である迷子の女の子こと風香はニ  
ンフのことを指差してにこにこ笑いながら嬉しそうにしているのだ。



それを智樹と話をしていた彼は横目に見ながら、智樹に呆れ口調で言葉を返すのだ。

「流石にお前の恭兄さんも迷子まで何でも分かるなんて思わないでほしいな」

「だ、だよなあ……じゃなくて、ちょっと聞いてほしい話があるんだよ」

「なんだ、迷子のことじゃないのか？」

「それじゃない別の話なんだよ！」

智樹をからかう様な口調で会話をしていた恭夜の口調が真剣なものに変わる。

「その様子だとよっぽど大事な話なんだな……それはあいつらに聞かれると不味い内容なのか？」

「分からない……けど、恭兄には伝えないといけないことだと思っ

「了解……ニンフ、少し俺とトモ坊は席を外すからちょっと待っててくれ」

恭夜は智樹の言葉に頷くとニンフに向かって用件を軽い口調で伝える。

ニンフはそれに対して少しだけ不思議そうな表情をしたが、すぐに分かったというように首を縦に振る。恭夜はそれをみてから居間から智樹を連れ出すと、二階にある自室に歩く。

相変わらずの私物の少ない部屋に二人が入ると、恭夜は鍵を閉めてベットの上に腰を下ろす。智樹も勉強机の前にある椅子に座ると会話を始めた。

「で、話つてのはなんだ？ 恋愛についてなら当てにしないで欲しいけどな」

「いいよ恭兄、わざわざふざけなくてもさ……」

「りょーかい。それで、話つてのはなんだ？」

「夢……についてなんだ」

「夢？ 夢つて言うのは俺たちが見ているあの夢のことか？」

恭夜は智樹の言葉に若干だが焦りを覚えた。

早すぎるのだ。智樹がカオスの夢を見るということは時系列で考えると、ニンフが破壊される前日、つまりニンフが強襲されているはずなのだ。

だから、恭夜は智樹の言葉を先ほどまでのようなおどけたような状態ではなく真摯に聞き入れる。

「それは最近見てない……なあ、恭兄。名前も分からないエンジンロイド、俺のことを好きだって言ってくれた女の子、消えちゃった恭兄……この三つについてなにか心当たりはないか？」

「な……」

その言葉を聞いた瞬間、恭夜の身体に言葉に出来ない寒気が走る。

「その反応……やっぱり知ってるんだな。教えてくれよ……これからさ、何が起きるんだよ。いや、何が起きたんだ」

そして、気づいてしまった。

この世界もまた、繋がっているのだと。

「な、何を言ってるんだお前は……しらねえよ」

「嘘だ。恭兄は事実を言うとき以外はいつだってそうだ。何でも知らない振りをして隠そうとする……なあ、恭兄。俺たちはそんなに信用できないような人間だったのか？」

「違う……そんなはずない……違う……そんなつもりじゃ」

「だったらどうして言わないんだよ！？ 恭兄はいつもそうだ、勝手にニンフや日和のこと救って、カオスだって助けようとして、それでガイアと一緒に勝手に居なくなっ……て！！」

智樹の怒声に恭夜は身を小さくする。

だが、それと同時に智樹も自分が今何を口走っていたのかわからなくなってしまう。しかし、結論だけを言ってしまうえばそれはありえない記憶の上書き。

「あれ、俺……どうして……ははは、思い出したよ。そういうことか……」

「トモ坊……お前は……」

「恭兄、今度こそ一緒にハッピーエンドを迎えてもいいだろ？ 手  
伝わせてくれよ、何も出来ないかもしれないけどさ」

けど、イレギュラーだらけのこの世界において、イレギュラーこ  
そが正常。正常こそがイレギュラー。

今までがおかしいくらいだったのだ。本来存在しない一族。魔術  
……そしてエンジェロイド。

「知ってしまったら後戻りは出来ないぞ」

「そのときは恭兄が守ってくれるんだろ？」

「運命は変わらないかもしれない」

「変えられるさ、二人なら」

「俺は本当の意味で変わってないかも知れないぜ」

「俺は知ってる。全てじゃないけど恭兄のこと。覚えてる」

その時、恭夜の中に隠れ潜んでいた翳<sup>かげ</sup>りが消えていくような気が  
した。今まで本当の意味で頼るといふことを知らなかった彼が、初  
めて本当の意味で気がつくことの出来た頼れる仲間の存在 桜  
井智樹という男のおかげで。

「夢のこと伝えられて良かった。俺たち親友なんだぜ？ だったら  
少しでも共有したいんだ」

「ありがとよ……トモ坊。それはそうと、あの女の子については本当に何もしらなんだ」

そして、あまりの切り替えの早さに智樹は驚きながらも、同じように話をあわせる。

「流石に人間の女の子を家で保護するのは何かと……こう、誘拐と誤解されそうなんだよなあ」

「確かに、お前なら変態ロリペド誘拐犯と勘違いされてもおかしくはないからな」

「おい……」

「冗談だ。多少嫌いなところはがあるが、記憶の読み込み（リード）でもすれば迷子くらい簡単に解決できるからな」

小型冷蔵庫から缶コーヒーを二つ取り出すと、一つを智樹に手渡す。

「そんなに簡単なものなのかよ……俺の一日はなんだったんだよ」

「ま、善行はいくらしたって構わないだろ？ 元気だせって」

二人は恭夜の部屋から今に戻る。

すると、今では三人でトランプをしているほほえましい光景がそこにはあった。

「微笑ましいな……」

「確かに……じゃなくて、早く読み込みってやつをやってくれよ」

「りょーかい」

やる気なさげに恭夜は迷子の女の子、風香に近づくとニンフの頭を撫でるように手を載せた。

(読み込み開始……)

「どうしたのお兄ちゃん？」

「あ、ああ。いつもの癖でつい……嫌だったろ。ゴメンな」

「ううん、全然いいよ！」

嫌がられるものだと思っていた恭夜は風香の反応に驚きながらも、撫でる動作と読み込みを一緒に続ける。

(あれ……どうしてこの子 )

「つあつー!？」

「……お兄ちゃん？」

( )  
「この子は…… ?」

「いや、なんでもないよ」

「ふうん、変なの」

「お詫びに一緒に公園にでも行かない？」

「公園……おにいちゃんど！？ 行く、いくよ！」

「じゃ、早速行こうか」

そんな会話を聞いていたほか三名は頭の上に疑問符を浮かべながら、恭夜と風香のことをみている。

「トモ坊、聞いての通り俺はこのこと公園に行くけどさ、ニンフとイカロスの相手してやっててくれないか？」

「あ、ああ。別に行けどさ、公園に風香ちゃんのお姉さんが居るのか？」

「ま、そんなところだな。んじゃ、後は任せとけ」

5

「こうしてお前とブランコに乗るのも二回目だな……」  
「いつから……気づいてたの？」

あの日、恭夜がある女の子に靴を創ってあげた公園。

「さつき、頭撫でただろ……そのときに気づいた」

「もう少しだけ、風香で居てもいい？」

「もう少しだけならな」

あの日のように、膝の上に女の子を乗せてブランコに座る。

「その姿はどうしたんだ？」

「地上で見つけたの……大丈夫だよ、スキャンしただけだから」

膝の上で足をぶらぶらさせながら、風香は少し上にある恭夜の顔を見上げる。

「でも、今日はおもしろかったよ。もう一人のおにいちゃんが遊んでくれたから」

「ま、トモ坊は苦労してたみたいだけどな……なあ、この前の答え聞いてもいいか、カオス？」

風香……だった女の子の姿が黒い霧に包まれる。それが薄っすらと消えてなくなると、いつかの修道服のような服を着た少女、カオスが恭夜の膝の上に座っていた。

「いまならいえるよ。わたしの気持ち……風香って女の子の記憶も見て分かったの。愛されるってのは心がぼかぼかすることなんだって」



「じゃあ」

「たすけてお兄ちゃん。私、もうこれ以上壊れたくないから」

その言葉を言い終えた瞬間、カオスは機械質な翼を広げて高速で空に戻っていく。

「ぜったい、絶対だよ」

その言葉は、恭夜の心に深く強く響いた。

「空の主……俺はアンタを引きずり落としてもエンジェロイドの宿命を変えてやる」

## 交わる世界 後編（後書き）

クリスマスということので約四日でがんばって仕上げました。

なにぶん急ピッチで作ったものですので理解に苦しんだかも知れませんが、ここで本編の解説をいたします。

今話に出てきた女の子、風香。この存在はカオスが地上に降りた際に『愛』を知るためにスキャンされたということになっています。

カオスの思考では『愛』とは人間やそれに近いものにしか出来ない感情だと思ったために、自分自身が人間に擬態することによって『愛』を知ろうとしていた。

その結果、『愛』が何であるかに気がつき、パンドラに蝕まれた本来の感情がこれ以上壊れる前にたすけて貰いたいと智樹に迷子探しをさせ、結果的に恭夜に行き着いた。

そんな設定です。

説明抜きでは分からない作品にならないように、これからも一層努力していくつもりですので見放さないで欲しいです ><

## 大切なモノ（前書き）

新年明けましておめでとございます……って遅いか><

本当なら一日に更新しようと思っていたのですが、完全に原作を外れ始めてしまったこの作品をどう進めようかと迷っていたらこの有様です。

内容も読み返して思ったことが、もう少しなんとかならないのかと思いつつ何度か修正してみました。が理解不能になる一方で……

とにかく、今年の三月まではがんばりますのでよろしくお願ひします！！

では本編へGO！！



「そうだ、欠陥品は使えるように改造しなければなあ」

おにいちゃん。私が変わってしまったても、また愛を教えてください。  
い。

そうしてもらえばきっと、この気持ちを思い出すことが出来ると  
おもっから。

あの迷子事件から早くも三日が過ぎた。何事も無かったかのように  
時間は進み続けていくものだとばかり考えていた自分が愚かに思  
える。

俺たちがいつものように学校に登校したとき、それはあの日の再  
来を告げるかのようにそれは突如現れた。気象庁も目を疑うほどに  
突如発生した超大型台風。そして、それは本来の大夫ならば絶対に  
ありえないような速度とともに一直線に、この美空町に向かってき  
ているそうだ。

おかげで暴風圏になってしまった美空町なわけで、当然中学校は  
休校になった。

察しのいい守形先輩は既に桜井家にお邪魔しているそうで、俺た  
ち……たち、といっても俺とニソフの二人なんだが、桜井家に向か  
って歩いている途中である。

それにしてもだ……俺の運命の分岐点には必ずと言っていいほど  
に天気が荒れるのだろうか？

まあ、そのおかげでこうしてなんとなくだが迅速に行動を取れるわけなのだが……

「随分とキョウヤは落ち着いてるのね」

「まあ、な。前にも似たようなことがあったからな」

「前にも？」

「そ、前にもあったの」

なんか、こう……前にも増してニンフが自分の娘のように愛らしく感じてしまう。

違う世界とはいえ、ニンフの本心を知ってしまったてからというもの、どうしてか恋人のように好きになるという感じではなくて、我が子のように思えてしまう。

本人に直接言ってしまったえば何故か泣かれそうな気がするから心の中に留めて置くが、きっと俺の好きとニンフの好きは違うものなのだろう。

どうしてかいつの間にかニンフの頭を撫でたりと……

「ねえ、どうして撫でるの？」

「あれ、いつの間にか……」

無意識のうちにやっています。いや、本当に無意識のうちに……

なでりと

「……いじわる」

「そういって」

まあ、言葉ではこう言われているが、ニンフの顔は緩んでる。だから、俺も自然と撫でることが出来る。

けど、歩いていけば当然目的地には到着するわけで……いつまでも頭を撫でているわけにもいかないから手を下ろす。

「あ……」

すると、残念そうな表情でニンフにしたから見上げられるのだ。

いかん、このままでは不味い。こんな緩みきった状態ではまともに思考が機能しない。

そろそろ気持ちを入れ替えないとな……

「トモ坊、勝手に上がるぞ。てか上がらせてもらったぞ」

「恭兄、言つの遅すぎだから……」

そんな感じに桜井家に入ると、トモ坊に呆れられたように言われた。

まあ、これからこんな馬鹿げたことする暇はなくなるだろうから今のうちに発散させておくのも悪くは無いだろう。

そう思っていた矢先だった。

「来てもらったばかりで悪いが……恭夜、どうやらアレが何なのか知っているようだな？」

「まあ、お察しの通り新型のエンジェロイドでしょうね。おそらく目的はイカロスの可変コア……」

「ふむ、お前らしくないな……もっと率直にカオスが来ると言えばいいだろう」

そこで先輩はやはりと小さく呟くと、俺の驚きに答えるかのようには話し始める。

「薄っすらとだが覚えているんだ……いや、厳密に言えば知っているというのが正しいのだろうが……正直に話そう。夢を見たんだ」

「夢……ですか？」

「ああ、夢だ。その夢は何故か夢だとは思えなくてな……それでお前に鎌をかけたと言っただけだ」

その話を聞いた瞬間に、俺は何故だかわからないが得体の知れない恐怖に身を囚われた。



あまりにも出来すぎている。

「そう、ですか……」

冷や汗が背中を伝って落ちていく。

そして、それを払拭させるために俺は本題に話を移す。

「ニンフ、アイツの位置はどうなってる？」

「あと一時間って所まで接近してるわ。ここで戦闘になると物的被害が大きいから町外れの使われてない工事現場で戦闘するのが理想的」

「的確な情報ありがとな」

俺はニンフにそう言ってから、トモ坊と先輩に向き直る。

「今回はかりは失敗するわけにはいかない。悲劇を一度でも起こしてしまえば、何度でも悲劇の連鎖は続く……だから、ここで終わらせる。そのために力添えをお願いしたいんです」

俺はそのまま頭を深く下げる。土下座のような格好になるが、別にこの二人に土下座をするのならば何の劣情も起きない。

俺たちはそういった確固たる信頼を持っているのだから。

「頭を上げてくれ恭夜。俺に出来ることは精々後方から指揮官の真似事をするくらいだ。前線を自ら張ることなんて到底出来ない。俺たちは自分に出来ることをやる。今まで通りのことだろう」

「俺は先輩や恭兄のように後ろで指揮官やったり前線に出て行くことも出来ない。けど、俺は俺にしか出来ないことをやるよ」

二人の言葉にゆっくりと頭を上げる。

未だに先ほどから感じる嫌な感覚は拭い切れてはいないが、それでも仲間がいるというだけで気持ちの在り方が変わってくる。

何時かの日に見た絃城の夢。あれはきっと、自分たちと同じ存在になってはいけないということ伝えるための夢だったのだろう。

世界に縛られ、誰かの為に自らの命を賭す。そんな生き方をしてはいけないという先達者からの教え。

けど、以前の俺は間違ってしまった。彼らのような生き方をしなければいけないという勝手な強迫観念に追い詰められてしまった。

だからこそ分かる。世界は楽しいことに満ちているのだと。幸せに満ちているのだと。

自ら失う生き方は誰も救えない。自分すら救えないような人間にどうして他人が救えようか？

今の自分が笑っていなければ、同じように誰も笑わせることなんて出来ない。

だからこそ俺は、精一杯の笑顔で答えるのだ。

「ありがとうございます、先輩。トモ坊もありがとな」

あの時の失敗は自分を殺し尽くしたこと。

ならば、今回は自分を生かし尽くそう。そして、同じように他人を生かし尽くそう。

無殺の意思。殺し尽くすことで失敗したのならば生かし続けられればいい。

決して簡単な路みちではないかもしれない。けど、俺は真っ直ぐに伸びている道から外れたところの道を繋ぐ路になる。

その礎となるものは俺たちの意思。エンジェロイドが違う道を進むしかないのだというのならば、その道を一本の道にするために繋げてしまえばいい。

「じゃあ、一足先に俺はニンフと一緒に行くよ。後のことは先輩たちに任せます」

「ああ、ごちらは任された」

「ありがとうございます、先輩」

俺は座っていたニソフの手を掴み、外に出る。風が吹きすさび、天候も悪い。

「キョウヤ、私、羽が無いよ……足手まといになっちゃっよ?」

「お前に羽が無いならさ、俺がお前の翼になってやるから」

「え、あ、うん!」

けど、この天候も初めてじゃない。だからこそ躊躇わずに飛ぶことが出来る。羽ばたく事が出来る。

「創造開始」

こうして、本格的に創造をするのはいつ以来だろうか。

そう苦笑しながらも、曖昧な翼の造型をイメージし、それを肉付けするようにイメージを重ねていく。

そうして出来るのが空を飛ぶための翼。

「あれ……イメージと少し違う?」

創造が完了し、翼を大きく羽ばたかせたとき、俺の目にはいつもの白く輝く翼ではなく、少し銀色の輝きを放つ白い翼が飛び込ん

できた。

白銀の翼。そう例えるのが一番しっくり来る。

「けど、綺麗よキョウヤ」

ニンフの言葉に俺は無言で考える。

これも俺の心境の変化から現れた誤差というものだろうか。だが、そんなに簡単に見つからないのが答えだ。

だから俺は考えることを諦め、ニンフを抱えながら目的地に向かって飛行する。

（待ってるよ……今度こそお前も助けてやるから。だから、壊れちまうなよ）

『愛なんていうものは瞞し（まやか）しだ。お前はまだ狂う前だから分かるだろうっ？』

頭の中に響き続ける言葉。それは『痛み』こそが真実の愛だと、私の脳内を埋め尽くす。

『だがな、アルファやベータは愛に狂った。だからお前が教えてやれ。愛を知ったエンジェロイドがどうなるかということとなあ……  
ククク、ハツハツハハハ！！』

マスターに身体を弄られて、身体も大きくなった。したっただらずな言語機能も完全なものになった。何より、身体の中にあつた黒い何かが大きくなった。

『さあ、カオス。お前がアルファやベータに、真実の、愛を教えてやれ』

その黒い大きなものをいくら追い払おうとしても、それは私の身体を内側からどんどん染め上げていく。

大きくなりすぎた真つ黒なそれは、どうしようもなく怖くて、恐ろしくて、悲しかった。

おにいちゃんを信じたいと思つても、おにいちゃんは嘘を言っていないと思つても、どれだけ黒いそれを否定しても、結局最後には飲み込まれてしまった。

身体は大きくなったけど、まだ成長していない何か私を追い詰める。

だから、私はおにいちゃん言葉よりもマスターの言葉を投げ所にしてしまった。そのほうが、何故だか安心できたから。

首輪に付いた鎖を触ると冷たかった。あのとき、公園でおにいちゃんから靴を貰ったときは動力炉がぼかぼかした。

私は知りたい。マスターとおにいちゃん言葉のどちらが真実なのかを。

「うふふ、おねえさま……私、大きくなったの。だから、いっぱいいっぱい愛をあげるね」

一時は知ることの出来たあの温かさを捨てて、私はマスターの<sup>エンジ</sup>人形としておにいちゃんに痛みという愛を教える。

（だからね、おにいちゃん、はやく、わたしを、たすけて）

狂ってしまった私でも、おにいちゃんならきっと愛してくれるか  
ら。

（痛い、辛い、悲しい、これが愛って言うなら、私は二度と  
愛なんて感情を知りたいなんて思わないよ）

「おにいちゃん、待ってて。今、そっちに向かっているから……うふ

15、

15、

15、

15、

15、

15、



## 慟哭（前書き）

ようやく戦闘パートに突入。

今回は完全に戦闘パート。作者の苦手な戦闘パート。

今回はわかり易すぎるくらいに露骨にあのキャラが活躍します。

## 慟哭

守形は智樹を引き連れてとある場所に向かっていた。田舎道を歩き、つい先日智樹が訪れた施設がそこにはあった。

ちなみに、イカロスは守形の考える最悪の事態を引き起こさないために恭夜たちの後を追うように智樹が命令という形をお願いした。

「あら、ここで待つて居て正解みたいね、英くん」

「美香子……どうしてお前が？」

「本当にどうしてかしらねえー」

だが、そこで出迎えてくれたのは本来ここに居るべき夫婦ではなく、美香子とそはらであった。

流石に何も知らされていない智樹には理解できず、守形に質問する形で聞くことしか出来ない。

「あれ、どうして浅神孤児院に二人が……てか、行く場所ってここだったんですか？」

「ああ、そうだったな。智樹、ここは孤児院という名の最新の技術開発局だ。ここで暮らしている浅神夫婦は過去にそう言った経歴を持っていてな」

その言葉に、つい先日風香と言う迷子の女の子を連れてきたと

きの会話を智樹は思い出す。

僕のことを軍事施設に連れ戻しに来た人間を撃退するためのシステムでね……

「 智樹、聞いているのか？」

「 え、あ、はい。聞いてました」

「 そうか」

守形の短い言葉を最後に、守形は美香子と一緒に孤児院の中に入っていく。智樹はその場で何かを考えているような素振りをしていたため、見かねたそはらに腕を引かれていく形で孤児院の中に入った。

この前に来たときと変わらない内装。歩いていても変わらずに子供たちの生活臭がする。

「こんな場所が……技術開発局って……本当にどうなっちまってるんだよ」

「どうしたのトモちゃん？ 具合悪いの？ 大丈夫？」

立ち止まって、顔を下げた咳いていたために心配させてしまったのだろう。そんな智樹の姿を見てそはらは智樹に近づいて話しかける。

だが、そはらが見た智樹の表情はいつもと変わらないような表情

であった。それだけに、そらは自分の気のせいかという風に笑いながら再び歩き始める。しかし、どこか心配そうな表情は抜けきっていない。

「そはらも……もう、なんの違和感も感じてないんだろつな。ここに在るのが普通で、ないことが異常だって風に……」

智樹の日常に、エンジエロイドがこの美空町に到来するまでは何の変哲もない日常を歩んできた。

だが、今はどうだろうか？

確かに、今までの平和というような平和な暮らしを過ごすことは出来なくなった。しかし、あの日常を過ごしていたあの時の自分と比べてみると感情の起伏がはっきりするようになった気がする。

なにより、家族……の、ような温かさが手に入った。

だから、智樹もその日常を知らぬ間に受け入れつつあった。

「けど……それが普通になりつつあるんだろつな。だから、誰もこの不自然を違和感と感じ取れないんだ。でも…恭兄が俺に頼んでくれたんだ。頼ってくれたんだ……だったら、俺も決心固めないとな」

「ねえ、トモちゃん……本当に」

「どうしたんだよそはら？ 早く歩けよ、じゃないと尻揉むぞ……うえへっへへへ」

「きやつ！？ ちょっと、やめっ、本当に殴るわよ！！」

ばきゃっ、と言う鈍い音が広い廊下に鳴り響く。

「あの、そはらさん……もう殴つてますけど」

「もうっ、早く行くよトモちゃん!」

「はいな……」

これでもう大丈夫だろうと智樹は殴られた箇所をさする。その表情は普段のおちゃらけた表情はなく、いつになく真剣なものだった。

そはらはちゃんとしてきているか気になってか、たびたび智樹のほうを見るが、そのたびに彼は表情を変える。

それが癩だったのか、智樹はもう一度殴られるのだった。

「くそ、何だよ、俺が何かしたかよ……ぶつぶつ」

「だって、トモちゃんがぶざけるようにみえるんだもん」

「横暴だ!! 乳を揉ませ　いや、あの、すみませんでした…

…って、そはらさん?」

智樹は失言をしてしまったととっさに身構えたが、来るはずである衝撃がいつまでもこないことに気がつき、そはらの見ているであろう方向に目を移す。

「なに……これ、機械……？」

「みたいだな……てか、前に来たときにこんなものあったっけ？」

そはらの疑問に答えるように、智樹も不思議そうに呟く。

その呟きに答えが返ってくることを予想もしていなかった二人に、やけに説明口調に話しかけてきた人物が一人現れる。

「ここは孤児院の地下だからね、知らなくてもしょうがないよ。でも、君には前に話していると思うけどな。僕は過去に軍事施設に  
つて、現在進行形で搜索されてるんだけどね」

そして、最後に乾いた笑いをしてから微笑む。

その笑い方は誰かに似ていて、それで居てどこか違う。智樹にはその誰かが分からない。

「まあ、智樹君はそんな非日常が嫌いらしいけどね……僕らからしてみればこうして平和に暮らせているほうが非日常なんだよ。それはおいておくとして守形君、そっちのシステムは使えそうかな？」

それでいて何処までも今を見ていて、日常を謳歌しようとしている。

「大丈夫です、専門的な知識がなくてもこれならある程度動かせます」

「そうかい、だったら移動できるようにトラックに積み込んでおいてくれると助かるな」

「分かりました。悪いが美香子、手伝ってくれ」

その時、浅神遼と絃城恭夜の姿が智樹の目に重なって映った。

「あ…恭兄……」

智樹の知る二人の共通点など一つもない。けど、智樹は直感的に二人は似た存在だというように感じた。

998

「そうだった、忘れていたよ智樹君。君は神様って信じるかい？」

「え、あ、あの」

ぼんやりとしていたところに突然話しかけられたために智樹はドモってしまっつ。

「ゴメンゴメン、こんなこと突然聞かれても困るよね」

「い、いや」

答える間もなく言葉の銃弾が智樹の耳を通り過ぎていく。

返事をする間もないくらいの早さだ。

「でもね、僕は信じている……というよりも存在していると確信しているよ。もし存在していないって言われても僕だけは信じ続ける。だってさ、神様ってのはいつだって出鱈目な存在だからさ」

その言葉は遠い昔を思い出して語るような口調で、しみじみとしていて、懐かしそうで……

だから、智樹はいつの間にか聞き浸っていた。

「ま、昔話はさておき……準備が出来たみたいだから君もトラックの荷台に乗り込んでくれるかな。僕が責任を持って送り届けるからさ」  
「え、あ、はいっ！」

そして、その話が終わると同時に智樹は現実には引きずり戻されたような感覚に陥り、浅神遼の言葉に驚きつつも荷台に駆け込む。

「さあて、フィオナ……僕たちの仕事もこれで終わりかな？」

浅神遼は智樹が荷台に乗り込んだのを確認してから胸ポケットから煙草を取り出して口にくわえる。



「あれ、煙草は吸わなかったんじゃないの？」

それに対してフィオナはくすくすと微笑みながら遼の啜えている煙草にライターで火をつける。

「子供たちが居たからね……ま、これが最後だし未練が残らないようにさ」

「遼が自分で決めた観測者って言う役割も終わって私たちは初めてここで生きていけるの。あの子達が成功してくれることを祈ってるわ。さあ、いきましょ」

「って、君も着いてくるのかい？」

「中学生でも子供に変わりはないでしょ。二人そろって引率してあげましょう、彼らの大きな社会見学にね」

遼はフィオナの言葉に苦笑しながら、さまざまな機材が積み込まれたトラックの運転席に座り込む。助手席にはフィオナが同じように腰を下ろしていた。

「さ、ここからは君たちがこの物語の主役だよ。僕たちには見届けてあげることしか出来ないけど……」

遼はそう言ってクラッチを踏んでスターターを捻りトラックのエンジンを開始し、ギアを入れてアクセルを踏み込んだ。

大桜の木が遠くに見える。

土ぼこりをかぶったシヨベルが何台か配置されており、三段ほどの円形に大きく地面が削られている。

俺たちはその一番上に着地すると、既に目視できるほどに接近してきている黒い暴風を見据える。

「ニンフ、アレで間違いないんだよな？」

「多分…だって、普通の台風と違って逆方向に風が流れてるから」

日本は北半球にあるから台風は反時計回りに回っているはず……  
であっているよな？

少し心配になったが、そんなことはこの状況が終わってからゆっくり確認することにしよう。

「嘘……凄く速度でこっちに何か　　っ!？」

「ニンフっ!？」

何故なら、悠長にことを考えている時間はなくなってしまったよ  
うだからだ。

「ぐっう……あぁ……」

「クスクス……おにいちゃん、私、大きくなったよ……いっぱい  
っぱい愛を教えてあげるね」

ニンフの首を片手で握って締め付ける初めて見るタイプのエンジ  
エロイドだ。けど、何かが引つかかる。

「マスターの教えてくれた愛はね、痛みと、辛さと、悲しみだった  
わ。だからね、壊すの。原型もないくらいにバラバラにするの」  
「キョウ……ヤ……っ」

笑みを浮かべた表情で、どこか狂ったように話しかけてくるエン  
ジエロイドを見て俺はカオスの表情を思い出した。

コイツ、カオスなのか？

だから、創造をするのが本当に一瞬だけ遅れた。

「でもね、おにいちゃんにはいっぱい愛をあげたいから最後に壊す

ね

「ニンフ先輩っ!!」

次の瞬間、空から猛スピードで何かが落ちてきたかと思っただけなら物凄い衝撃波が空気を伝って巻き起こった。

そこには瞳を赤くしたアストレアがニンフを背に立っている。

「大丈夫でしたか先輩!? 息、してますよね!!」

「してるわよ…けほっ……ありがとうデルタ」

「よかったあゝ、私、先輩が」

けど、やっぱりアストレアはアストレアだ。こんなときまで能天気でお人よきな性格でどうする。

今は一瞬でも気を抜いたら駄目なんだ。

「馬鹿! 右だ、早く避ける!!」

「ちよと、せつかくニンフ先輩のこと助けてあげたのに馬鹿って何よ!?!」

くそ、言い方が悪かったか。

俺はアストレアの横に滑り込んで獅子刀を両手で持って横に構えた。

瞬間、鉄が弾ける音がする。その音とほぼ同時にジワジワと重みが増加して、獅子刀からキシキシと軋む音が聞こえる。

「だから、早く避ける……獅子刀がもたない!!」

「デルタ、早くっ!!」

アストレアは突然の出来事に対応しきれずに、ニンフの叫び声でようやく状況を判断し、横に飛んで逃げる。

俺は獅子刀が折れるか否かのところで無理やり衝撃を下に受け流す。その瞬間に高く飛び上がると、俺が立っていたところには小さなクレーターが出来ていた。

「凄いいい! そんな鉄くずで耐えたの? おにいちゃんはやっぱり凄いいんだね」

「おにいちゃん、か……」

「でも、次はどうかな」

純粋な笑みに俺は確信する。間違いなくコイツはカオスなのだ。俺が中途半端に世界を変えようとした結果にカオスはこんな姿になっってしまったのだろう。

きゃははと笑いながらカオスは背中の鋭い翼を巨大化させて押し潰す勢いで俺に狙いをつける。

「俺が、俺のせいで……ゴメン、ゴメンな」

「どうしておにいちゃんが謝るの？ どうしてたすけてくれないの！？」

「カオス！？」

俺は上から迫ってくる鋭い翼を避けるために地面を強く蹴って逃げに徹する。

俺ではこの質量を相手に打ち勝つ方法がない。だから逃げることしか出来ない。

「おにいちゃんがたすけてくれるって言ったんだよ！！ それなのに！ どうして！！」

「キョウヤっ！！！」

遠くからニンプの声が聞こえる。前からはカオスの声が聞こえる。

そのどちらも悲しそうな声。心からの叫びに聞こえる。

「なのに、どうして

「離れてください  
アルテミス  
Artemis 発射」

なのに、それなのに……俺は一人ではどうすることも出来ないよ  
うだ。



## ソラオト（前書き）

やはり前回の投稿から一週間以上かかってしまいました。

スランプらしきものからも開放されたようなされていないような…  
…それでも、今年最大と思われる執筆量で今話をお届けさせていた  
できます。



## ソラオト

俺の鼓膜をイカロスの放った永久追尾空対空弾の爆発音が劈つんざく。  
アルテミス

その爆発音はカオスに迎撃されて永久追尾空対空弾が爆発した音のか。それとも、カオスに直撃して響いた爆発音かはまだ判断できない。だが、その爆発音とともに巻き起こった爆風によって俺は受身を取ることすら儘ならない状態で地面をサッカーボールのように転がっていたということだけは理解している。

俺らしくないミスだと思う。戦闘中に戦意を自失し呆然としていた。

諦めるにはまだ早すぎると言うのに。

「キョウヤっ!!」  
「痛ッ、クソ……」

先ほどまで手に握っていたはずの獅子刀がない。

どうやら、無意識のうちに手放して致命傷を負うことだけは避けていたようだ。そもそも、自分の得物で致命傷を負っていたら笑い話にも洒落にもならない。

「ニンフ、俺は大丈夫だからそっちに刺さってる獅子刀をこっちまで持ってきてくれ」

「あ、うん！ ちょっと待ってて」

その間に、身体に解析魔術をかけて損傷率を確かめる。

全体的損傷率 12%……戦闘続行可能。機動力低下と痛みによる状況判断能力の低下。

頭部損傷率 5%……左耳に裂傷があるが出血だけで大したことはない。

体幹損傷率 24%……肋骨が二本折れている。が、創造による一時的な修復は可能。

上肢損傷率 15%……左腕橈骨、右尺骨に損傷あり。しかし、どちらも可動に問題は無し。

下肢損傷率 4%……表面的に切り傷や裂傷は目立つが可動に問題は無し。

ニンフの時のハーピー戦に比べれば大したことはないのだが……、結果的に考えれば理由が酷すぎる。

あの時は戦闘による疲労とハーピーの物理攻撃によるダメージの蓄積で入院するに至ったが今回はただの不注意。それも友軍誤爆に分類されるかすらも怪しい、イカロスの永久追尾空対空弾の爆風によつて勝手に怪我をした程度だ。

もつとも、イカロスは「避けてください」と言っていたのだから全て俺が悪いのだろう。

「身体情報の偽装及び偽装による一時的な完全治癒の再現……創造開始」

最も損傷の酷かった体幹を中心に偽装をしていく。言葉にするのなら無理やり骨と骨にホチキスの針を打ち込んで繋げているような状態だ。

それもホチキス針を打ち込んだ上から瞬間接着剤を流し込んで、さらにその上からガムテープで補強するくらいにその場凌ぎのためだけの偽装。

「創造による肋骨の一時的な偽装完了、表面上の外傷の完全治癒完了、痛覚の偽装完了　　オールグリーン」  
「キョウヤ、これって私の鎖を切ってくれたカタナっていうやつだよね。拾ってきたよ」

俺が咳くと同時に、ニンフが獅子刀を俺の手に持たせてくれる。

というよりも、ニンフがそんな昔のことを覚えていてくれたことに感激だった。昔というにはまだまだ最近のことだけど、俺にとっ  
ては大分昔のことに思える。

そういえば、ニンフの羽が元に戻ったのってカオスとの戦闘が終  
わった後だったっけ……？

そんなことを考えていたら、俺の耳に大型トラックの排気音が響  
く。

そして、それが近づくに連れて聞きなれた親友の声が聞こえてき  
た。

「おーい！！ 恭夜、助けに来たぞー！」

それは酷く暢気なもので、絶望なんて言葉とはかけ離れている。

それが俺にはとてつもなく安心できるもので、心に落ち着きを与  
えてくれる。

アイツだけはいつでも、何処でも俺を理解わかいてくれる。

「遅いんだよ智樹！」

言葉でこそ悪態をついているように聞こえるように言っているが、  
きくと俺の表情は笑っているだろう。

だが、いつまでも笑っていられるほど状況は芳しく無いようだ。

「アルファ！ デルタ！」

隣でニンフが叫んだ。

俺は慌ててそちらを見ると、片翼をボロボロにされたイカロスと盾形のイージス<sup>し</sup>を破壊されたアストレアが地に墜とされていた。

「そんじゃまあ、ガイア……お前の兵装を使わせてもらっよ。創造開始」

思い浮かべるは俺のことを父さんと呼び慕っていた愛娘の使う兵装。

自由に空を駆け、意思を持って動かし、攻防共に優れた羽を。

「羽根型思念操作式兵器・Pranesu<sup>パネス</sup>」

俺は大きく翼を羽ばたかせ、無数の羽を舞い散らせながら天に飛翔した。

それは見たことの無い兵装だった。凄く綺麗で、汚れを知らない  
白銀の雪の結晶のようで、それで居てどこか懐かしく感じた。

一見しただけならば空から舞い散る翼の数々にしか見えないが、  
キョウヤはそれをガイアの兵装と言葉にした。

聞いたことの無い単語。それだということにも関わらず私はその言  
葉を知っていた気がする。

一緒に暮らして、私なんかよりも人間らしくて、辛い物が大好き  
で……私と同じくらいにキョウヤのことを愛していた。

そんな非現実にしたエングェロイドのことを。

「ガイア……プロトタイプ……雛形……第零世代……オメガ？」

確認できるような記憶は何処にもないけど、悲しい記憶だった気  
がする。

それはとても悲しいことで……。

「消失……、けど、私は空を飛んでいる？ わからないよ……キョ

ウヤ」

『ニンフ、聞こえるか？』

瞬間、頭の中に直接声が響く。

その声はキョウヤヤトモキが信頼しているスガタの声だとすぐにわかった。

『どうしたニンフ、聞こえていないのか？ 聞こえているのなら回線を合わせて返事をしてくれ』

だから、先ほどまでの知らないはずなのに頭に残っている記憶を振り払って返事をする。

「ど、どうしたの？」

『すまないがニンフ、この戦いにお前の力が必要不可欠だ。だから指示に従って欲しい』

「うん、わかったわ」

『ありがとう。そしてすまない……』

「いいのよ。それで、私はどうすればいいの？」

こちらの人間は小さなことでも必要としてくれる。ありがとうと言ってくれる。

初めはそれが気恥ずかしくて、嬉しくて……どうしても慣れるこ

とができなかった。

けど、今は違う。

キョウヤが私にいろいろなことを教えてくれたから。

『こちらでカオスのことをいろいろ解析してみた結果だが、カオスは自己進化プログラムを搭載しているようだ。それに加え、何者かに無理やり改造されたのかプログラムの一部に混乱が見られる。だが、混乱が見られる現在でもそれを補ってなおイカロスを越える性能だ』

そこまで説明されたところでスガタの大まかな要望がわかった。

けど、キョウヤに「話は最後まで聞くんぞぞ」と言われたことを思い出し、勝手に判断せずに続きを聞く。

『だからニンフ、お前にはイカロスとアストレアの兵装をハッキングして最大出力に上書きをかけて制御してもらいたい。できるか？』

しかし、わかっていたことだったために私の返事は少し遅くなる。

「ゴメン……羽が無いから、そこまで広範囲に掛けるのハッキングフィールドを形成することも高度なハッキングをすることもできないの………」



『それなら安心しろ。そのための浅神家の技術力だ。今、説明をしてもらう』

そこで通信が一度切れたかと思うと、すぐに違う男の声が頭の中に響く。

その声の感じは何処と無くキョウヤに似ている。似ているといっても声が似ているのではなく雰囲気似ているのだ。

『二度目だけど自己紹介をしておくよ。僕は浅神院のお兄さんこと浅神遼。痛いつ、痛いよフィオナ』

シリアスな登場の仕方かと思えば、通信の最中に情けない声を出して近くから聞こえてくるフィオナと言う女性に怒られているアサガミリョウという男。

だが、すぐにシリアスな雰囲気を作り直して説明を始める。

『ゴメンね、僕の妻に怒られちゃった。あ、ごめんなさい　じやなくて、君の羽の代わりに使ってもらえる仮想エミュレーターがあるんだ。どういった経緯で造られたかは内緒。詳しくは恭夜君に『模倣』って言葉を聴いてくれればきつと嫌な顔をしながら答えてくれるよ』

「は、はあ。それで、その仮想エミュレーターって言うのはどんな装置なの?」

私は少し呆れながらも質問を返す。

瞬間、頭上で大きな爆発音が響いた。それと同時に残骸と成り果てた無数の羽だったと思われる物が降って来る。

「む、悠長に話してる場合じゃないみたいだね。今から君にプログラムを送信するから受信したらファイルを解凍して展開してくれればいいよ。使い方は君が一番知っているはずだからね。それじゃ、幸運を祈るよ」

「え、私が知ってるってどういうことなの!?! ううん、それどころじゃない。早くしないとキョウヤがまた無理しちゃう」

私は送信されてきたファイルを受け取ると共に即座に解凍し、それを展開させていく。

アサガミリヨウは仮想エミュレーターと言っていたから、何かの代わりを果たしてくれるモノに違いは無いのだろう。

プログラムを完全に展開した瞬間、私が今まで感じていた生えていたはずの物が生えていない違和感が消失したことに気がついた。

「ウソ……だって、仮想エミュレーターって　でも、羽さえあれば私は電腦戦で絶対に負けない!」

疑問は多々あるが、今はどうでもいいこと。

今、私が一番したいことはエンジェロイドたちよりも遙かに劣っているはずなのに、関わりうとしなければ関係の無いキョウヤを私の手で助けること。

「アルファ、デルタ、聞こえたら返事をして！」

その声に、先ほどまで壊れたかのように地面に横たわっていたアルファとデルタが私の声に気がついたというようにふらふらと立ち上がる。

「アレ、私どうして　　って、イカロス先輩、ニンフ先輩大丈夫ですか!？」

「うん、私は平気よアストレア……」

私はそんな心配そうな声と安心できるいつもの声を聞きながら作戦の説明をする。

「今から私がハッキングフィールドを展開して一時的に貴方たちの兵装を強化するから。それと、フィールドが展開されている間は私が貴方たちのダメージをフィードバックするから安心して戦って」

私が説明していることをアルファは理解してくれたみたいだけど、デルタはきつと理解していない。けど、デルタは直感的に理解して

いると信じたい。

「でも、それだとニンフの負担が……」

「私は大丈夫よアルファ。私は私にできることをするだけだから」  
「うん。わかった」

アルファはそう言って戦場に戻っていく。デルタも心配そうな表情をしながら一言残して飛んでいった。

「ニンフ先輩、絶対に無理しないでくださいね！」

「分かってるわ。それとデルタ、それはキョウヤに言ってあげて！」

「分かりましたー！！」

今はあの少し能天気な声が私には嬉しい。

焦りは落ち着きに変わり始めている。

今なら

「ハッキングフィールドフルレンジー！！」

私もキョウヤのことを手伝ってあげられるよ。

カオスの鋭利な翼を回避し続けること十数分。反撃するわけにも行かずとにかく回避を続けている。

「くそ……カオス！ 頼むから言うことを聞いてくれよ！」  
「おにいちゃん……愛って痛いよ、痛いんだよ。動力炉がね、壊れるんじゃないかって程に痛い……」

隙あらば一気に契約の証である鎖を切り裂こうと思うが、無理に切り込んであの強固な翼と鏢迫り合いになったりしたら獅子刀は耐え切れずに折れてしまう。

だから、必殺の瞬間以外に切り込むこともできない。

それに、あの幼い心のカオスに刃を向けることが辛い。

「だったら、俺が教えてやったほうの愛はどうだったんだよ！ 思い出せよ、分かってくれたんだろ？」  
「うふ、あははは！ ウソだウソだウソだ！！」  
「なっ、カオス！？」

瞬間、辛そうな笑みを浮かべていたカオスが狂ってしまったかのような笑みを浮かべて思い出したというように言葉を紡ぐ。

「だって、おねえさまたちは私を愛していたから海に沈めたんでしょ！？」

「違うっ！ それはこの世界のお前の記憶じゃないだろ！！」

「うっん、違うよ。愛って痛いんだよ……」

泣きそつで、それで居て崩れてしまいそうな儂げな表情。

それでもカオスは言葉を紡ぐことを止めない。

「暗い海の底で……寂しくて、怖くて……でも、あの時もおにいちゃんだけは手を伸ばしてくれたの覚えてるんだよ」

「な……俺の……せいなのか……？」

「違うよ……寂しくて、怖かったから私はイカロスおねえさまの言葉を信じたの……だからますたーの言葉を信じちゃった」

再び、意思を別の誰かに奪われてしまったかのようにカオスの瞳が禍々しく光る。

「痛くて痛くて、愛して愛して……うふふ、わたし、おねえさまたちにも愛を返したいの、もっとももっと愛して殺してあげる！！」

けど、俺にはどうしてもカオスが泣いているようにしか見えなかった。

痛くて、辛くて、それなのに誰にも助けを求められなくて、アイツの言葉を信じ込まされて、それで狂って。

「ゴメンな……今度こそ、お前の手を俺が掴んでやるからな」  
「おにいちゃんにもたくさんたくさん愛をあげるの！」

反応速度を超えた一撃をカオスに放たれる。どうやっても回避することができない状況で、あらかじめ創造していた複数の羽根型思念操作式兵器を移動させ点と点を線で繋ぎ合わせて盾を作り出す。

一瞬だけその盾に勢いを殺がれたカオスの一撃だったが、その一瞬さえあれば回避することなど容易い。

「1〜8ロール番回転及び反転、9〜12コネクト番連結捕縛、1〜8オールファイア番一斉攻撃  
！！」

そして無数に存在する羽根型思念操作式兵器を的確に操作し、カオスを魔力の絃で拘束し、一斉射撃をする。

八方向から同時に放たれる完全包囲攻撃。一撃一撃のダメージこそ少ないが、蓄積していけばいずれは大きなダメージとなる。

しかし

「凄い凄い！ けどね、それくらいじゃ私は縛れないよ」

魔力で生成した絃はいとも簡単に引きちぎられ、カオスの硬化された翼によって全て防がれる。

その結果、直撃した羽根型思念操作式兵器は全てゴミ屑のように振り落とされ、一時的に俺の周りに存在していた兵装が消える。

「終焉の光、混沌の炎を纏いて魅せる雷」

イカスチ

だが、俺の本職は魔術師。

物理戦闘も得意に違いは無い。

「我が総軍に響き渡れ、恐怖の象徴、開幕を告げる号砲よ」

言霊を吐くように一言一言に魔力を込める。

久々に行く魔術発動における詠唱が三節以上の大魔術。

「罪と罰を灰燼に帰し、悲しみの涙を拭え」

今までとは比にならないほどの魔力を根こそぎ持っていかれる。



「流出せよ、我が力よ」

俺の属性は五大元素の炎と風。そして偽という特殊な属性。

「吹き荒ぶ炎稻妻」  
アグニ・フルメティス

掌にバチバチと音を鳴らしながら燃烧し続ける火炎球が形成されていく。

次第にそれは周囲の空気と反応を起こして凶悪なまでに肥大化していく。

「なに……それ」  
「実際に使うのはこれで二度目だ。だから、加減がいまいち出来そうに無い」

俺は掌で肥大化し続ける吹き荒ぶ炎稻妻をカオスに向かって発動しようとした瞬間だった。

「やっぱり……痛いのが愛なんだ。だからおにいちゃんを壊すんだ。でも、おにいちゃんになら」

心にナイフを刺されたかのように一言一言が突き刺さってくる。

(これじゃ……過程しか変わらないじゃないか。結果が良くなければ無意味じゃないのか?)

心が揺らぐ。

「助けに来たわよ!!」

「アストレア、カオスを止めて」

「了解ですイカロス先輩」

その瞬間、耳の中にイカロスとアストレアの音が響く。

やっぱり、過程が違ってても結果は書き換えることはできないのだろうか？

そんなはずは無いと心の中で大きく叫ぶ。

「永久追尾空対空弾、発射!!」

「やらせるかッ!!」

方向を反転し、永久追尾空対空弾に向かって吹き荒ぶ炎稲妻を放つ。

電気によって発生する強力な磁場に引き寄せられ、永久追尾空対

空弾は引き込まれた先に待ち構えている炎に触れて蒸発する前に爆発する。

「なつ、助けに来たのに何で邪魔するのよ!? ニンフ先輩も心配してるんですよ!」

「それでも、俺には変えないといけない結果があるんだよ!」

凶悪な姿になった超振動光子剣クリュサオルを勢いのままに振り下ろしてくる。

俺はそれに対し、極力重みを獅子刀に乗せないように往なす。

「ふふ、アハハハハ! そうだ、みんなに愛をあげるの」

俺はカオスの行動予測を立ててみたものの、ここから避けるという選択肢を除外しているために何の意味も無かった。

「なつ、いいから避けなさいよ! あんたなんか少しでも攻撃に当たれば死んじゃうのよ!」

けど、アストレアは既に気付いていたのか俺が避けた瞬間にすぐに振り落とせるように剣を構えなおしている。

「だからって、アイツ一人に悲しい想いを、辛い想いを背負わせた

くないんだよ！」

「バカ！ 避けて、じゃないと死んじゃう！ ニンフ先輩が悲しむんですよー！！」

それでも、俺はそこから一ミリも動かなかった。

「カハッ」

「おにい…ちゃん？」

何かが身体に突き刺さったという圧倒的な異物感が襲い掛かってくる。

その際にどこかの内臓が傷ついたのか口の中に鉄臭い血の味が広がる。

でも、このタイミングしかないと思った。

身体に突き刺さった異物を傷口から無理やり引き抜き、カオスの方向を向いて再び同じ箇所突き刺す。

既に開いている傷口だったために何の違和感もなく身体に飲み込まれていく。アドレナリンの分泌量が大量に分泌されていたからかは分からないが、痛みは感じなかった。

そして手に持っていた獅子刀を握りなおし、ある一点だけを狙って出せる力の限り振り切った。

「これで……自由だ……カオス」

バキンツと、鉄が砕ける音が俺の耳の中に響く。

掌には確かに何かを切り裂いた感覚が残っている。

どうやら、俺は成功したらしい。

「ウソだ……嫌だよ。おにいちゃん、動力炉が痛いよ。おにいちゃんが冷たいよ……私、あの温かさが欲しいのに」

「大丈夫だって……俺以外にもさ……滅茶苦茶なくらいにさ、優しいやつがいるから」

ずるりと、身体に突き刺さっていたからだが支えを無くしたように抜け落ちていく。

言いよの無い浮遊感。

「だからさ、お前は……信じたいモノを信じればいいんだ」

前回とはまた違った死の感覚。

一応解析してみるけど、多分もう長くは無いだろう。

でも、今回はただじゃ死んでやらない。消えてなんかやらない。

全体的損傷率 46.25%……

頭部損傷率 35%……魔力の枯渇による脳の活動の低下及び血液不足による脳への酸素供給量の低下。その他裂傷多数。

体幹損傷率 80%……解析不能。脳が働かないために詳細は不明。

上肢損傷率 60%……解析不能。上に同じ

下肢損傷率 10%……右足の裂傷及び左足靭帯の損傷。比較的軽傷ではあるが全体的に見れば大怪我。

でも、俺の死への収束運動はどうやら書き換えることはできないらしい。

多少の誤差は生じたが、おそらく俺の死因はこの世界の本来の在るべき運命を変えることによって同時に起きるようだ。

でも、この考えには疑問が幾らかの残る。けど、もう考えるのも億劫になってきた。

どうせ、最後は高所からの落下による死亡だろう。

俺の削って置いた保険が上手く発動されることだけを祈る。

「おにいちゃんは死なせない！」

「キョウヤツ！」

聞いたことのある声が二つ重なった。

誰かに身体を抱えられたような感触が俺を優しく包む。

「 「 「 「 「  
「 「 「 「 「

俺は、呼吸をするのをやめた。

## ソラオト（後書き）

次回、エピソードの予定。

エピソードはいつも病院でと決めております。

日和編はしばらくは無しの方向で考えておりますのでご了承ください。  
承をお願  
いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0871p/>

---

そらのおとしもの～それぞれの想い

2012年1月14日13時54分発行